



君は生きのびることができるか…！

Title : GUNDAM
Author : NIPPON SUNRISE CO.,LTD.
Copyright : ©1980 by NIPPON SUNRISE CO.,LTD.
SOTSU AGENCY CO.,LTD.

printed in Japan



●記録全集 2

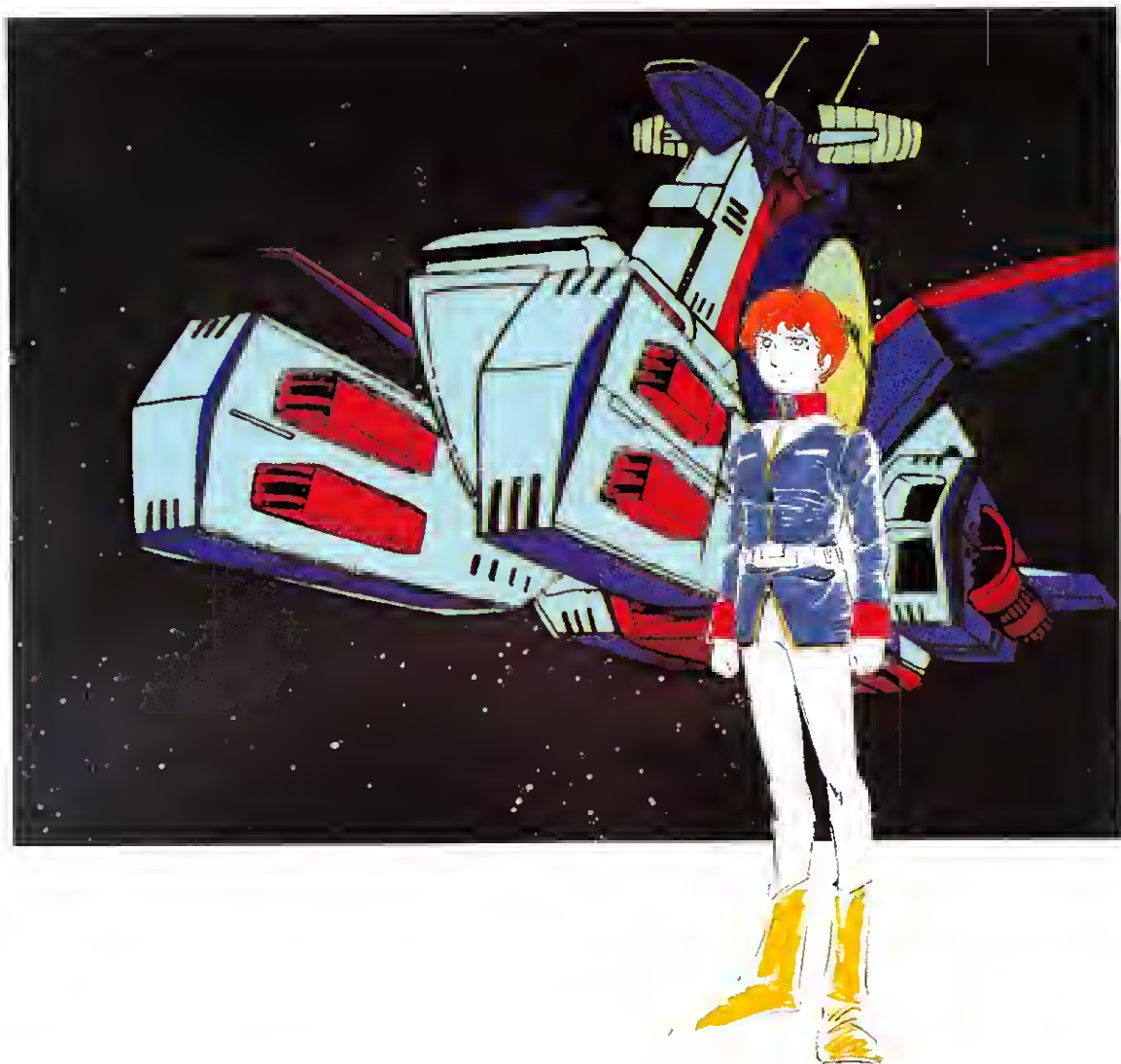
機動戦士

ガンダム
GUNDAM

G

本書の制作スタッフ

●構成	株式会社ニューアート・クリエーション
●編集制作	新田デザイン事務所
●編集・美術統括	新田雅利
●フィルム編集	佐野礼子 黒木恭子
●取材・記事執筆	増崎幸子 小牧雅伸
●取材アシスト	東 丈
●レイアウト・アシスト	中川万佐子
●執筆・編集協力	富野喜幸 星山博之 中村光毅 大河原邦男
●取材協力	中村プロ 青鉢プロ アップル アート・テイク・ワン シャフト
●写植・版下制作	荻原 敬
●製版担当	矢板 坦 高味寿雄
●印刷進行	渡辺克巳
●製作コーディネイト	平田昭吾
●印刷・製本	小宮山印刷(株)



「あいさつ」

「機動戦士ガンダム」を愛して下さった全国ファンのみなさまのご要望に応えて、出版された「機動戦士ガンダム・記録全集」は、お陰様で予想以上の評判をいただき、また多くのご意見やご要望をお寄せ下さいまして、誠に有難度うございました。

このたび、記録全集を発行するに当たりまして、みなさまの「声」を参考に、さらに内容の充実をはかり、第1巻では実現できなかった新しい企画・構成も加えて、全5巻の記録全集としてみなさまの許へお届けする予定であります。

本書が、「機動戦士ガンダム」の制作にたずさわられた総ての人びとの記録として、後年、みなさまの思い出に加えていただければ幸いです。

日本サンライズ

機動戦士ガンダム記録全集②

目次

ごあいさつ

★ザク透視イラスト

ビジュアルストーリーリー編

●登場キャラクター

●第2話 ガンダム破壊命令

●第3話 敵の補給艦を叩け

●第4話 ルナツー脱出作戦

●第5話 大気圏突入

●第6話 ガルマ出撃す

●第7話 コアファイター脱出せよ

●第8話 戦場は荒野

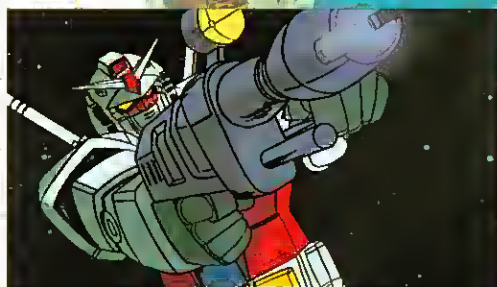
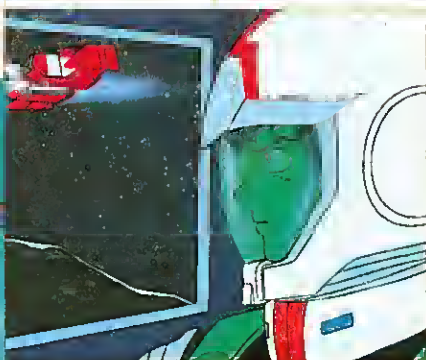
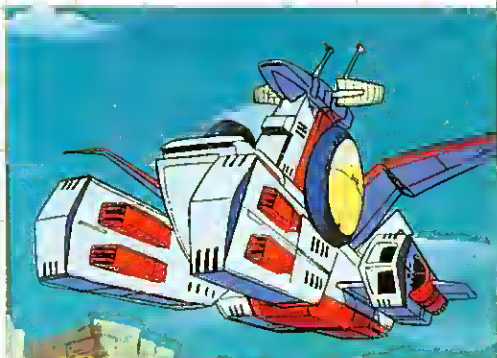
●第9話 翔べ！ガンダム

●第10話 ガルマ散る

●第11話 イセリナ、恋のあと

●第12話 ジオンの脅威

108 100 90 82 74 64 56 48 40 32 18 12 11 10



モビルスーツ・ザク／イラスト

キャラクターシート

オリジナルデザイン

設定・資料編

●人物設定

●美術設定

●メカニック設定

●放映記録・スタッフリスト

●キャスト・リスト

演出ノオト／富野喜幸

spot light／メインスタッフ

●星山 博之〔脚本〕

●中村 光毅〔美術設定〕

●大河原邦男〔メカニック・デザイン〕

制作スタッフ&キャスト

●スタッフからのコメント

●声優からのコメント

221 217

207 201 195

181

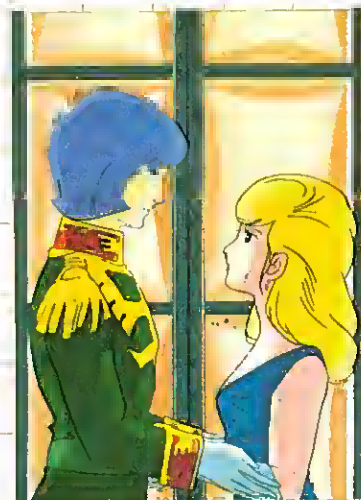
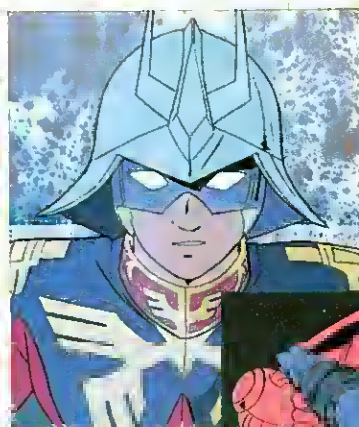
180 179 162 148 132

131

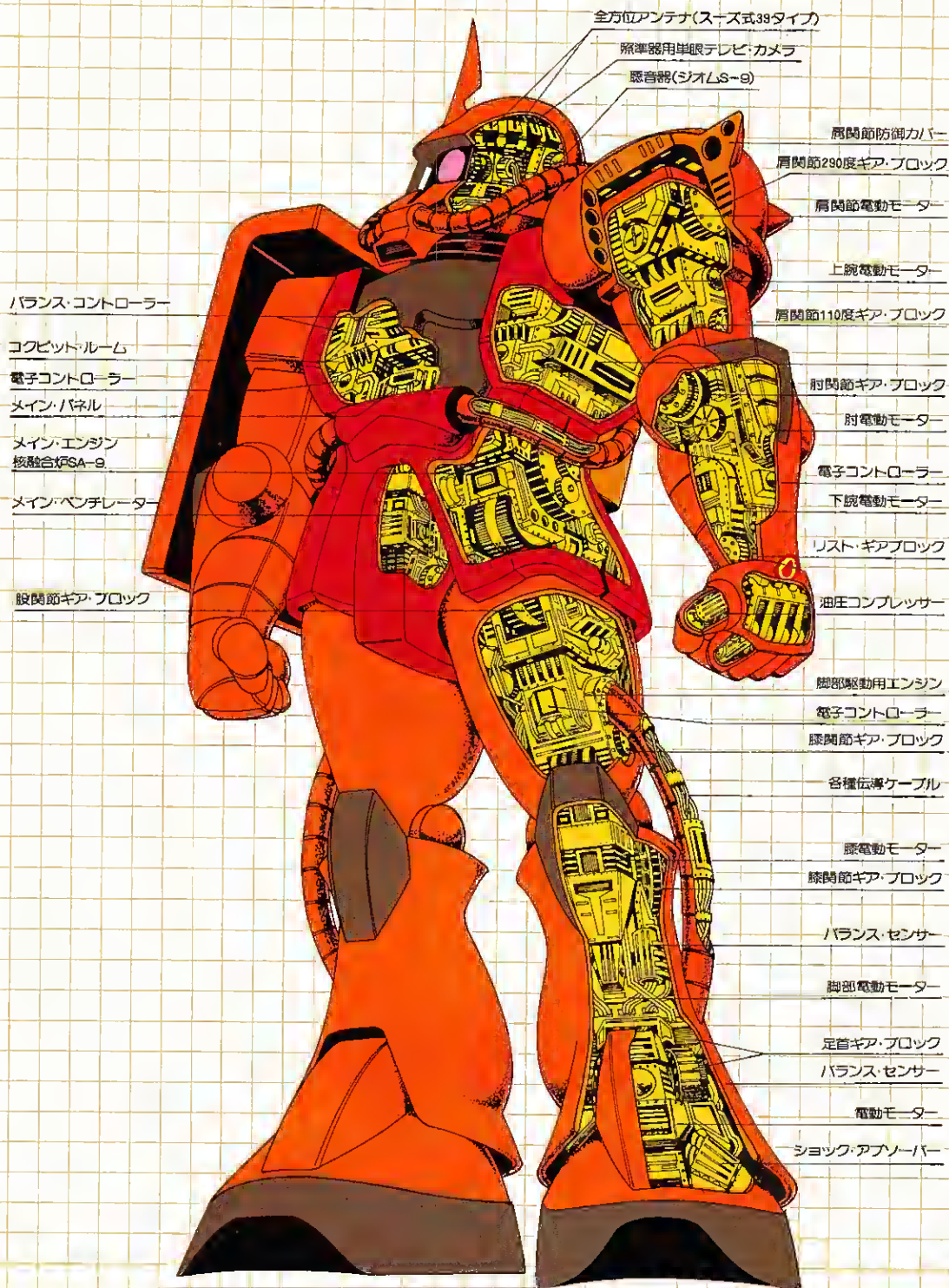
127

117

116



★モビルスーツ・ザク〈透視イラスト〉



VISUAL STORY



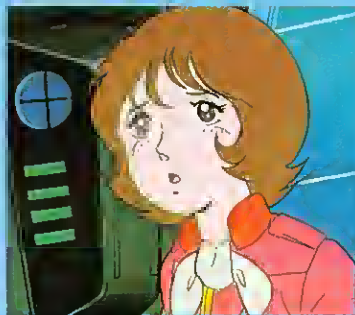
●ビジュアルストーリー編

●登場キャラクター①



アムロ・レイ

戦火の中で、ガンダムのマニアルをひろったことが、アムロの運命を決定づけてゆく。傷つきながら、いやおうなく戦士としての道を歩みはじめるのだった。



フラウ・ボウ

港へ避難する途中、ジオンの攻撃で母と祖父を失う。その悲しみにも負けず明るく、甲斐がいしく人びとの医療や生活の面倒をみている。アムロを好きなのだ……

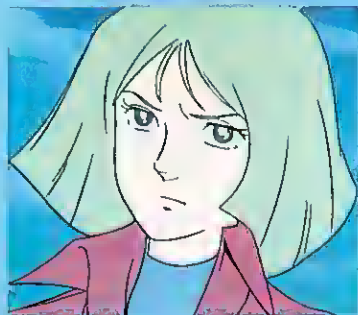
ブライト・ノア

ホワイトベースの士官候補生。パオロ艦長の死で、事実上の指揮官としての重責を負う。避難民と乗組員の命を守りながら、宇宙空間で懸命に闘う19歳の戦士。



ミライ・ヤシマ

たまたま、スペース・グライデールのライセンスを持っていたことで、ホワイトベースの操縦という重責を負うことになる。優しさと母のような抱擁力をもつ女性。



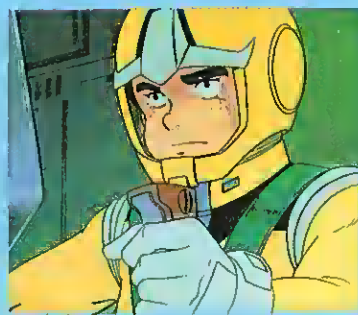
セイラ・マス

美しく聡明で、闘うことを人一倍嫌うセイラさえも、戦争から逃れることはできなかった。探索する敵兵を見つけたセイラは、ハッとして立ち止まる……「兄さん？」



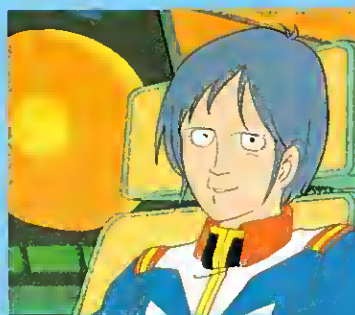
リュウ・ホセイ

連邦軍のパイロット候補生。実地訓練を受けないまま、戦闘員のリダーとして闘う。彼の温たかく素朴な男のやさしさが、アムロに大きな影響を与えてゆく。



ハヤト・コバヤシ

アムロの家の近所に住んでいたが、敵襲で一家は全滅。ホワイトベースに乗り込んで、主にガンタを操縦している。善良で素直なのだが少々気が弱い。



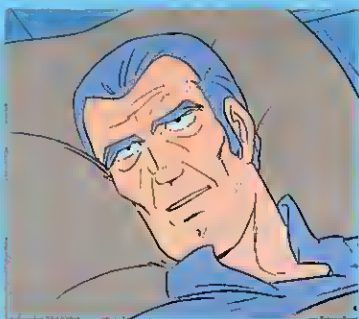
カイ・シデン

ちよつとすねた性格の皮肉屋。ジオンの爆撃の跡をよけながら、ホワイトベースに避難してきた若者の一人だったが、彼もまた戦士としての道を歩みはじめる。

CHARACTER'S

パオロ艦長

連邦軍の宇宙空母ホワイトベース艦長。不利な戦況の中で重傷を負いながらも、少年達に的確な指示を与えてルナツー脱出へ導くが、惜しまれながら息を引きとる。



ワッケイン少佐

ルナツー方面軍司令官。軍規ですべてを片付ける神経質で融通のきかない軍人。しかし重体の老雄。パオロ艦長には一目おいている。



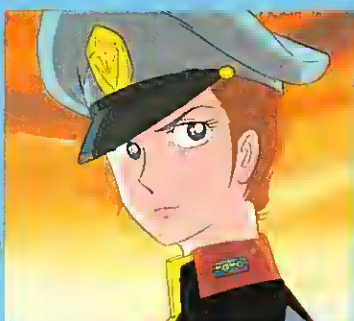
リード中尉

ルナツーの巡洋艦サラミスの艦長。ホワイトベースとガンダムを無事地球基地に送り届ける任務を受けて出発するが、ブライト達とは、何かと衝突しがち。



マチルダ・アジャン

窮地に追い込まれたホワイトベースに、秘かに補給物資を届ける連邦軍ミテア輸送部隊・マチルダ隊の潔々しく美しい指揮官。アムロにとってはあこがれの人物。



ワッケインの副官

ルナツー司令官ワッケインの副官



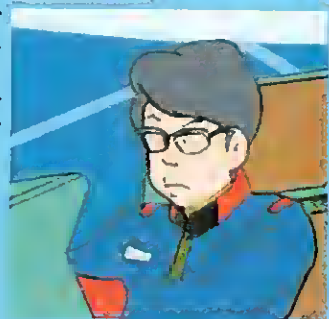
マーキー・克蘭

ホワイトベースのオペレーター



オスカ・ダブリン

ホワイトベースのオペレーター



タムラ

ホワイトベースの炊事長



ジョブ・ジョン

連邦軍・ガンベリーのパイロット



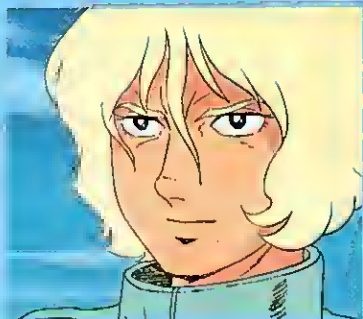
オムル

ホワイトベースのメカニックマン



●登場キャラクター②

シャア・アズナブル



宇宙攻撃軍少佐。頭脳明晰、冷静沈着。容姿にすぐれ、策略にたけた戦闘のプロフェッショナル。「赤い彗星」は、アムロにとって出逢うべき目標でもあった。

ガルマ・ザビ大佐



地球方面軍司令として地球基地を統治している。シャアとは士官学校の同期生。親友として信頼しているシャアの裏切りによって、若い命を散らしてしまふ。

デギン・ソド・ザビ公王

ジオン公国公王。ザビ家による一族独裁制をしく自己顕示欲の強い独裁者だが、身内の情に甘く、ことに四男ガルマの突然の死は、公王の心に大きな影をおとす。



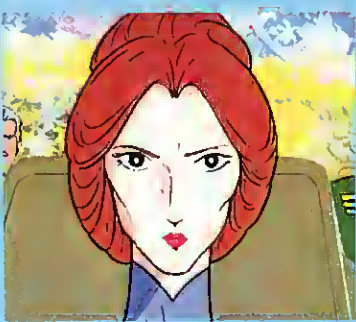
ギレン・ザビ大将

デギン・ザビ公王の長男でジオン公国の実質的指導者。無能な人間を切り捨て、冷酷なまでの合理的科学性に基づいたジオン中心の理想社会実現を目指している。



キシリア・ザビ少将

デギン・ザビ公王の長女。引力地帯における突撃機動軍指令官でガルマの直接の上司。冷徹な性格で政治的手腕と策謀にたけ、シャアの処分を提案する。



ドズル・ザビ中將

デギン・ザビ公王の四男。宇宙攻撃軍指令官でシャアの上司。闘争心旺盛。弟ガルマに大きな期待をかけていただけに、ガルマを守りきれなかったシャアを憎む。



ドレン少尉



ジオンの「赤い彗星」シャアの副官。いつもシャアの側に付添っているのだが、腹心の部下というほどでもなさそうだが、シャアの野望を感じていた男。

ダロタ中尉



ガルマ直属の部下。美しいイセリナの誘いにのって、ガルマの仇を討つべく、ガウ攻撃機で猛然とガンダム目がけて体当りを企てるが、失敗して墜落死する。

CHARACTER'S

ガデム

武器を使い果したシャアのもとに派遣された、補給艦バブアの老艦長。百戦錬磨の腕にものいわせ、瀕死の重傷を負いながらもガンダムに応戦して壮烈な最後をとげる。



バムロ

ジオンの偵察機ルッケンの機長。ホワイトベースを下艦して、荒地を夫の故郷に向うベルシア母子を案じて、非常食糧と救難キットのカプセルを投下する。



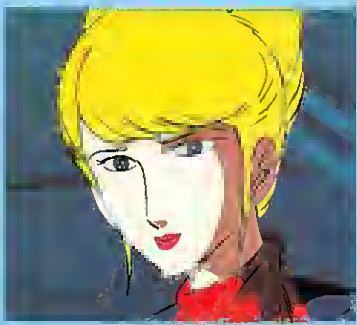
ランバ・ラル

宇宙攻撃軍大尉。ドズル配下のジオンの勇将で、ガルマの仇討ちを任務として地球に派遣される。純粹で実直、豪胆で判断力に優れた、部下思いの指揮官。



クラウレ・ハモン

ガルマの仇討部隊を率いて地球に赴任したランバ・ラルの側に、いつも寄り添う美しい女性。後に大人の女性として、アムロに大きな影響を及ぼすことになる。



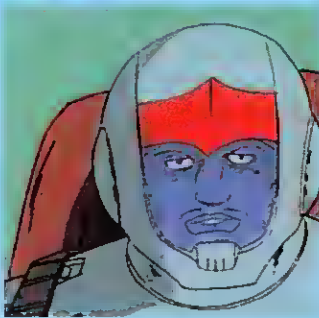
マチュウ

シャア配下のザクのパイロット



フィックス

シャア配下のザクのパイロット



クランプ

ランバ・ラルの副官



ゲビル

ガルマ配下のドップ戦隊隊長



パイソン

ガルマ配下のドップ編隊指揮官



ガバラ

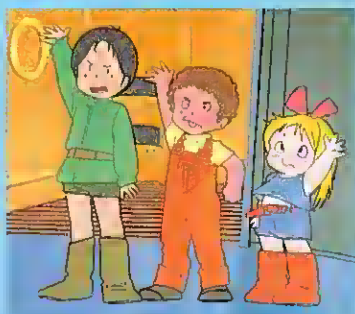
ガルマ配下のザク小隊長



●登場キャラクター③

カツ、レッツ、キツカ

ホワイトベース生活班の元気なちびっ子三人組。彼らのまき散らすいたずらとギャグは、凄惨な戦火の中で、一瞬、人びとの傷ついた心をなごませてくれる。



ハロ

アムロが作ったフラウ・ボウのペット・ロボ。簡単な会話ができて、いつもフラウ・ボウの周囲をこま回りがりながらついてゆく。アムロを見つけると敏感に反応する。



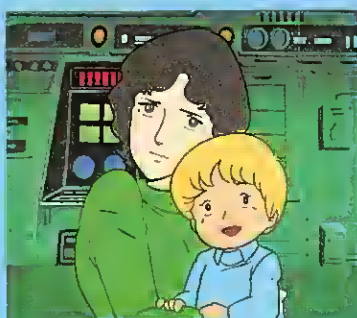
スミス&ペロ

いつもポケットに、自分がつくったコーヒード豆を持ち歩き、時どき取り出しては遠い故郷の南米を懐しむ。孫のペロと、地球の土の上で暮らす夢をすて切れない。



ベルシア&コーリー

夫の故郷セントアンジェで息子コーリーを育てるために、ジオン占領下の荒涼たる荒地の真只中に降り立ったベルシア母子……もう故郷はないのだろうか。



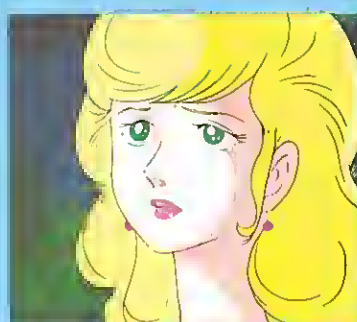
エッシェンバッハ

ジオン占領下のニューヤーク市長。占領後もニューヤークに止まって市民の安全を守る。ジオンを憎み、娘イセリナとガルマの恋も頑なに認めようとはしない。



イセリナ・エッシェンバッハ

エッシェンバッハの愛娘。燃えるようなガルマとの恋もつかの間ガルマの突然の死は、激しい気性のイセリナをも仇討ちと死の道へと追いやってしまう。



ジェイクユウ

シャア配下のザクのパイロット



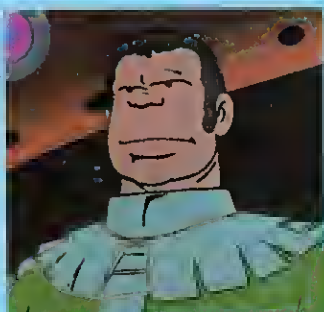
クラウン

シャア配下のザクのパイロット



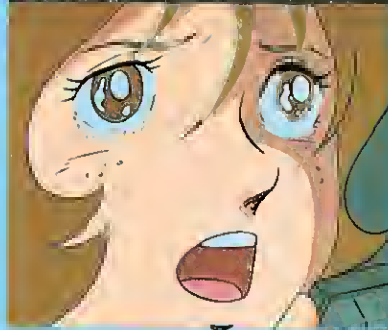
コム

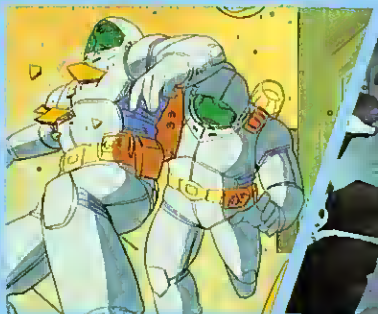
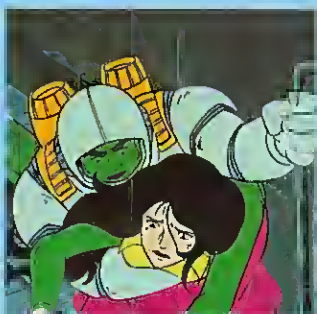
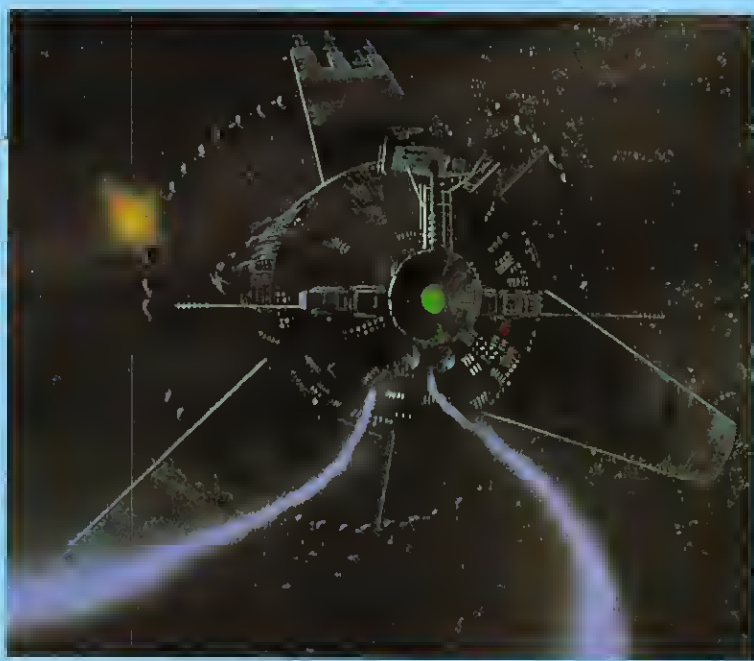
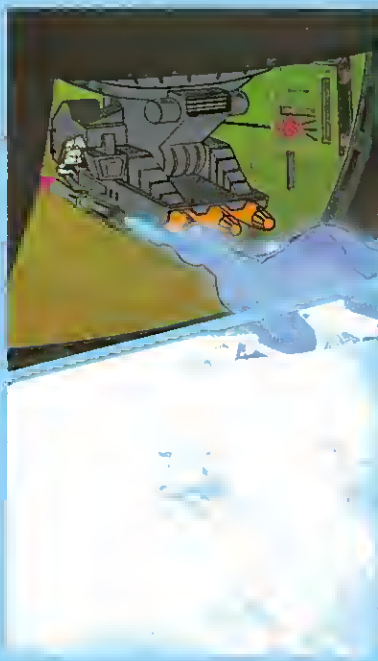
シャア配下のザクのパイロット





- ② ガンダム破壊命令
- ③ 敵の補給艦を叩け
- ④ ルナツー脱出作戦
- ⑤ 大気圏突入
- ⑥ ガルマ出撃す
- ⑦ コアファイター脱出せよ
- ⑧ 戦場は荒野
- ⑨ 翔べ!ガンダム
- ⑩ ガルマ散る
- ⑪ イセリナ、恋のあと
- ⑫ ジオンの脅威





ムサイのミサイルがサイド7を襲った。ザクの攻撃で戦闘員はほぼ全滅し、応戦しようにも出来ないでいた。実戦経験のないリユウではあったが、

「艦長、自分が替ります。どうぞ船にお戻り下さい！」

「パイロット候補生の君に撃てるのか!？」

「ハイ、やってみますッ!」

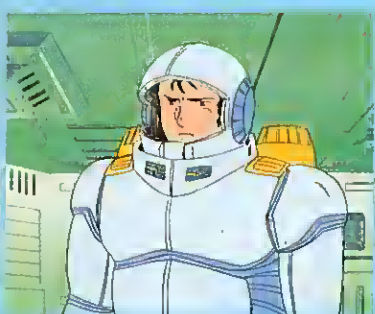
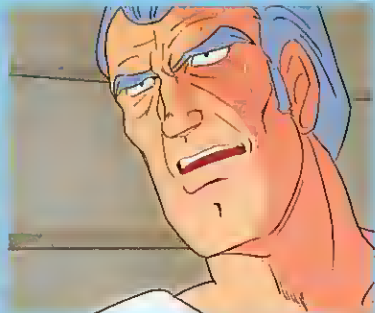
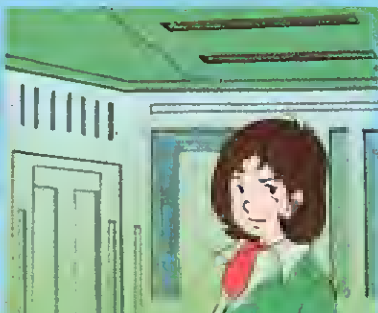
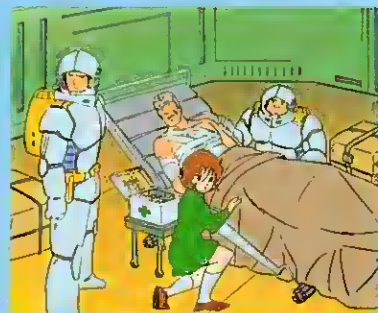
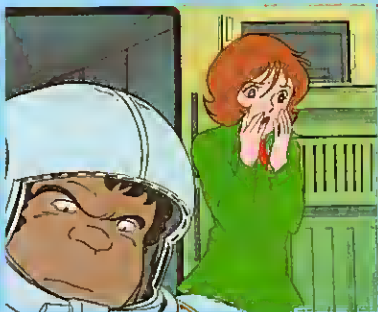
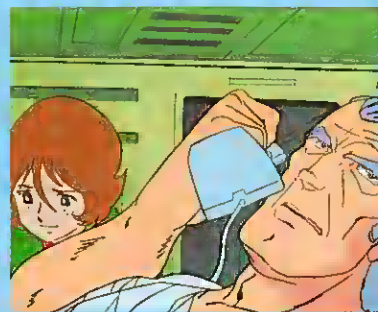
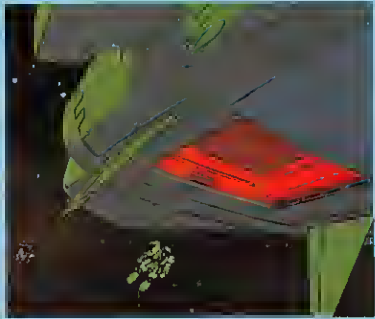
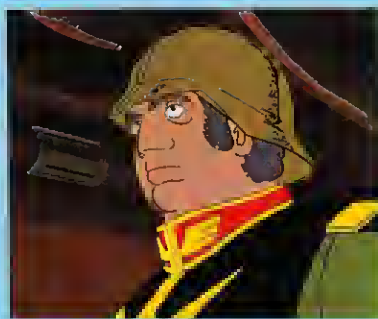
次の瞬間、艦長とリユウは吹きとばされ、艦長は負傷してしまふ。

シヤアは、サイド7から脱出してきたスレンダールの報告を聞いたが、連邦軍の新兵器がそれほどの高性能とは、にわかには信じられないでいた。

フラウはパオロの看護に当たっていた。そこへブライトが報告に来る。技師、軍人ともに全滅だが、幸いパイロットがガンダムを動かした。部品の積み込みを急いでいるという。しかし、出発しようにもホワイトベースを動かすパイロットがいないのだ。そこへ、

「クルーザー級のスペースグライダーのライセンスが、役に立つとは思いませんが、私でよければ」と申し出たのは、八洲家の令嬢、ミライ・ヤシマだった。

その頃、シヤアはドズル中將に連邦軍の新兵器を発見した、と報告していた。



「さすが、赤い彗星のシャアだな……よし、ザクを送る。V作戦のデーター、なんでもいい。必ず手に入れろ！」

シャアは補給を待たずに、突撃隊3名と共に宇宙服で出撃した。

ホワイトベースの艦上で、パオロとブライトはガンダムの操縦者に連絡をつけていた。アムロという名前は聞いていたものの、モニターに映った少年を見て、ブライトとパオロは仰天した。

「どういう訳だ!? こ、子供がガンダムを操るとは……?」

ホワイトベースの中は、避難民と負傷者でごった返していた。敵襲を避けながら、カイ・シデンも逃げ込んできた。負傷者のことも考えず、リフトに乗ったカイに、

「それでも男ですか! 軟弱者!」

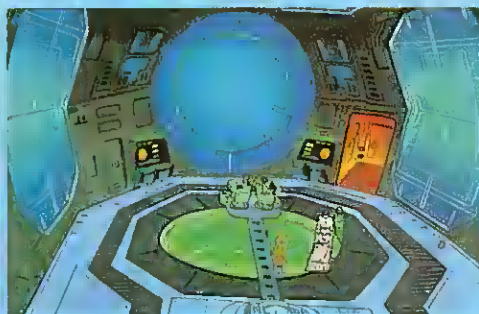
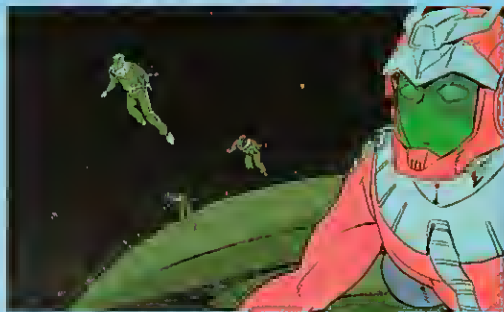
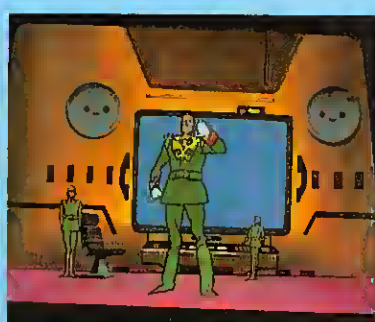
セイラは平手打する。ししぶ、リュウを手伝うカイを残して、セイラとフウラは、居住区へ逃げ遅れた人を探しに出ていった。

ムサイはサイド7にビーム砲撃をしかけてきた。その際にシャアは工場用出入口から潜入した。

居住区を廻っていたフウラは、自宅に目を止めた。ふと、母との会話が甦って、涙ぐむフウラ……

軍事施設を捜していたセイラは敵兵らしい人影を見つけて、銃をかまえた。

「ヘルメットをとって、後を向いて下さい!」



ヘルメットとマスクをとったシャアの顔……セイラの顔に一瞬、驚きと困惑の色がはした。すかさず、シャアはセイラの銃を蹴り落し、すばやく逃げ去った。

セイラは呟いた。「…兄さん！」

彼が、10年前に別れた兄に違いないと、セイラは直感していた。

パオロの命令で軍事機密を守るため、パーツ類を焼却し、軍事施設を破壊し終ったアムロが、港に戻ろうとした時、敵兵が港に侵入したのだ。老人や少年たちも敵兵を狙撃するが当らず、カメラだけはブライトの弾が破壊した。

宇宙へ脱出したシャアを、ガンダムが追う。しかし、初めて人間を撃つアムロの照準はゆれた。

シャアは自らのザクを操って、赤い彗星の本領を発揮せんとガンダムに突進してきた。アムロは、ブライトの後退命令を聞かず、ビームライフルで立ち向った。

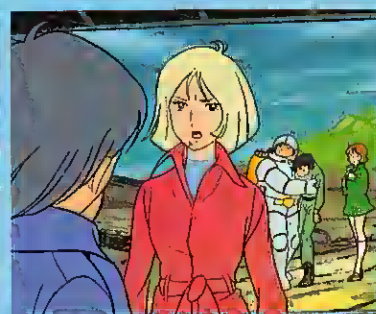
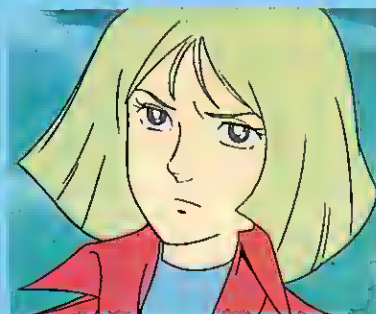
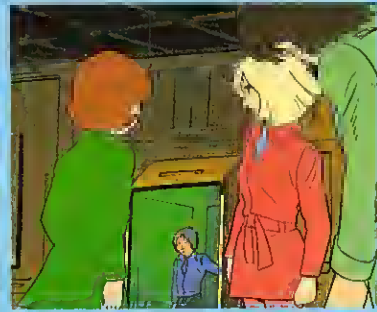
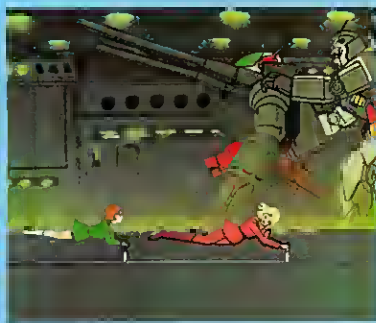
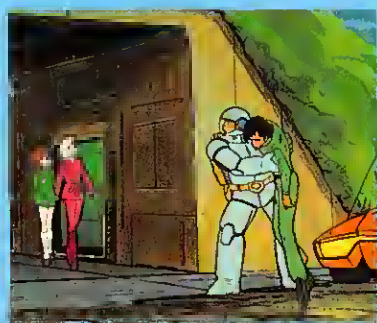
鋭いシャアの攻撃に、アムロはふるえながらレバーを握りしめ、ビームを連射する……

「こ、これが……た、闘い……」

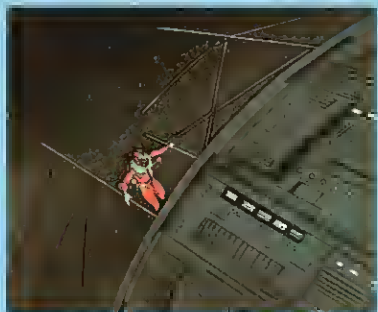
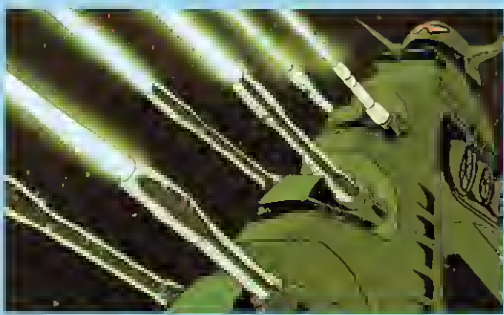
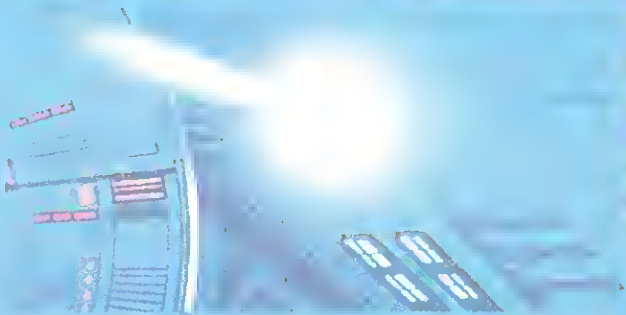
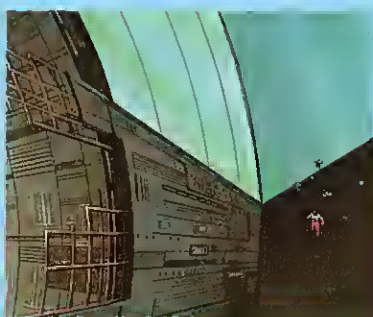
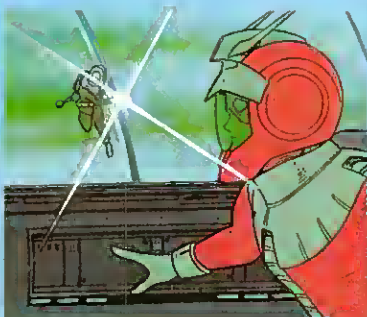
モニターに迫る赤いザク。

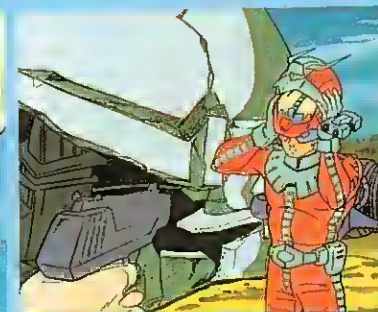
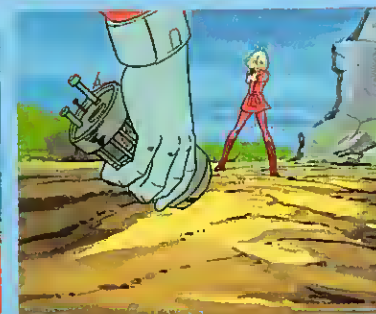
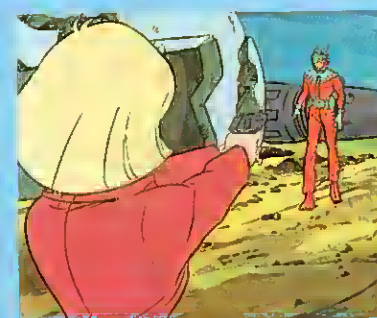
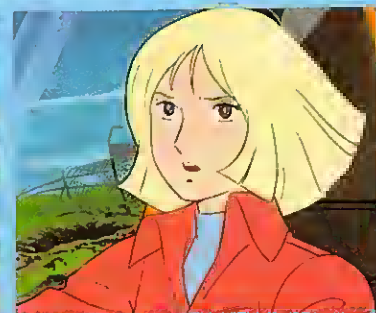
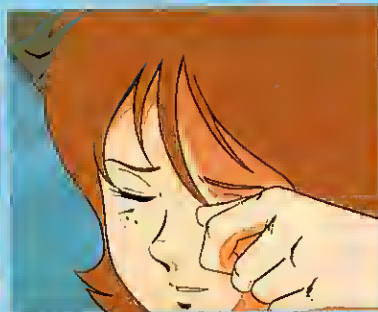
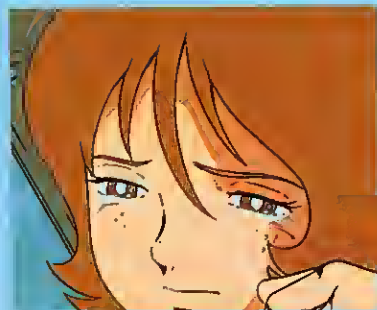
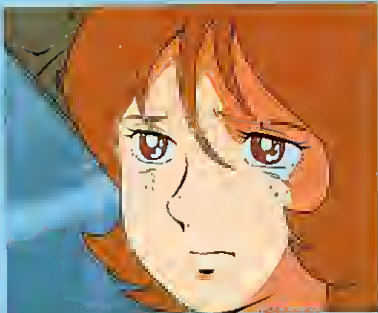
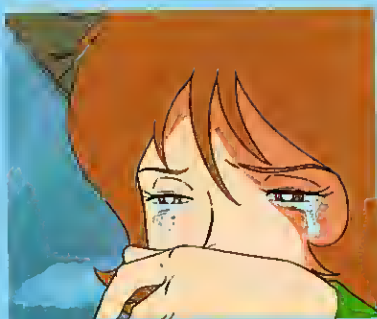
「うわあ／ああ／」

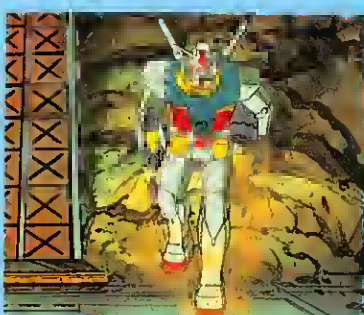
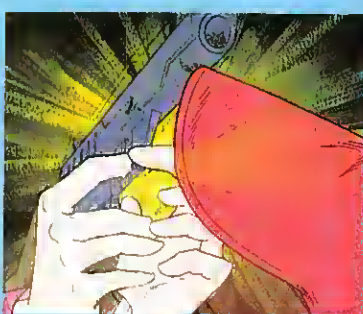
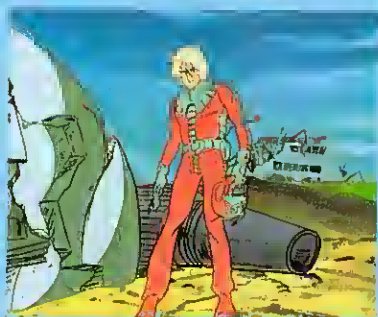
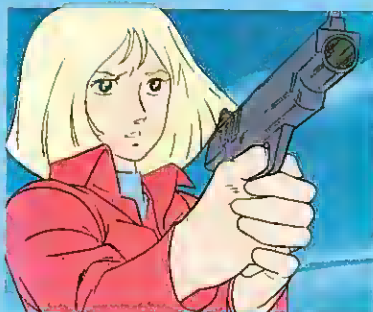
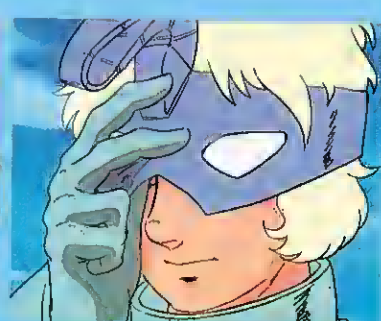
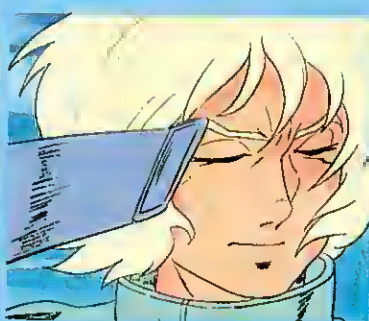
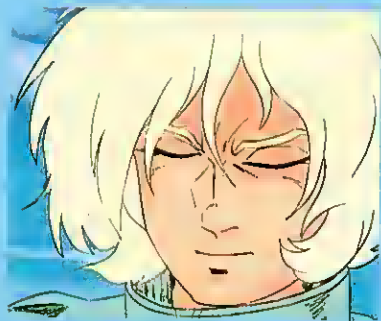
シャアは我が目を疑った。ガンダムにライフルの直撃を浴びせたが、ガンダムには効かなかった。そしてさらにもう一機のザクが見

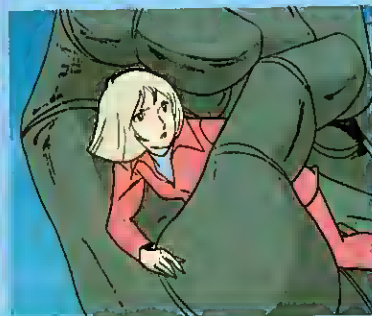
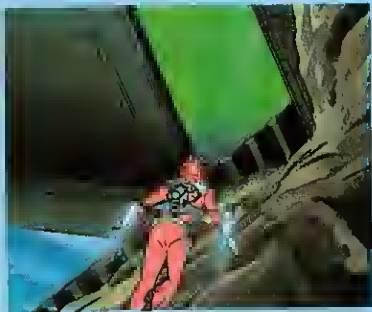
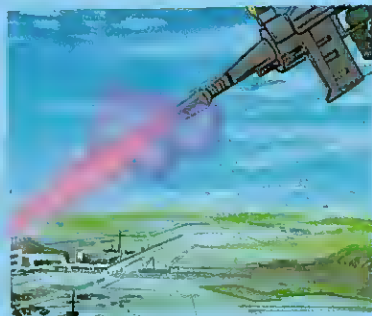
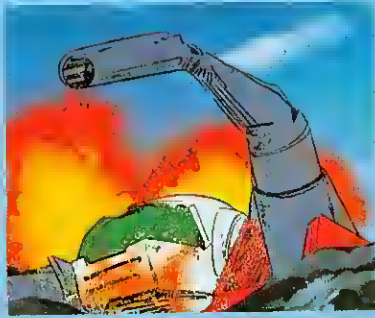
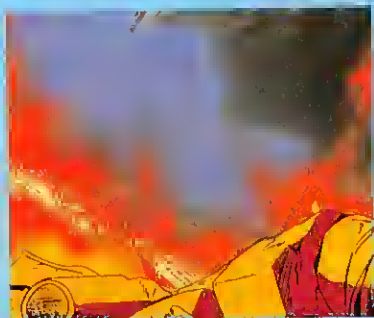
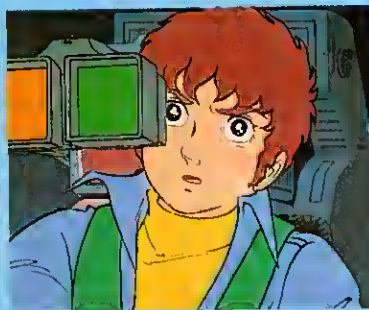
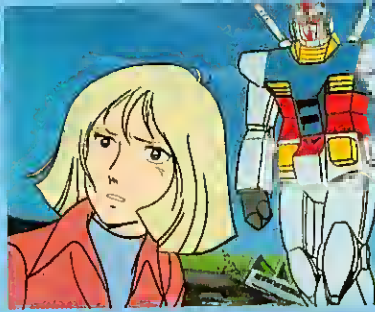
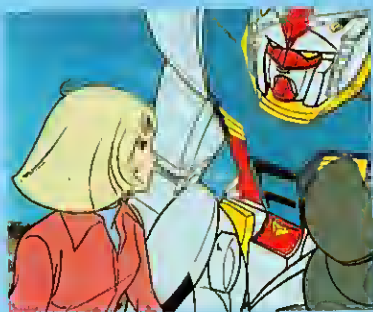
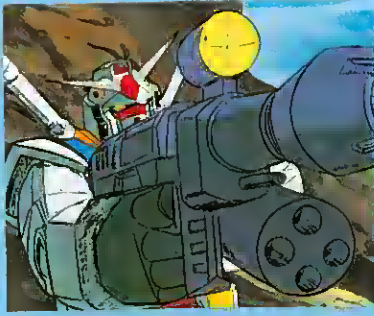
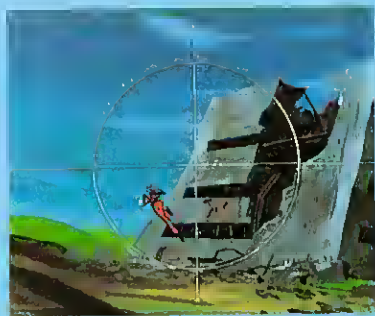


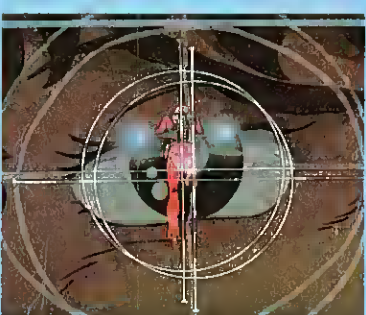
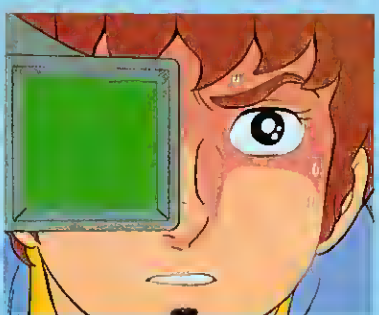
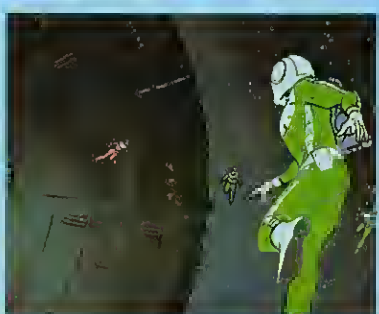
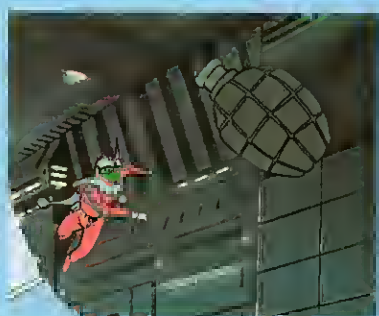
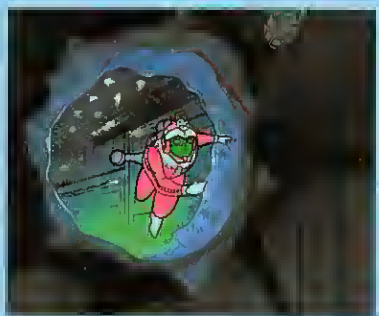
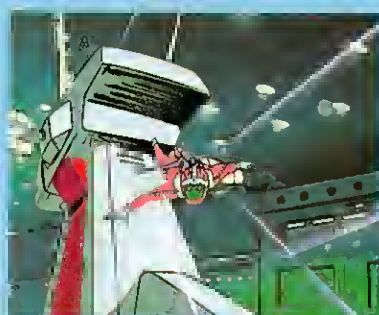
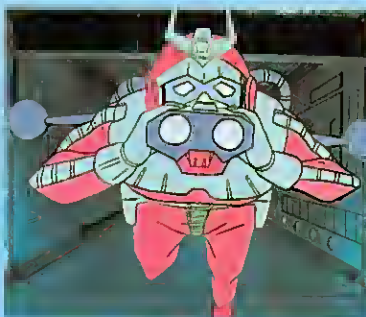
すると、さすがのシャアもその性能に恐怖した。明らかな戦力の違いだ。シャアは後退し、アムロもエネルギーが尽きて帰艦した。
 戦い終わったアムロに、ブライトはガンダムの性能をあてにしすぎると指摘した。
 「甘ったれるな！ガンダムを任されたからには貴様はパイロットなのだ！この船を守る義務がある」
 「い、いったな！」
 「こう言わざるを得ないのが、現在の我われの状態なのだ。やれなければ、今からでもサイド7に帰るんだな！」
 睨みあうブライトとアムロ。
 「やれるとは言えない。…け、けど……やるしかないんだ！僕には、あなたが……」
 「憎んでくれていいよ。……ガンダムの整備をしておけ。人を使ってもいい、アムロ、君が中心になつてな！」
 ホワイトベースは、連邦軍の最前線基地ルナツーを目指して、いま出発した——



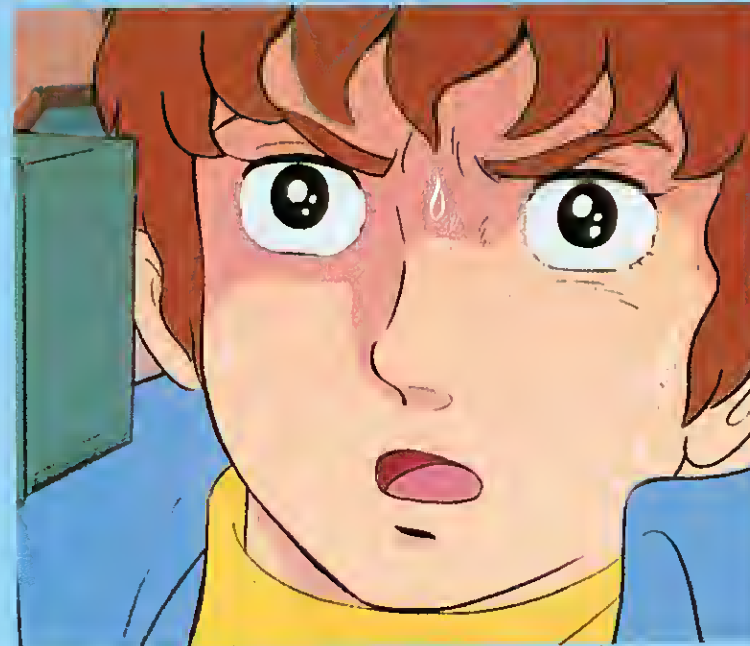
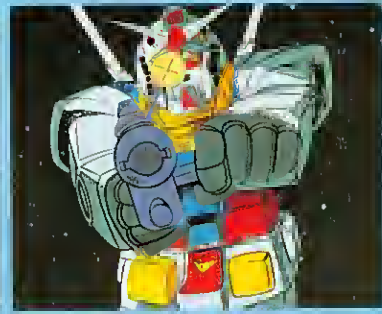
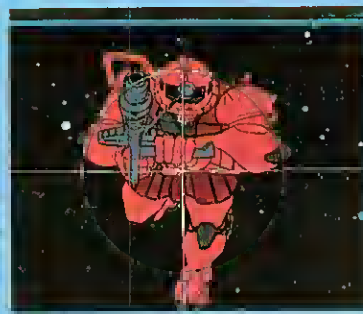
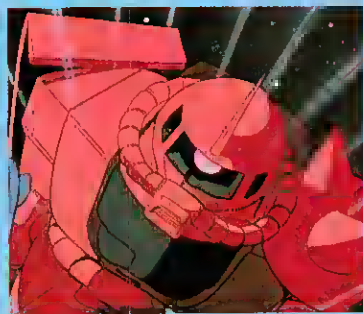
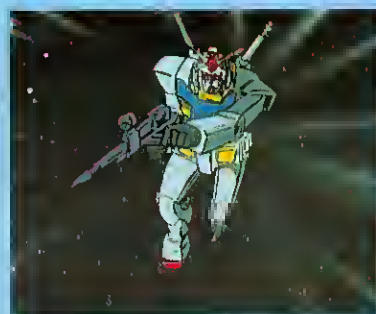
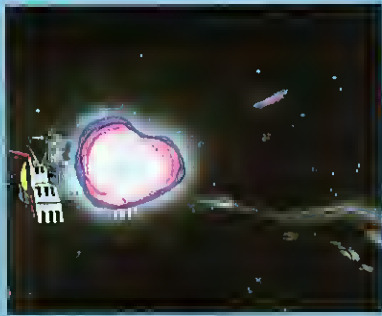


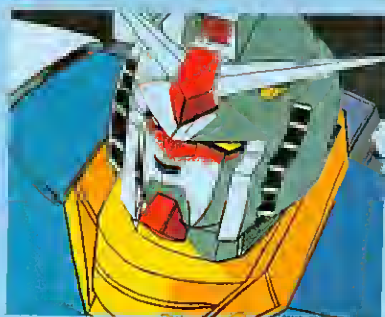
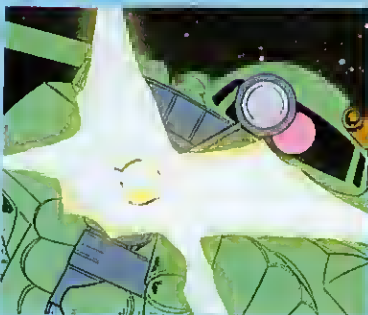
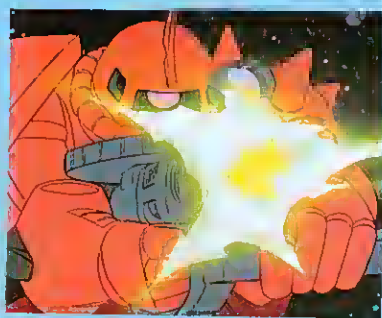
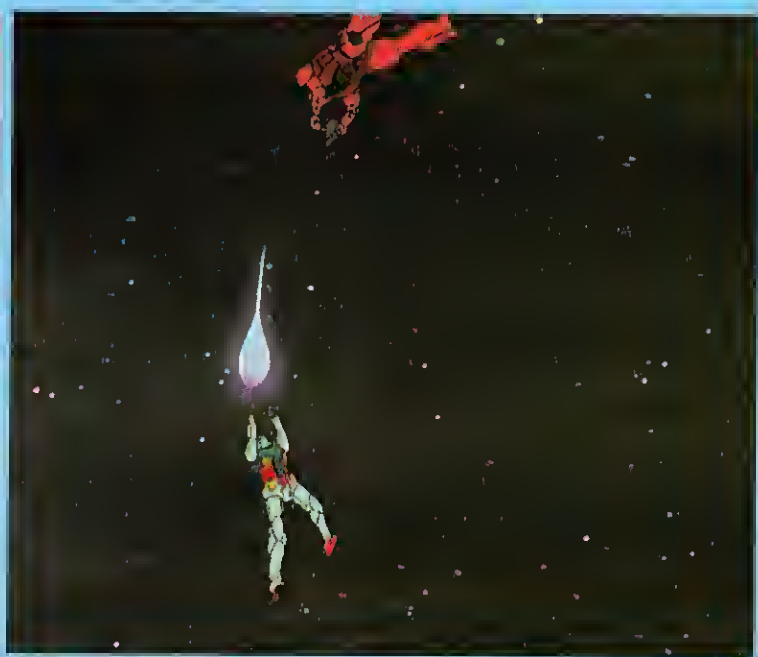
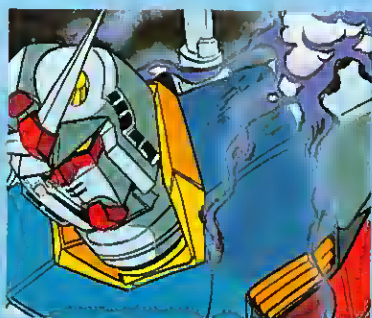


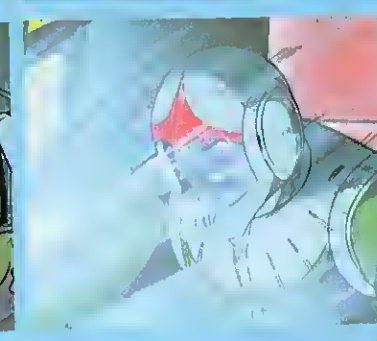
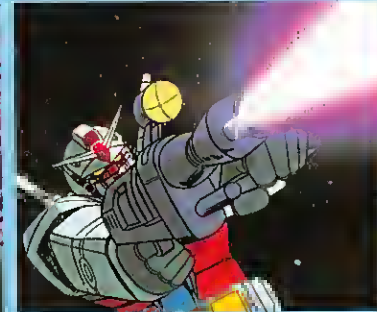
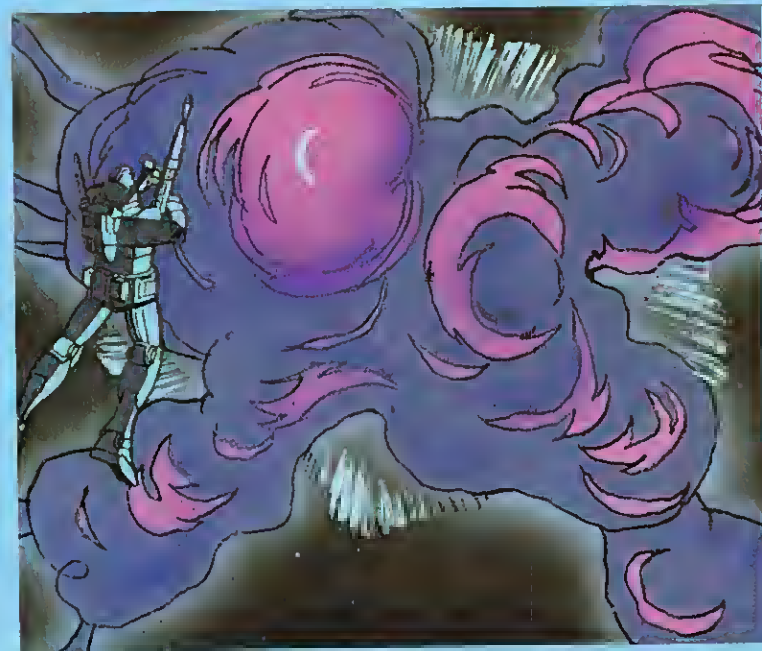
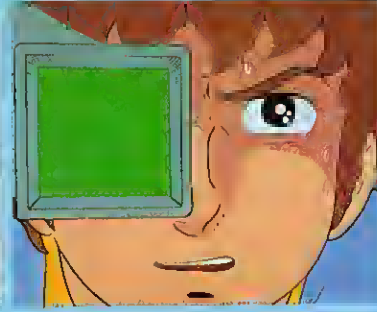
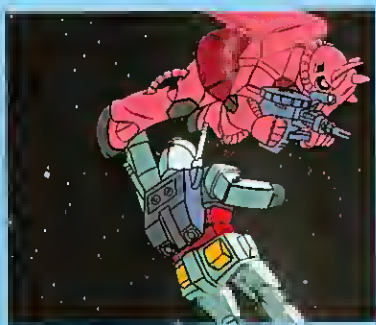


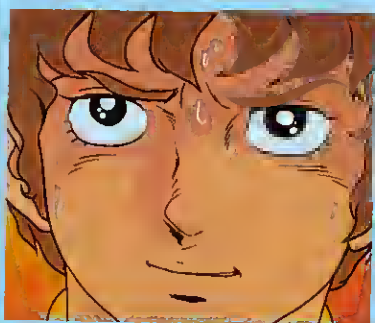
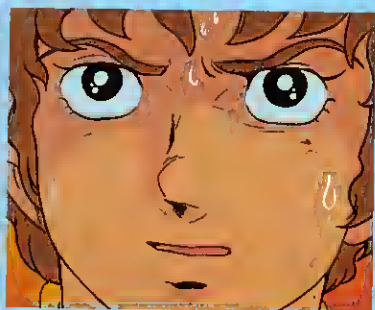
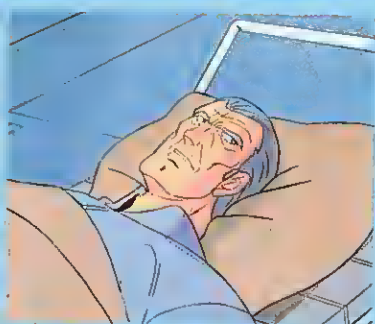
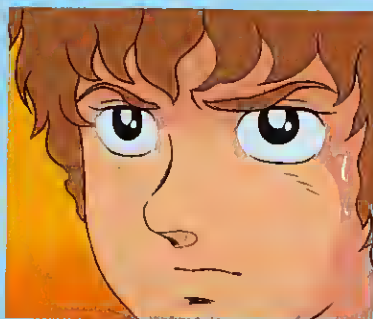
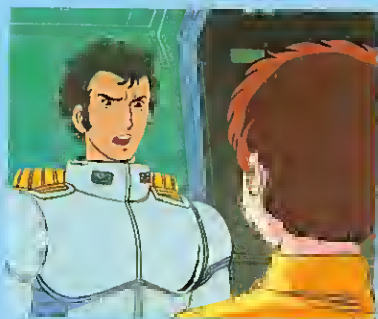
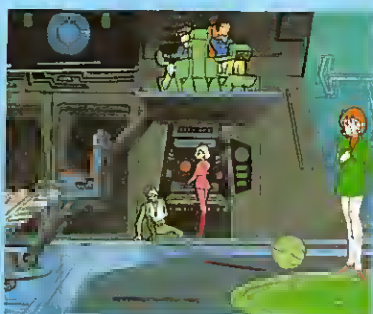
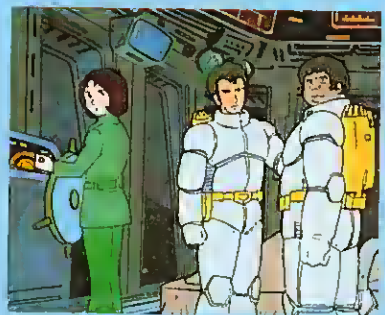
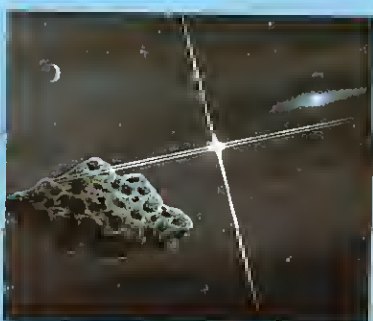
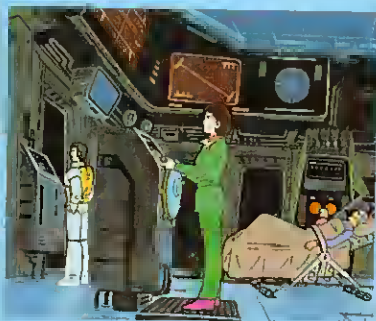
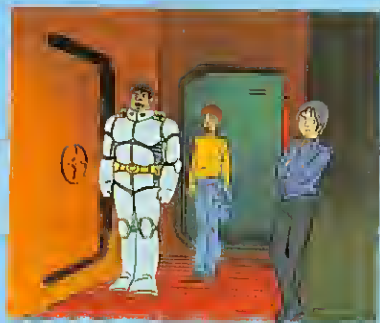


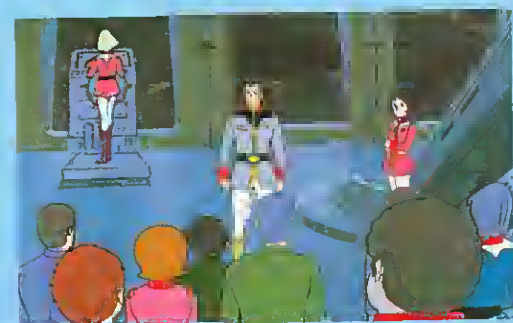
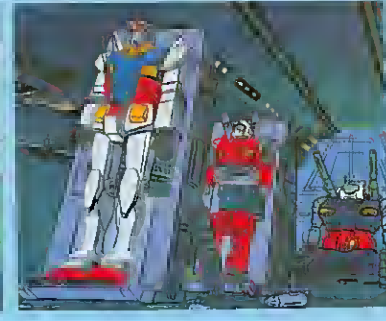
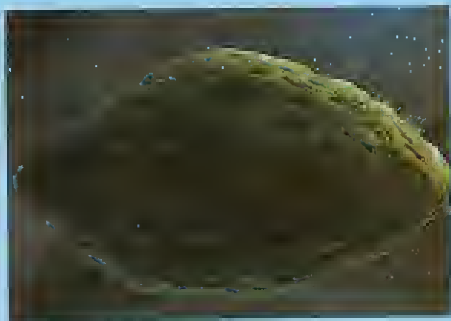




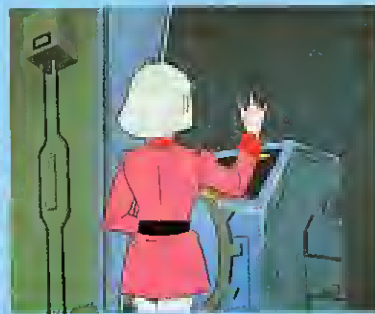
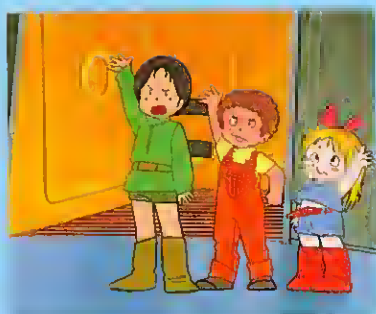








第3話 敵の補給艦を叩け！
ルナツー。宇宙都市建設の鉱物資源を得るために、月軌道上に運ばれてきた小惑星である。そこには連邦軍の最前線基地があり、ホワイトベースはそこに向っていた。大任を負うブライトたちは不安だった。ブライトとセイラは、バオロ艦長の指示を仰いだ、艦長の傷は思わしくなかった。隣りのブロックでは、避難民たちが不安げに食糧の配給を待っていた。そこには、かいがいしく避難民たちの間を走り廻って食糧を配って歩く、フラウとチビちゃんたちの忙しそうな姿があった。シャアのムサイは、相変わらずホワイトベースをつけていた。しかも、ただ後をつけてくるだけで、何の攻撃もしかけて来ないのだ。「時間の問題だと思っただけです」ど……シャアの攻撃……とうとうミライが口を切った。そのころ、シャアはドズル中將からの通信を受けていた。3機要請したザクを2機に減らし、しかも老朽化した補給艦ババアで送ったというのだ。「ババア補給艦!? あんな老朽艦では十分な補給物資は……」「現状を考えると十分な戦力で闘える昔とは違うぞシャア!」そして、何としても連邦の機密を手に入れるという。



「敵のモビルスーツの性能が、皆目わからんというのに……」
「シャアは不満だった。」

そのころガンダムの格納庫では、アムロが一心に整備をしていた。フラウがアムロの体を気づかってやってきたが、アムロはなま返事だ。

「ブライトを気にして、そんなにムキになることないのに」

「そんなこと関係ないよ！ 死にたくないからやってるだけさ」

「そっかしら？」

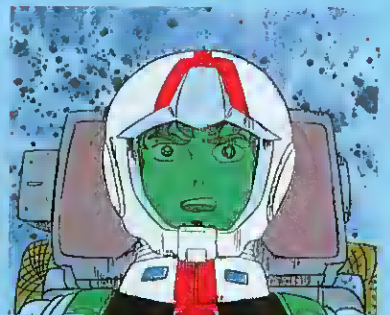
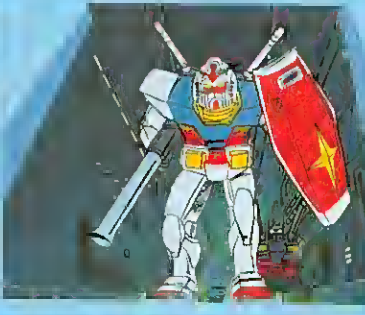
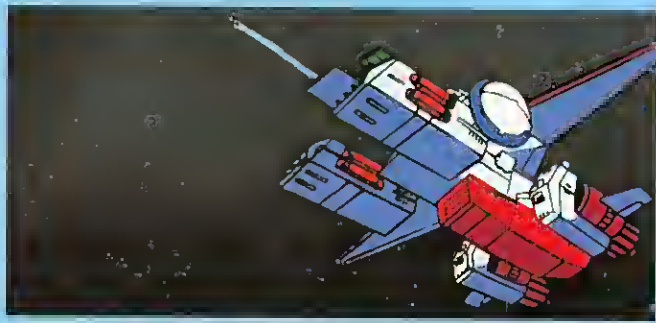
「……そっかい？」
ブリッジでは、ブライトとミライがシャアの行動について推測をたてていた……。

ムサイに接近する艦があった。補給艦なら、その隙をつけば、あるいはシャアに勝てるかも知れない……もし援軍なら、逃げることさえ不可能かも知れないが……ブライトは多数決で、ムサイを撃つて出ることにした。

アムロのガンダム、リュウのコアファイターが続いて出撃し、ルナツーの地表に沿って、太陽を背にムサイに接近した。

折しも、ムサイと補給艦ババアが、コンペアパイアで接続された時だった。アムロはバズーカを射った。コンペアパイアに命中／続いて第2弾もババアを直撃した。シャアもザクで迎え撃つ。

「モビルスーツの性能の違いが、



戦力の決定的な差でないことを、
教えてやるが！

ガンダムはバズーカは、ザクに
軽々とかわされて弾がつきた。ガ
ンダムの攻撃は、シャアには通じ
なかったのだ。苦戦に苦戦を強い
られるアムロの顔に、恐怖の色が
はした。

ムサイに戻ろうとするシャア、
それを阻止するアムロ……

「ブライトと約束したんだ。シャ
アを引きつけておくってな！」

シャアの執拗な攻撃にも、ガン
ダムはなんとか耐えていた。

「連邦軍のモビルスーツは化物
か？これだけの攻撃でもまだ……」

ハヤトは、カイとガンタンクで
ムサイを撃つことを提案した。

ハヤトは地表を走り、ババアを射
つた。ザクを放出し、物資をまき
散らしながら、ババア艦は爆発し
地表に激突した。

艦を失ったガテムは、自らのザ
クを駆って、

「あれがアア！連邦軍の作った
モビルスーツってのは！」

「ガテム、落ち着け！」

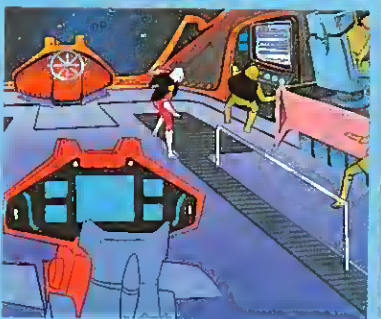
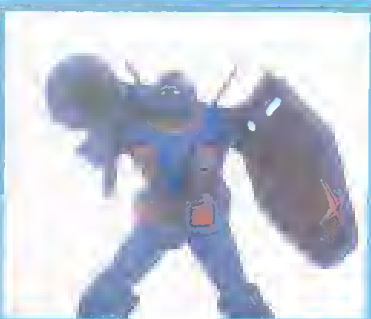
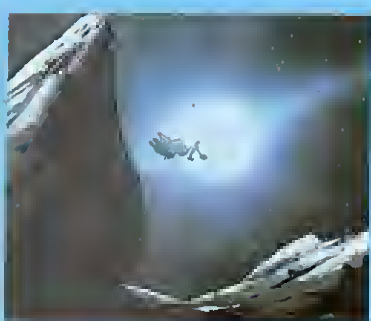
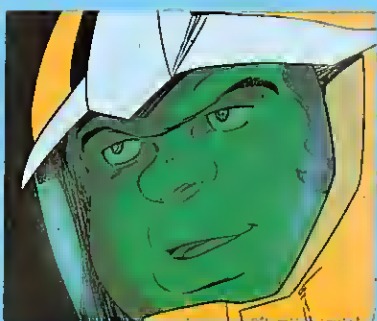
「とめるなア！」

「わしの船をやられたのだぞ！
このザクとてわしと百戦練磨の闘

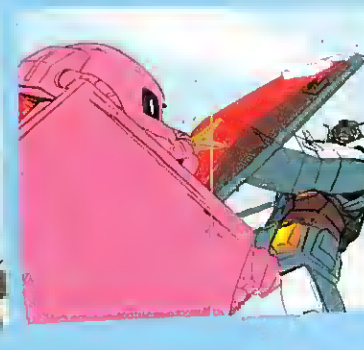
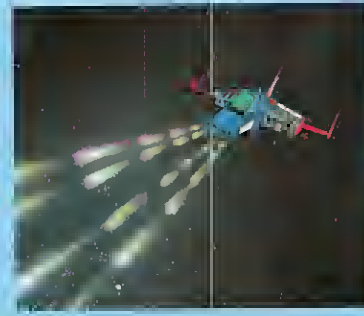
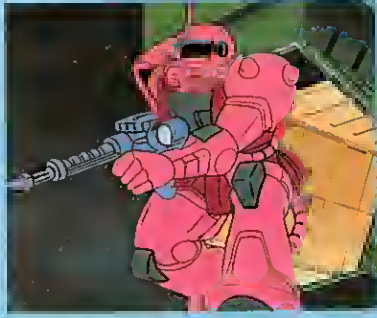
いの中をくぐり抜けてきたのだ！
にわか作りの連邦軍のモビルスー

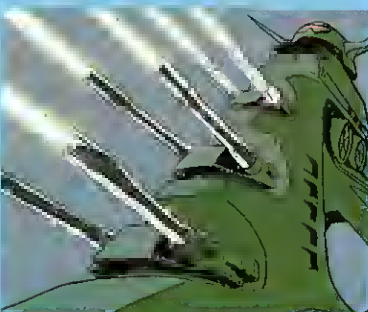
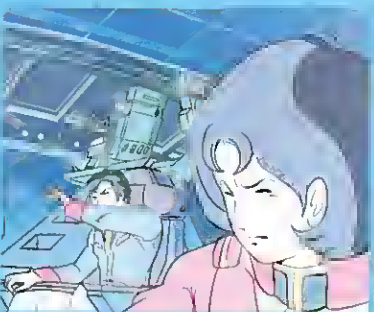
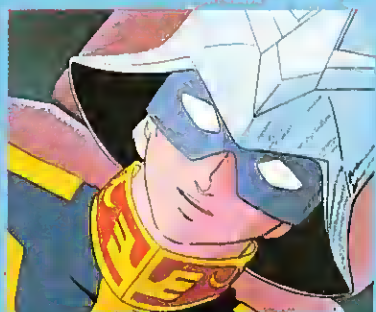
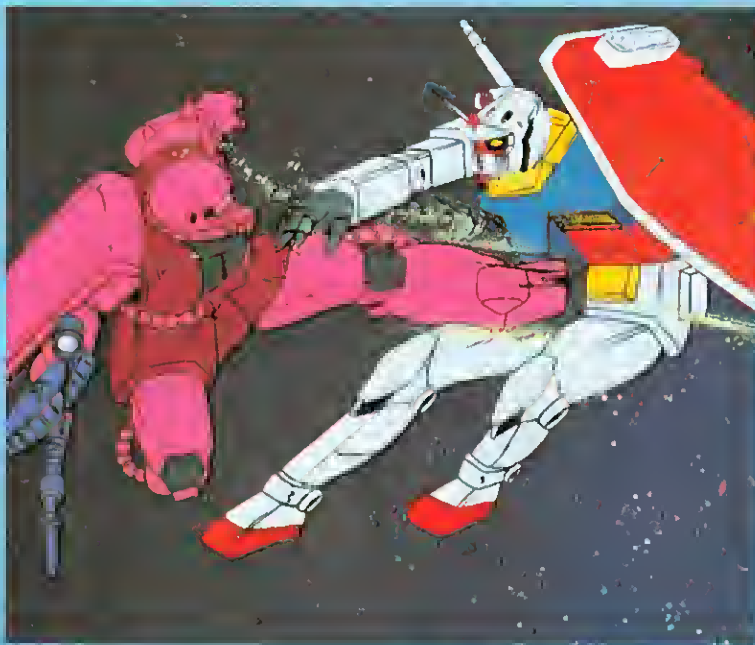
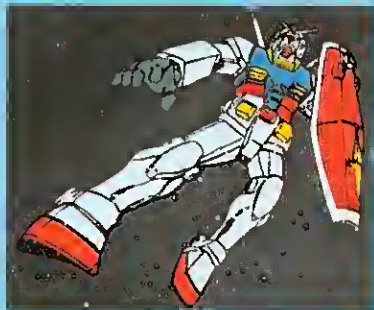
ツなぞ、一撃で倒してみせるわ！」
シャアの止めるのを振り切って、ガ

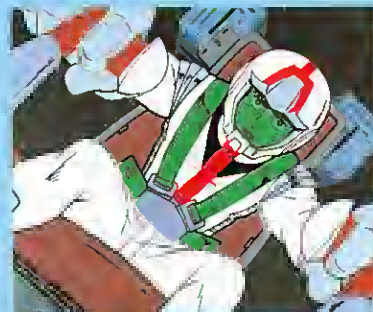
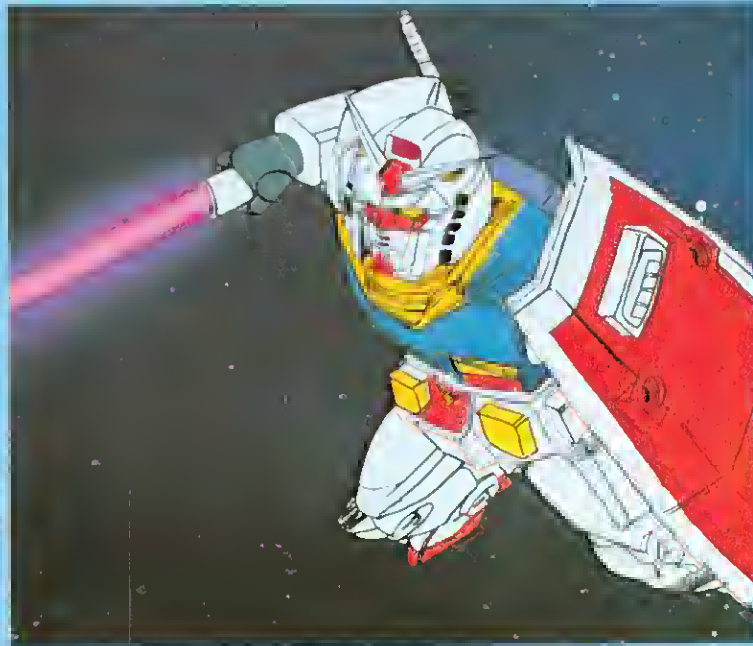
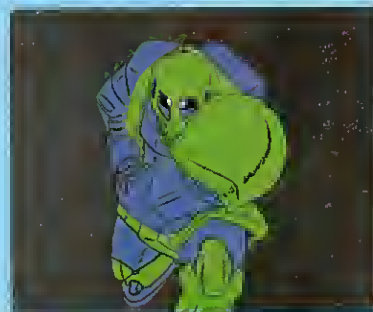
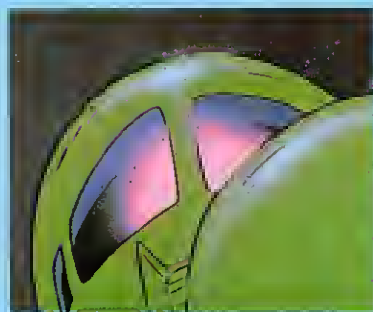
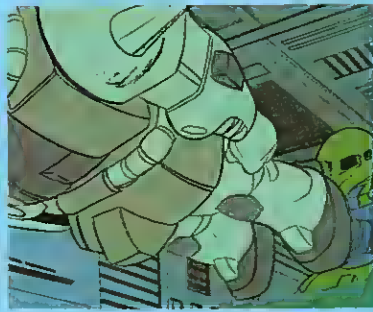
ンダム目がけて体当りを企てた。

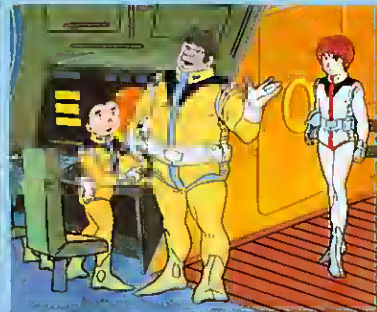
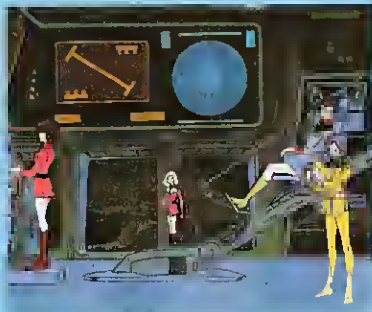
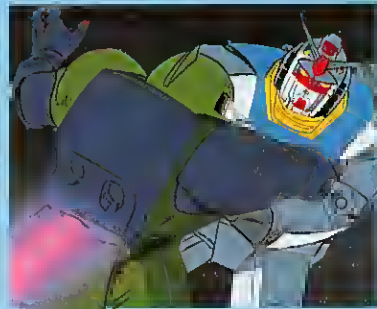
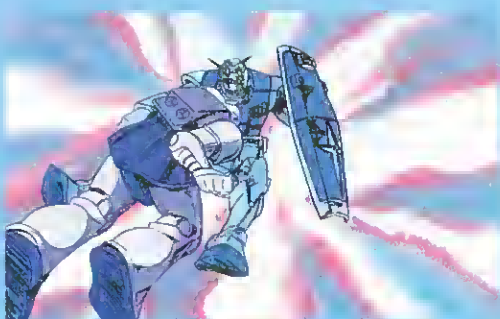


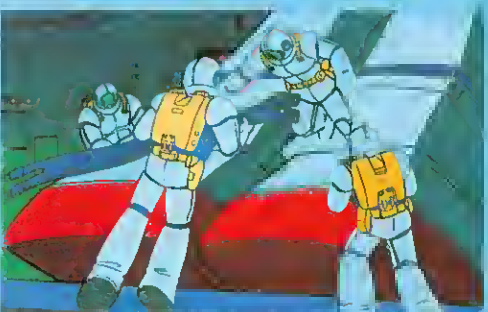
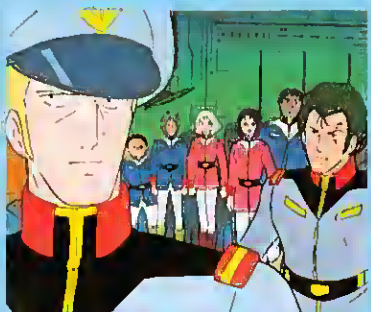
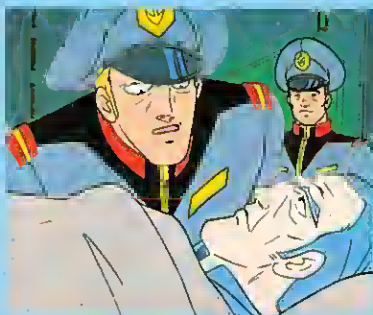
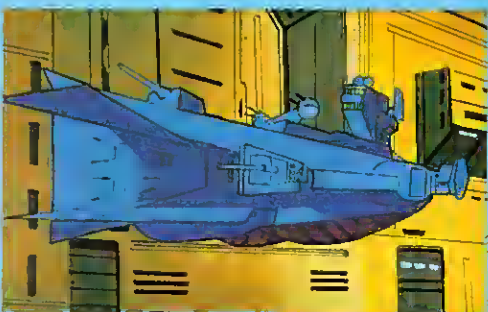
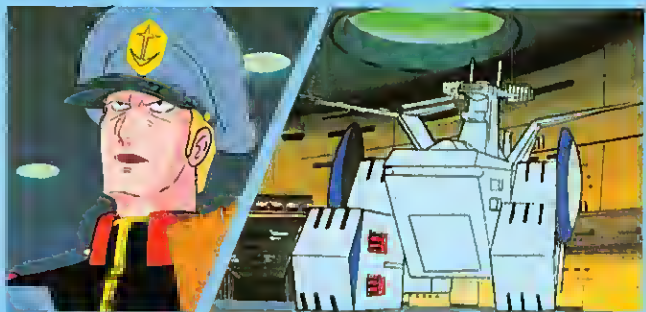
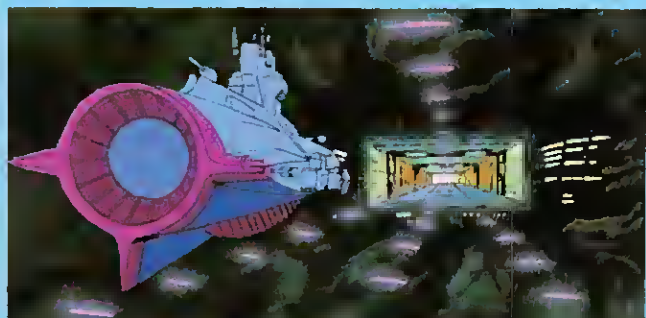
「ふ、武器も持たずに……!?」
とまどうアムロ……ガンダムは、
ビームサーベルで突こうとした。
「素人め、間合いが遠いわ!!」
ガデムの体当りに一瞬ひるんだア
ムロだったが……次の瞬間、ガ
ンダムのビームサーベルがザクの
胴に切り込み、ザクは閃光を放っ
て爆発した。
「ガ、ガデム……」
老雄ガデムは散った。
ガンダムは撤退していった。し
かし、シャアは勝に落ちなかった。
連邦軍の新兵器の威力を思い知
らされた。明らかに、連邦軍の新
兵器の高性能の前に敗北した。
「……………しかし、一体どういふこ
となのだ!? 連中は、戦法も未熟な
ら、戦い方もまるで素人だ……」
戦果をあげたにもかかわらず、
ブライトの言葉は冷たかった。
ホワイトベースのブリッジで、
ブライトは燃えたアムロに言っ
たのだ。
「シャアは、赤い彗星と呼ばれて
いる男だろ? もっとたち向い方を
考えてくれ」
はい? と答えはしたものの、アム
ロの中にこみ上げる激しい反感が
あった。しかし、それもフラウの
笑顔に吹きとんだようだ。
そして、ホワイトベースは一路
ルナツー基地を目指していた……



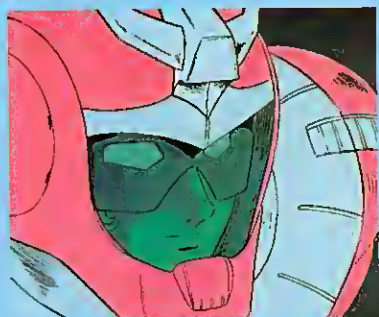








ホワイトベースはルナツー基地に着いたものの、人びとは体を休めることもできなかった。
 司令のワッケインが、ホワイトベースを守ってきたブライトたちを、基地内に監禁してしまったのだ。士官候補生と民間人が、軍の最高機密であるホワイトベースとガンダムを勝手に使用したことがその理由だった。そのうえ、赤い彗星が追撃してくる、というブライトの忠告にも耳をかさず、ホワイトベースを没収、ガンダムを封印してしまったのだ。
 その頃、シヤアのムサイは、ブライトの子想通りレーダーをすり抜けて、ルナツー基地に近づきつつあった。
 シヤアはふと、サイド7で自分に銃を向けた、少女のことを思い出していた。
 「お捨てなさい！……動くとき撃ちます！……」
 「もし……あの時の少女が……10年前に別れた妹の……いや、アルティシアにしては……強すぎる……」
 「そっ……アルティシアは、もっとやさしい……」
 ふと、おとした顔をキッとあげると、シヤアは部下たちの方に向き直って言った。
 「ノーマルスツで敵のふところに潜入する！」



ガンダムとホワイトベースを奪取し、もし不可能なら爆破してしまおうという大胆な計画だ。

首尾よく潜入はしたものの、警戒が厳しくてホワイトベースに近づけないことを知ったシヤアは、基地の各所に爆弾を仕掛けた。

ところがその爆発が、偶然にもアムロたちが監禁されている部屋の電源を切り、扉の電子ロックを解くことになってしまったのだ。

「やったーっ！」

「仲間を集めろ！ ホワイトベースを港から出さず！ アムロはガンダムの封印を解け！」

一方、シヤアを撃つべく港を出かかったマゼランは、シヤアの仕掛けた機雷によって爆発を起し、港の通路をふさぐように止まってしまった。

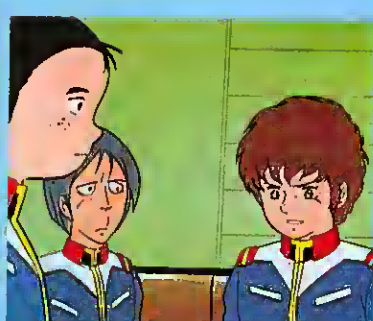
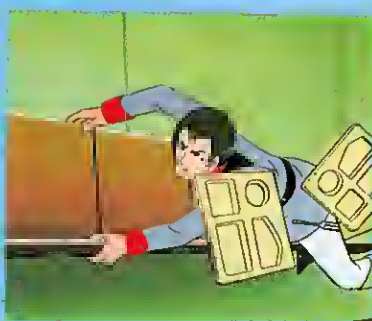
アムロがガンダムの封印を焼き切っている時、マゼランから脱出してきたワッケインが現われて、直ちに退去せよという。

「あなたの敵はジオン軍なんですか!? ……それとも私たちなんですか!？」

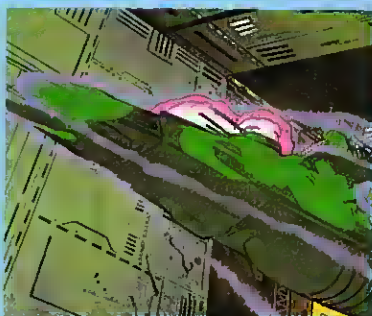
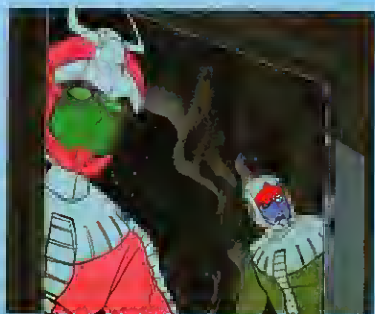
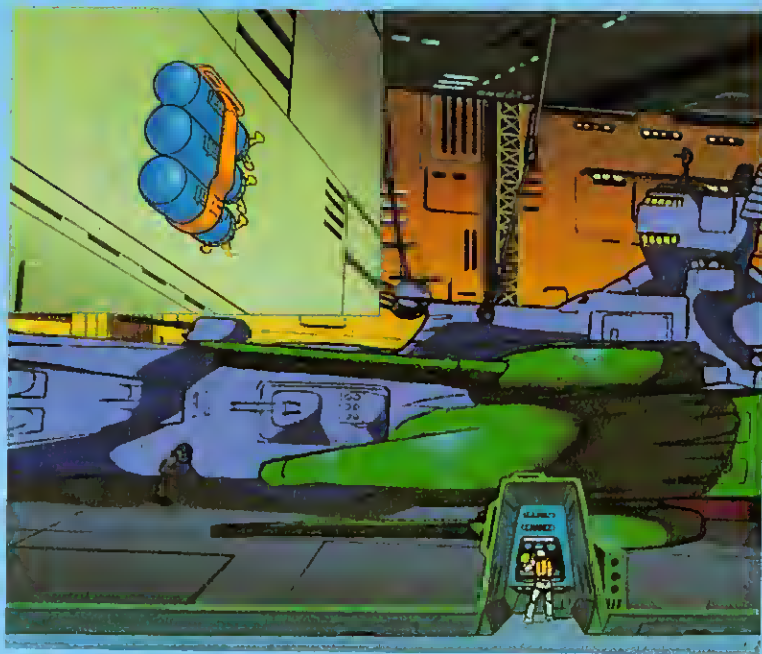
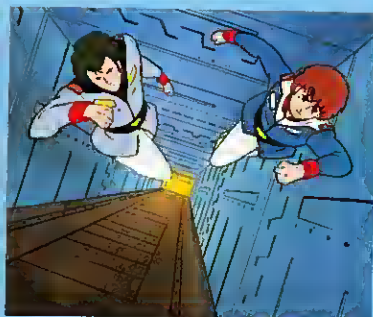
詰めよるブライトに、ワッケイン司令は言った。

「今、君に軍規がなぜ必要なのか、説明したくはないが！ 定められた命令は厳守だ！」

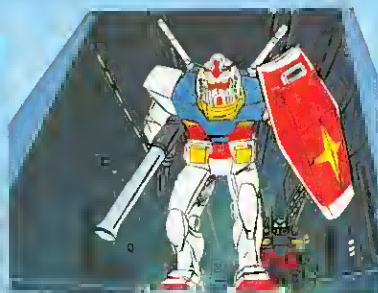
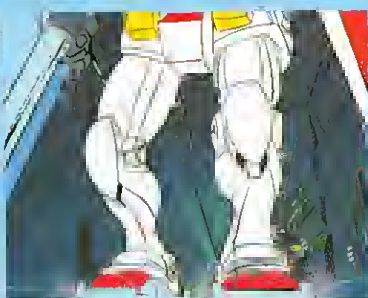
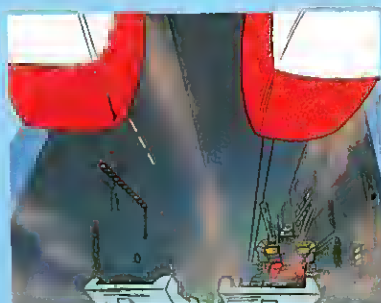
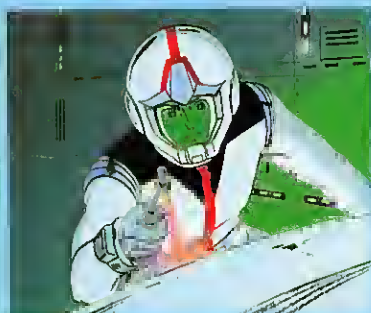
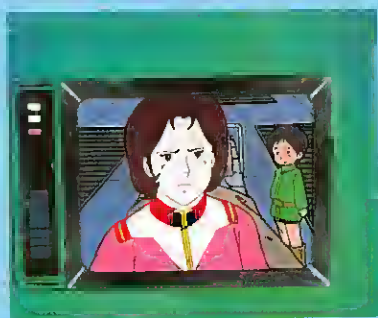
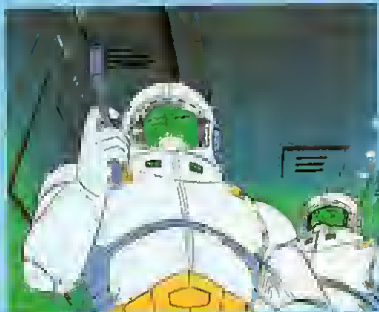
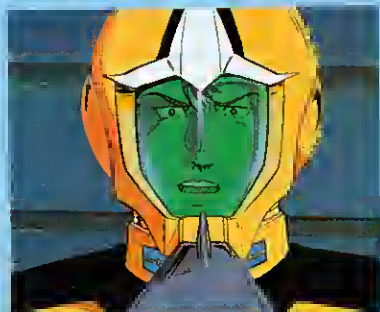
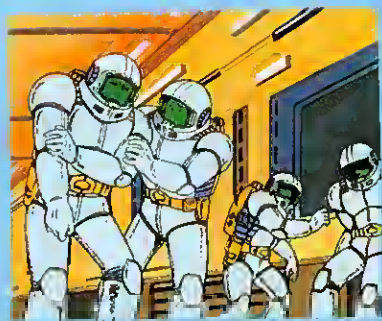
「軍規、軍規！ それは何だということです。軍人が軍規にのっとって死ぬのは勝手です。でも、他の民

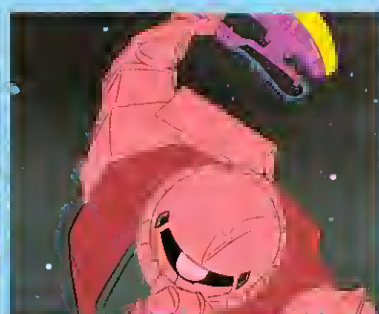
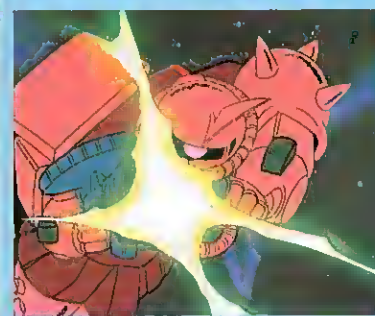
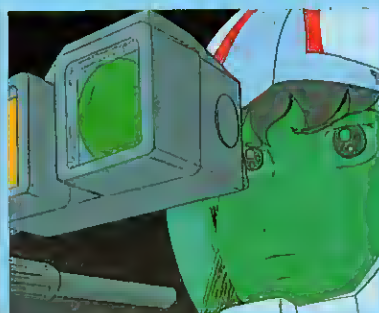
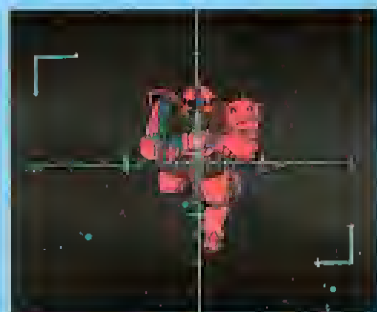
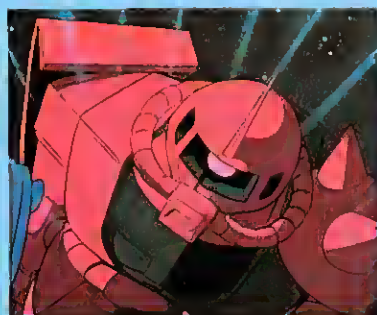


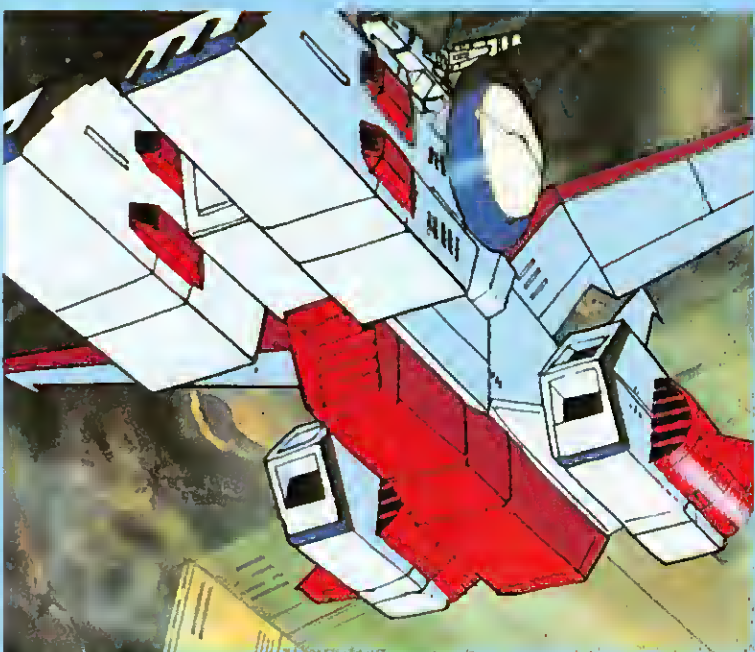
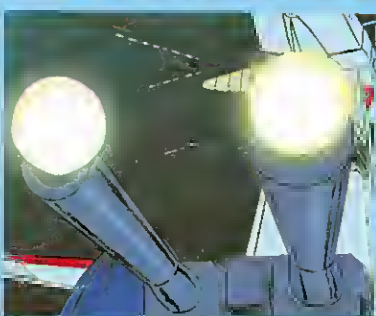
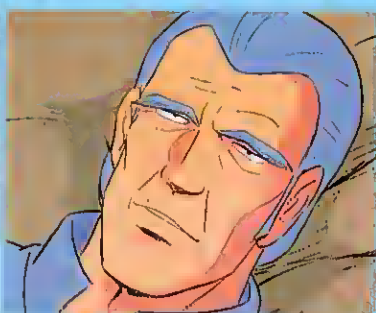
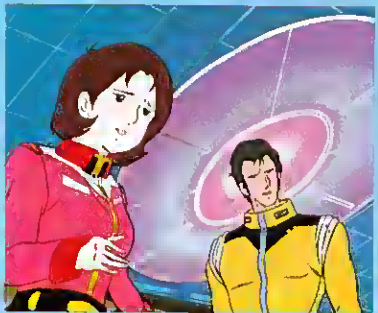
間人がその巻き添いになるのは理
 不愔ではないでしょうか？
 ミライがモニターから叫んだ。
 「ど、どうだろう……。ワッケイ
 ン君……ホワイトベースにしろガ
 ンダムにしろ……今まで機密事項
 だった……。しかし、不幸にして
 我われより彼らの方がうまく使っ
 てくれるのだ。
 すでに二度の実戦経験がある彼
 らに……」
 「しかし、パオロ艦長！」
 「そう……所詮彼らは素人だ……
 司令たる君が……闘いやすいよう
 に助けてやってくれ給え……。わし
 が、責任をもつ」
 ムツとのり出すワッケイン司令に、
 パオロ艦長が苦しい息の下から説
 得するのだった。
 「わかりました。艦長のお言葉に
 従います」
 じつと眼を閉じてパオロ艦長の言
 葉を聞いていたワッケイン司令は、
 やつと出撃を認めたのだ。
 ガンダムに続いて、コアファイ
 ターも発進した。
 シェアは、ザク一機をやられた
 ものの、バズーカを切り落してガ
 ンダムに迫ってきた。
 「ワッケイン司令！あのマゼラン
 艦を排除しない限り、ホワイトベ
 ースは港を出られません。
 このままでは、戦わずしてルナ
 ツー艦隊は全滅です！」

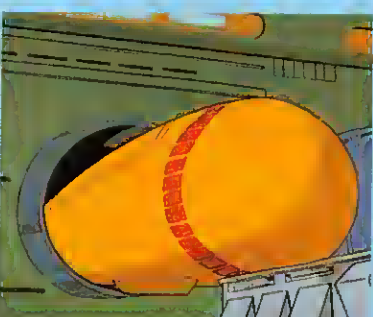
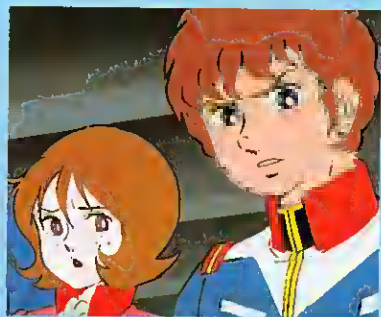


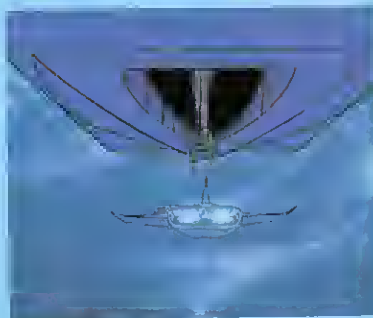
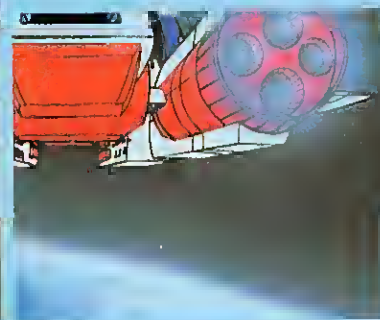
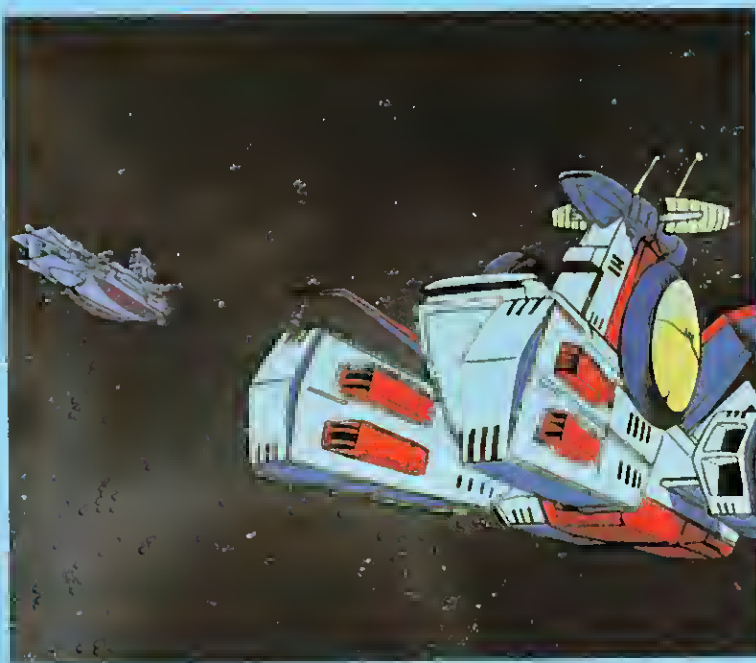
フライトの言う通りだ。通路の正面にザクとムサイを見つけたワッケインは、決断した。
 「マゼランを排除する！」
 マゼランの爆発はザクをのみこみ、状況不利とみたシャアは、ムサイとともに引き揚げていった。
 ムサイの中に消えるザクを見つめながら、アムロは思う……
 「シャア……一体どんな男なんだ……」
 しかし、ムサイ撃退の喜びも束の間だった。
 「おーっ……」
 艦長ノ……やりましたよ！
 嬉しそうにフライトが振り返ったとき、艦長はすでに息絶えていた。
 フライトは、艦長の手を握って誓うのだった。
 「艦長、あなたのホワイトベースは、私たちの手で必ず地球にお届けします」
 ホワイトベースを見送りながらワッケインは、つぶやいた。
 「ジオンとの戦いが、まだまだ困難を極める時、我われは学ぶべき人を次つぎと失ってゆく……寒い時代だと思わんか……？」
 パオロ艦長の亡骸を納めたカプセルが、広大な宇宙の彼方へと点になって消えてゆく。見送るアムロの心の中に父の姿が浮んだ。
 「……父さん……どこに行ったんだろう……」











第5話 大気圏突入

行く手に地球が見えている。

ホワイトベースは、大気圏突入を目前にしていた。

フラウがタオルと石けんを配っている。

「はい、石けんとタオルです。さっぱりした気分で地球の土を踏んで下さい……」

避難民たちの気持も、希望になんているようだった。

スミス老人は、孫のペロと故郷の大地を踏めることを心待ちにしていた。

「もう一度と地球の土は踏めんと思つてりましたから……地球へ帰ったら、僕は、絶対に動かんよ」

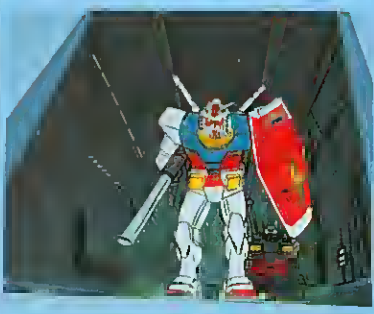
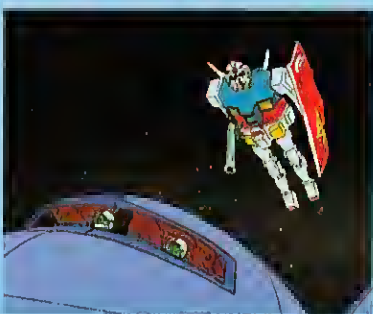
ポケットから出したコーヒー豆を懐しそうに見つめながら、スミス老人は故郷でペロを育て、何があつてもそこから離れず、そこで骨を埋めるんだとアムロに語った。

シャアは再び補給を受けていた。

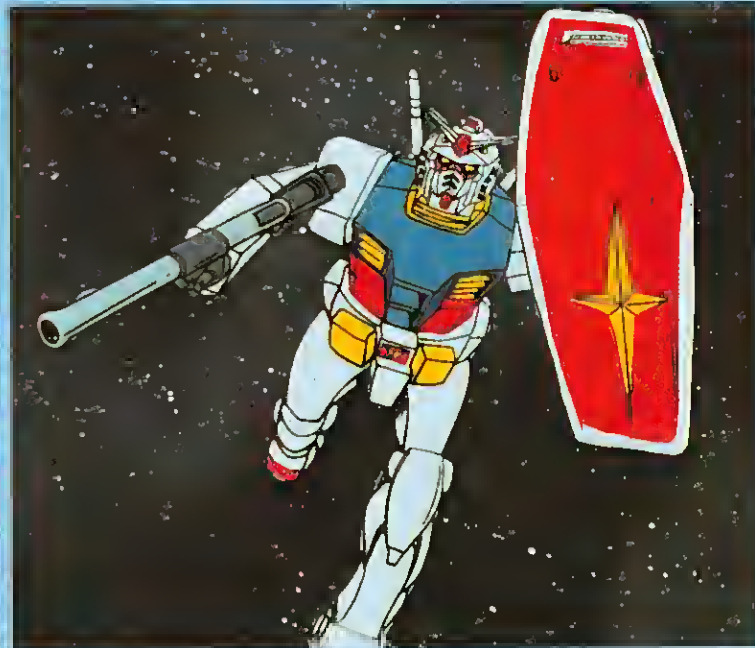
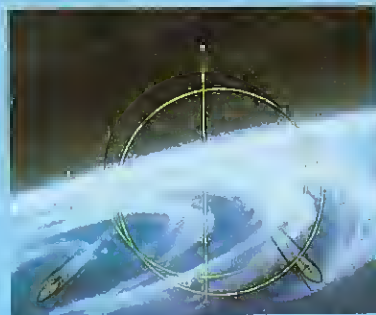
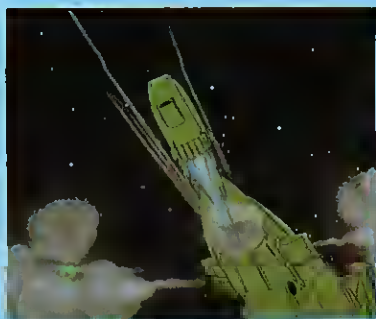
自らも危険をおかして、新たなザク3機で、危険な大気圏突入時に攻撃をしかける作戦だった。

サラミスの突入カプセルに導かれたホワイトベースを、4機のザクが追っていた。

ザクの接近を知ったフライトは、ガンダムを発進させた。だが、発進後わずか4分で帰還しなければ、



摩擦熱で燃えつきてしまうのだ。
ムサイからミサイルが発射されたが、迎撃ミサイルの射ち方のおかげで、ホワイトベースは、高度を下げてよけるしかなかった。
「アムロノシヤに気をとられすぎないでノザクがサラミスのカプセルを……」
モニターのセイラが叫んだ。
しかし、突入カプセルを襲うザクと戦っているスキに、シヤアはホワイトベースを攻撃していた。
バズーカ弾のなくなったガンダムは、バルカン砲でなんとかザク一機を撃破し、ホワイトベースから送ってきたガンダムハンマーを受け取ろうとした瞬間、シヤアはガンダム目がけてバズーカを射った！
突入カプセルも被弾して、リード艦長は負傷した。このままでは大気圏に突入できない。カプセルは、ホワイトベースに収容された。バズーカ弾のなくなったシヤアは、ガンダムの楯に切りつけた。
「ええーいノ腕が上ってきたようだなノこのパイロットはノ」
そして、ガンダムの背後からは別のザクが襲いかかってきた。
恐怖の中でアムロは、後ろのザクに夢中でハンマーをたたきつけた。直撃をくったザクが、大爆発を起した。
もう、オーバータイムであった。だが、アムロは執拗にホワイトベ



ースに攻撃をしかけてくるザクを追うのだった。

「アムロノホワイトベースに戻ってノオーバータイムよ」

セイラとアライトが叫んだ。

「アムロノ戻れノザクはいい」しかし、ガンダムの機体は灼熱しはじめていた。もう、帰還することはできなくなっていたのだ。

一方、シャアも灼熱するザクが回収不可能と知って見ているしかなかった。

「助けて下さいノげ、減速できませんノシャア少佐アー、助けて下さいノ」「うわーっ」

クラウンをのせたザクは灼熱し、徐々に溶解していった。

「……クラウン……無駄死ではないぞ。お前が連邦軍のモビルスーツを引きつけてくれたお陰で、撃破することができるのだ……」

アムロは、夢中でマニュアルをめくった。

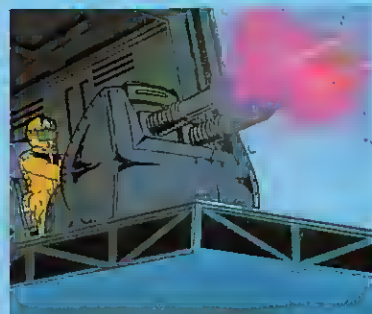
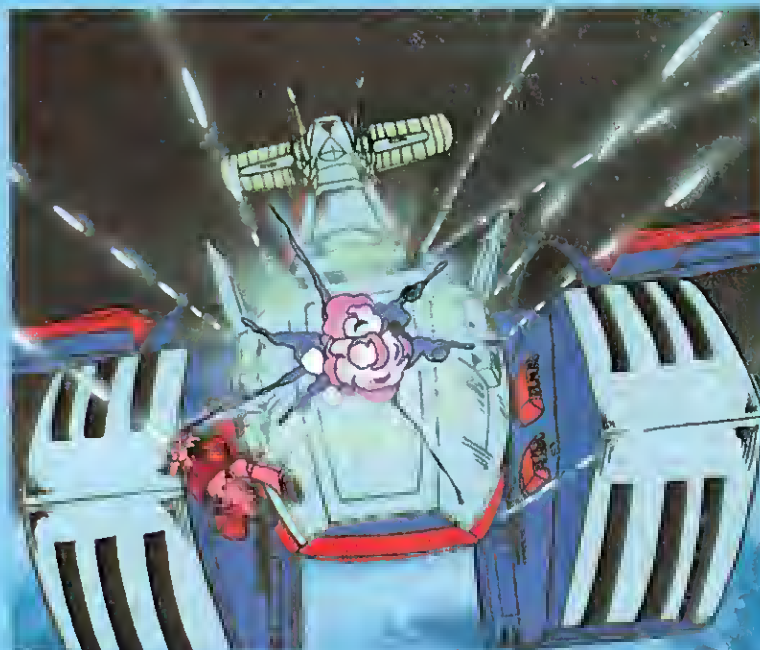
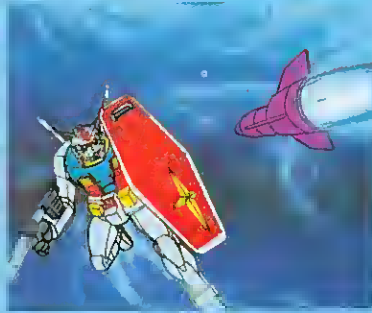
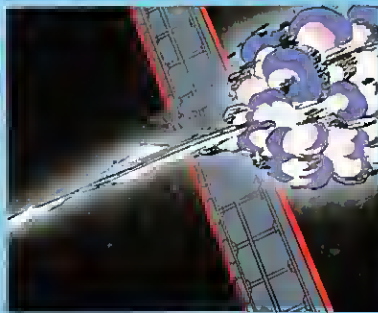
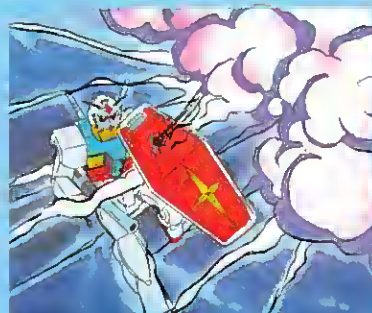
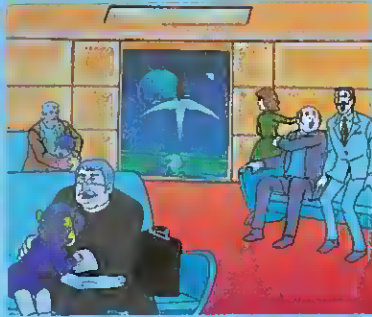
「あったノ大気圏突破の方法が……間に合うか？」

……姿勢制御。……冷却シフト……全回路接続……耐熱フィルム」

「すごいノ装甲板の温度が下がった……」

機体を冷却し、耐熱フィルムをかけ、ガンダムはついにその身を摩擦熱から守ったのだ。

大気圏に突入していくホワイトベースとガンダムをみて、シャア



はその性能を再認識しないわけにはいかなかった。

シャアは、すかさず北米基地のガルマ大佐に連絡した。

「よう、なんだい？ 赤い彗星」

「その呼び名は、返上しなくちゃならんようだ。ガルマ」

「……珍らしく弱気じゃないか」

「敵のV作戦の正体をつきとめたんだがね」

「なんだと？」

「そちらにおびきこんだ。」

君の手柄にするんだな……」

アムロは、ホワイトベースに無事着艦し、ホワイトベースも地球の上空に出ることができたのだ。

近づいてくる地球、眼下に広がる大陸をみて、避難民たちは歓声をあげた。ペロにとっては、初めて見る自然の陸と海だった。

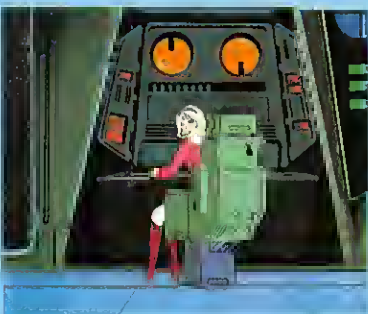
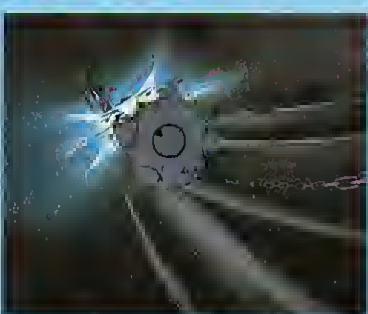
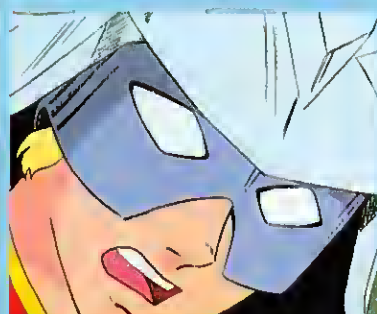
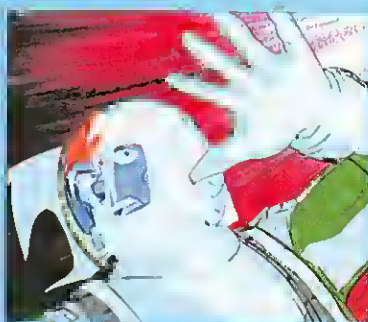
しかし、ホワイトベースのブリッジでは、リード中尉が当り散らしていた。

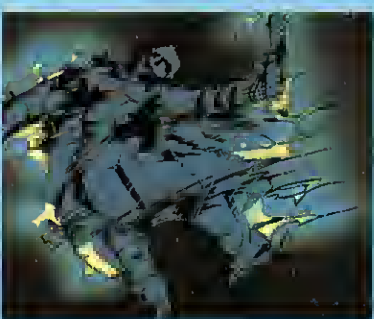
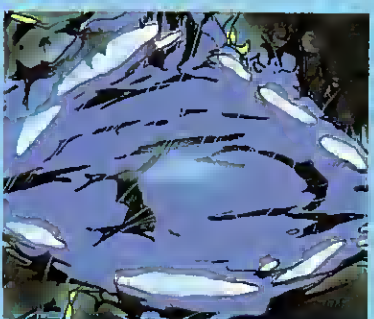
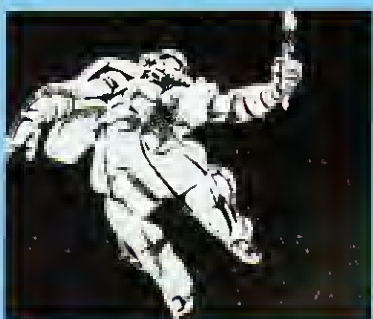
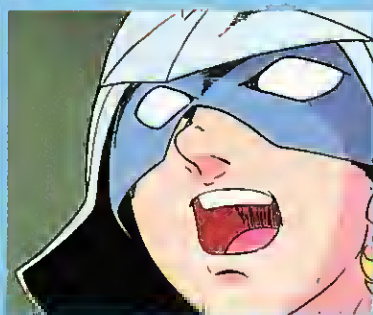
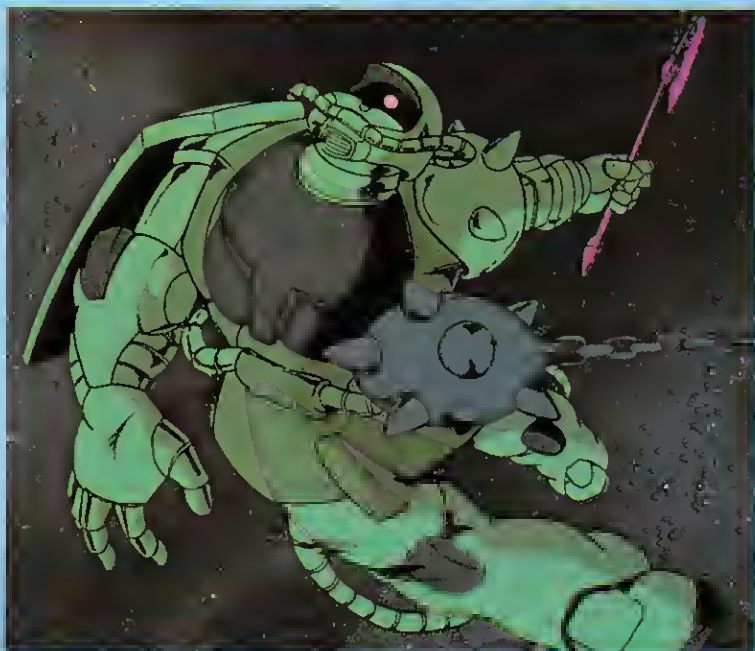
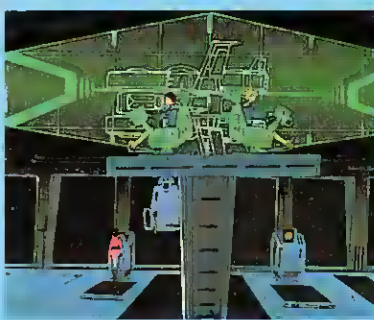
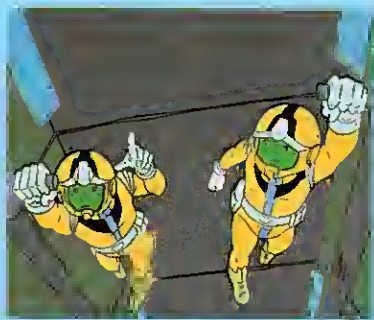
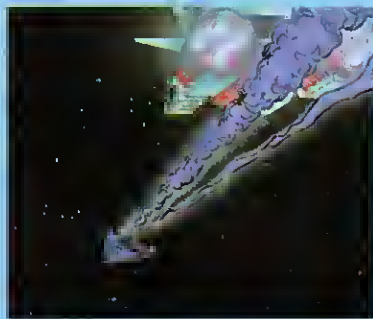
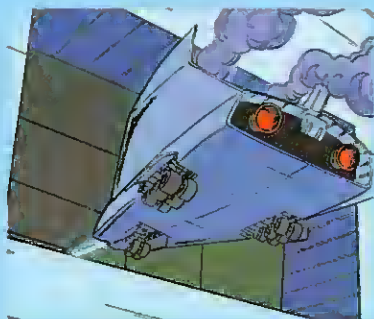
「これでは何にもならんじゃないか！ プライイト君！ 冗談じゃない」

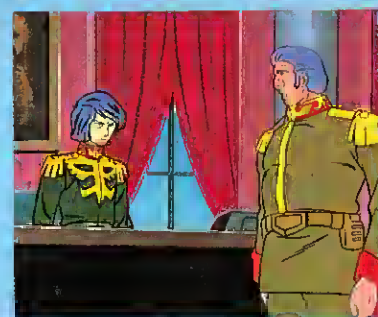
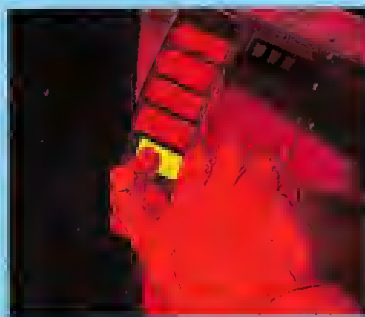
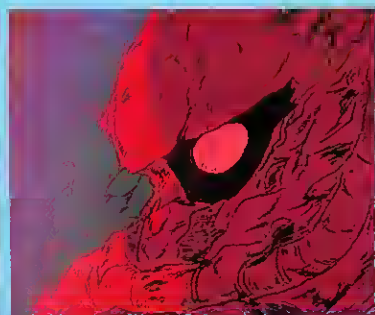
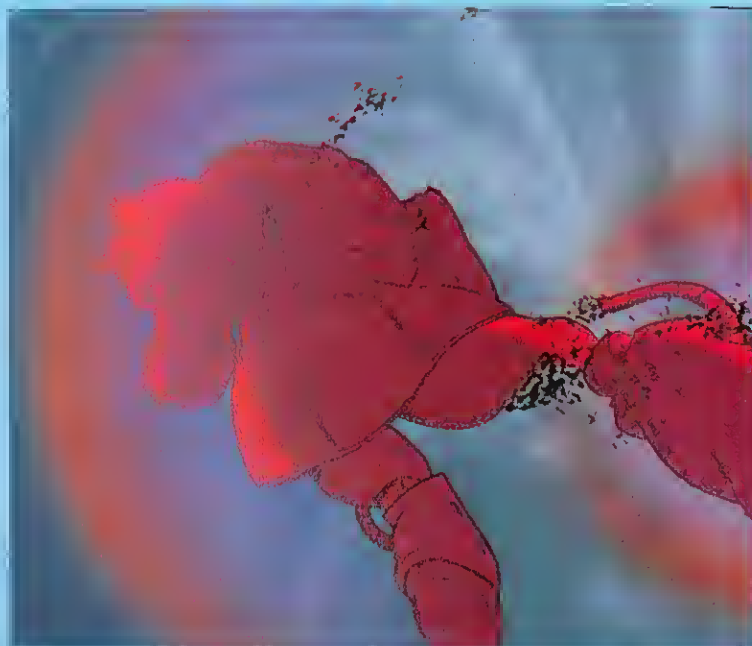
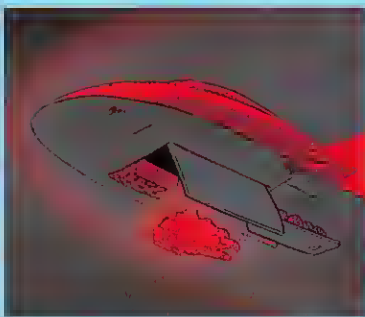
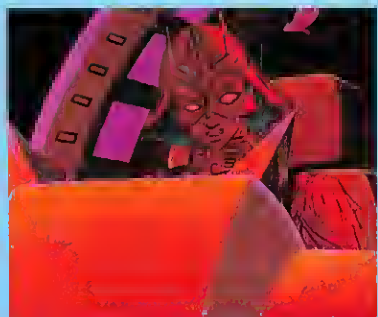
無理もない。ホワイトベースが降りたのは北米。しかもそこはジオンの勢力圏内だった。

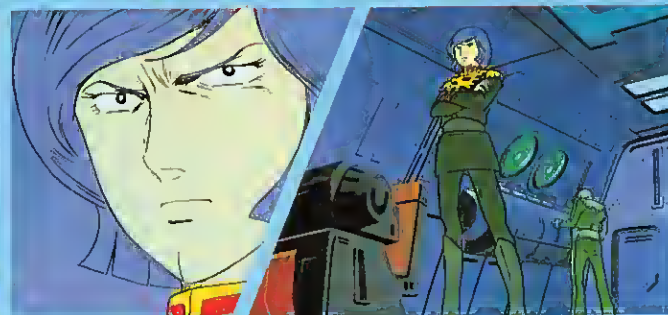
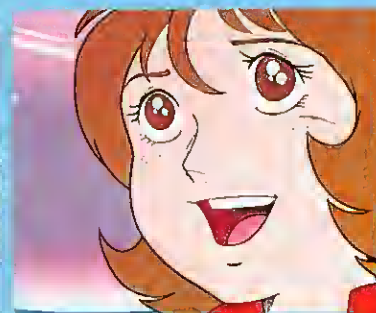
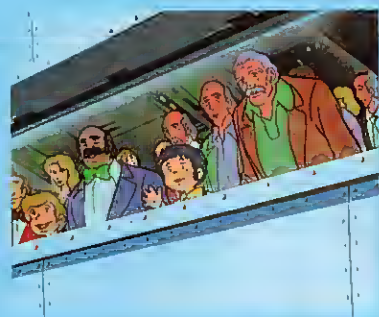
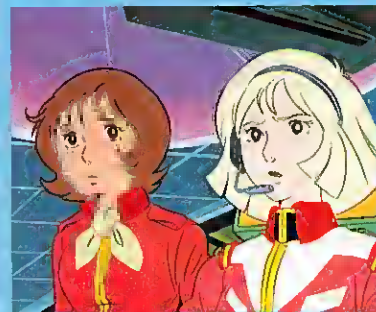
見事にシャアの計略にはめられてしまったのだ。

時すでに遅く、ガルマ自らが指揮するジオン空軍が、ホワイトベースに迫っていたのだった……。

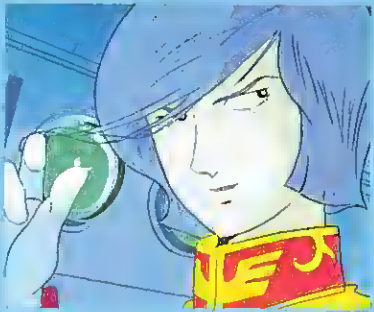
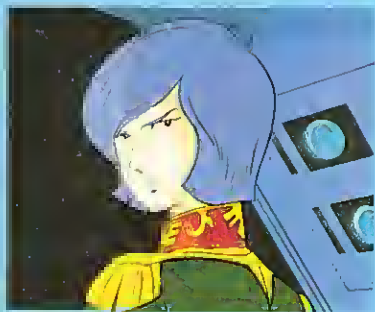
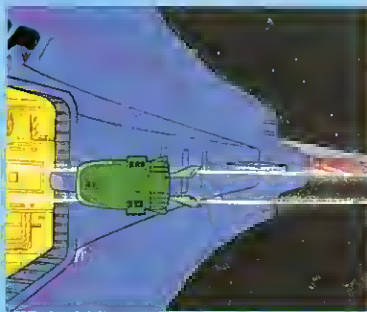
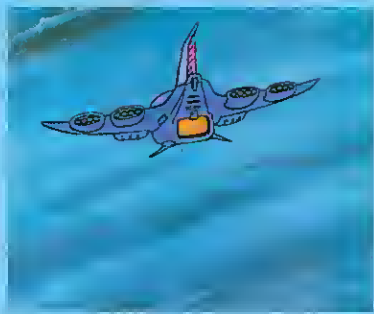
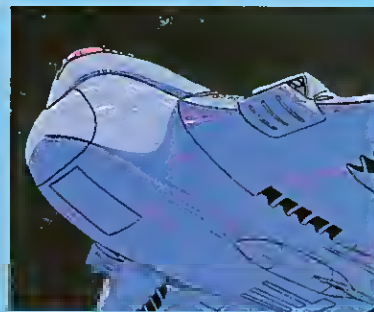








第6話 ガルマ出撃す



大気圏突入をしてきたコムサイが、ガルマのガウ攻撃空母に収容された。そしてシヤアは、ガルマと再会した。

「いよう。シヤアノ君らしくもないな。連邦軍の船一隻に、手こずって……」

「いくなよ。ガルマ……いや、地球方面軍指揮官ガルマ・ザビ大佐と呼びすべきかな？」

二人は士官学校時代の同期生だったのだ。

シヤアを休めると、ガルマはもう勝った気分、ホワイトベース攻略の作戦を進めていた。

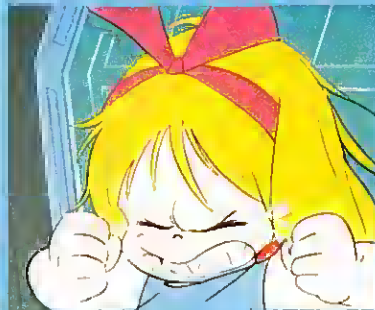
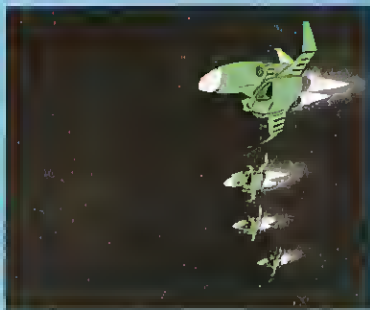
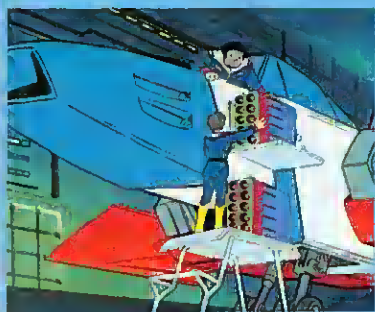
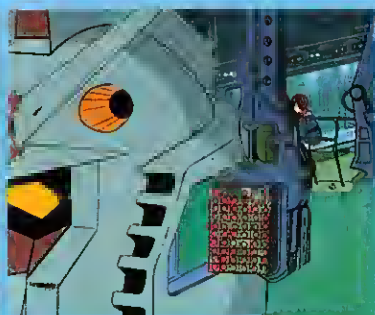
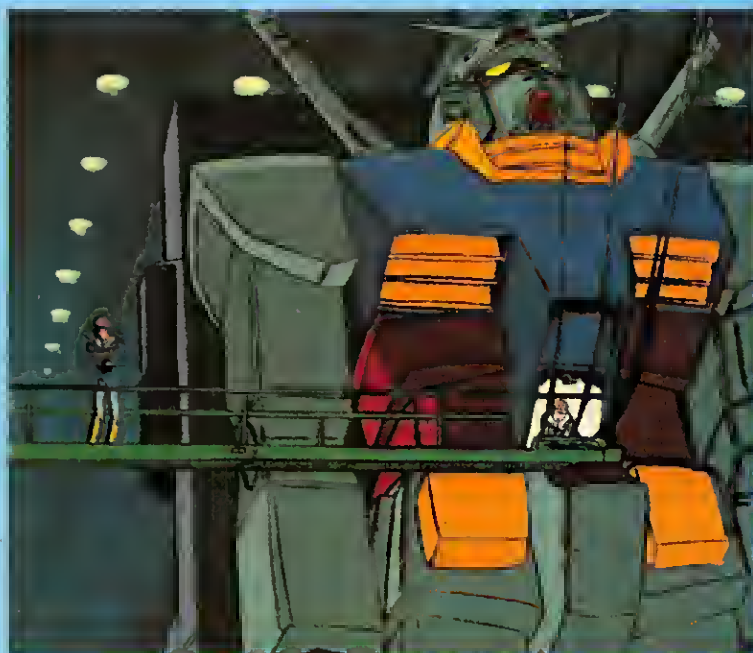
「しかし……ジオン十字勲章ものであることは、保障するよ」

「ありがとう。……これで、私を一人前にさせてくれて……姉に對しても、私の男をあげさせようという心使いかい？」

ホワイトベースでは、艦長役のリード中尉がアムロを使つての中央突破を主張したが、戦闘続きで疲れ切っているアムロの体を気づかうアライトは、これに反対した。

リード中尉はご機嫌が悪い。その時、シオンの小型戦闘機編隊が襲いかかり、ホワイトベースの後方を塞いだ。

ハヤトの提案で、アムロの操縦、ハヤトの射撃でガンタンクが出撃



していった。

離れて敵を分散させろというハヤトに対して、アムロは援護には近い方が有利だと主張する。

だが、前方から敵の戦車部隊が砲撃をしかけてきたのだ。

フライトは、アムロにガンダムで出撃してくれと頼んできた。

「一人の方が戦いやすいか」

「了解です！」

ガンタンクは、カイカセイラさんに操縦させて下さい。セイラさんなら出来るはずですよ！」

そして、ガンダムにはアムロが、コアファイターには、リュウが乗りこんだ。

ガルマは、ホワイトベースから発進された戦車が、モビルスーツであることを知って、

「モビルスーツにはモビルスーツで叩け！」

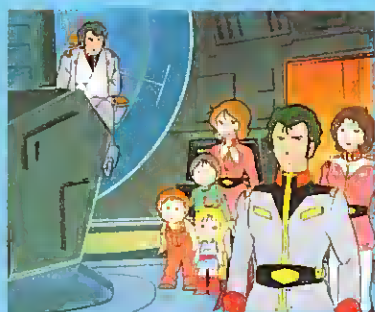
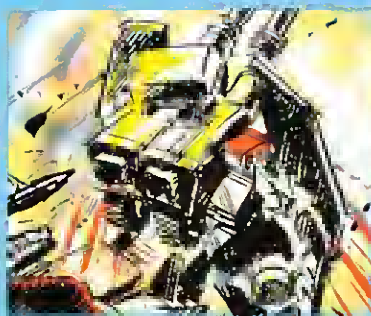
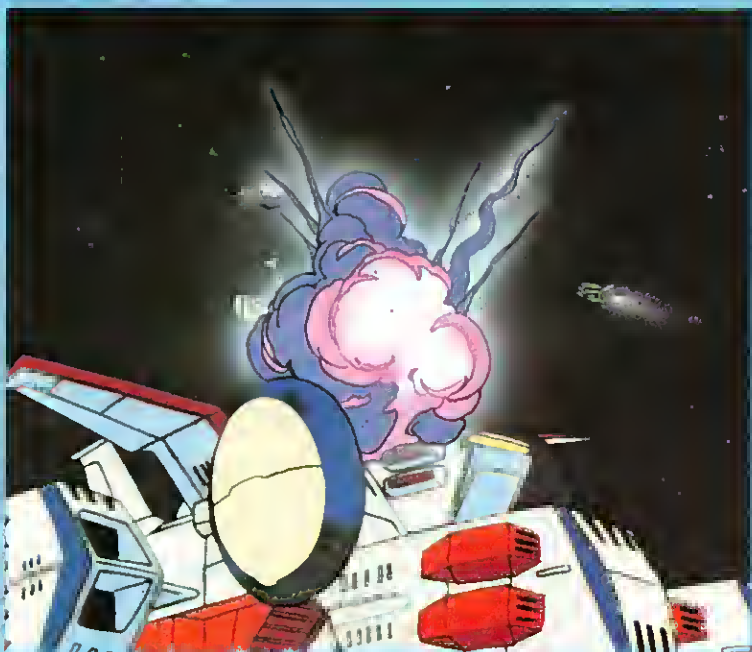
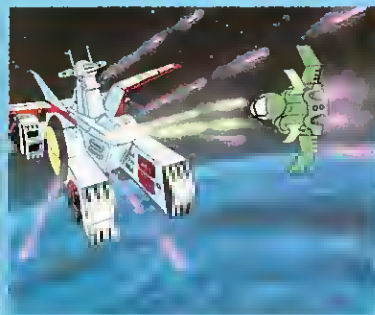
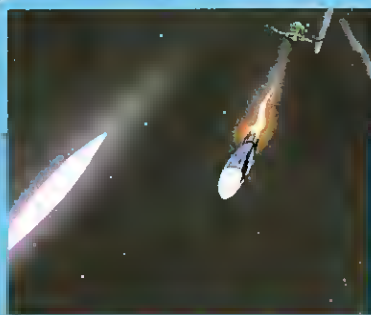
と、3機のザクを送り込んだ。

ガルマの苦戦を傍観しながら、

シャアは冷やかにつぶやくのだった。

「我われが2度ならず機密とりに失敗した理由を、彼が証明してくれている。しかも我われ以上の戦力だな……ドズル將軍も、決して私の力不足ではなかったと、認識することになる」そして、ガルマが自らのザクで出撃しなかったと知ると、シャアはニヤリとして、つぶやくのだった。

「……彼が、ガンダムと闘って



死ぬもよし、危ういところを私が
出て救うもよし……と思っていた
がな……」

アムロのガンダムが出撃して、
苦戦していたコアファイターとガ
ンダムを救った。

血路を開こうとさらに前進する
ガンダムは、ザクと戦車部隊に囲
まれて集中砲火をあびる。

爆発の衝撃で意識の薄れかけた
アムロの脳裡に、ハヤトの声が響
いてきた。

敵に目標を分散させる……分
散させる……分散させる……

「よし……やってみる……」

ゆっくりと起き上るガンダム。

アムロは決死の攻撃にでた。

ザクの頸を引きちぎり、ビーム
サーベルでザクを切り裂いた。

恐れ知らぬガンダムの攻撃に、
ジオン軍は退却してゆく。だが、

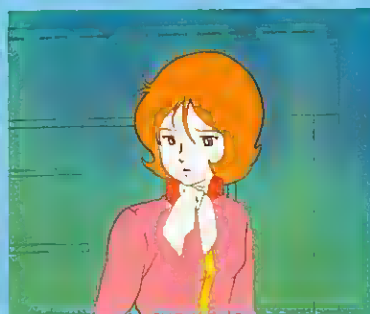
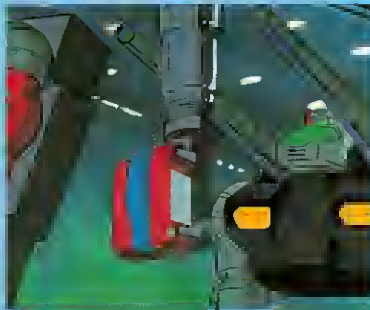
アムロは半狂乱になって、敵の残
骸にまで切りつけていた……。

退却してゆくガルマではあった
が、敵の威力を思い知らされ、ま
すます奪取の執念を燃やすのだっ
た……。

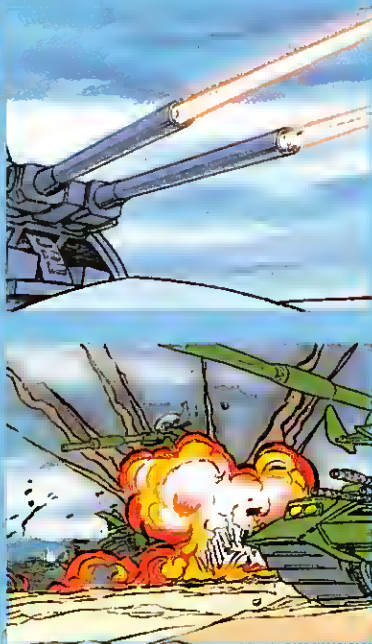
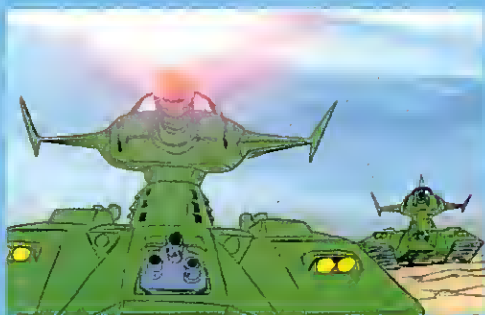
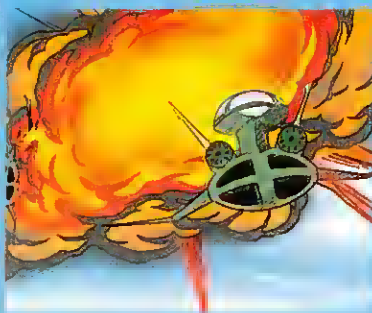
「私はあれを無キズで手に入れ
たい……あれは、今後の大戦の戦
略を大きくぬりかえる戦力だ。

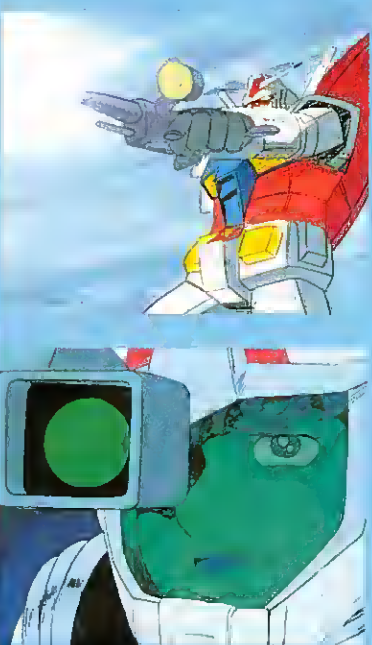
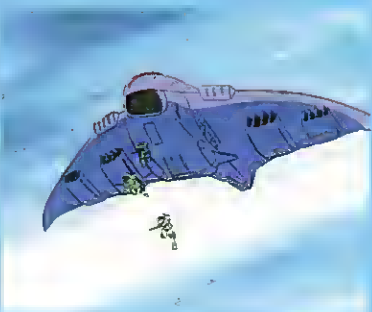
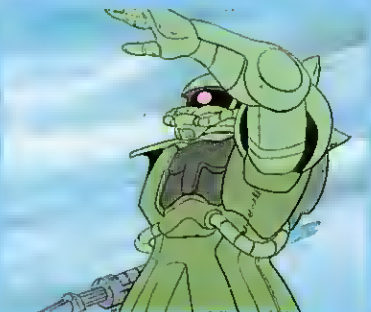
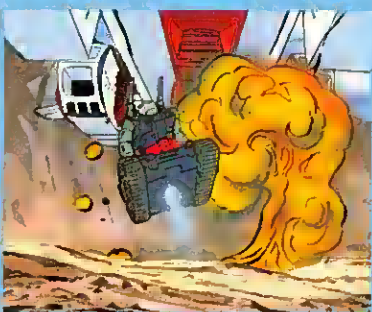
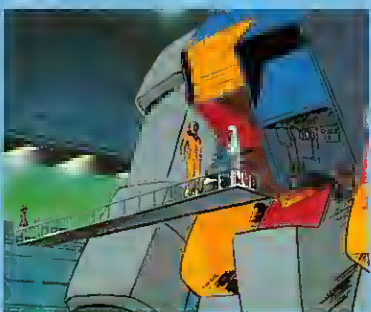
……奴らを大陸から、一歩も出さ
な！私の監視の目の中に泳がせて
おけ！

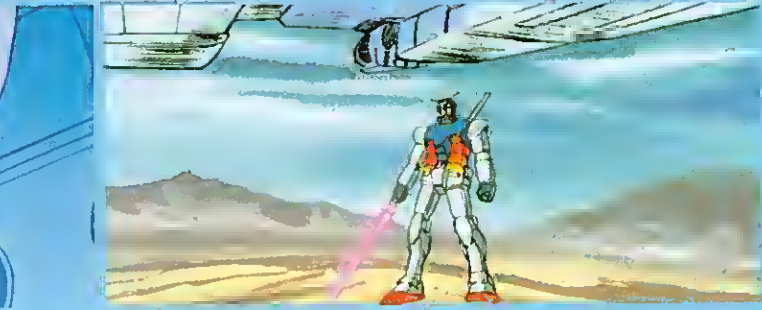
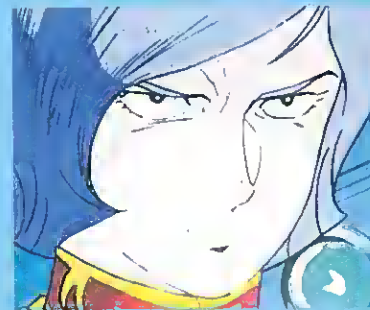
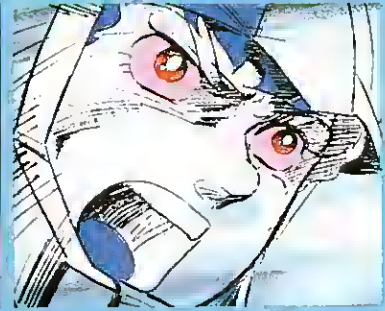
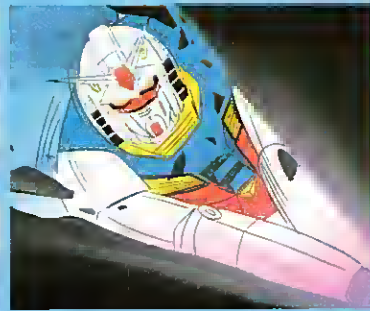
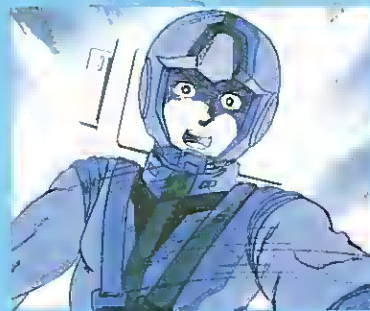
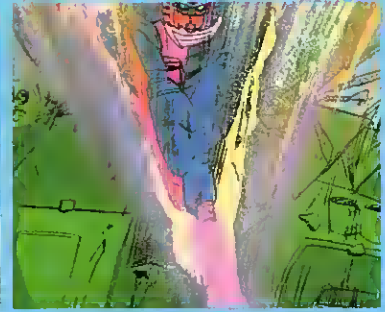
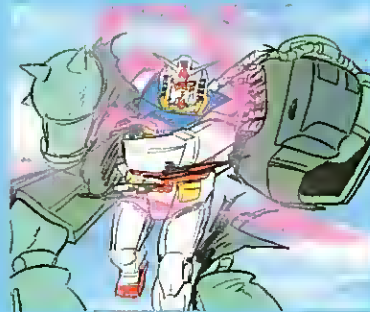
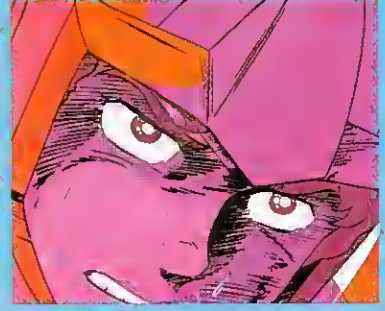
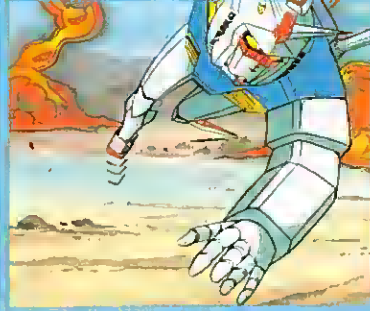
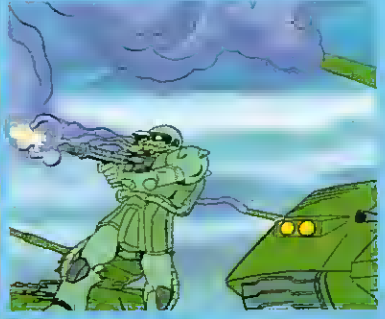
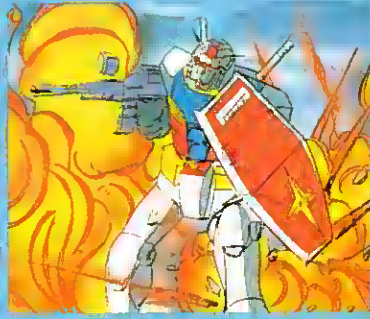
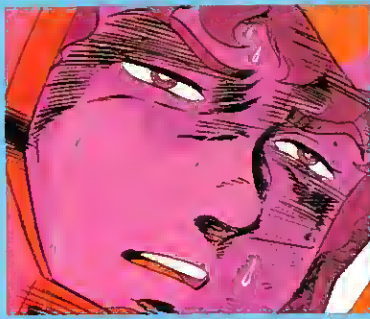
私は……かならずしとめる！」

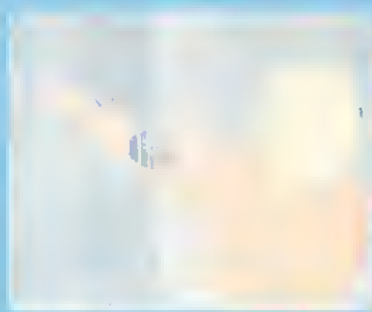
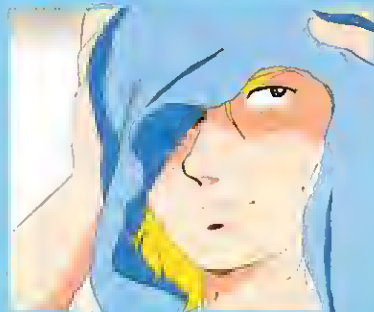
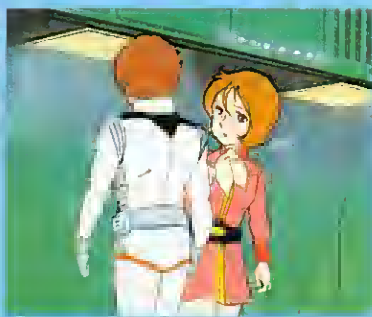


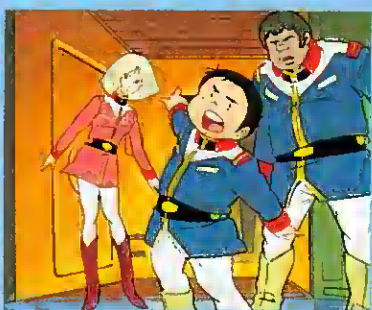
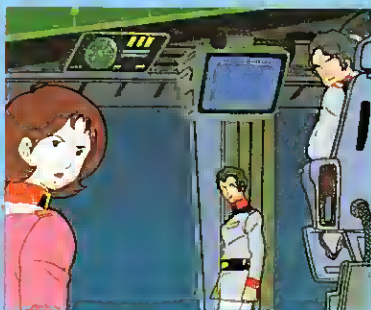
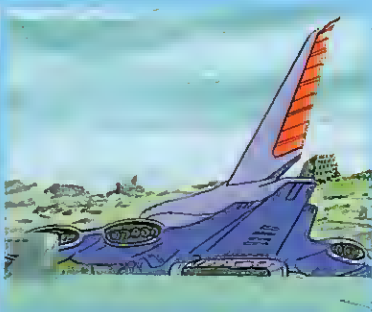
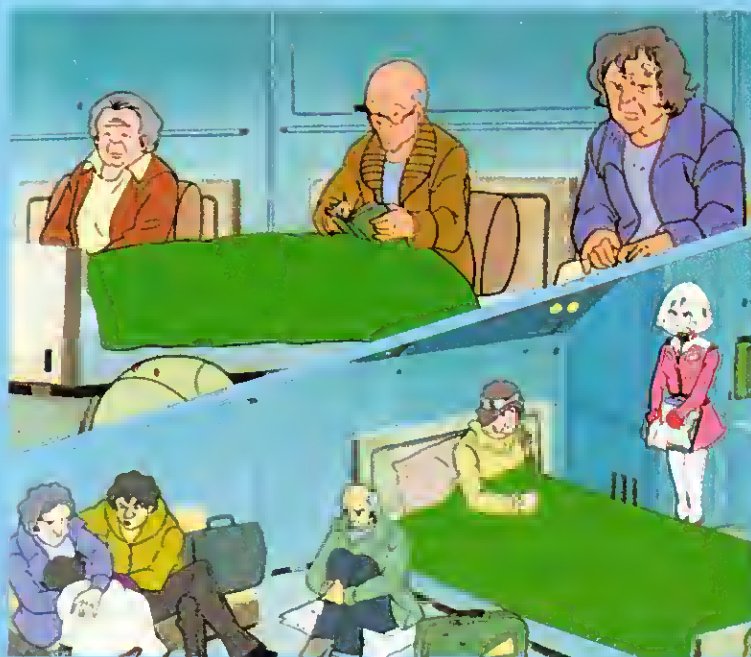
敵を撃退はしたものの、ホワイトベースは、山沿いに味方を求めて大陸を進むしかなかった。
「ガルマ・ザビに占領されたとしても、まだ大陸には連邦軍の地下組織が抵抗をつづけているはずよ……」
「どうやって、接触するかだ」
「ブライト……今は、みんながあなたをあてにしているのよ」
「わかってる。ミライ」
「さあ、ガンダムの戦士を迎えよう……」
「アムロ！ おつかれさま」
ホワイトベースに帰艦したものの、アムロはフラウやカイや、みんなのねぎらいの言葉さえ耳には入らなかった。
アムロは疲れ切っていた。今、アムロに必要なのは、深い眠りだけなのだ。チビたちが何か騒いでいる……。自分の部屋に戻ると、アムロはベットに倒れこんで、ただ泥のように眠るのだった。
シアアの部屋を訪れたガルマは姉のキシリアに実力を示すためにも、シアアの助けが必要だと頼む。
「俺も協力する。君の手だすけができるのは、嬉しいものだ……」
シャワールームから、シアアの声が答えた。
「私は良い友をもった……」
「水臭いな、いまさら……」
ガルマが去った後、タオルの下のシアアの目が鋭く光った。











ホワイトベースは、エンジン出力が落ちていて、衛星軌道で北米のジオン勢力圏から脱出することができなかった。

艦内には、戦闘のできない民間人が100人もいる。食料にだって希望があるのだ。しかし、いくら希望があったからといって、ジオン占領下の地に、民間人を下ろすわけにはいかない。ブライトの苦悩は深かった。

そこで南米の連邦軍本部と、なんとか連絡をとるために、コアファイターが弾道軌道に乗って、一気に敵の上空をとり越える作戦がたてられ、アムロがその役をかって出た。

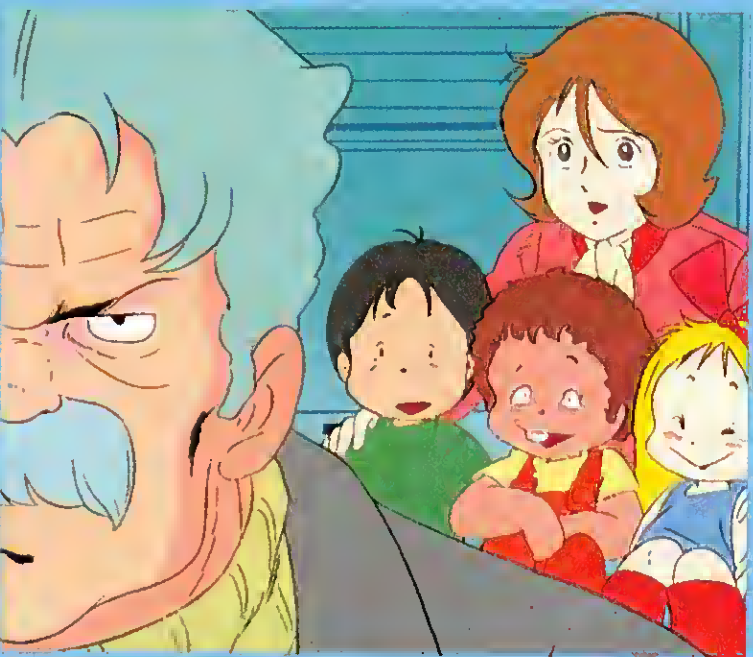
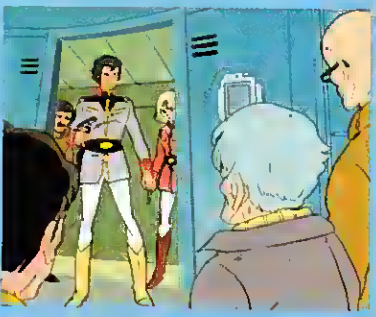
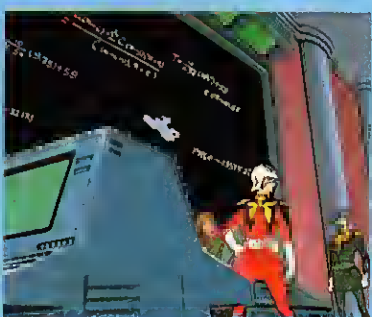
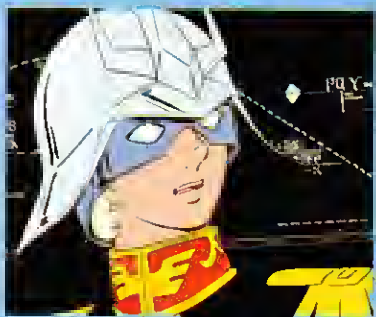
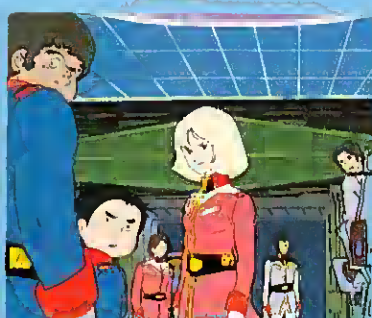
丁度その準備が進められているとき、避難民たちがフラウとキツカたちを人質に、艦を着陸させろと、部屋にたてこもってしまったのだ。

「二度と帰ることもないと思っていた地球へ帰れたというのに、着陸もできずに終ったら、死にきれんというものじゃ……」

「心配じゃないのか!? アムロ……君の一ばん仲良しのフラウが、人質にとられているんだぞ……」

心配するハヤトに、アムロはきっぱりと言うのだった。

「ホワイトベースには、ブライト



トさんもミライさんも、セイラさんもいるんだ……僕は自分のできることをやるだけだ」
騒ぎをよそに、アムロは発進していった。

一方、ブライトは懸命に老人たちの説得を続けていた。老人たちは何としても地球の土を踏みみたいというのだ。

「地球には……元氣なら孫がいるはずじゃ……」

「わしは、生まれ育った町や川をもう一度この目でみたい……」

「別れたじいさんにもう一度……」

「あと、どれくらいで着陸できるのか……はつきりとこの耳で聞かして貰いたい！」

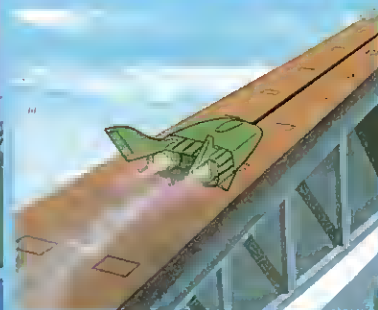
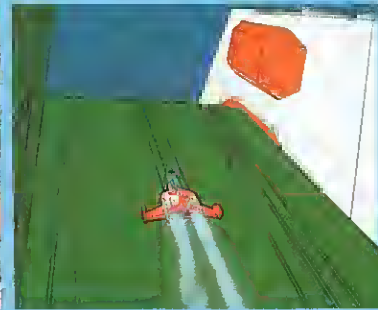
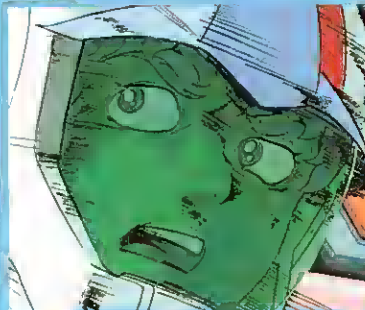
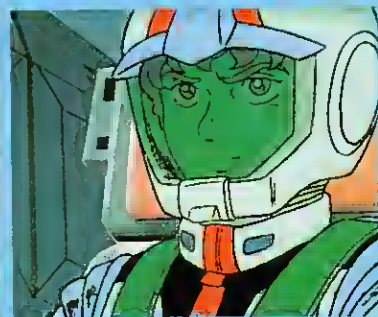
老人たちはブライトに詰め寄った。

「……私は、地球に着陸しないと……は言っていない。」

「……私たちも全力を尽くしているんです……」

ブライトとて、早く連邦の勢力圏内に、老人たちを安全に降ろしてやりたかったのだ。しかし、ここはジオン領なのだ……。

コアファイターに敵が接近していた。アムロたちの作戦を見抜いたシャアが、直ちにコムサイで後を追っていたのだ。



だが、ミライたちの必死の呼びかけにも、依然としてアムロの応答はなかった。

「アムロ！応答せよ！アムロ！」

「アムロ！こちらホワイトベース、応答して下さい！」

「アムロ！目を覚まして！」

ゆれるコアファイターの中で、ふと正気にかえったアムロは、目をしばたかせて迎いを見廻した。

「ぼ、ぼくは……？」

間一髪！コムサイに銃撃される直前だった。そしてさらに、ガウからの戦闘機6機が迫っていた。

しかも、直線上に位置しているの、ホワイトベースからの援護は不可能だ。ここまでと判断して、アムロを呼びもとすブライトに、カイが横槍を入れた。

「へへへ、無理するからさ！」

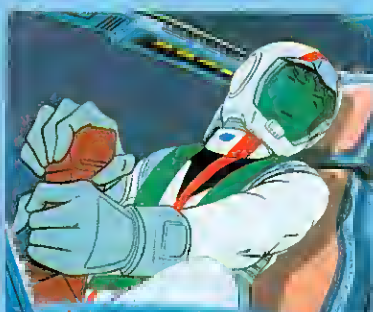
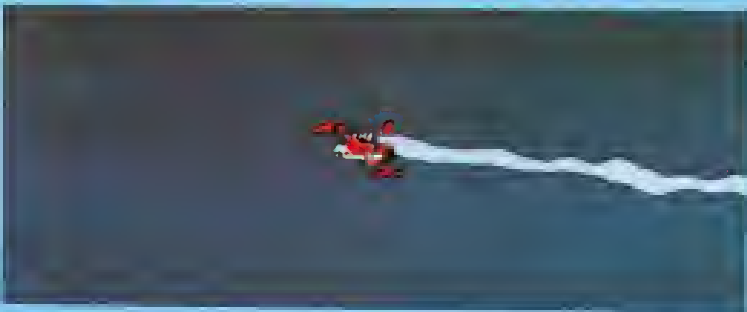
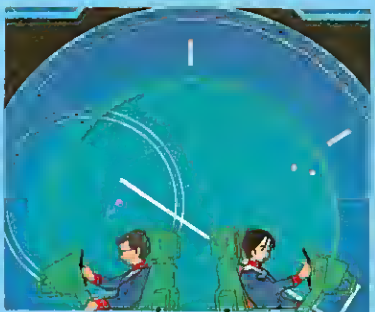
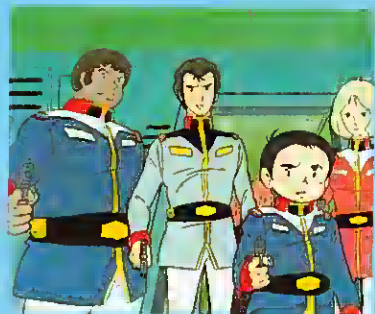
「貴様、今度同じような態度をとったら、宇宙だろうと何だろうと放り出す！」

と、ブライトはカイを殴り倒した。コアファイターをガンダムに換装して、自由落下の空中戦に持ちこんで欲しいと、セイラがアムロに言った。もちろん、アムロにとっては初めての戦法だ。

「勝手すぎます。ガンダムは陸戦兵器なんですよ！僕には、そんな器用なことではできません！」

「生きぬきたいの！？あなたならできるわ。アムロ！」

半分やけになって、アムロは了



解した。

着艦し、そのままガンダムに換装したアムロの前に、シャアのザクが降下してきた。再び、宿敵シャアと相まみえたのだ。

巧みにガンダムに攻撃をしかけてくるシャア。ガンダムは一方的な防戦を強いられる。

地上に降りたシャアは、ガンダムが連邦の多用途モビルスーツの一つであることを知って驚愕した。

そして、その底知れぬ威力に対する作戦を練り直すべく、引き揚げた。

ブリッジでは相変らず老人たちが、今すぐ地上に降ろせとプラトたちに迫っていた。

そこへ、ビームのエネルギーを使い果して、退却してきたアムロが帰って来た。

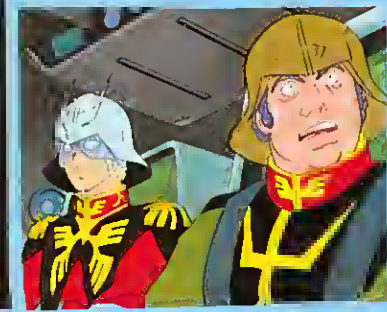
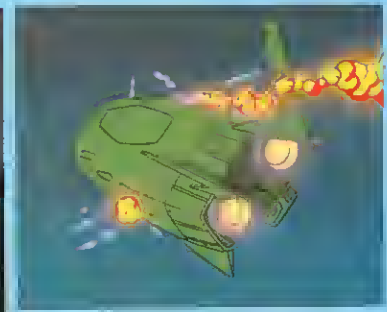
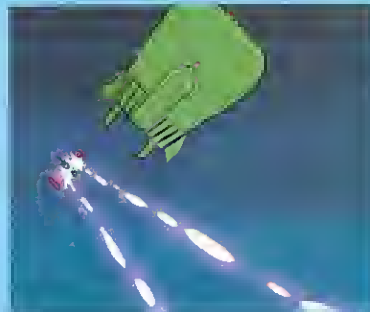
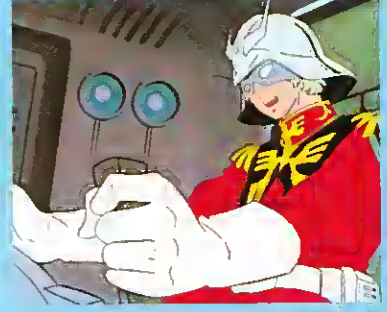
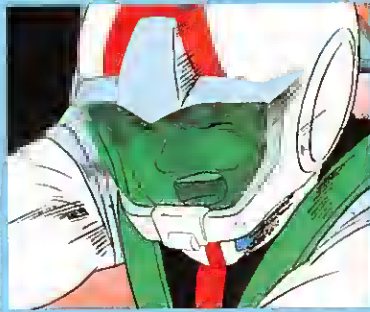
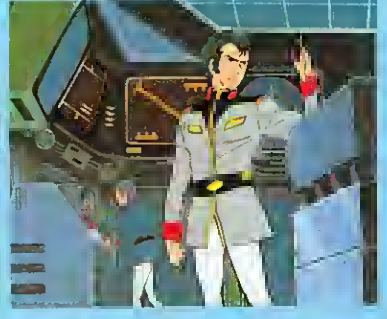
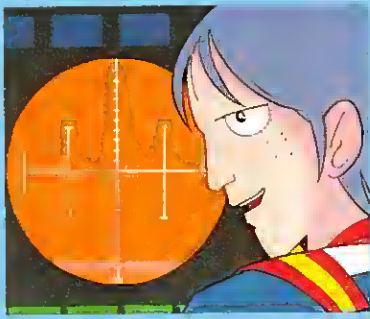
「あなた方は、自分のことしか考えられないんですか!」

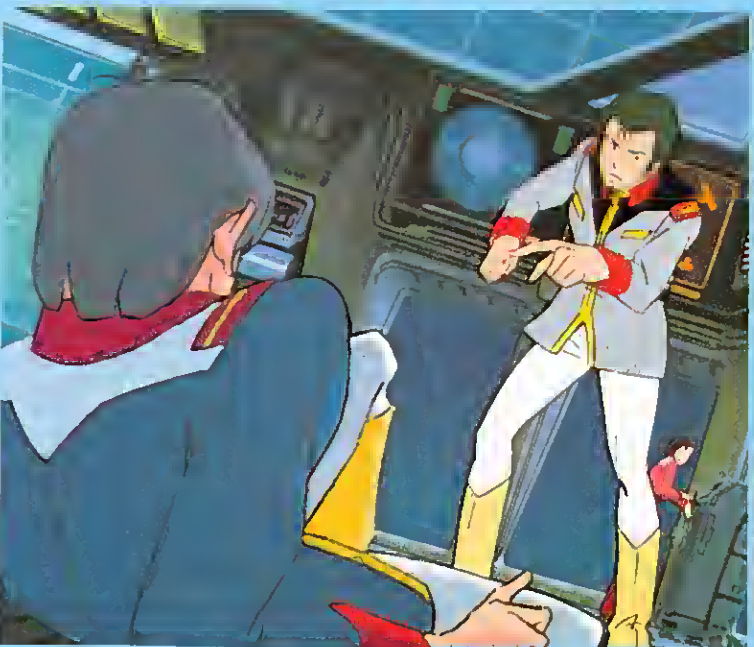
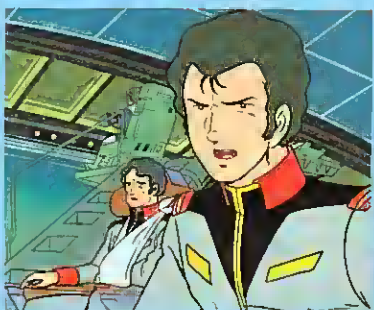
「子供に年寄りの気持が判るか!」

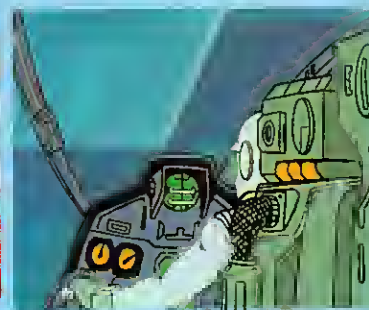
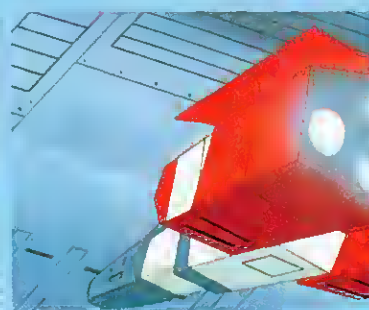
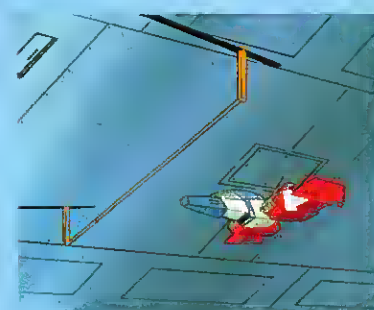
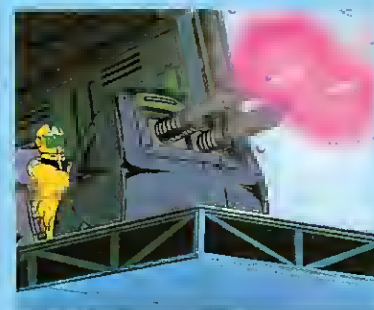
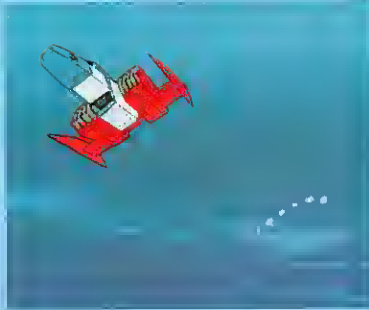
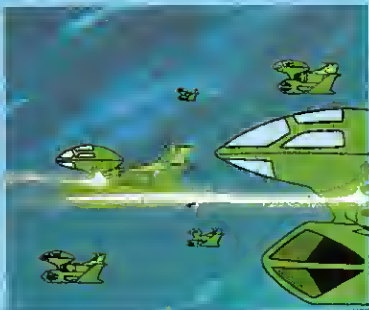
「だが、自分だけのために闘うものか!みなさんがいると思えばこそ、闘ってるんじゃないか!」

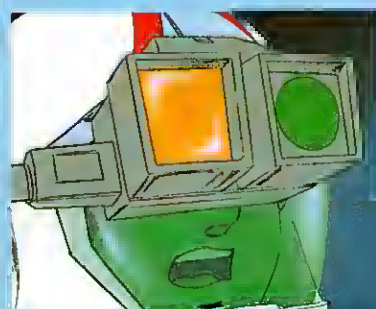
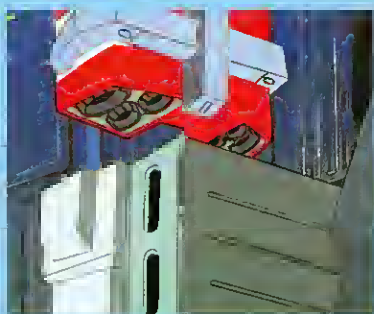
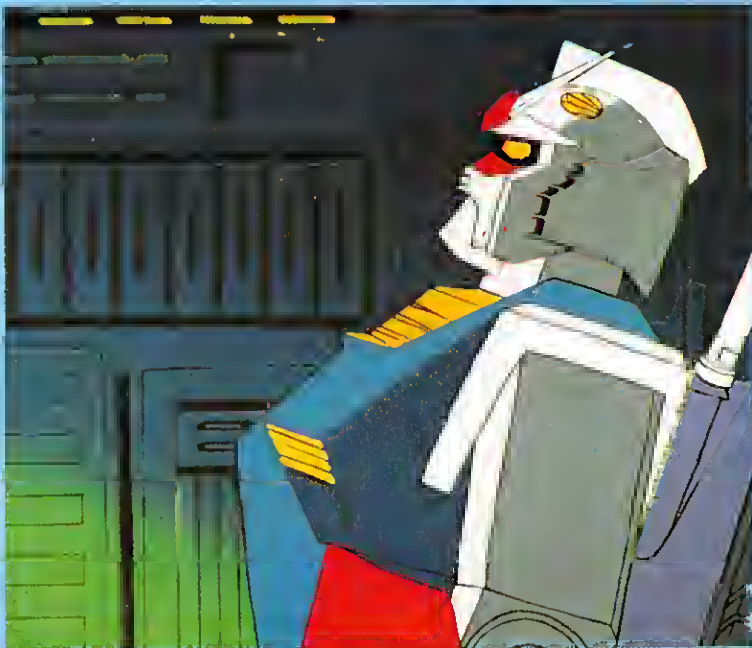
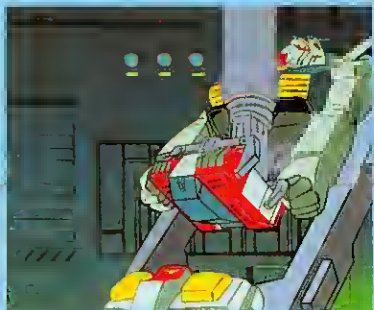
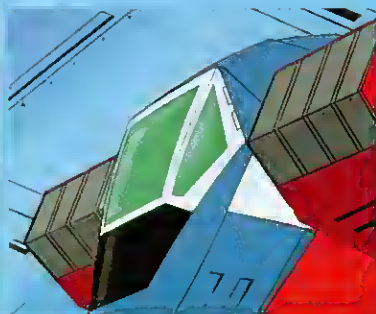
「僕は……もう止めますよ!」

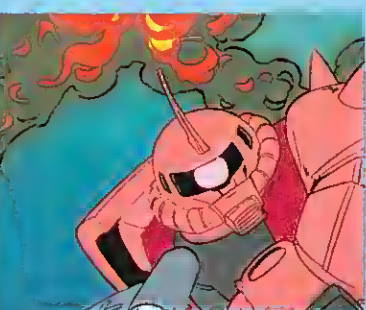
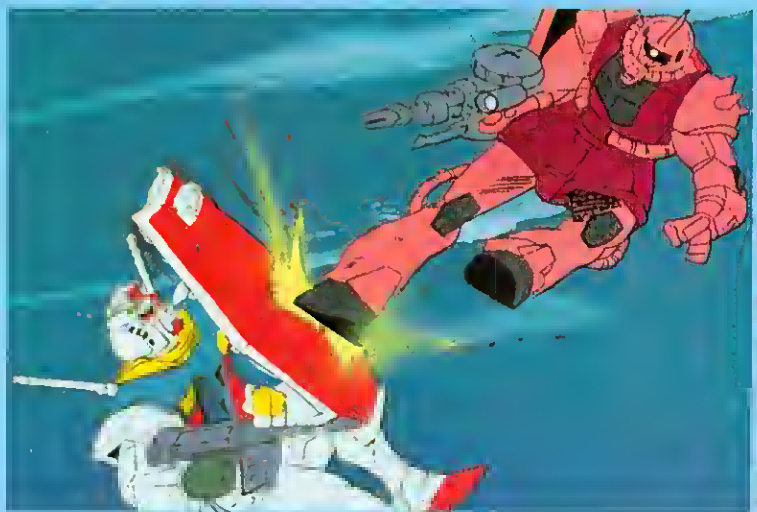
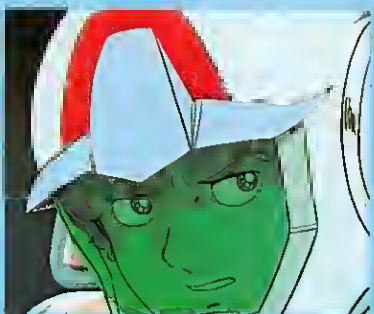
この言葉に、老人たちは人質を返して引き揚げていった。
 プライトとリードの声が聞える。
 「越えられますかねえ……」
 「山脈を楯にして、海へ出るしかありませんね……」
 ホワイトベースは、進路を西海岸へと向けていた……

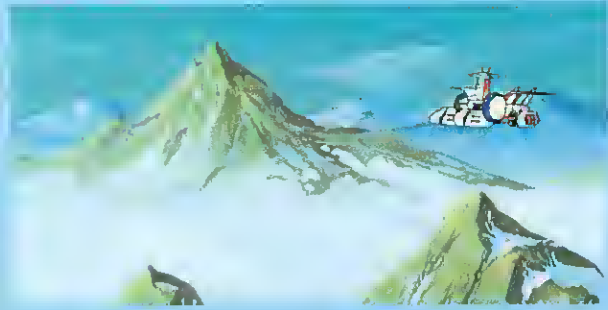
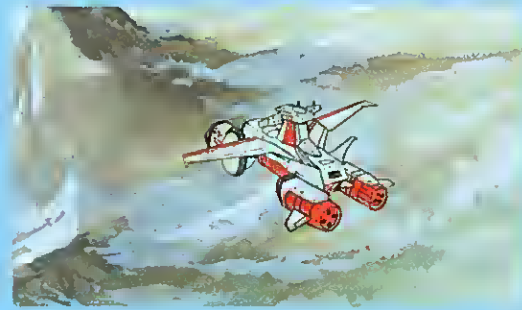
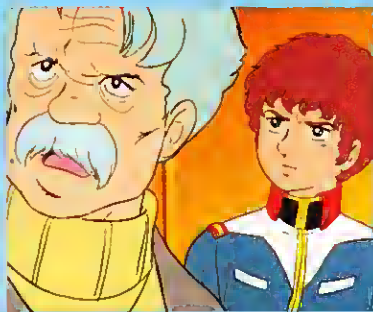
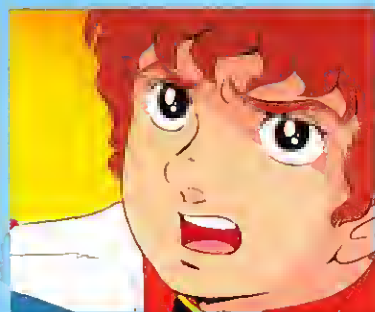
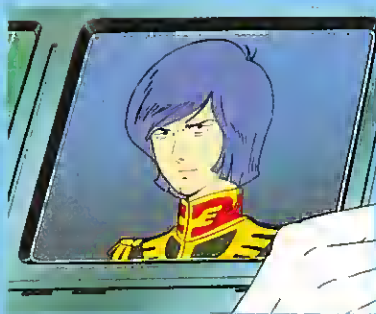


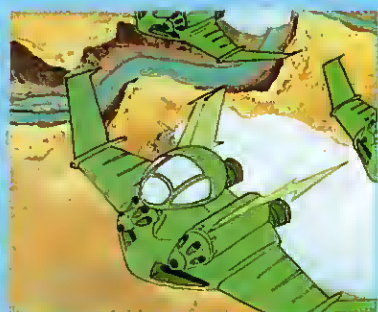
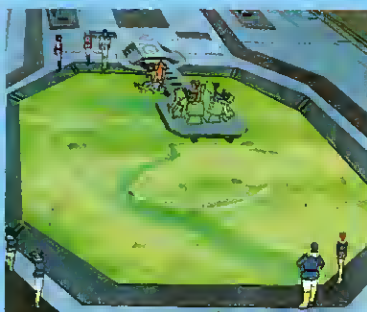




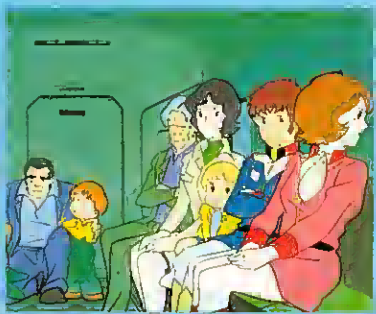
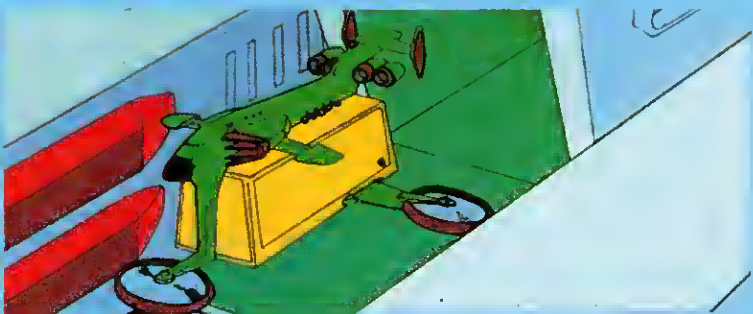
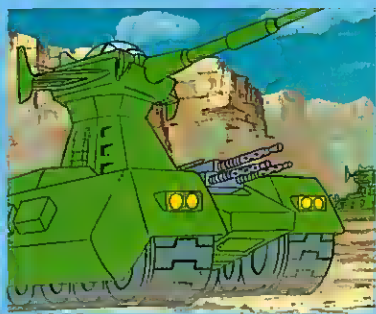
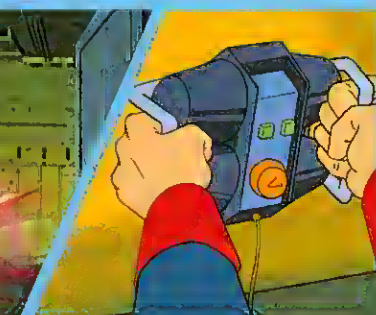
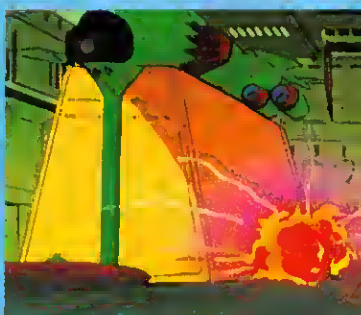
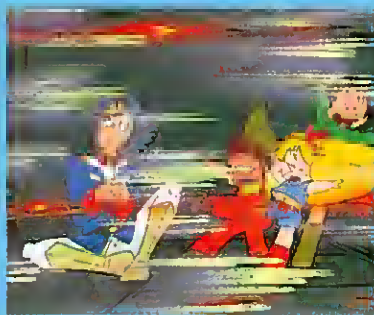




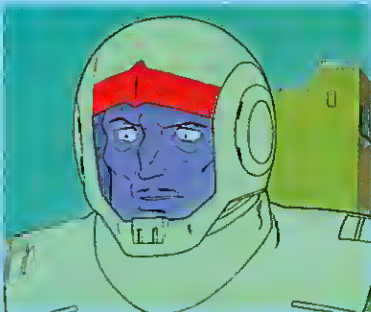
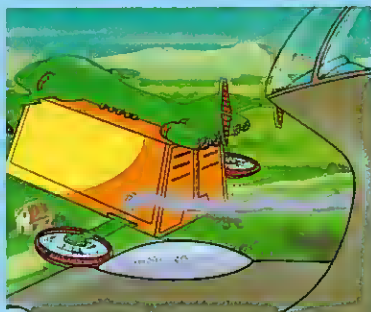
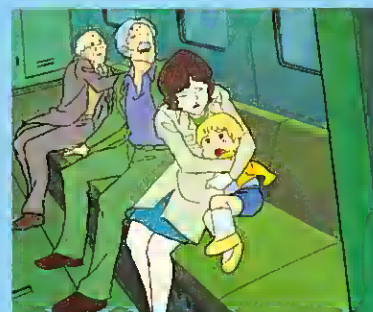




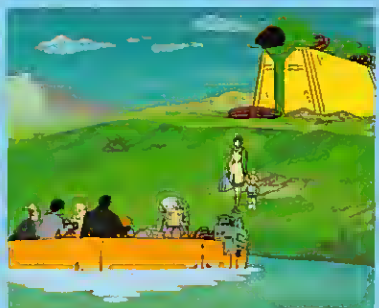
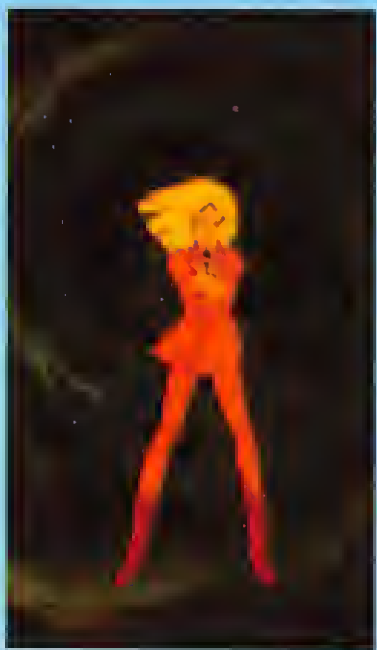
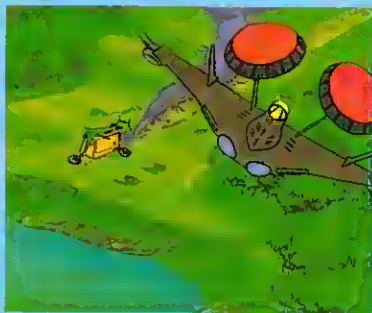
ホワイトベースは、グレートキ
 ヤニオンの地上すれすれを飛行し
 ていた。上空の敵機編隊の攻撃を
 避けるためだった。
 ミライは必死に操縦するが、岩
 が当たり、翼が岩をけすったり
 で、そのたびに艦体は大きく揺れ
 人びとは、ぶつかったり倒れたり
 していた。
 倒れたコーリーを抱き起こして
 ベルシアは涙ぐんだ。
 「ここがあなたのお父様の育っ
 た所なのよ……お父様はあなたが
 いくらでも威張れるような立派な
 方だったのよ……」
 その様子を、じっと見ているアム
 ロとフラウ。
 「母親って、
 みんなあんなもんな……」
 「アムロは……お母さんにすつ
 と会っていないのよね……でも……」
 でも……とフラウは思ふ。アムロ
 にはお母さんがいるじゃない……。
 上空を飛んでいたトップ編隊が
 急に引き揚げていった。隠れる場
 所のないミッド湖で、待ち伏せる
 作戦らしかった。
 そんな折、ここで降ろして欲し
 いとベルシア母子が申し出た。
 「この先にあるセント・アンジ
 ュは、夫の故郷なんです。ご無理
 は承知の上です。
 でも……私はこの子を夫の故郷で
 育てたいんです……」



フライトには一つのアイデアがあった。難民を降ろす間の一時休戦を申し入れるのだ。
 「どう思う、シヤア? 避難民を下ろしたいから……という休戦理由は?」
 「気に入りません……しかし……敵がどういふつもりか知らんが、こちら時間もながせける……」
 足の遅い陸上兵器を、今のうちに補強すれば……
 「我われの勝利の確率は高くなるわけか……よし!」
 進軍する大部隊を見て、ガルマは勝利を確信した。
 「どうも、お坊ちゃん育ちが身にしみこみ過ぎる。甘いな……これで勝てねば貴様は無能だ!」
 シヤアは心の中でつぶやいた。
 ペルシア母子と共に下船する老人たちを乗せて、輸送機はホイイトベースから発進した。
 ジオンの偵察機が近づいてくる。無邪気に手をふるコーリ!
 「機長、子供が手をふってますよ……」
 「ああ……」
 湖と住めそうな家を見したりユウは、作戦を開始した。発煙筒で煙を出し、故障したように見せかけて不時着したのだ。
 老人たちは湖のほとりの家へ、そしてペルシア母子はセント・アンジェへとそれぞれ去っていった。リュウたちが、作戦通り輸送機に隠れていたガンダムを出そうと



していたとき、ジオンの偵察機がひき返してきた。
 「あの母子が気になるんでしょ……怒られますよ」
 「ガルマ大佐はまだお若い。おれたちみたいな者の気持は分らんよ！ちよつと寄り道をするぞ……」
 敵機の爆音に、驚いて走り出すベルシア母子……
 「あなた……コリーを助けて！」
 偵察機が何かを投下した。
 アムロはハッとして、ライフルの照準を合わせた。突然パラシュートが開いて、救助カプセルが投下されたのだ。偵察機の窓からはバムロが手をふっている。
 運わるく、岩かげから様子を見守っていたガンダムは、発見されてしまった。
 「ん？……連邦軍のモビルスーツか？……」
 「くっ、発見されたか！見つけなけりやいのに……」
 止むなく応戦するガンダムのビームを受けて、偵察機は火を噴きながら落下していった。
 戦闘は開始され、カイもガンキヤノンで出撃した。
 初めての犬攻防戦を目の当りにしてカイは恐怖する。
 一方、シアアはやつと敵の作戦に気づいた。不時着した輸送機の中からモビルスーツが出てくるのではないかと。事実ガンダムは敵の後方に現われたのだ。ホイイトベースの反撃が始まった。



遙かに戦火をのぞみながら、ベルシアは傷を負ったバムロたちの手当をしていた。

「どちらが勝っても負けても、私のように夫を失くす人が、これから大勢でるんでしょう……」

「ガンダム」の働きは目覚ましく、ザク部隊を壊滅させ、ホワイトベースは敵を撃退させたのだ。

司令室のモニターで指揮していたガルマに、この敗北は大きな衝撃を与えた。

「……このような失態を姉上に何といって報告したらいいのか」肩をおとし、頭をかかえるガルマだった。

原隊に戻らなければならないバムロが言った。

「……今夜は救命カプセルで休むといいでしょう。」

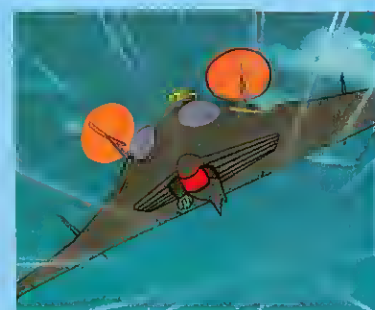
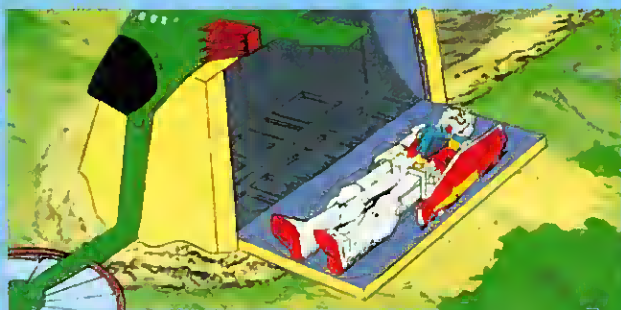
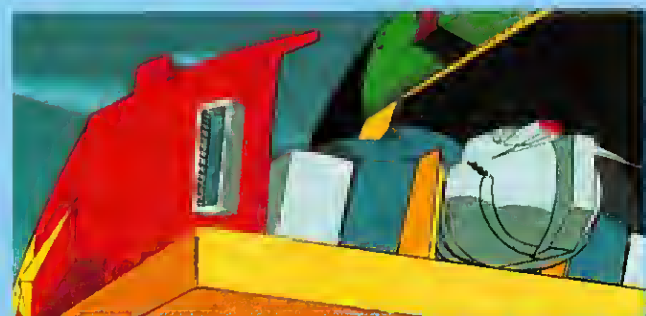
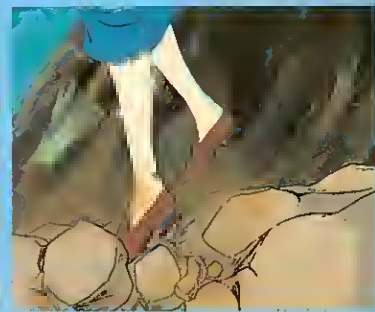
坊主、強い男になって、母さんを守ってやれよ！ ではない……」

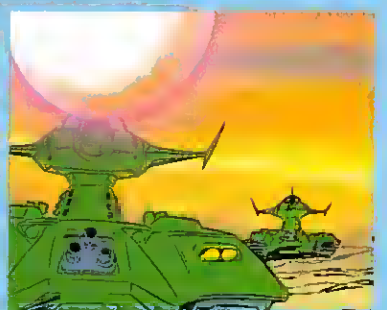
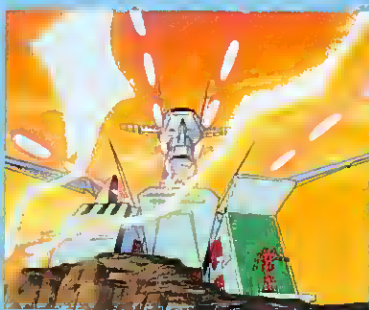
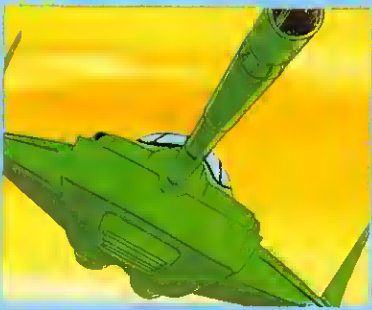
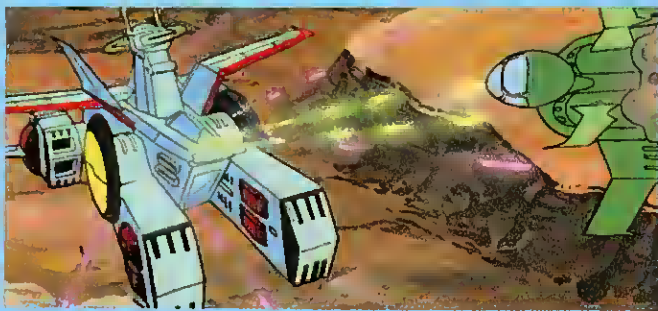
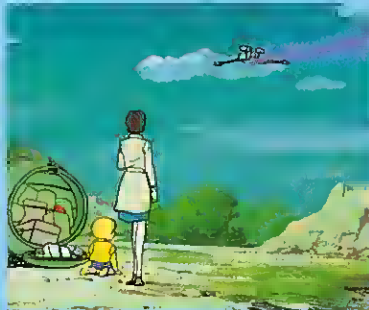
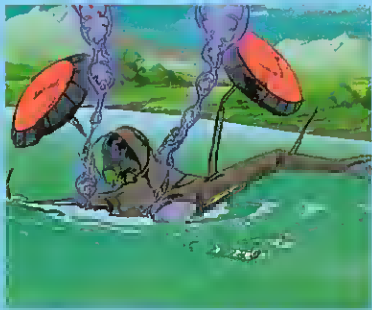
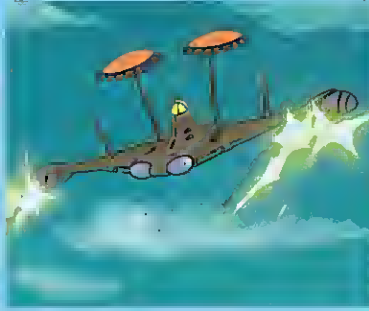
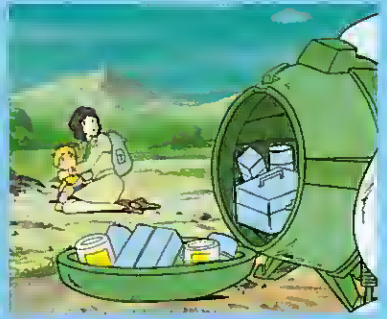
「奥さんがとうございます……」

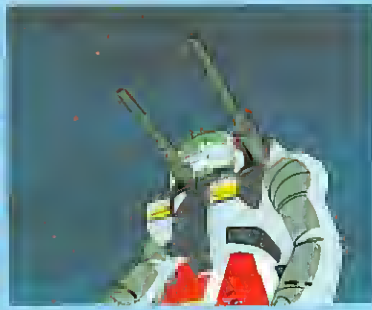
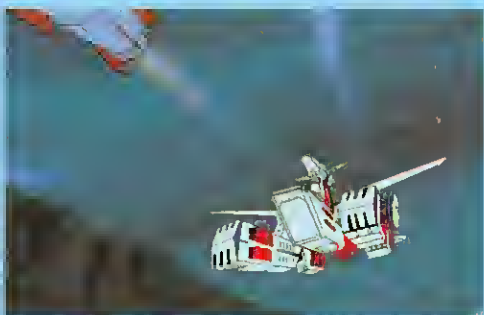
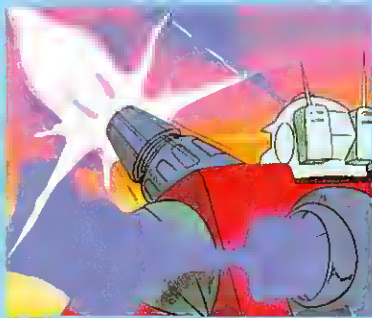
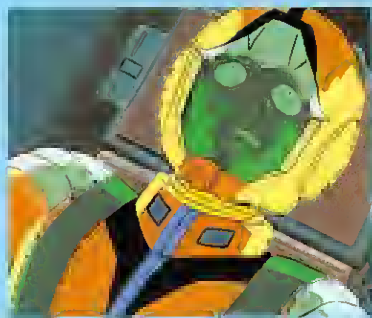
セント・アンジェのあった所です。奥さんは、湖の仲間のところへお帰りなさい……」

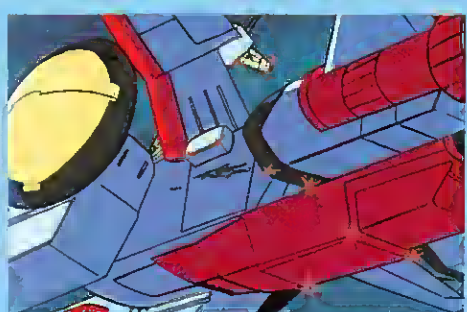
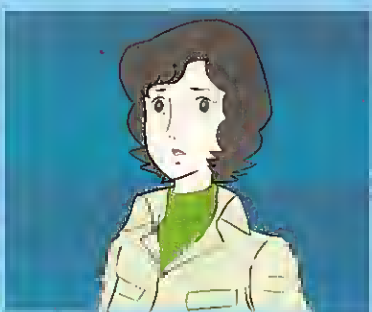
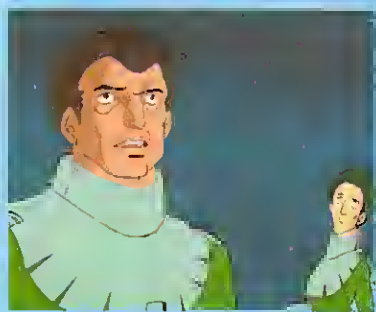
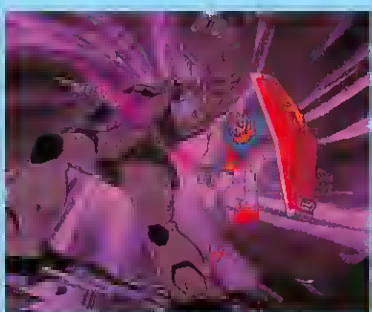
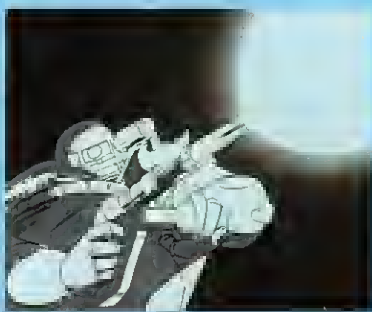
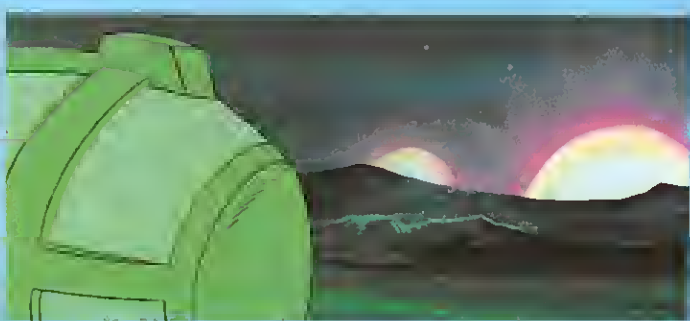
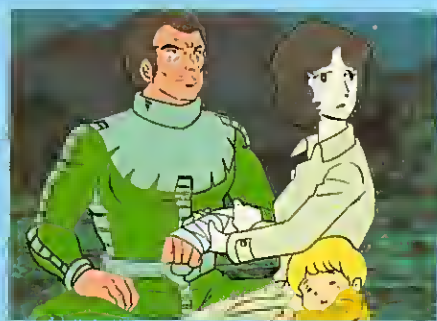
「え!? ここが?……ここが……」

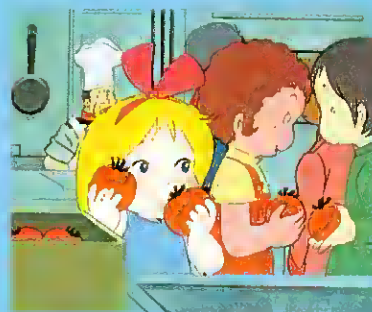
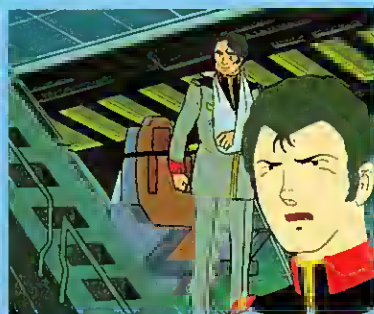
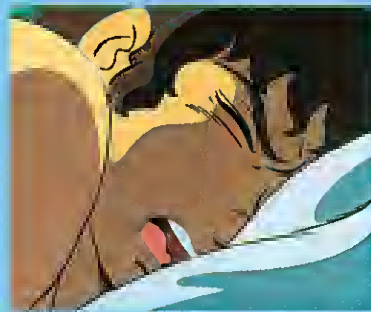
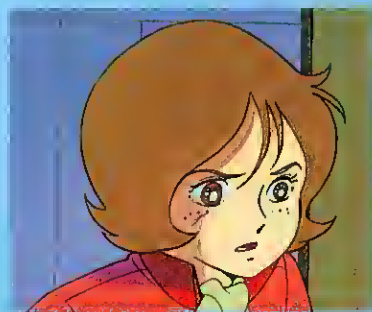
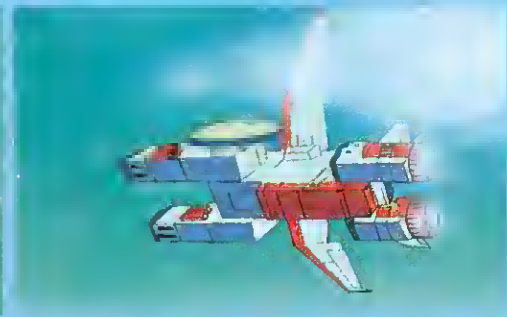
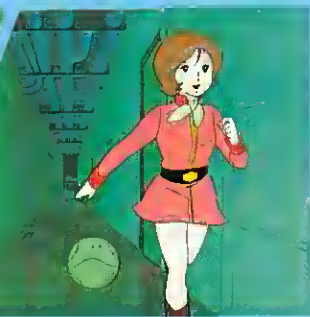
「あの母子は……セント・アンジェに着けたんだろうか?……」











第9話 翔べノガンダム

ホワイトベースは、まだジオンの勢力圏内にいた。

フラウが、アムロを食事と呼びに来たが、アムロはけだるそうにただベットで横になっているだけだった。

アムロは、心身ともに疲れ切っていたのだ。戦い続きで、ろくに眠れないし、それにガンダムで戦うなど、自分には似つかわしくないのでとフラウに語った。

「だけど……この間の戦争で、大人はみんな死んでるのよ。年寄りと若い人が闘わなくちゃならないのは、ジオンだって、地球連邦だって同じじゃなくって？」

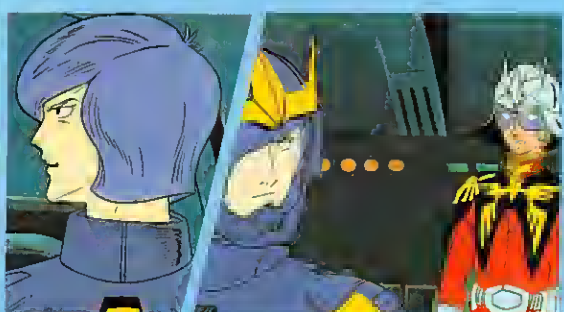
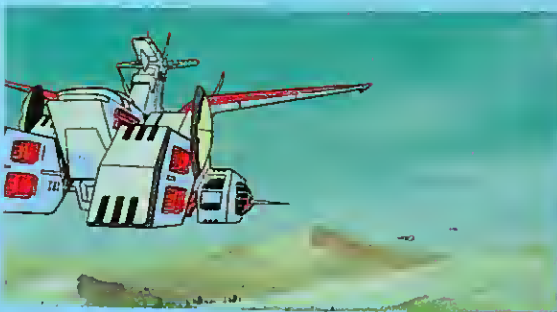
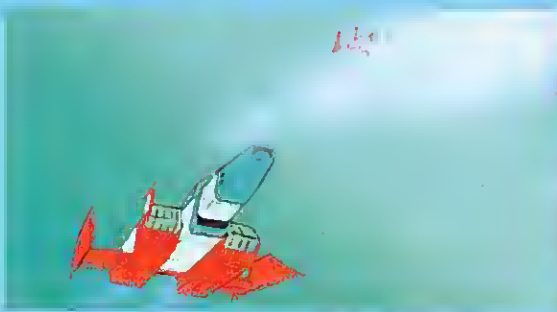
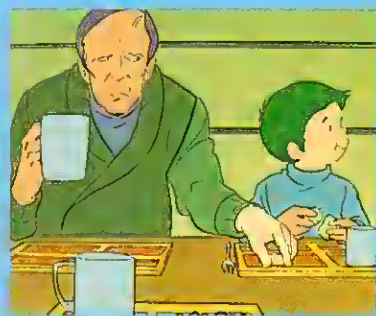
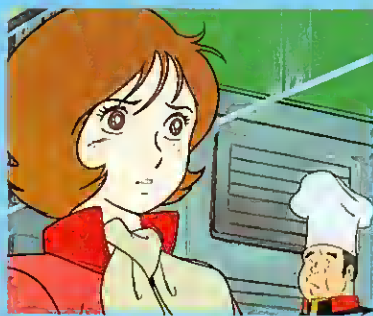
やつと連邦軍本部からの通信が入ったが、海へ脱出せよとあるだけだった。しかし、もう艦内の武器も弾薬も食料も、ともに底をつきかけていたのだ。

気をとり直して、食堂にやってきたアムロだったが、老人が子供の食事を盗みぐいしたのを見て、すっかり食欲をなくしてしまふ。

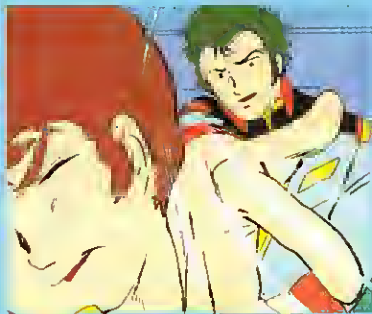
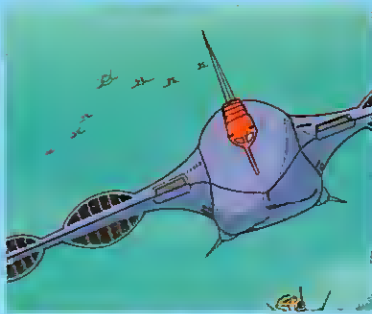
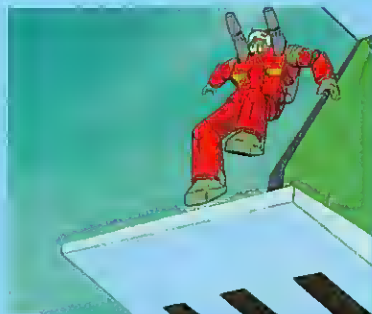
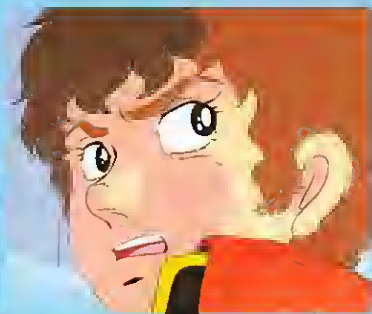
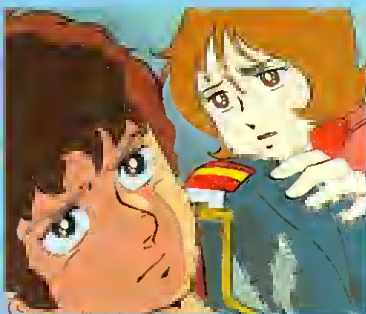
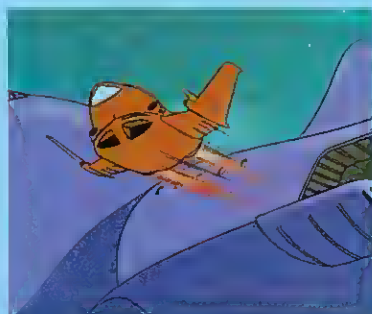
部屋に戻ったアムロに、パトリールに出るようにとアライトからの指令が待っていた。

「パトリールして、わざわざこちから仕掛けることなんて、ないでしょ！」

そうでなくたって、僕ははっちゅう戦わされてるんだ。



いやですよ！
 「アムロは疲れてるんだ。俺たちもアムロをあてにしすぎる。俺とハヤトでパトリールに出ますよ……」
 アムロに代って、リュウとハヤトが偵察に出て行った。
 ガウを発見した二人は、帰艦してガンキャノン、ガンタンクに換装して、出撃した。
 カイも出撃した。
 フラウは、アムロを説得するが、
 「みんなはこれから厭になるのさ。僕は違う。……何回も、何回ものせられたんだ……」
 「あたし、アムロが戦ってくれなければ、とくに死んでいたわ」
 「僕だってそうなんだよ」
 だけど……もう恐いの厭なんだ」
 ガルマは、自ら戦闘機にのってホワイトベースのエンジンに、的をしぼって攻撃してきた。
 もともと対空用でないガンキャノンとガンタンクは、苦戦を強いられていた。
 ブライトがアムロの部屋に、怒鳴りこんできた。言ってもきかぬアムロを、ブライトは殴ったが、アムロはもう意地になっていた。
 「誰が二度とガンダムなんかに乗ってやるもんか！」
 「アムロ、今のままなら貴様は虫ケラだ！それだけの才能があれば、貴様はシヤアを超えられる奴



ガルマ機を追うガンダムに、連邦軍の輸送機が接近して、女の声
が呼びかけた。

片翼でガウの方に向うガルマ機を、アムロが追う。ガルマはガウに連絡した。ビーム砲でガンダムを射と。だが、応答はなかった。

アムロは、ついに隊長機らしい戦闘機を発見して、サーベルで翼を切り落した。

アムロのガンダムは、ロケットノズルで高空までジャンプしては次つぎと戦闘機を射ち落していった。アムロは、ふさぎ込んでいても、こんな戦法を考えていたのだ。

アムロは、ついに隊長機らしい戦闘機を発見して、サーベルで翼を切り落した。

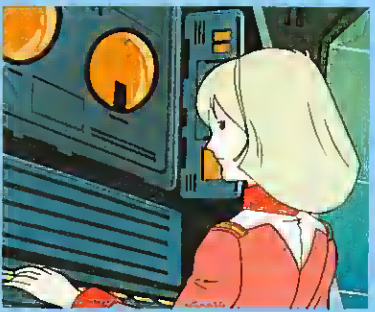
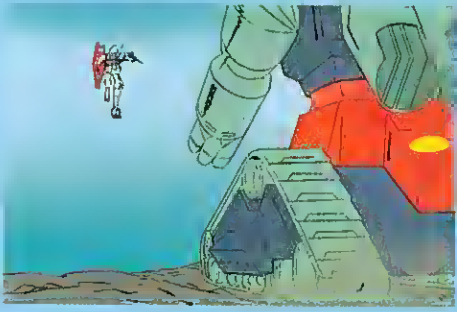
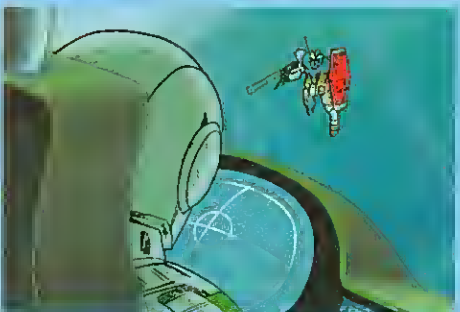
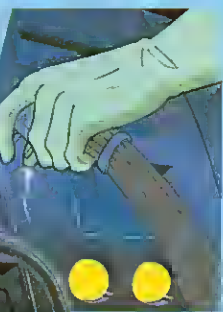
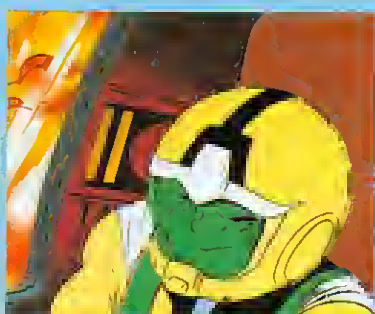
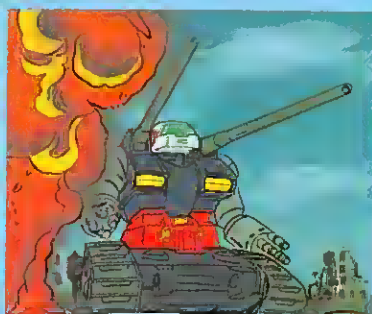
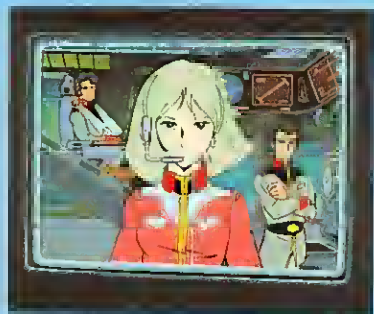
ガルマ大佐の攻撃ぶりには？

「親の七光りで大佐になった……だけの人物ではないな……」

「シャアの左手がすつとのび、周囲に気づかれないように、コクピットの下にある通信機のプラグを抜いた……」

「悔しいけど僕は男なんだな」と、フラウに言い残して、アムロは格納庫に駆け出しにいった。

ガルマに言われた通り、シャアはガウのブリッジからガルマの戦いを傍観していた。



深追いすると、ガウの飼食になる……帰艦せよ!……と。

ガウに戻ったガルマは、通信機のプラグが汚れて接触不良だったことを発見したが、整備の手落ち以外には考えられなかった。

なぜ援護をしなかったかと詰問するガルマに、シヤアは答えた。

「……ブライドを傷つけちゃ、悪いと思ってな……」

もうガルマは何も言えなかった。マチルダ少尉の輸送機で、ホワイ

トベースは物資の補給を受けた。マチルダは、リード以下の負傷

者、病人は引き取るが、他は現状維持という参謀本部の指令を伝えた。しかし、ホワイトベースは、

事実上正規軍扱いになったのだ。アムロの肩に手を置いて、マチ

ルダは活躍をたたえた。

「あなたの闘いがなければ、私たちもやられていたわ。」

ありがと……あなたは、エスパールかも知れない。」

「そ、そんな……」

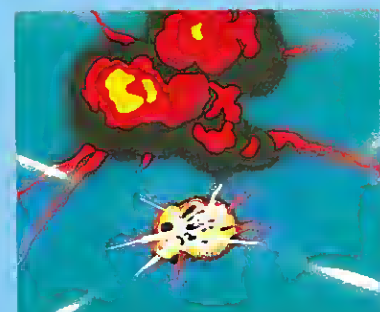
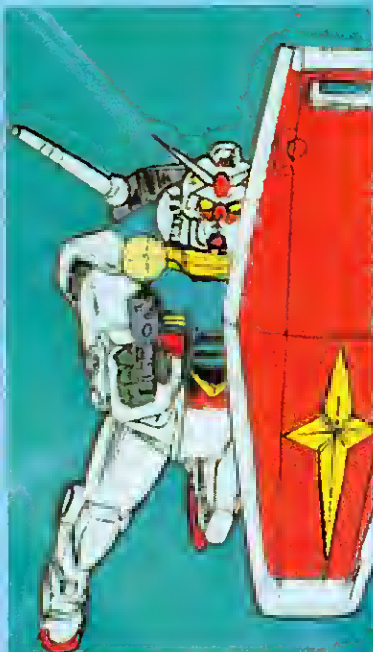
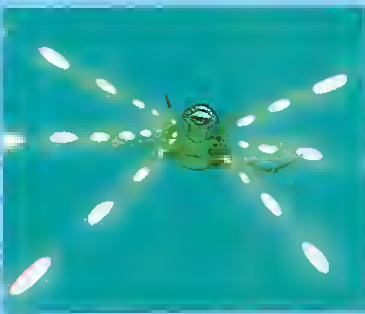
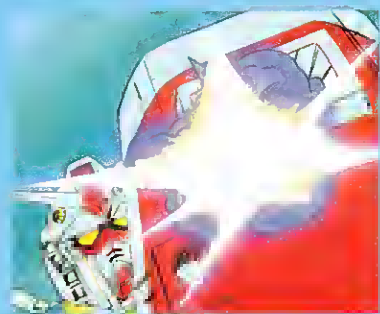
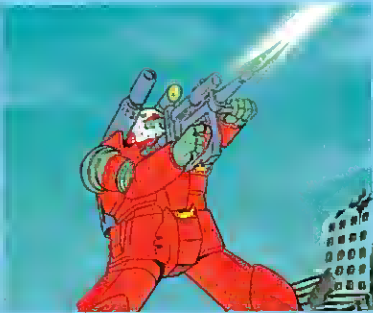
アムロは、はにかんで答えた。

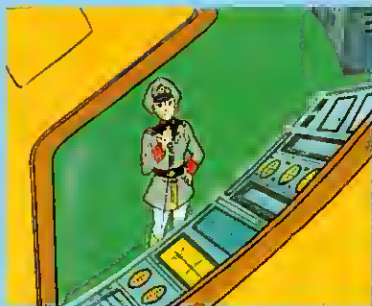
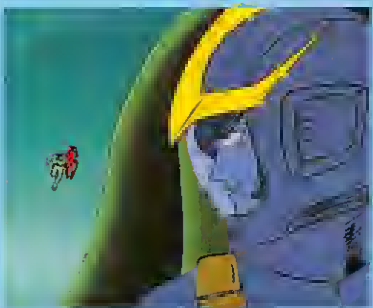
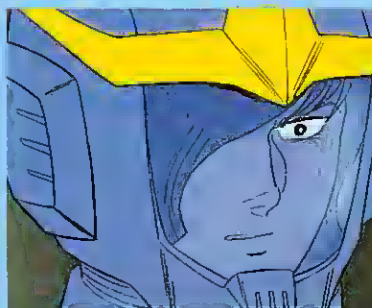
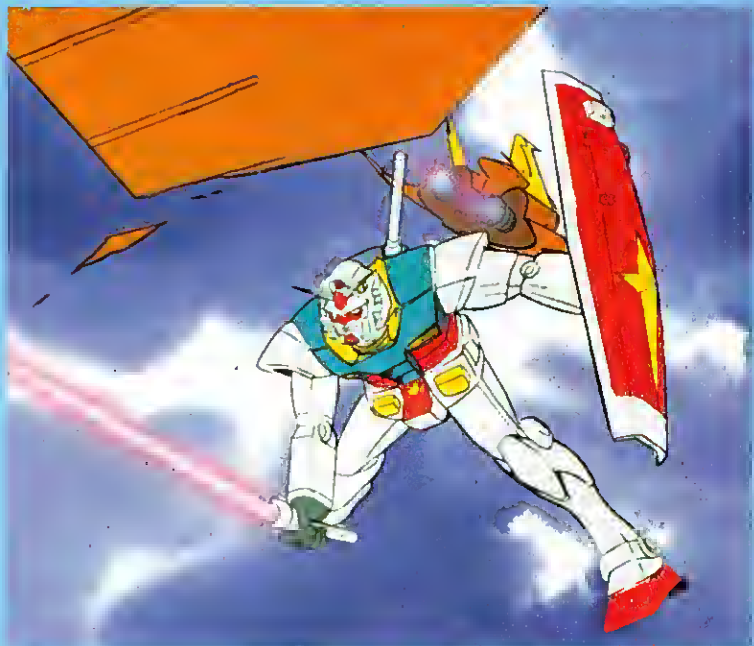
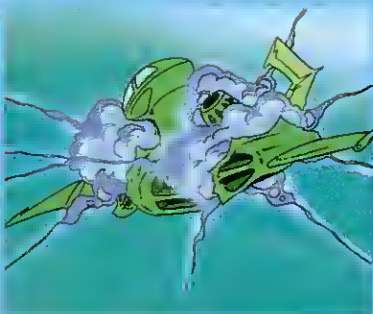
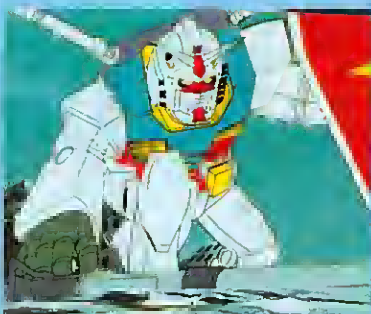
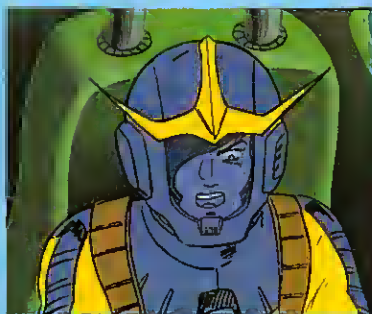
「がんばって……」

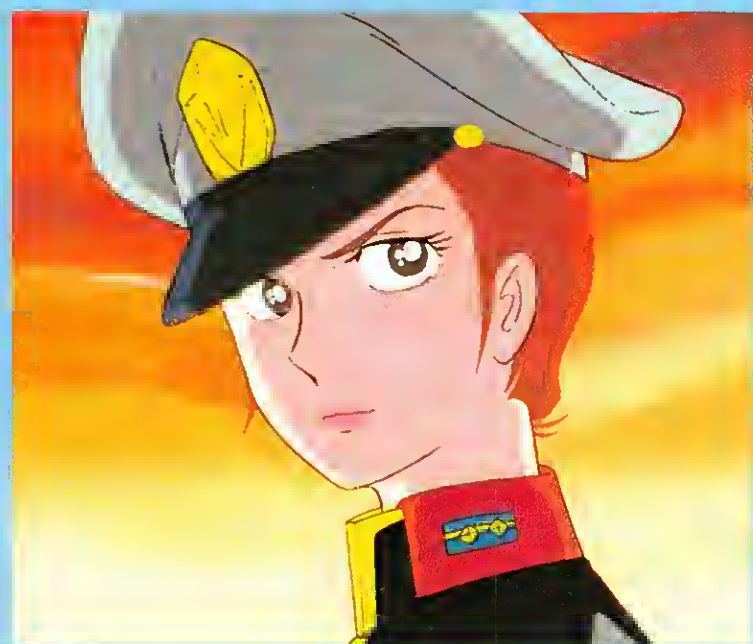
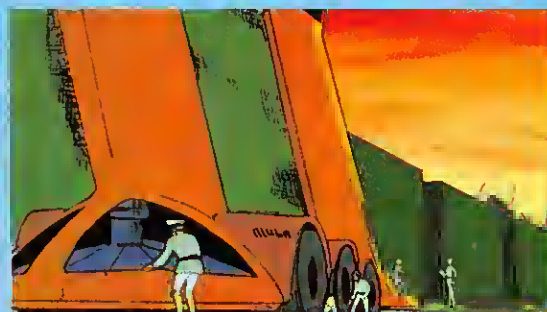
一瞬の香りを残して、マチルダは去っていった。

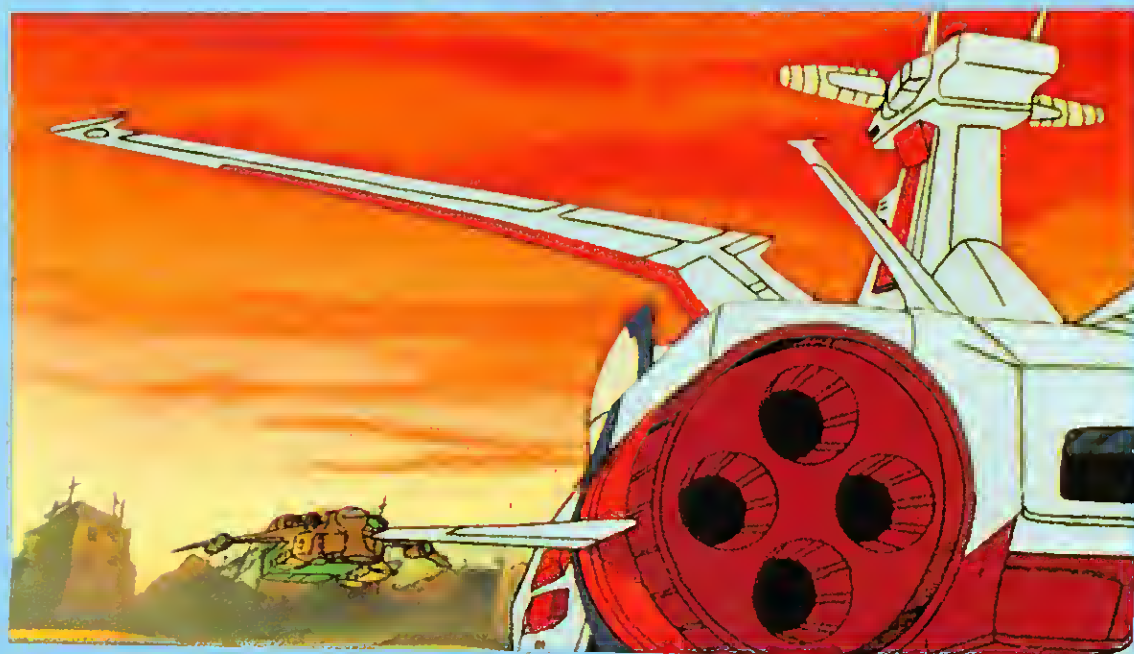
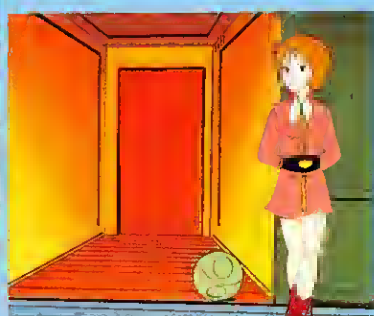
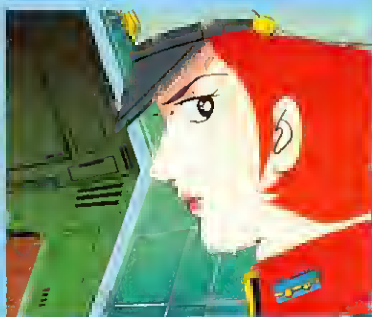
アムロにとって、それは初めて知った女性の香りであった。

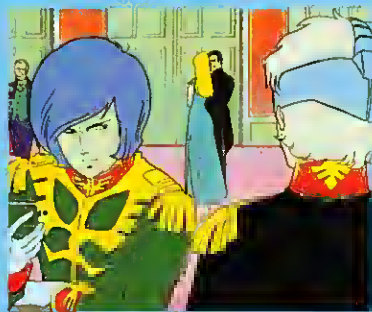
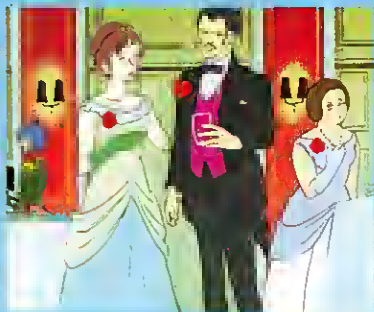
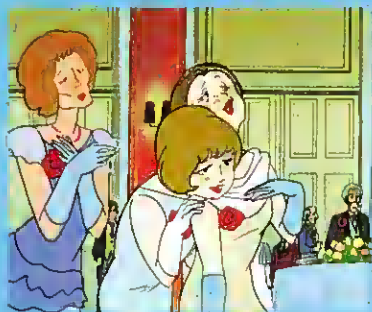
マチルダを乗せて、連邦軍の輸送機は上空に消えていった……。











第10話 ガルマ散る

ジオン軍の本部官邸。

官邸内のホールでは、今夕もパーティーが催され、夜会服に着飾った紳士や淑女、軍人たちが華やかにグラスを重ね、談笑している。その中にガルマとシャアの姿が見られた。

パーティーもたけなわのころ、
「イセリナ・エツシエンバッハ様の御見えてでございます」

一きわ音楽が高まって、大階段を降りてくる美しいイセリナの姿に、人びとの視線が集った。

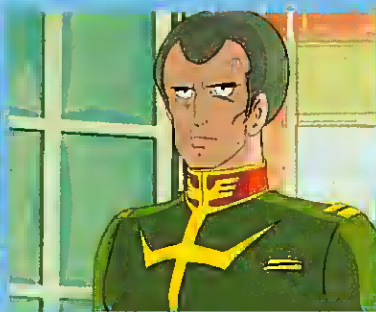
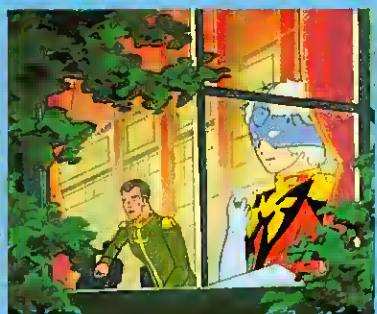
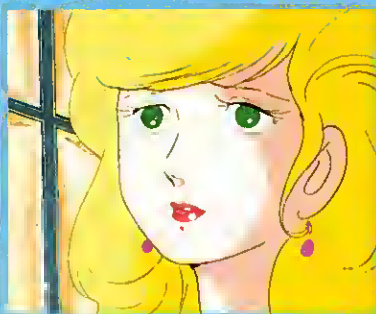
イセリナは、元ニューヤークの市長、エツシエンバッハの娘で、ガルマと愛し合っていた。

しかし、市民たちの安全を願って、ジオン占領下のこの地に留ったものの今もジオンを憎んでいるエツシエンバッハは、ジオン軍の総帥たるザビ家の息子に、娘はやれぬと、頑なに二人の結婚を認めようとはしなかった。

そんなガルマの恋を、シャアは冷やかに見つめていた。

「前線で、ラブ・ロマンスか……ガルマらしいよ、お坊っちゃん」
静かなテラスで、じっと見つめ合うガルマとイセリナ……。

「私には、ジオン軍も連邦軍も関係ありません……ガルマ様はガルマ様……たとえ父を裏切ろうと私はあなたのおそばに居ります」



「今、連邦軍の機密を手に入れるチャンスなのです。それに成功すれば、父として私の無理を聞き入れてくれます……」

聞き届けてもらえねば私も……

「ああ……ガルマ様」

抱きあうガルマとイセリナのところへ、ホワイトベース発見の報が伝えられた。

連邦の機密を奪いとったら、本国に連れていくと約束し、イセリナの額にキスをして、ガルマは出撃していった。

ホワイトベースは、街の廃墟の中を地上すれすれに移動していた。もう夜になっていた。

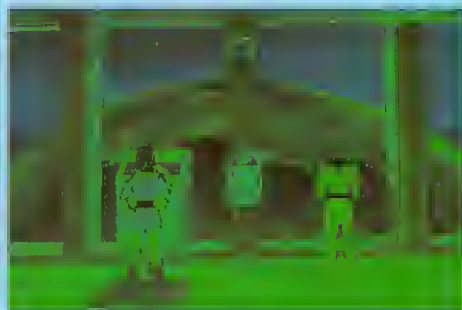
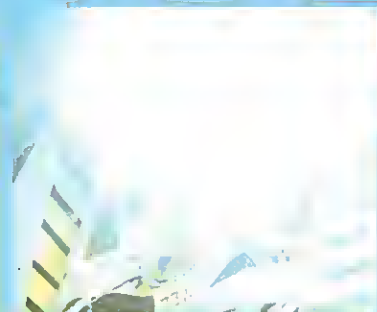
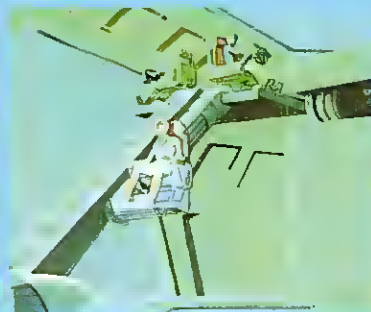
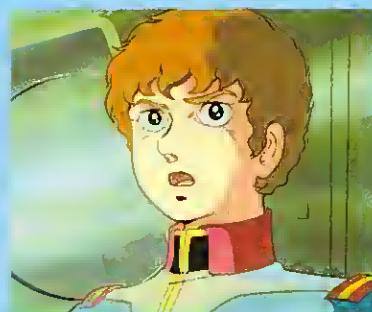
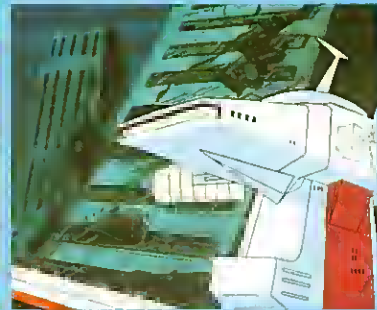
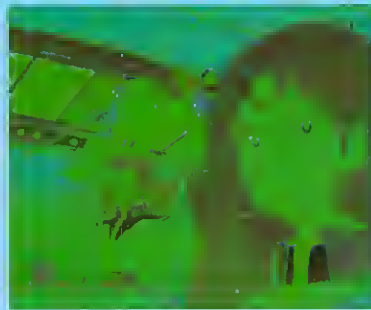
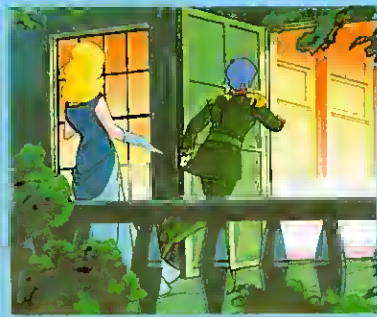
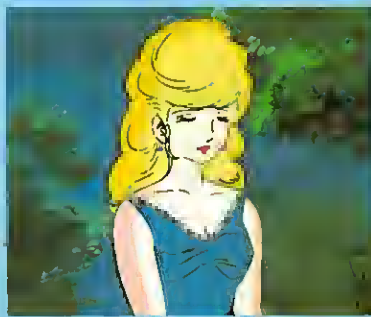
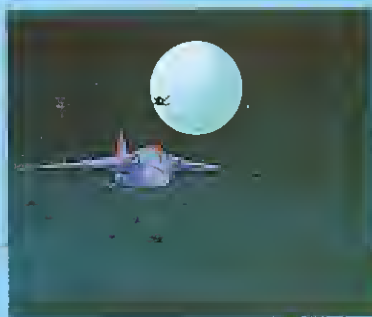
照明弾の明りで、半壊した雨天野球場が見える。そうだノブライトは、そのドームの中に艦を隠して全ての動きを停止した。

艦内の照明も落して、モビルスーツを待機させ、敵の様子をうかがった。

敵が発見できないガルマは、ガウから絨緞爆撃をしていぶり出しにかかった。爆弾は、野球場のドームを直撃して、艦は揺れたが、ホワイトベースは必死に耐えた。

ガルマの身を案じたイセリナが家用機でガルマのもとへ飛ばうとするが、見つかってしまふ。

あくまでもガルマのもとへと走るイセリナに、エッセンエンパッハ



は、平手打ちをする。泣きふすイ
セリナは、愛する人の名を呼んだ。
「ガルマ様……」

三機のザクを発見したブライト
は、ガンダムを出撃させた。ザク
とガウをおびき出し、一挙に殲滅
させる作戦だ。

アムロとシヤアは、バズーカで
射ち合ったが、ビルの残骸の中で
相手を見失ってしまった。その隙
に、アムロはザクを一機倒して追
ってくるザクをおびき寄せ、ホワ
イトベースから遠ざかった。

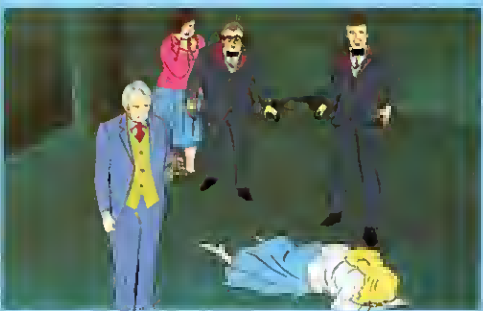
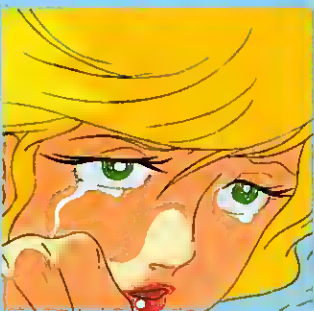
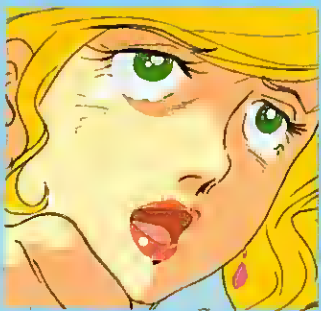
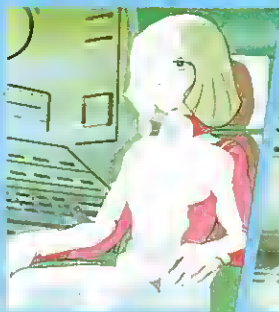
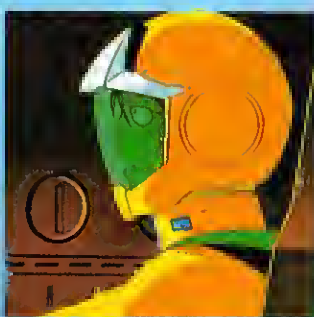
この作戦を見抜いたシヤアは、
後方にホワイトベースを発見しな
がら、ガルマにはこう知らせた。
敵のモビルスーツの逃げる先に、
ホワイトベースがあるはずだと……
シヤアの言葉を信じたガルマは、
ガンダムを全軍で追った。

ブライトは、各砲に指令して、
照準を合せた。今しもガルマが、
ガンダムに攻撃をかけようとした
時、ホワイトベースの一斉射撃が
始まった。予期せぬ後方からの攻
撃に、ガルマ隊は次々と撃破さ
れていった。

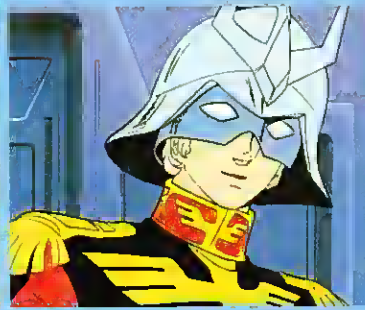
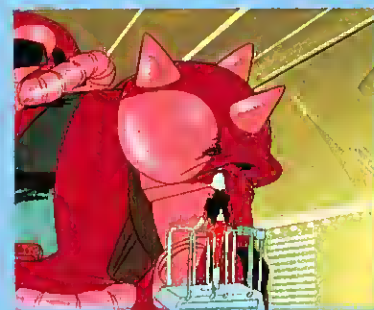
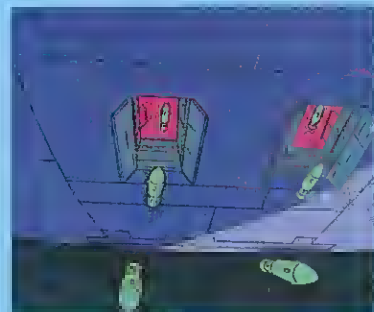
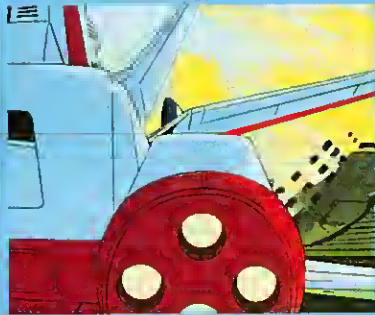
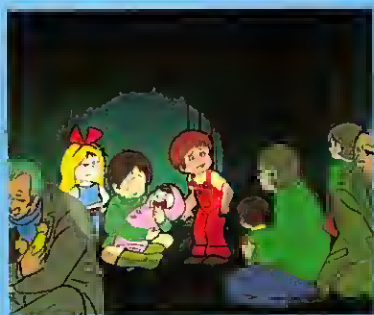
もう無理だった。ガルマは炎上
するガウをホワイトベースに体当
りさせようとする……

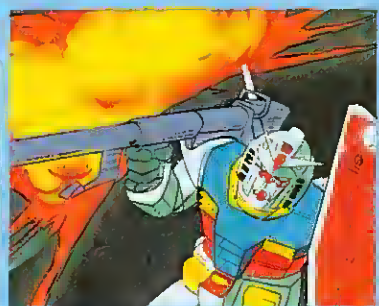
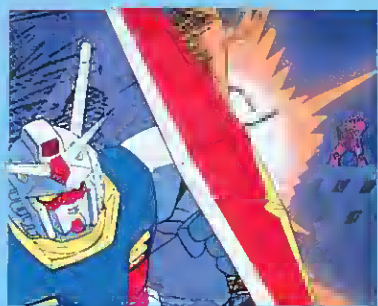
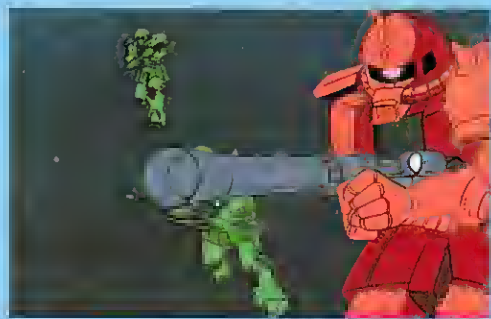
「フフ……ガルマ、聞えていた
ら君の生れの不幸を呪うがいい」
「なに!? 不幸だと?」

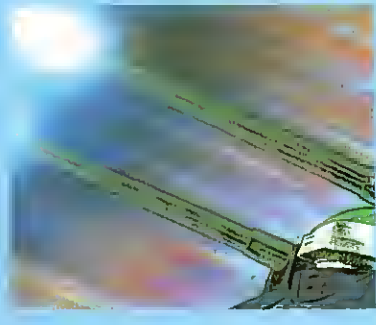
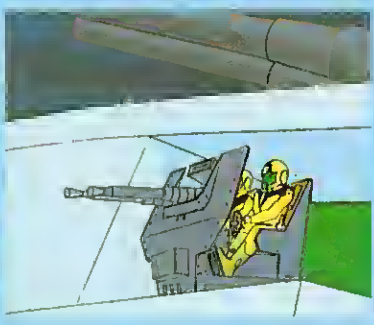
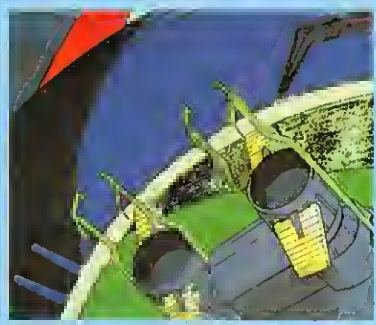
シヤア「お、お前は……」
「君はいい友人であったが……」

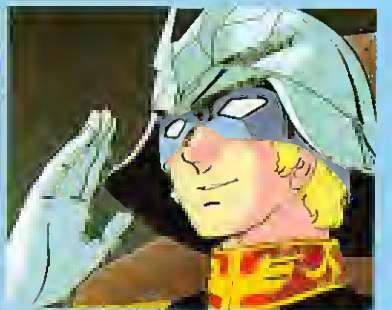
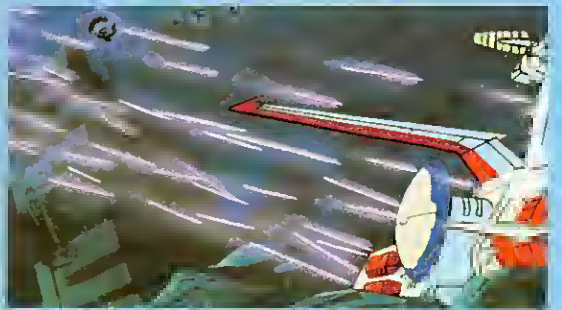
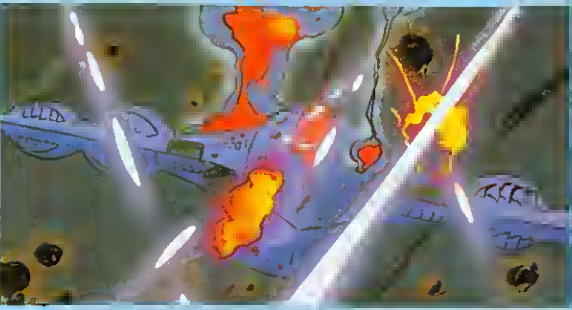
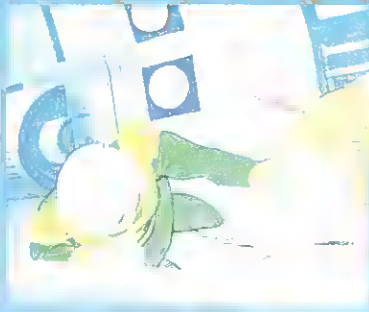
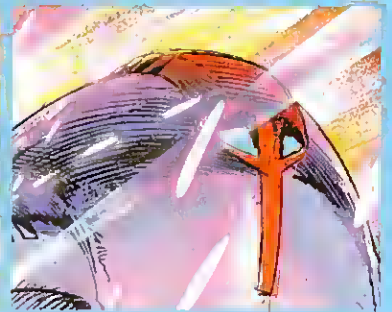
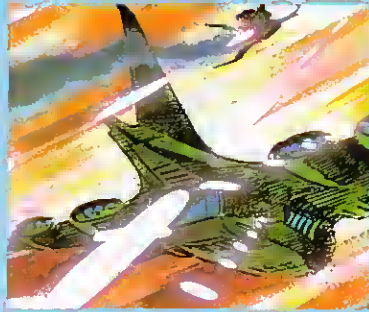


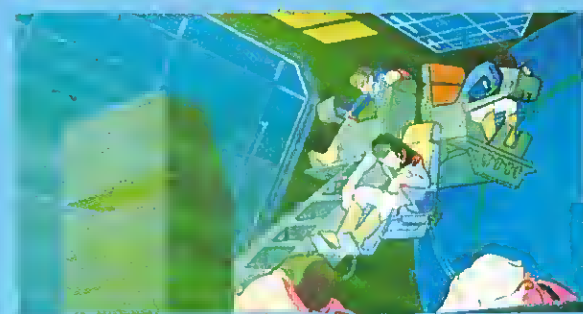
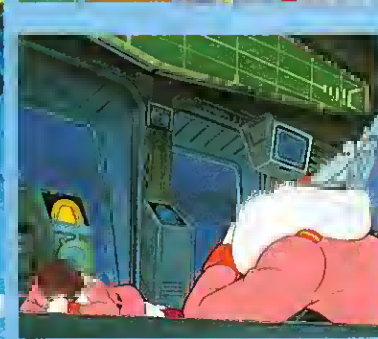
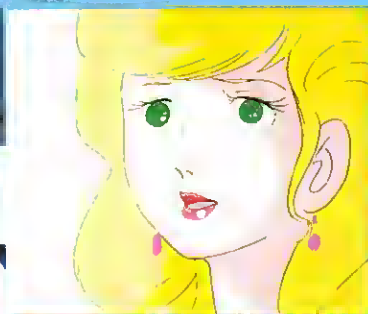
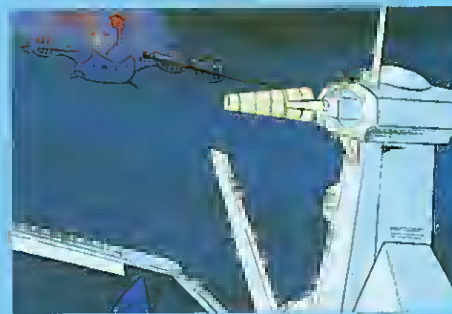
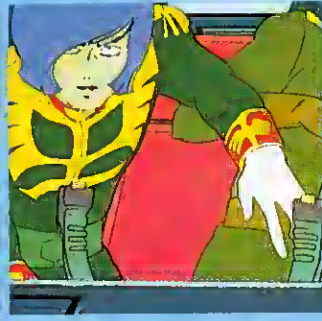
君の父上がいけないのだよ。
フフフ ハハハハ」
「はかったな……シヤア!!」
自ら操縦桿にとりついたガルマは、炎上しつつガウとともに特攻をかけたのだ。
「私とてザビ家の男だノ無駄死にはしないノ」
ジオン公国に栄光あれ……!!」
絶叫するガルマの脳裏に、イセリナの姿が浮んだ……。
ガウはホワイトベースの直前で爆破して、ホワイトベースは無事だった。
「た、助かったのか……」
ブリッジには、ホツとするプライトの姿があった。
「アムロ!!よくやったぞ、突破作戦はうまくいった。これより脱出する。帰艦しろ!!」
アムロは、シヤアの姿がないのを気にしつつ、取敢えず帰艦した。ガルマの戦死を父から聞かされたイセリナは、木にもたれて泣きじやくった。
「う……ガ……ガルマ様
うう……なぜ、なぜなの?
ガルマ様——!」
月の向う側のジオン本国に、ザビ家の末弟、ガルマの死が急報された……。
時に、ジオン公国の公主、すなわちガルマの父、デギン・ザビは、使者の前で杖をおとした……

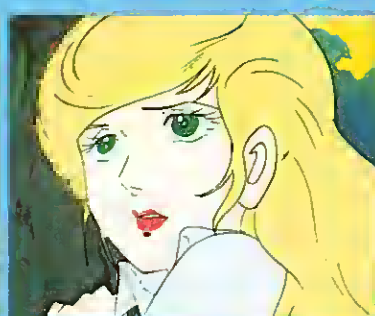
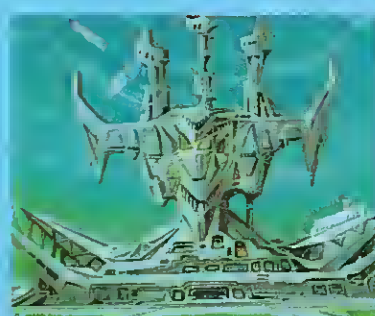
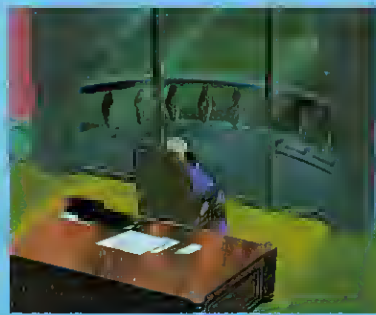
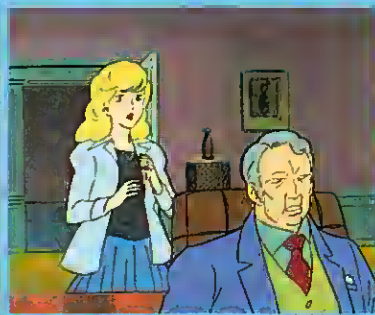
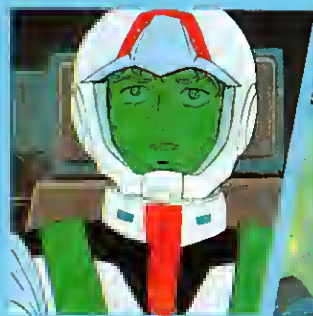


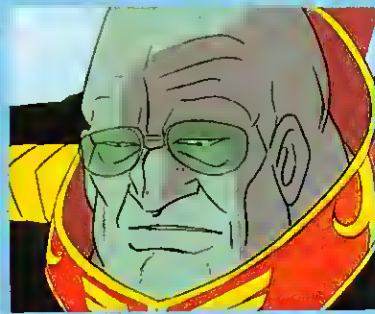
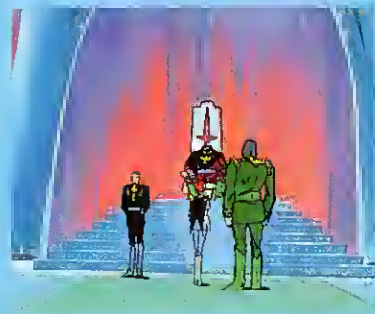
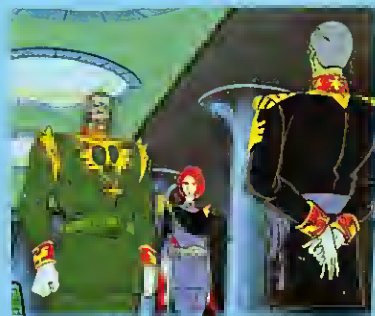
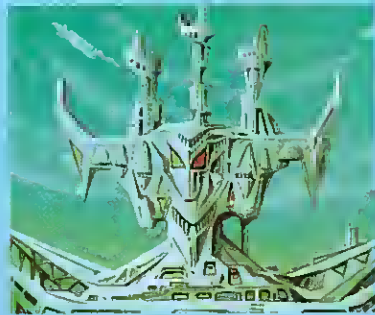
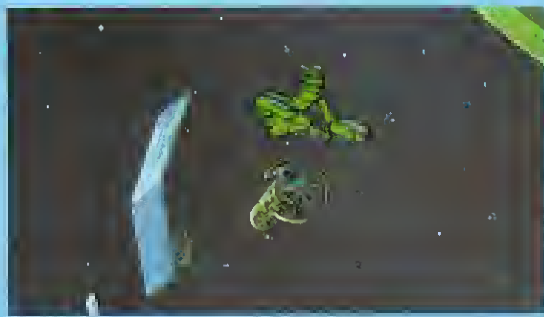












第11話 イセリナ恋のあと

月の向うに浮かぶ数十の宇宙都市。これこそザビ家が支配するジオン公国である。

そのザビ家の官邸では、デギン公王をはじめ、ギレン、前線より戻ったドズル、キシリアなどが一堂に会してガルマの死を、悼んでいた。

恋人ガルマに死なれたイセリナは、ジオン北米基地を訪れていた。

ガルマの部屋に通されたイセリナは、愛するガルマの肖像の前で復讐を誓ったのだ。

「さぞ……ご無念でございましょう……しかし……このままでは済ませません！我々は必ず……」

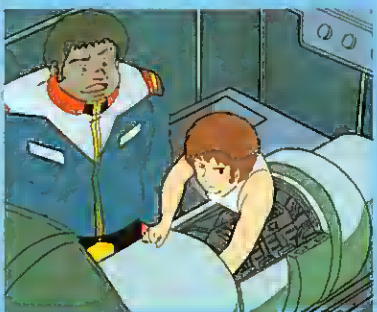
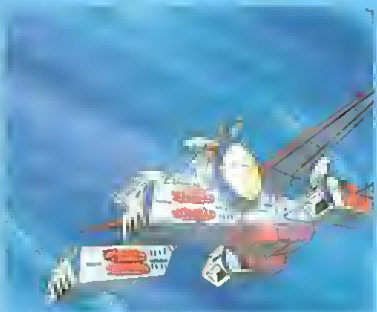
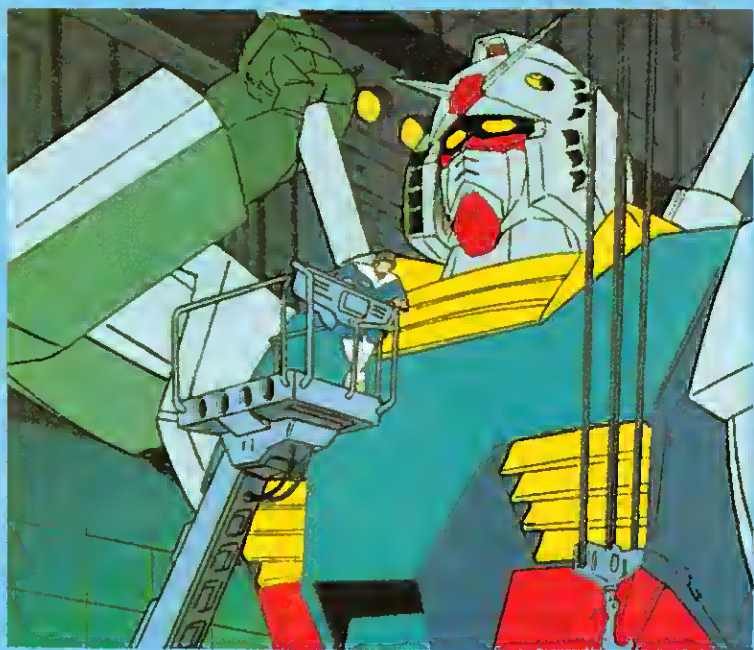
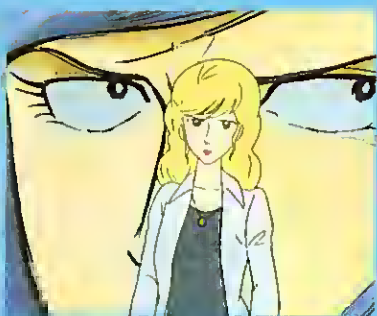
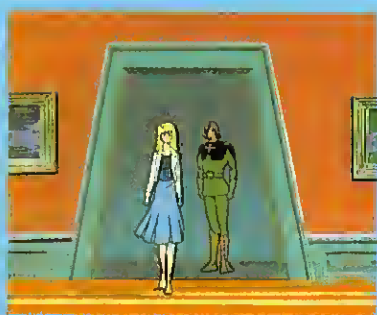
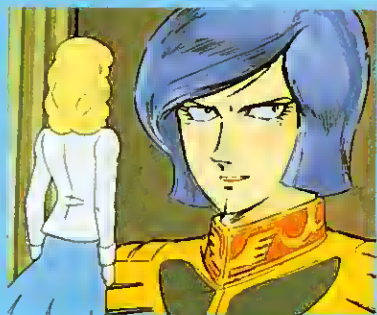
「ダロタ中尉……私を……ガウに乗せて下さい。」

ガルマ様を殺した憎い敵……せめて一矢なりとも報いたいのです」

「しかし……それは……」

ホワイトベースは、やっとジオン領から脱出できるという時になって、強力な乱気流にぶつかってしまった。揺れる格納庫で、アムロはビームサーベルをジャベリンに変形する方法を知ったのだ。

丁度、ガウの三機編隊がキャッチされた。その中の一機には、イセリナとダロタが乗り組んでいた。ガンダムとガンキャノンが発進して、先頭のガウの翼に飛びのり主砲と垂直尾翼を破壊した。



後方のガウが、ガンダムを狙って攻撃してきたが、それで味方のガウを貫ぬいてしまう。ガンダムとガンキャノンは次のガウにとび移った。翼を味方に射ち抜かれたガウは、墜落して大爆発した。

シアアが偵察機でガウの援護にやって来た。シアアは、連邦の制空圏に向うホワイトベースを追う。彼は、イセリナのようにガルマの復讐にやってきたのではない。

「ガルマを戦死させた責任。ドズル中将への忠誠。」

……どうとられても損はない……」

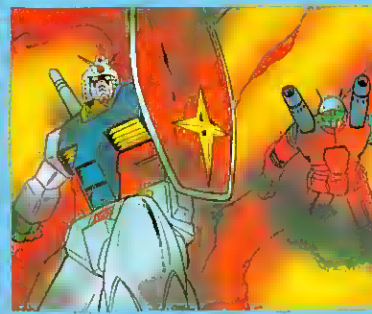
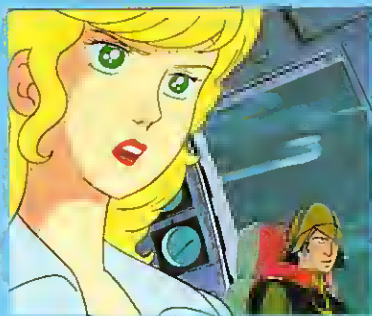
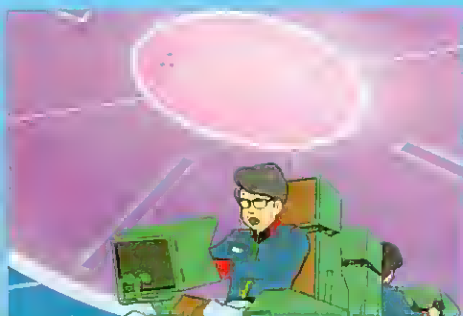
ホワイトベースは、参謀本部からの通信を受けた。援軍は送れないが難民は受けとることだ。

シアアの偵察機が接近してきた。廻りこんできたシアアの機は、ホワイトベースのエンジンを爆破してしまったのだ。

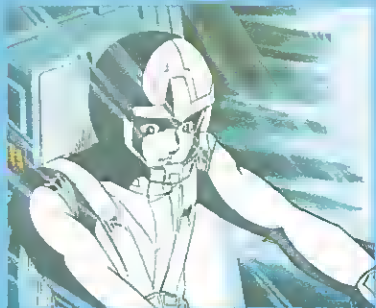
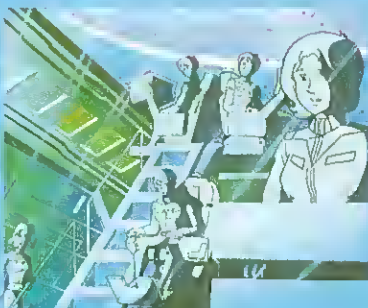
操縦不能になったホワイトベースは、砂漠に不時着した。エンジン部の応急処置をして発進しようとした矢先、数人の避難民が勝手に艦を降りてしまった。

下船した難民に姿を見られたシアアは、彼らを射った。銃声をきいたブライトが発砲しつつシアアを追ったが……。

一旦地上に降りたガンダムは、再びガウの翼にとびのり、ビーム砲を受けながらもガウをジャベリンで真二つにした。ガウの大爆発で腕をやられたダロタに代って、



イセリナがガウの舵をとった。
「このままでは、ガルマ様がおかしいそうです……」
イセリナの目に涙が光った。イセリナの操縦する最後のガウは、ガンキャノン、ガンタンクの斉射を浴び、ジャベリンの攻撃を受けながら、ガンダム目がけてまっすぐに突っこんできた。
「モビルスーツ！
ガルマ様の仇！」
ガウはガンダムに体当たりし、はねとばして停止した。
「うう……しまった……どこか回路をやられたな、調べてみます」
「アムロ、大丈夫か？」
ガウには兵がいるかも知れん！
気をつけろ！」
ヨロヨロとガンダムを点検しているアムロの姿を見ていたイセリナは、死んだダロタ中尉の銃を抜くとガウの上から真直ぐにアムロを狙った。
「ガルマ様の仇！」
「か、かたき、だ……」
身に憶えない言葉に、驚いて目を見開くアムロの前で、力尽きたイセリナは、銃を空に向けて発砲しながら、くずれるようにゆっくりとガウから落ちて砂の上に横たわった……。
「ぼ、ぼくが……か、仇……？」
砂の上に静かに横たわるイセリナの姿を、アムロは信じられない面持ちで放心したように見つめて



いた……。

ジオン本国では、ガルマの死を戦意高揚に利用して、国民の地球連邦への憎しみをかき立てようとギレンが提案していた。

「ガルマの死を……我がザビ家だけで悼むのが……なぜいけない」「父上、今は戦時下ですぞ。

ガルマの死は、一人ガルマ自身のものではない……。

ジオン公国のものなのです」

国葬より、ザビ家内だけで静かに弔いたかったデギン公王は、ドズルにシャアの左遷を命じただけだった。

そんなことも知らずに、シャアとドレン中尉をのせた偵察機は墜落したガウを尻目に、砂嵐の中を飛び去ってゆく……。

「人には頼れんな……」

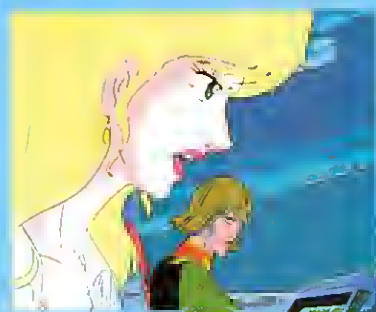
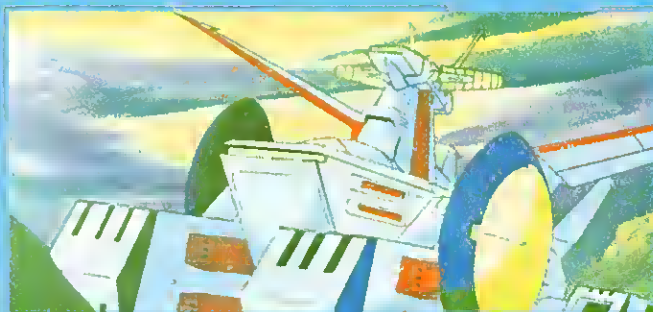
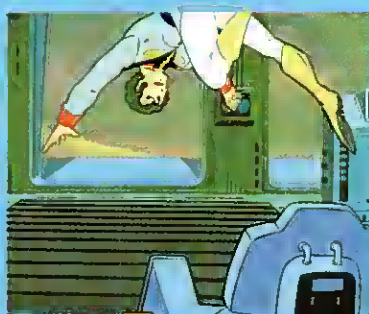
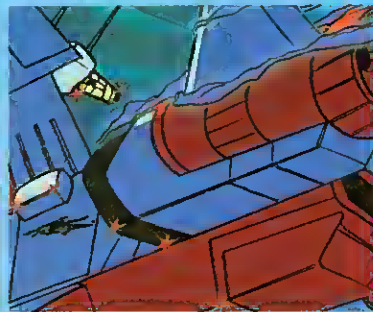
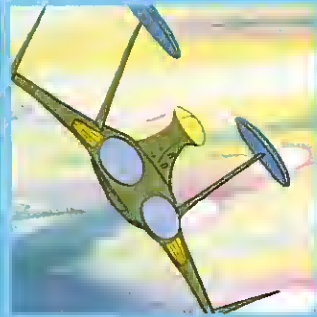
あ、ドレン。私のモビルスーツは電気系統がメチャメチャに焼ききれていたことにしておけ」

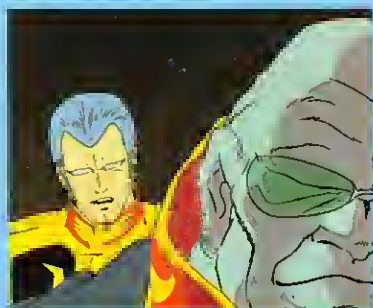
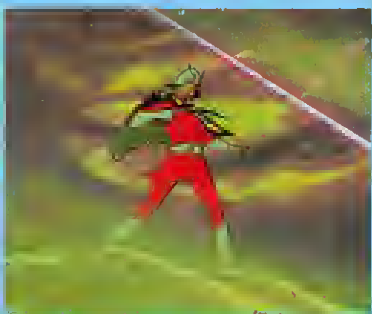
ドレンがニタリと笑う。シャアもまた、ニヤリと返すのだった。ホワイトベースのハッチから、避難民たちが降りてゆく。救援隊の方に向って……。

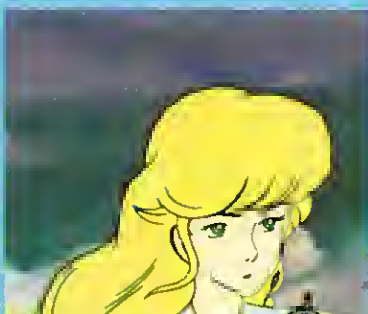
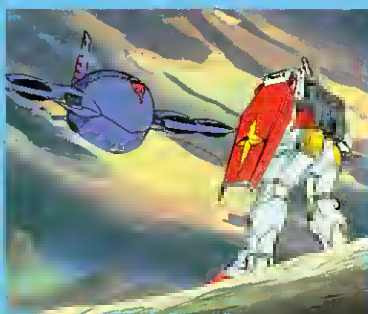
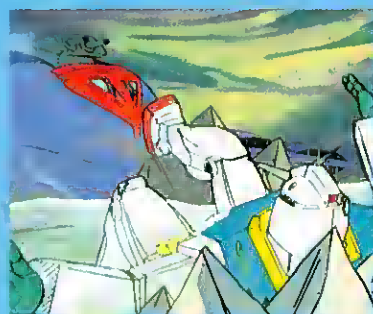
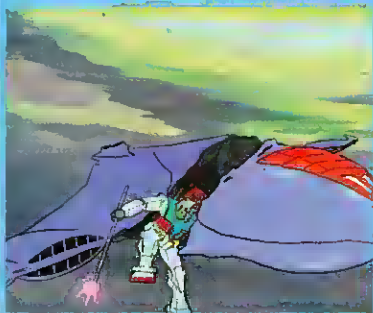
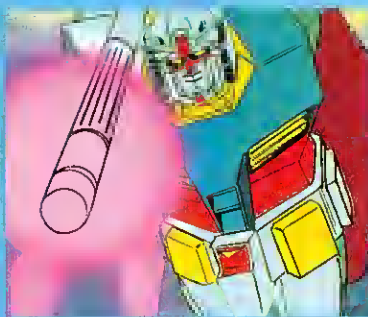
アムロは穴の中に横たえられたイセリナを見てつぶやいた。

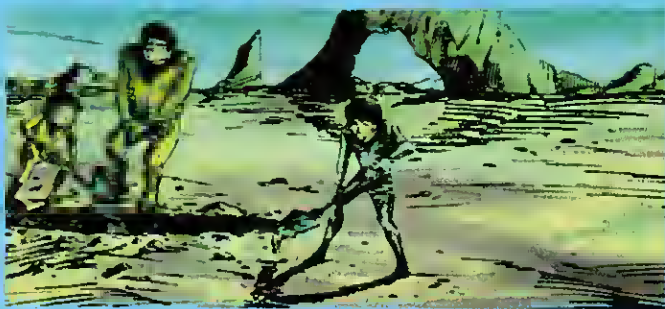
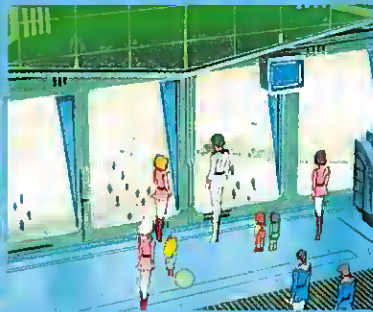
「何て名前の人のだろう……」

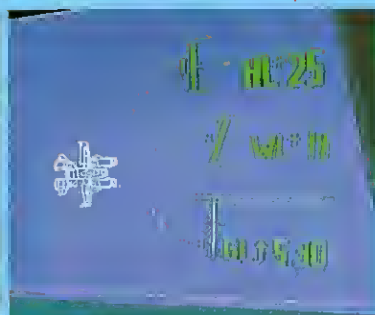
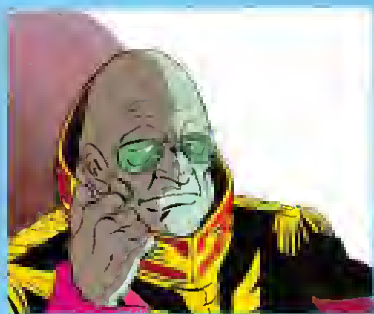
僕を……仇と、いったんだ……」
カイが無言で砂をかけた。そしてアムロも砂をかけた……











第12話 ジオンの脅威

デギン公王は私室で、ガルマからのビデオレターを茫然と見つめていた。

「二ヵ月ほどのうちに、一度ジオンに帰ります。ですが父上、その前に必ず、大戦果をあげてご覧に入れます」

お目にかかる日を楽しみにしております……」

チャイムが鳴って、キシリアが入ってきた。

「まだ、こんな処に……」

閣下のお気持はお察し致しますが公王としてのお役目だけは……」

「判っておる」

祭壇の中央には、花々に飾られたガルマのステールが見える。

ザビ家の面々を迎えて、広場を埋める群集の中から「ザビ、ザビ、ザビ、ザビ」の大合唱が起った。

その頃、ジオンの新造艦ザンジバルと二機のコムサイが、地球に向って大気圏に突入していた。

ザンジバルの艦橋に、ランバルとハモンが入ってきた。ラル

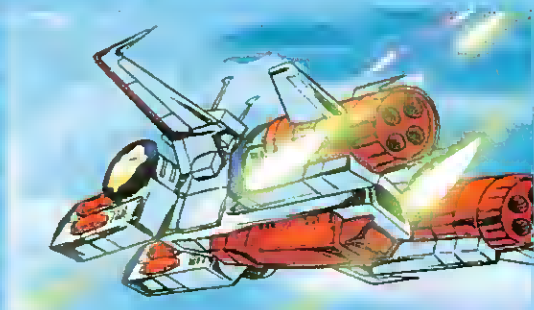
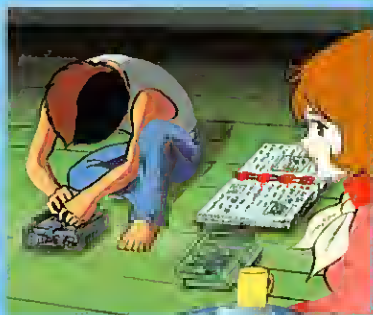
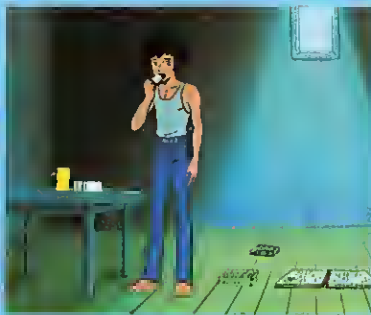
は、ガルマの仇討ちという特命を受けて地球に送り込まれたのだ。

レーダーが、ホワイトベースらしいものをキャッチしていた。

「ガルマ様の仇きを討つチャンスというわけですか？」

「そう急ぐな、ハモン」

アムロの部屋に、フラウが食事



を運んできた。アムロは何かによつて、ガンダムの子供コンピュータの修理をしていた。邪魔しないようにフラウとハロが出ていった後で、ふと気づいてフラウが置いていったサンドイッチを頬ばった。

ブライトも疲れていた。ちょっとしたことにムツしたり、いらいらしてしまう自分をもて余していたのだ。

はしやぎ廻っていたキッカたちを怒鳴りつけて泣かせてしまったブライトは、部屋に入ってふと目を閉じた。そんなブライトを気づかうミライに、

「判っているよ。」

「言いたいことは……」

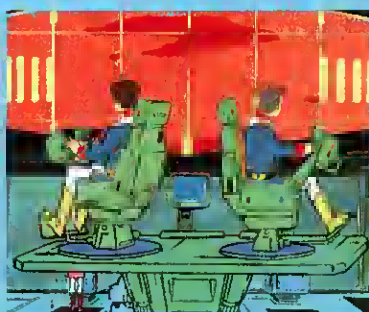
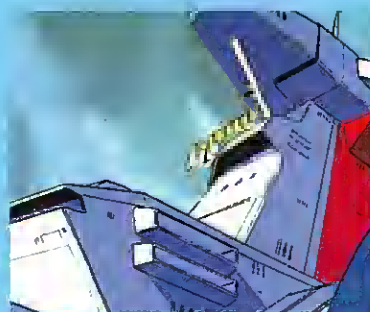
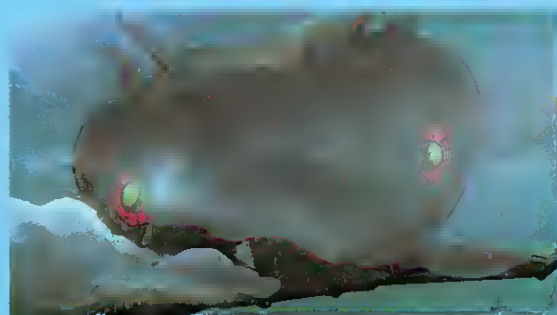
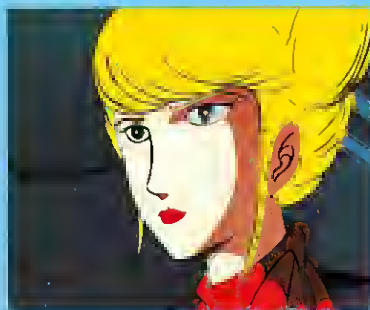
「でしようね。でも貴方が中心になる以外ないし、みんな頼りにしているんだから……」

しかし、休んでいる暇はなかった。ザンジバルの奇襲で被弾したホワイトベースは、急遽、積乱雲の中に逃げ込んだ。

激しい雷鳴と稲妻の閃光が走る中で、アムロは一瞬、突っ込んでくるガウと。ガルマ様の仇き！と叫んで銃口を向けた、見知らぬ女性をみたような気がした。

出撃の用意でアムロを呼びに来たリユウは、毛布を抱えてうずくまるアムロを見つけて戸惑った。

「アムロ！ まさかと思つたがまだこんなところに！ ！！」



おい……アムロ、しっかりしろ！
ほら！立て！……立つんだ！
「なんとかスーツを着せ、ヘルメツ
トをかぶらせたが、アムロは半分
放心状態だった。戦闘による心理
的な圧迫感が、15才のアムロの神
経を痛めつけていたのだ。
ホワイトベースは発見されてし
まった。」

「ホウ！あれが噂の木馬か」
ラルはハモンに軽くキスすると
新型のモビルスーツ、グフと新し
い武器を携えて、出撃していった。
ラルにとっては、初めての地上
戦の肩ならしのつもりだ。

リュウは手応えのないアムロを
ガンダムのコクピットに押し込む
と、発進していった。アムロは突
然ムチのようなもので打ち倒され
たが、それが新型モビルスーツの
武器と知って闘志が目覚めた。

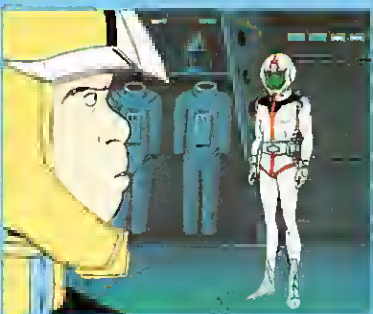
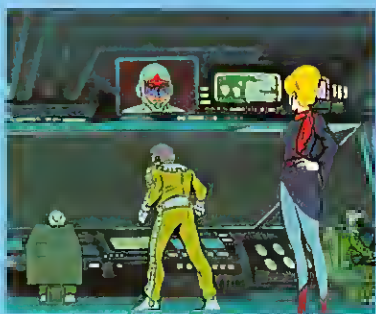
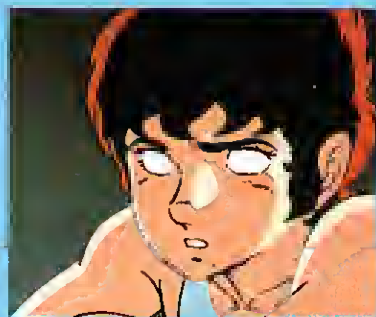
グフがムチをのばして、バズー
カに電流を通じた。爆発するバズー
カをガンダムは楯で防ぐ。

ラルはガンダムの戦いに驚嘆し
た。そしてザク二機にガンキャノ
ンとガンタンクを頼むと、自分は
ガンダムとの一騎射ちに挑んだ。
力をこめるガンダムに、ラルは
心の中でつぶやく。

「ザクとは違うのだよ。
ザクとは……」

そして、グフのまわし蹴りがガ
ンダムの脇腹にきまった。

「うわーっ！



こ、こいつ!.....違うぞ!ザクなんかとは甲装もパワーも!.....
カイとハヤトの激しい砲撃を受けて、ザクとグフはとりあえず帰艦し、めぐらましの巨大な光のかたまりの中へと、ザンジバルは消えていった。
見送りながらアムロは思う.....
「逃げられた.....というより、見逃してくれたのか?.....」

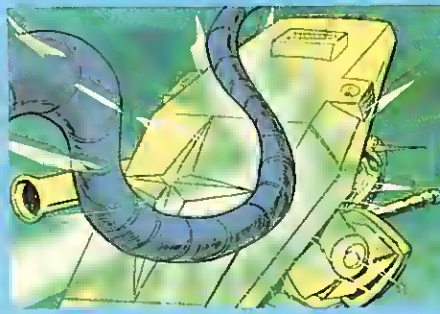
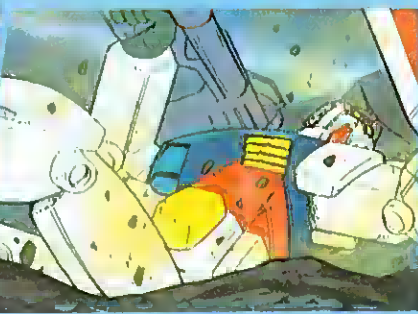
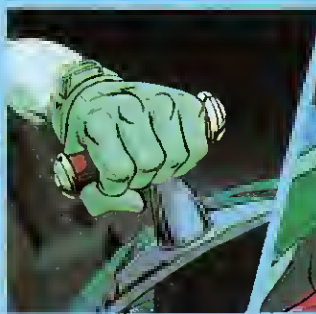
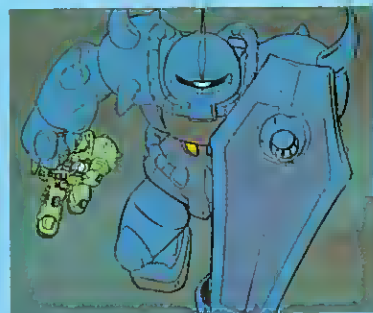
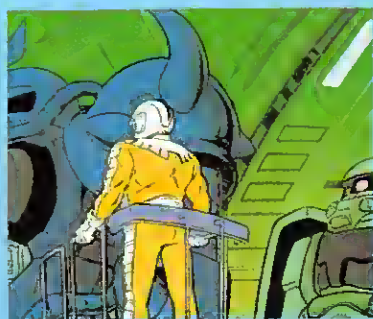
ホワイトベースのブリッジでも全世界中継の、ギレンの演説を流していた。
「我々は一人の英雄を失った。これは敗北を意味するものか?否、始まりなのだ!」

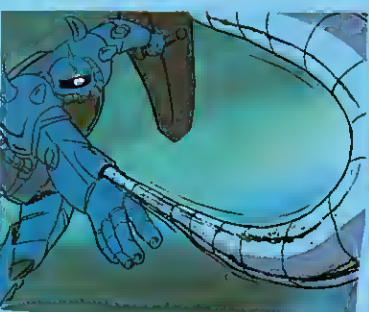
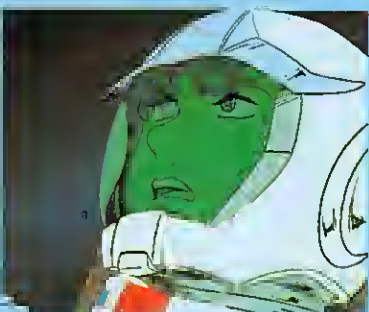
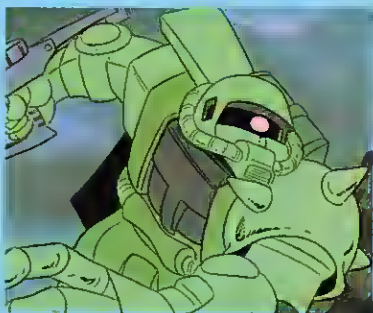
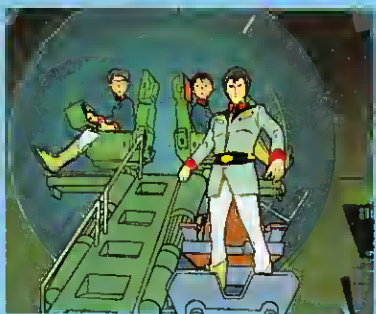
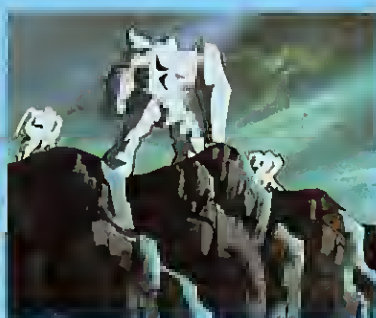
ザンジバルでも、ラルとハモンがみていた.....
「私の弟、諸君の愛してくれたガルマ・ザビは死んだ。何故か!」

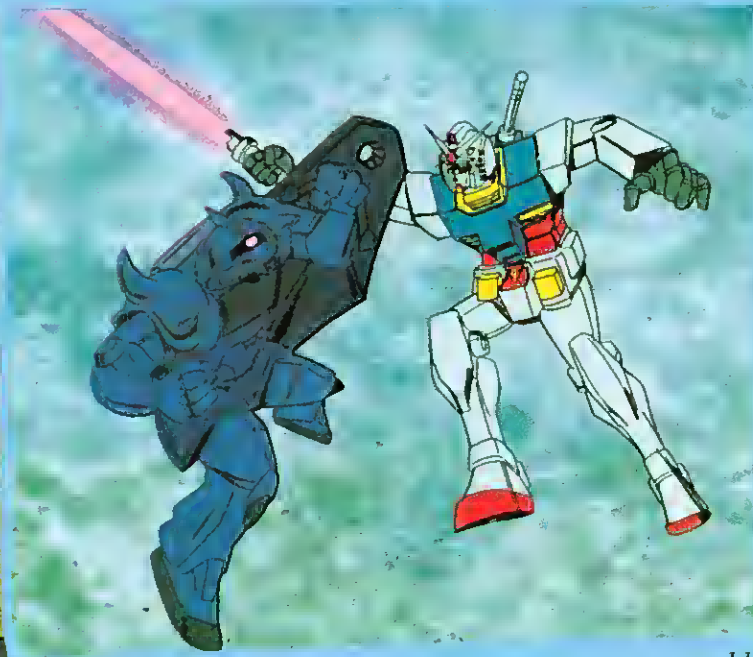
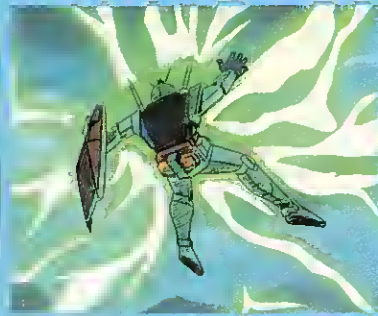
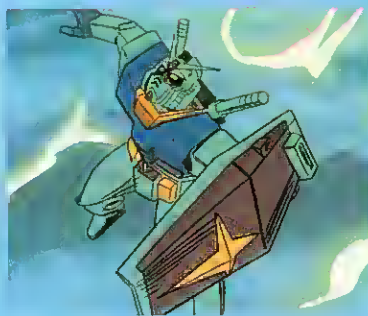
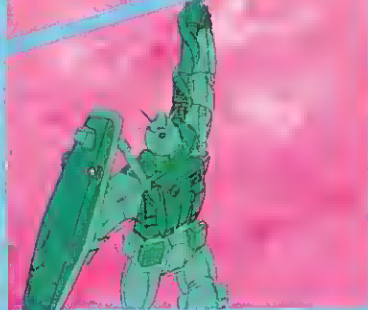
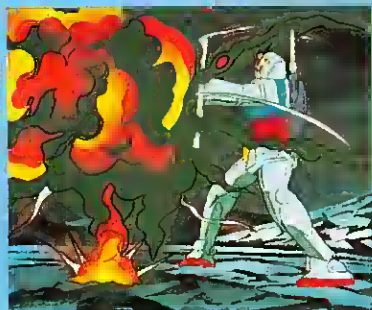
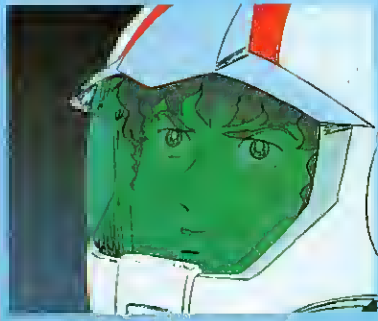
「.....坊やだからさ.....」
シアアが、酒場のテレビをみながら言った。その隣に一人の男が座っていた。シアアが声をかける。
「親衛隊の者だな?.....キシリアの手のもの?.....」

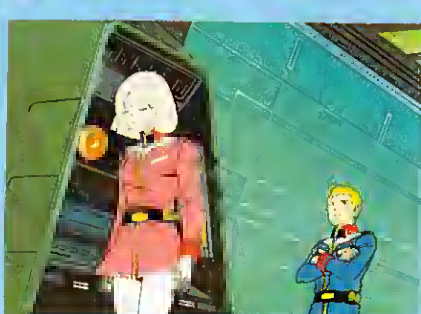
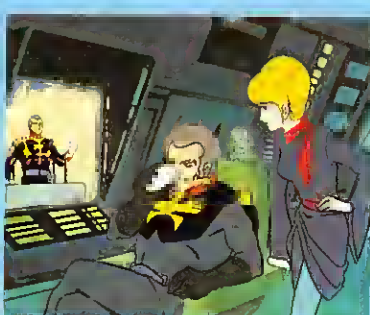
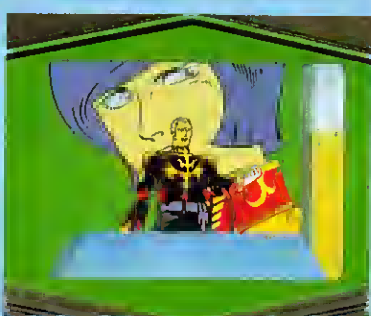
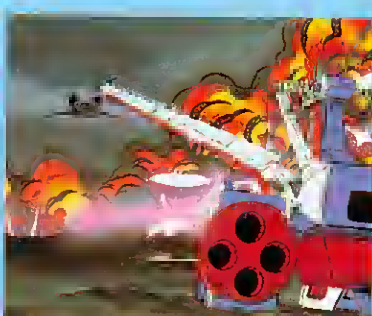
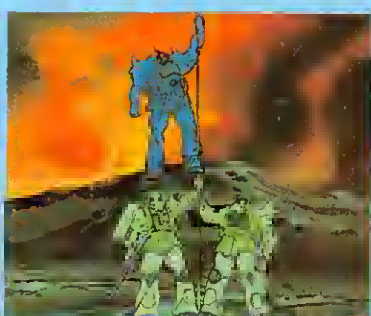
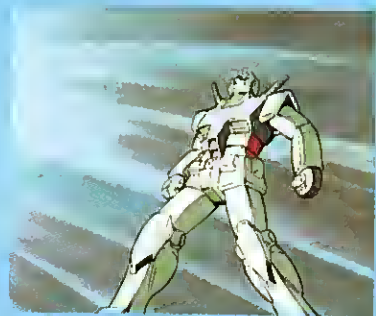
「判りますか?さすがですな」
ギレンの演説と「ジーク・ジオン」を叫ぶ数万のジオン国民の姿に、アムロは初めて自分が闘ってきた本当の敵の姿を知ったのだ。

ホワイトベースは、ゆらめくように朝日の中にきえていった!..









MOBILE SUIT ZAKU

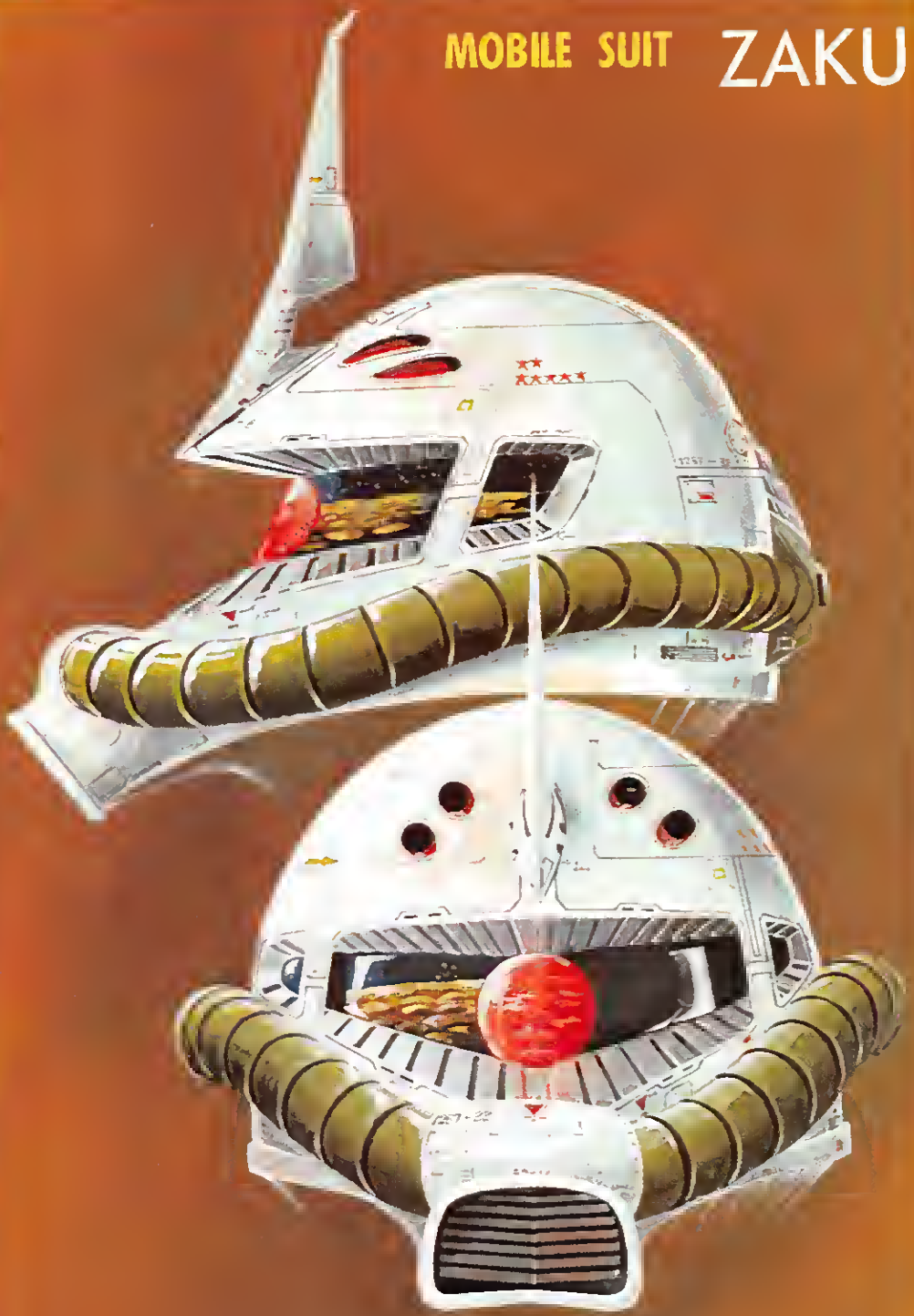


illustration by Kunio Ogawara

●キャラクターシート I



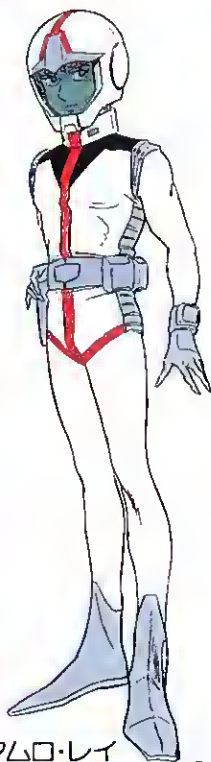
●ミライ・ヤシマ



●セイラ・マス



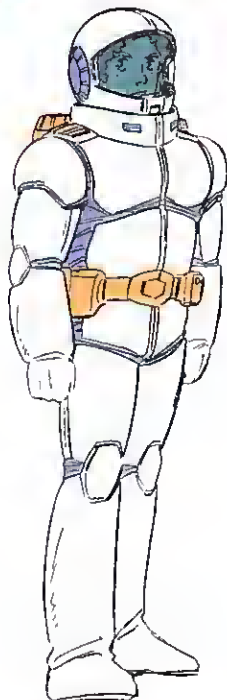
●フラウ・ボウ



●アムロ・レイ



●ブライト・ノア



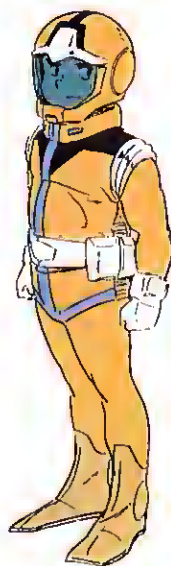
●ジョブ・ジョン



●カイ・シデン



●リュウ・ホセイ



●ハヤト・コバヤシ

●キャラクターシート II



●リード中尉



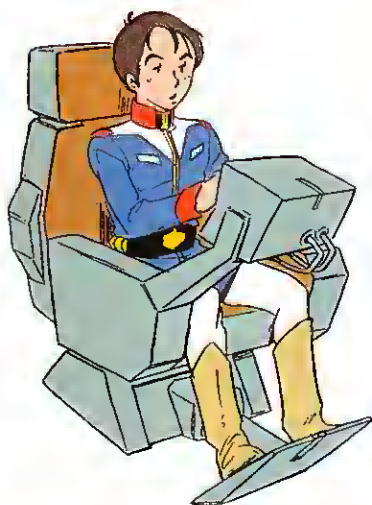
●ワッケイン少佐



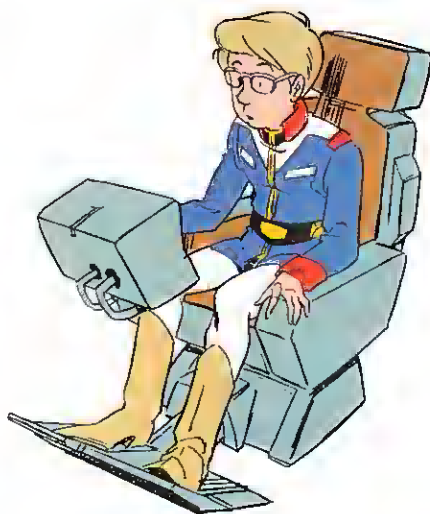
●バトロ・カシアス



●マチルダ・アジャン



●マーカ・クラン



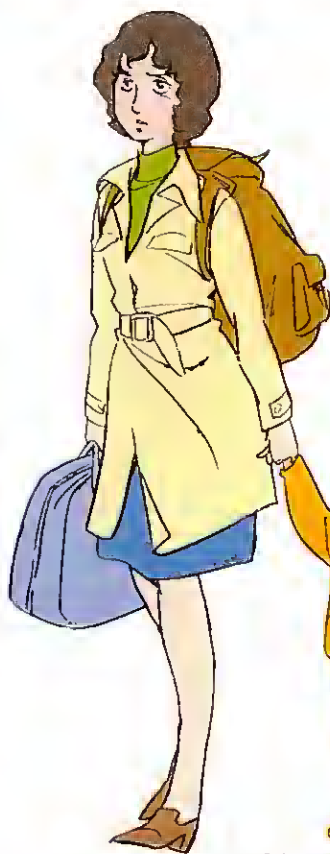
●オスカ・ダブリン



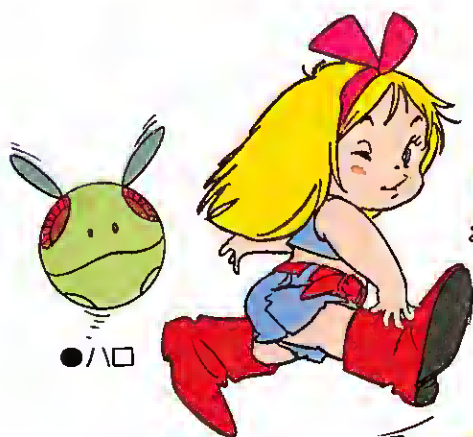
●連邦軍・一般兵士



●スミス&ペロ



●ベレシア&コリー



●ハロ

●キッカ・キタモト

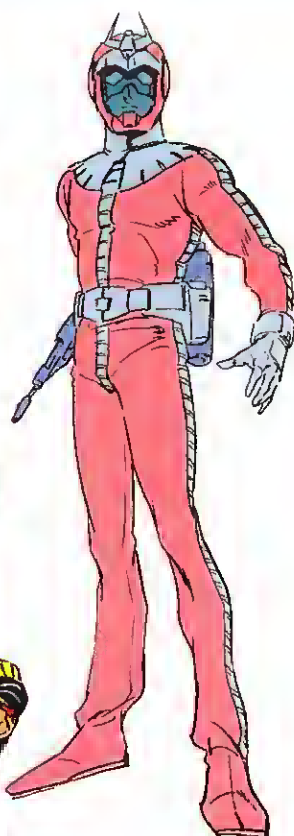


●カツ・ハウイン



●レッツ・コ・ファン

●キャラクターシート III



●シャア・アズナブル少佐

●ガルマ・ザビ大佐



●ドズル・ザビ中将



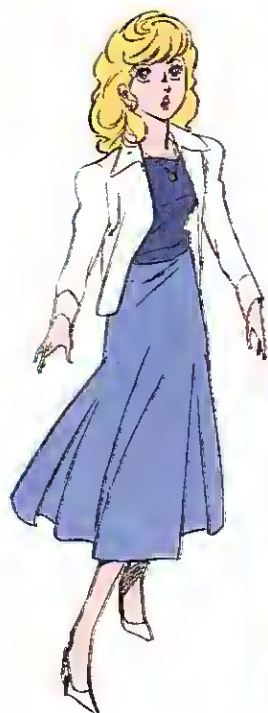
●ギレン・ザビ総帥



●デギン・ザビ公王

●キシリア・ザビ少将

CHARACTER SHEET



●イセラナ・エツシェンバッハ



●エツシェンバッハ

●クラウレ・ハモン



●ランバ・ラル大尉



●ジオン軍一般兵士



●バムロ機長



●ダロタ中尉

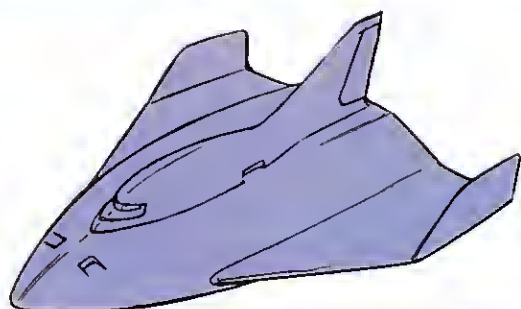


●クランプ副官

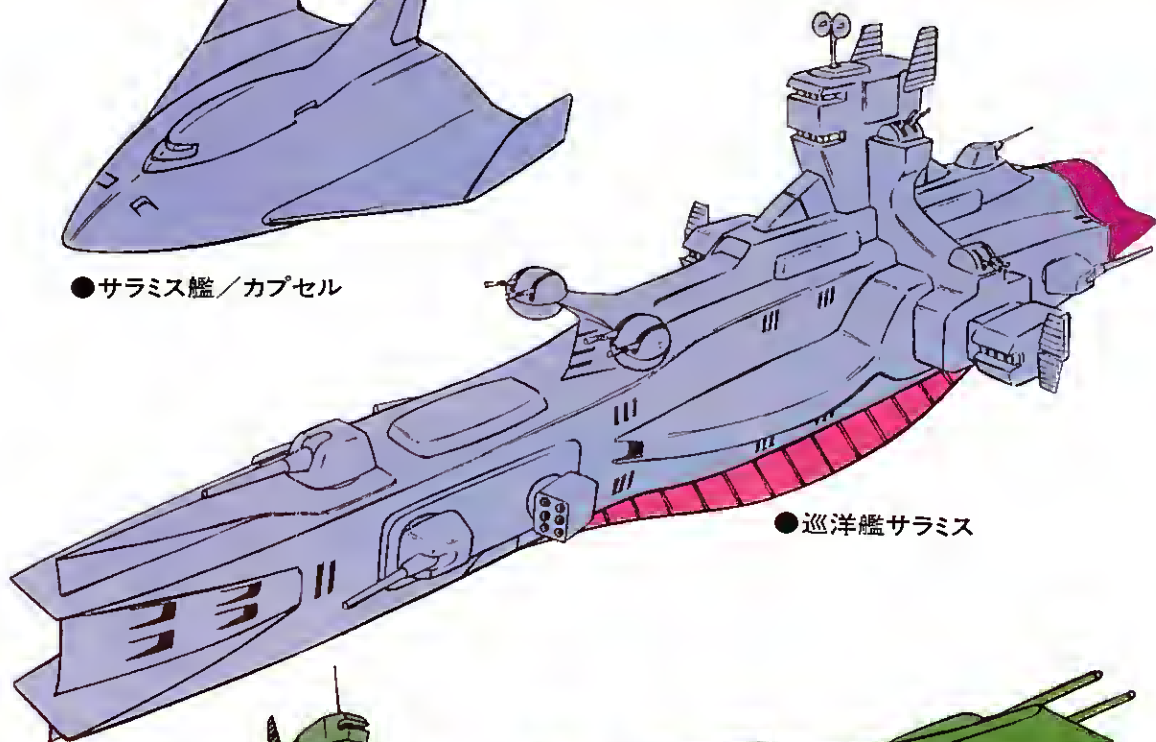


●ガテム艦長

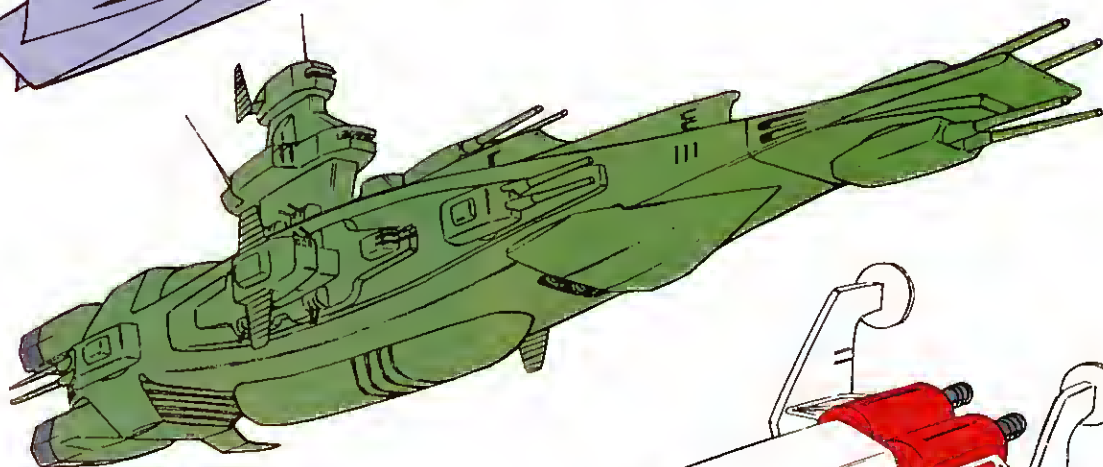
●キャラクターシート Ⅳ



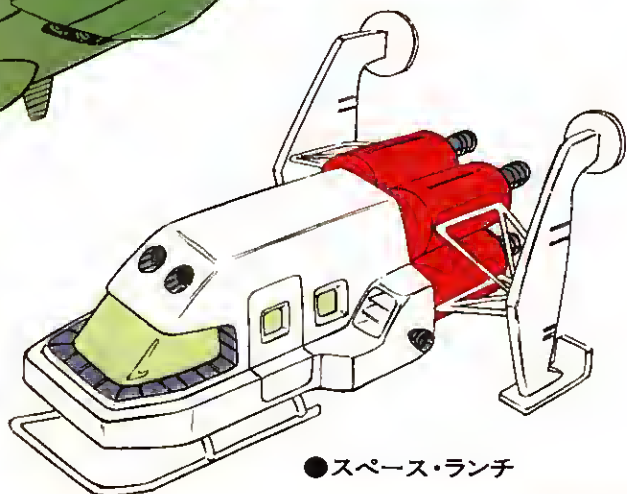
●サラミス艦／カプセル



●巡洋艦サラミス

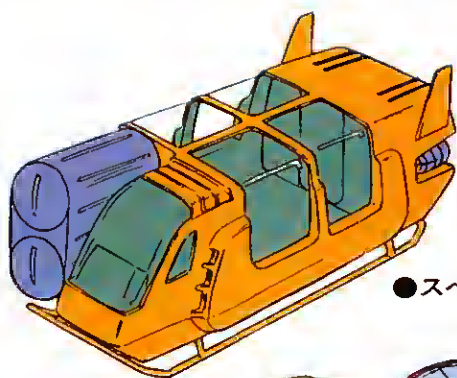


●戦艦マゼラン

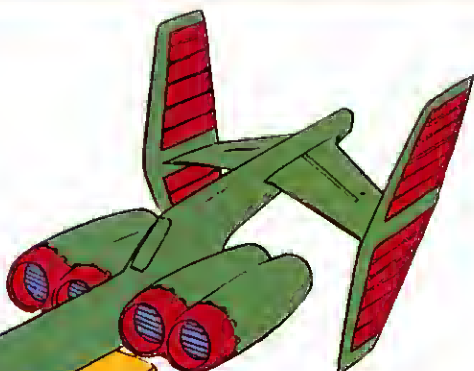


●スペース・ランチ

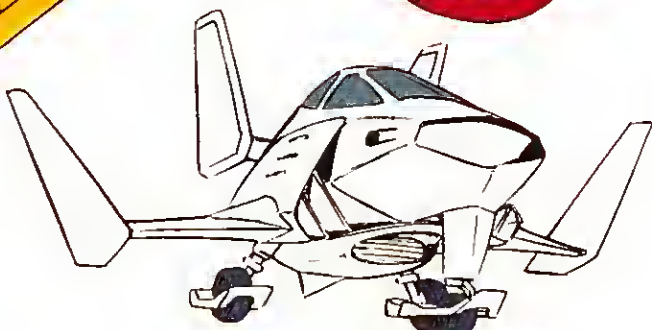
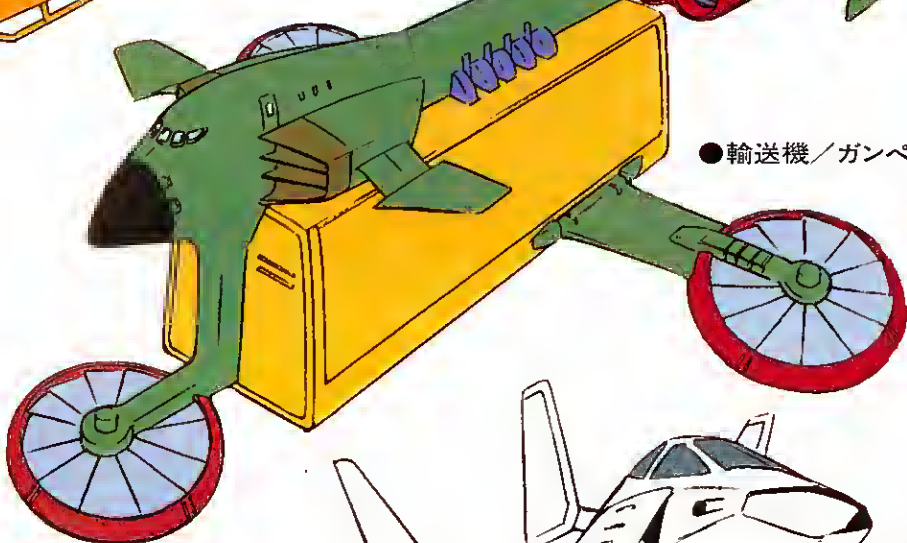
CHARACTER SHEET



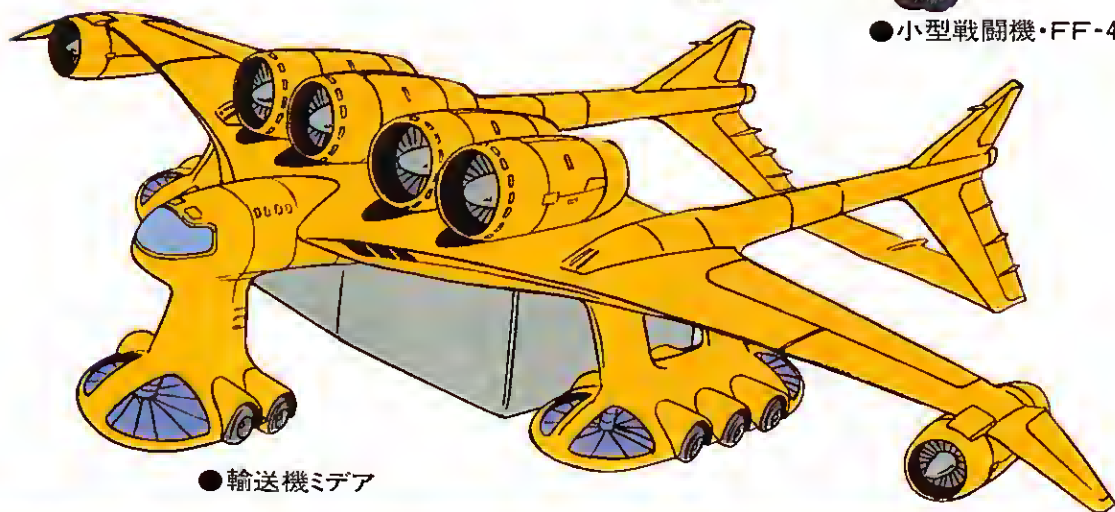
●スペース・ポート



●輸送機／ガンペリー

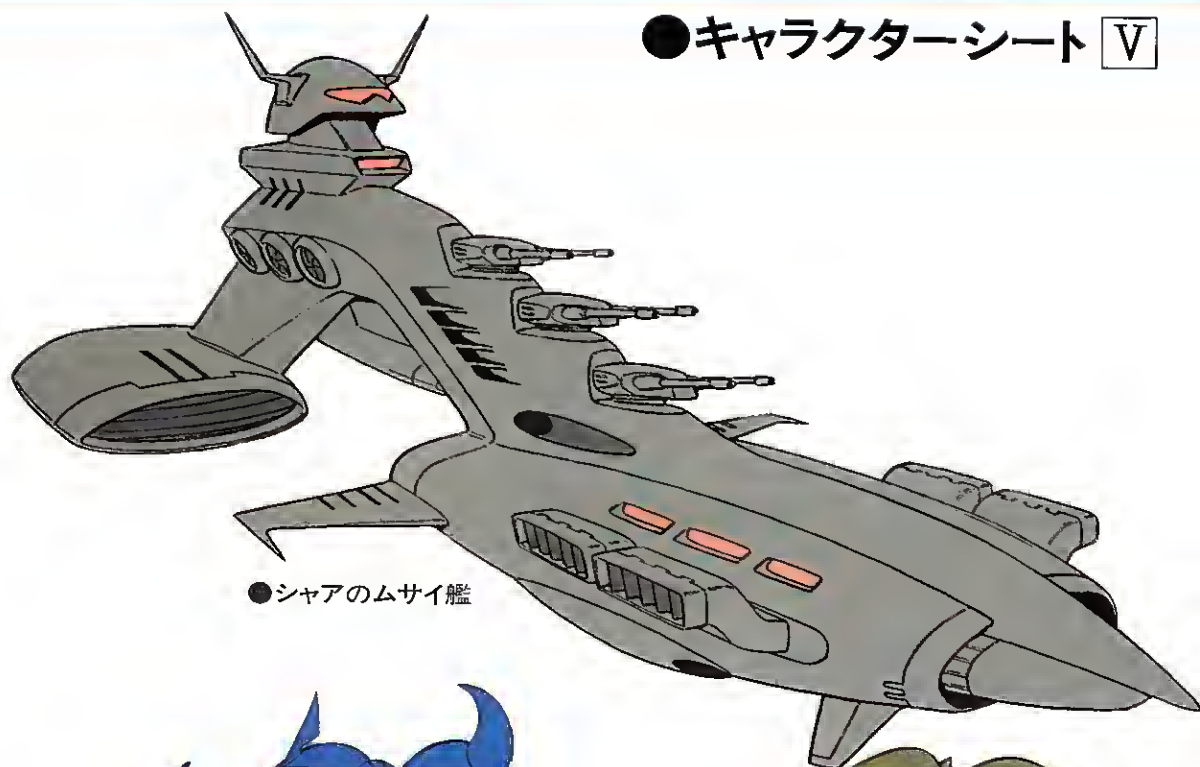


●小型戦闘機・FF-4



●輸送機ミデア

●キャラクターシート V



●シャアのムサイ艦



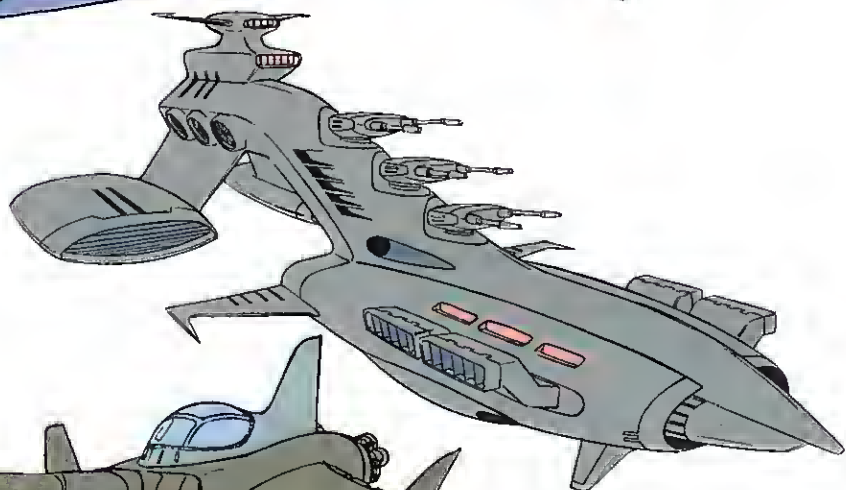
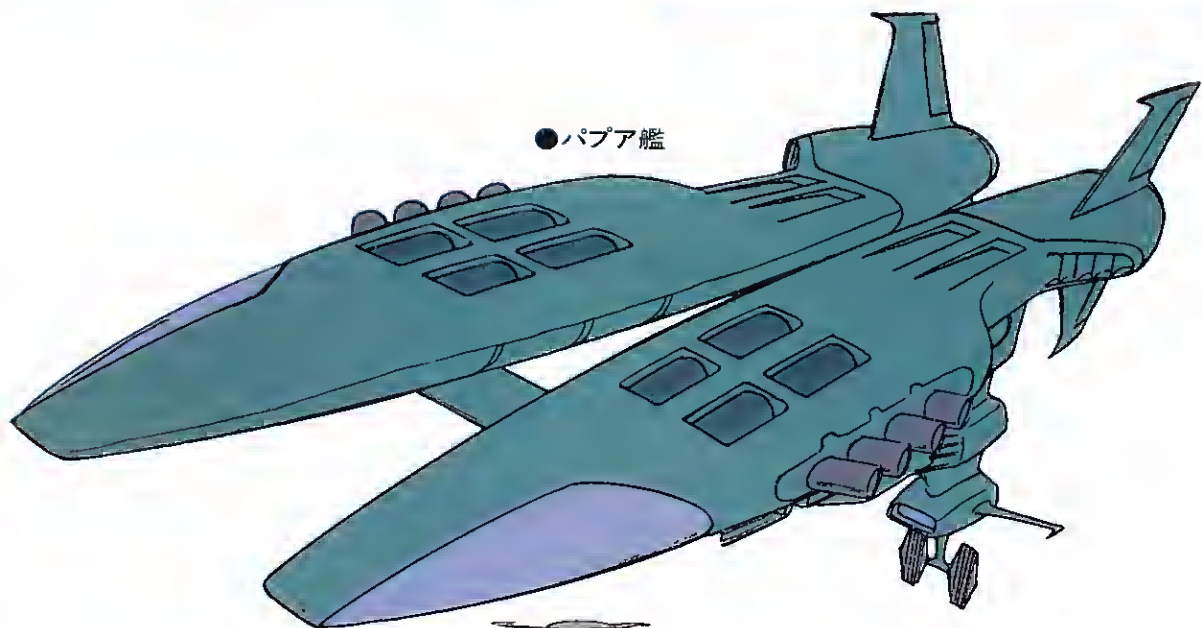
●モビルスーツ・グフ



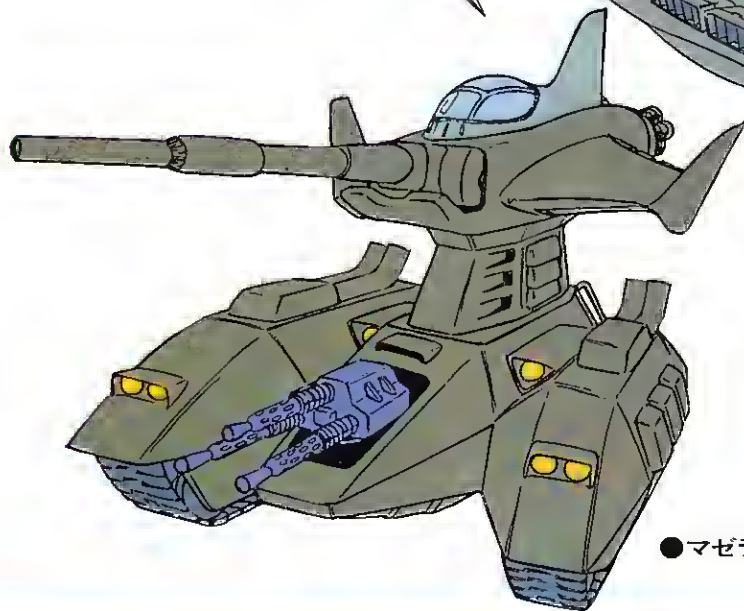
●モビルスーツ・ザク

CHARACTER SHEET

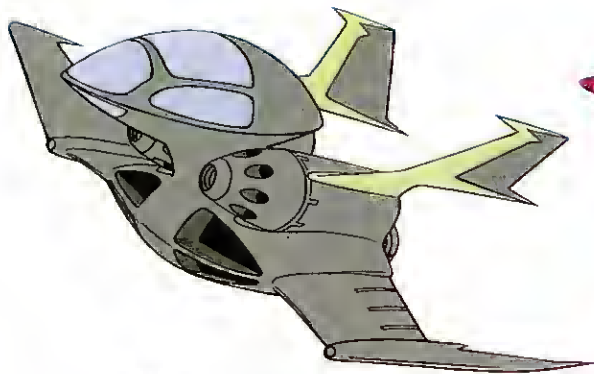
● パプア艦



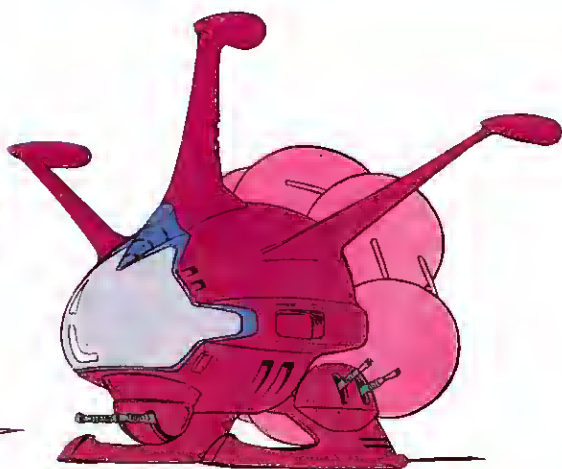
● 宇宙巡洋艦ムサイ



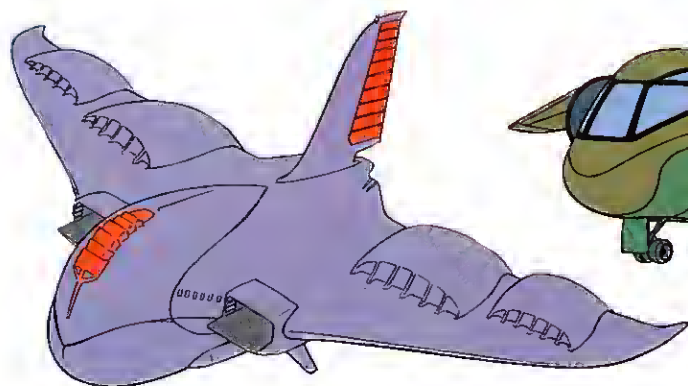
● マゼラ・アタック



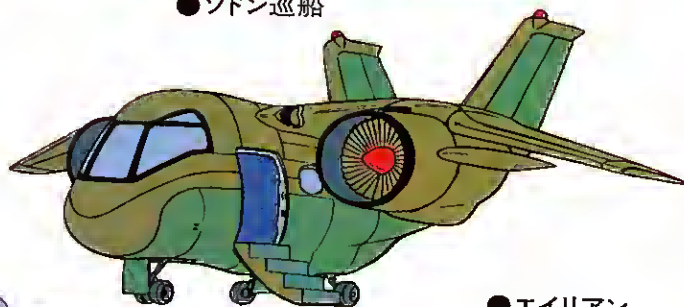
●戦闘機／ドップ



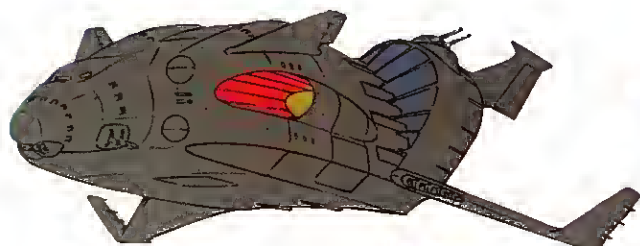
●ソドン巡船



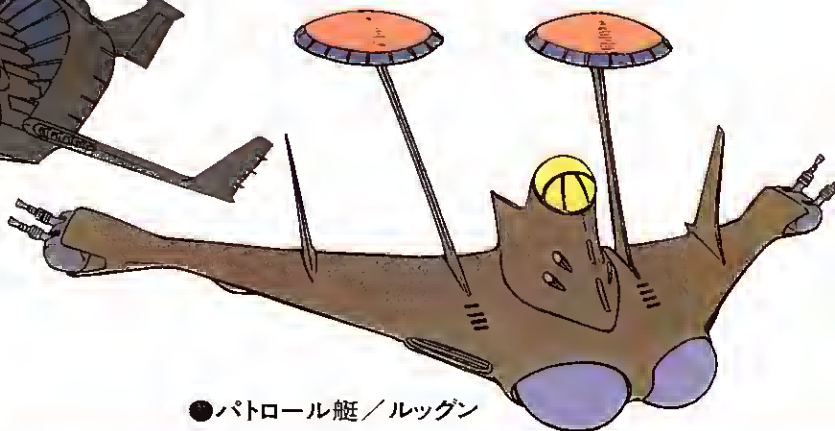
●ガウ攻撃空母



●エイリアン



●ザンジバル



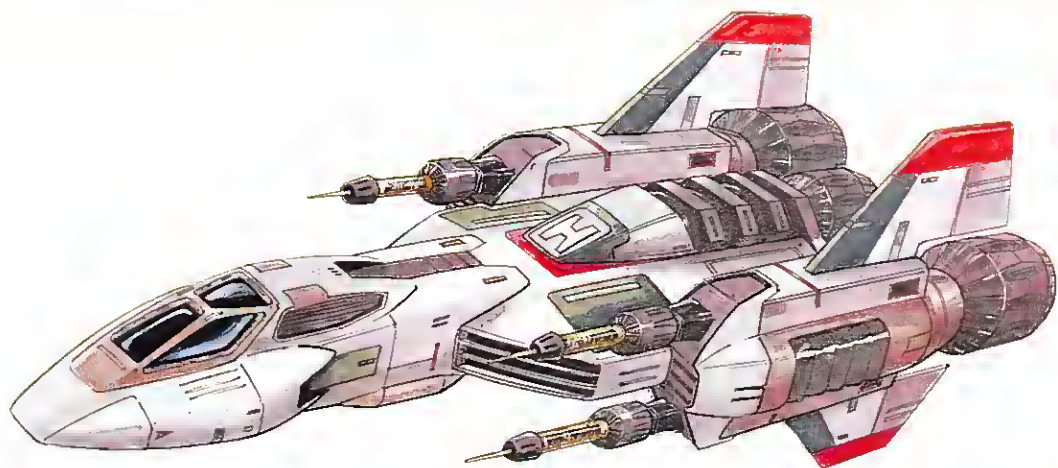
●パトロール艇／ルグゲン

ORIGINAL DESIGN

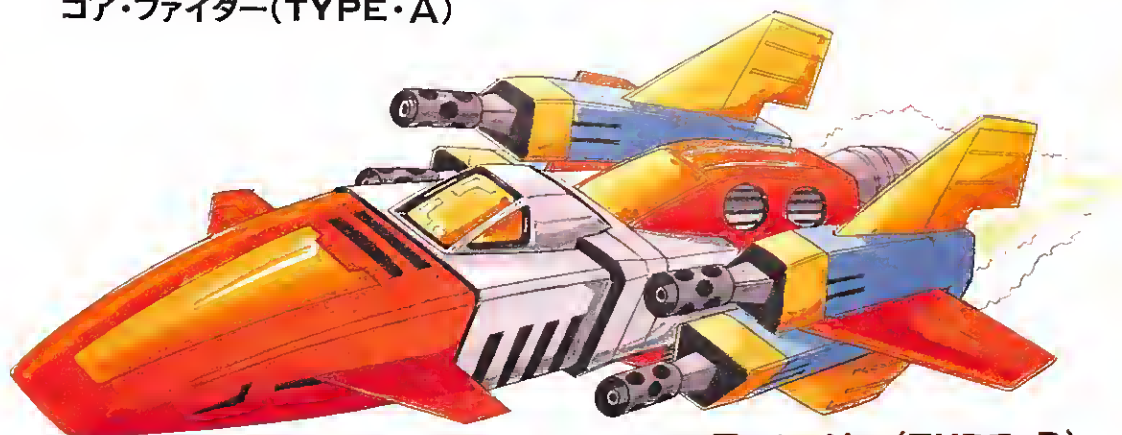
MECHANIC DESIGN

●大河原邦男

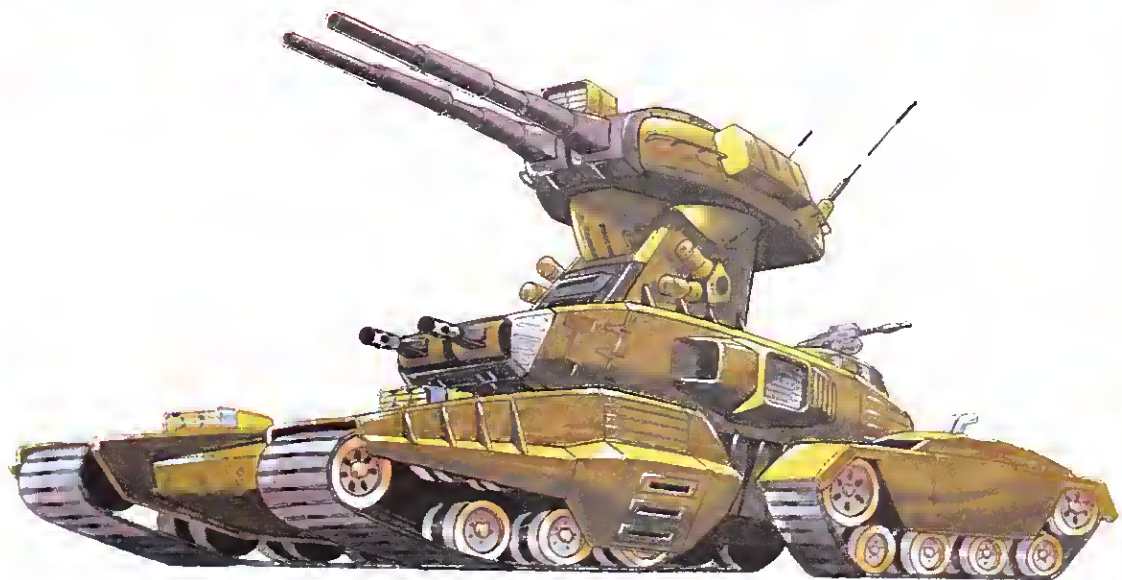




コア・ファイター(TYPE・A)

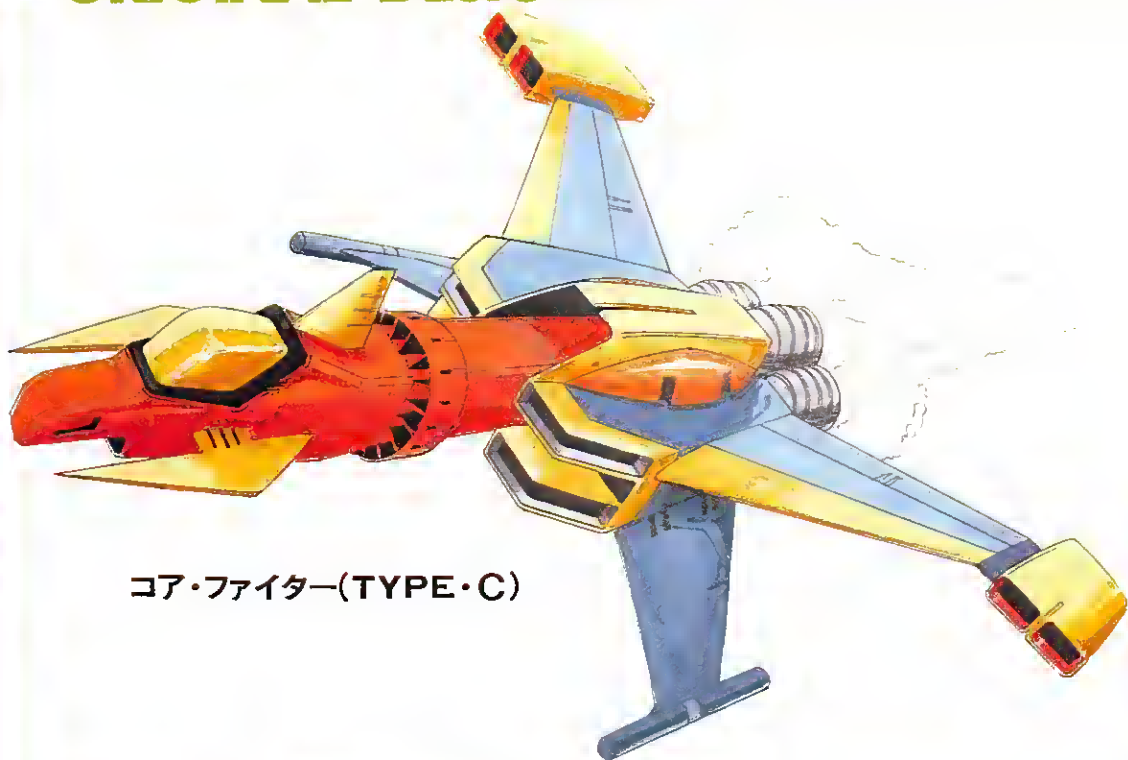


コア・ファイター(TYPE・B)

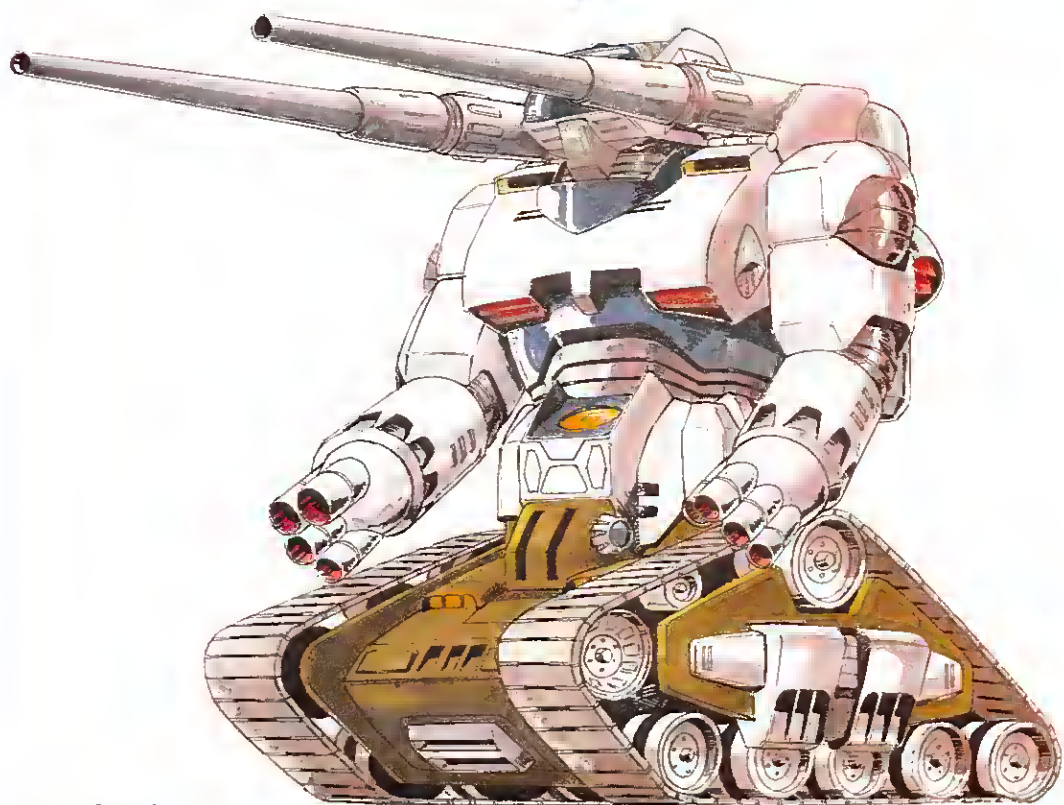


マゼラ・アタック

ORIGINAL DESIGN



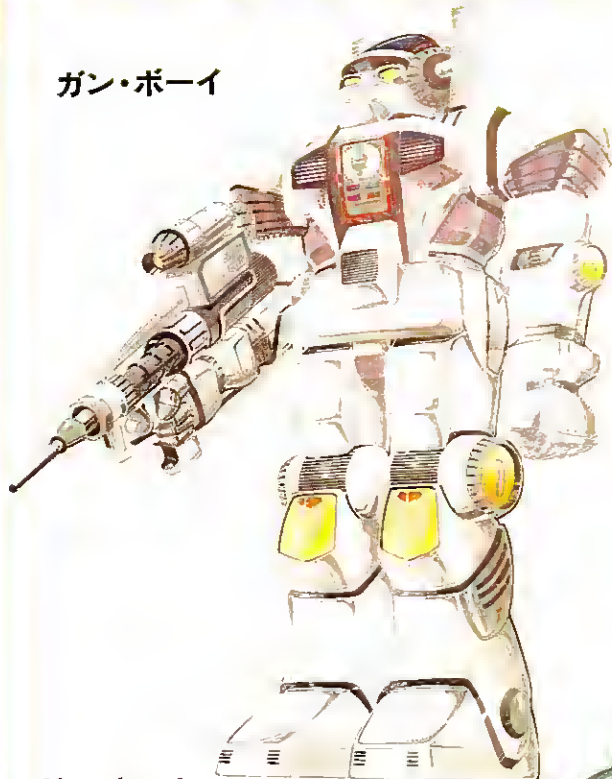
コア・ファイター(TYPE・C)



ガン・タンク

ORIGINAL DESIGN

ガン・ボーイ



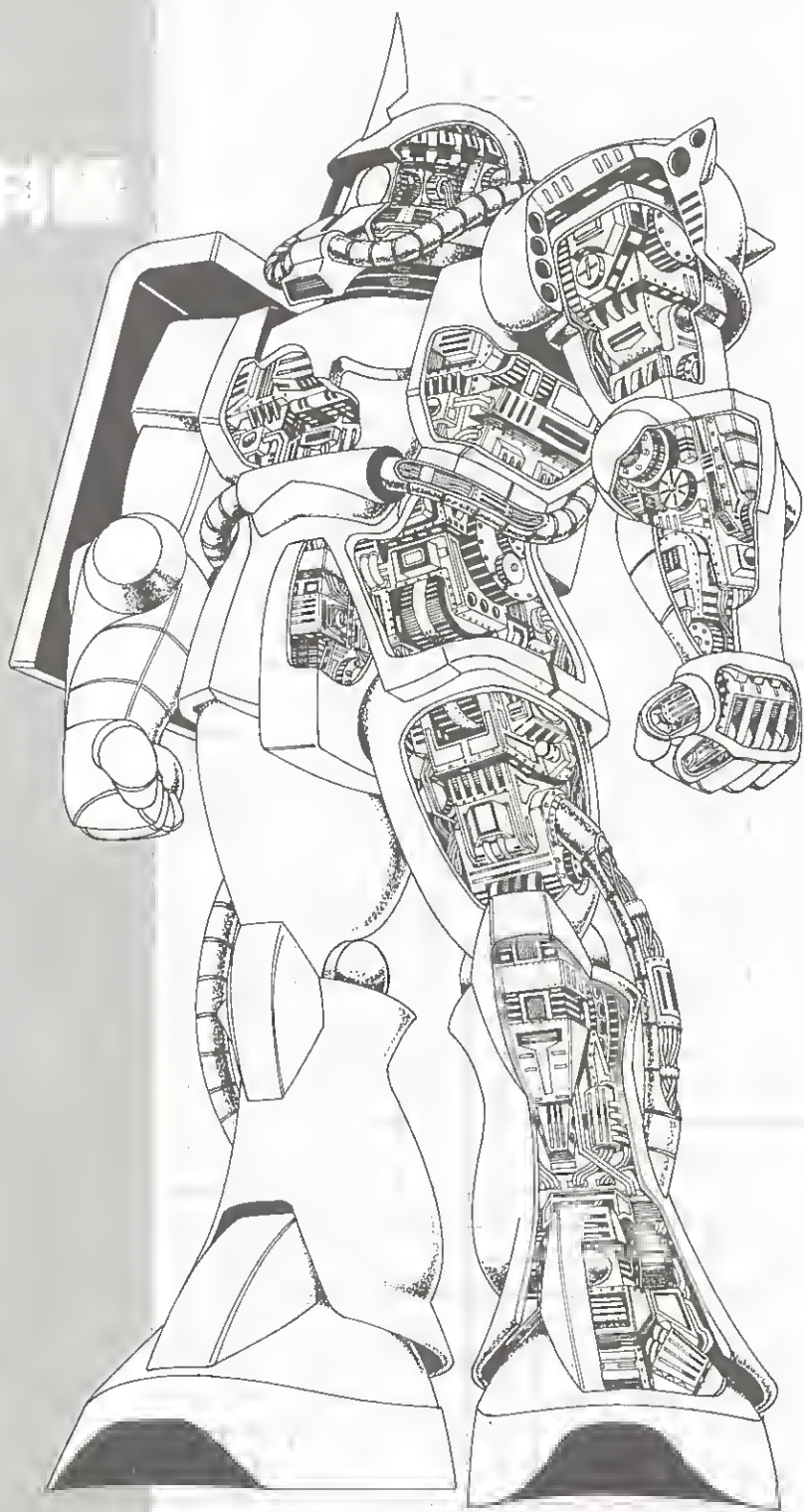
ガンダム組立図

ガン・キャンノン

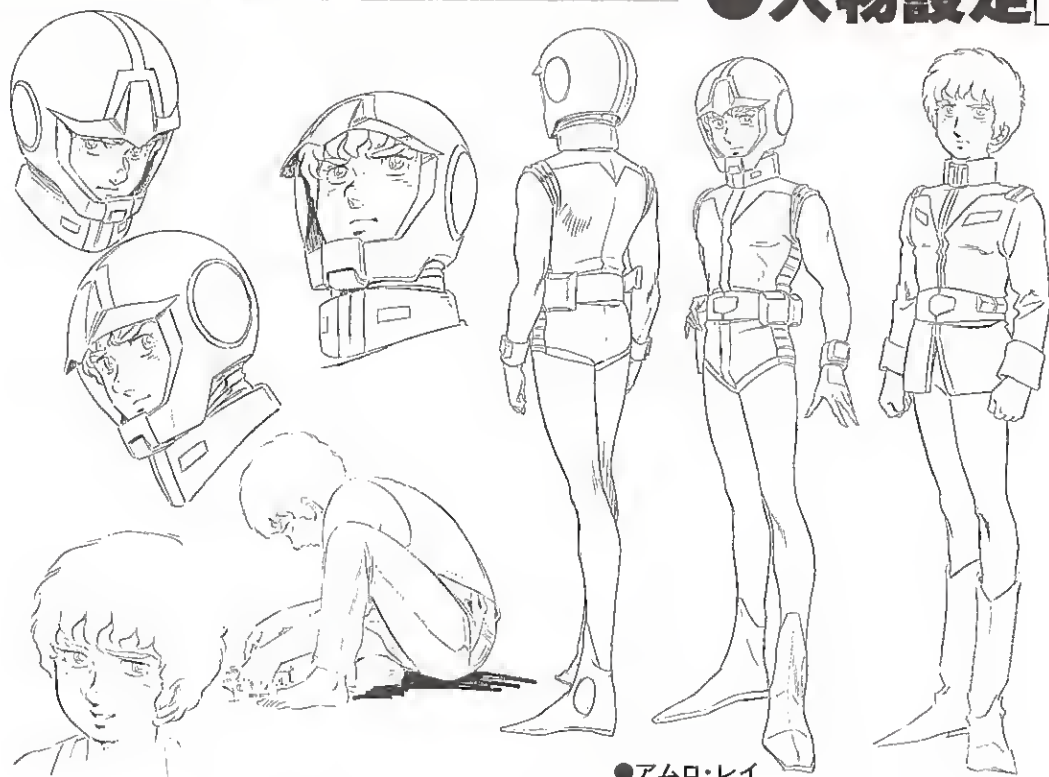


モビルスーツ・グフ

設定・資料編

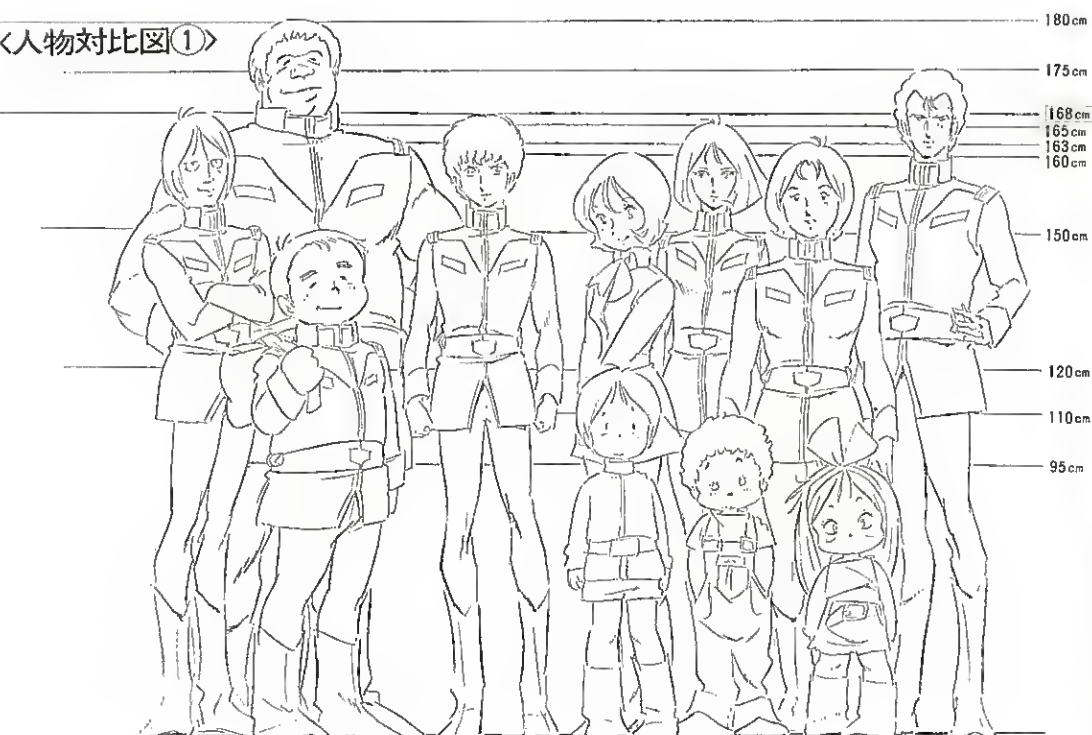


●人物設定1



●アムロ・レイ

＜人物対比図①＞



リュウ・ホセイ 主人公 フラウ・ボウ セイラ・マス ミライ・ヤシマ ブライト・ノア
カイ・シデン ハヤト・コバヤシ アムロ・レイ カツ レツ キツカ



●リュウ・ホセイ

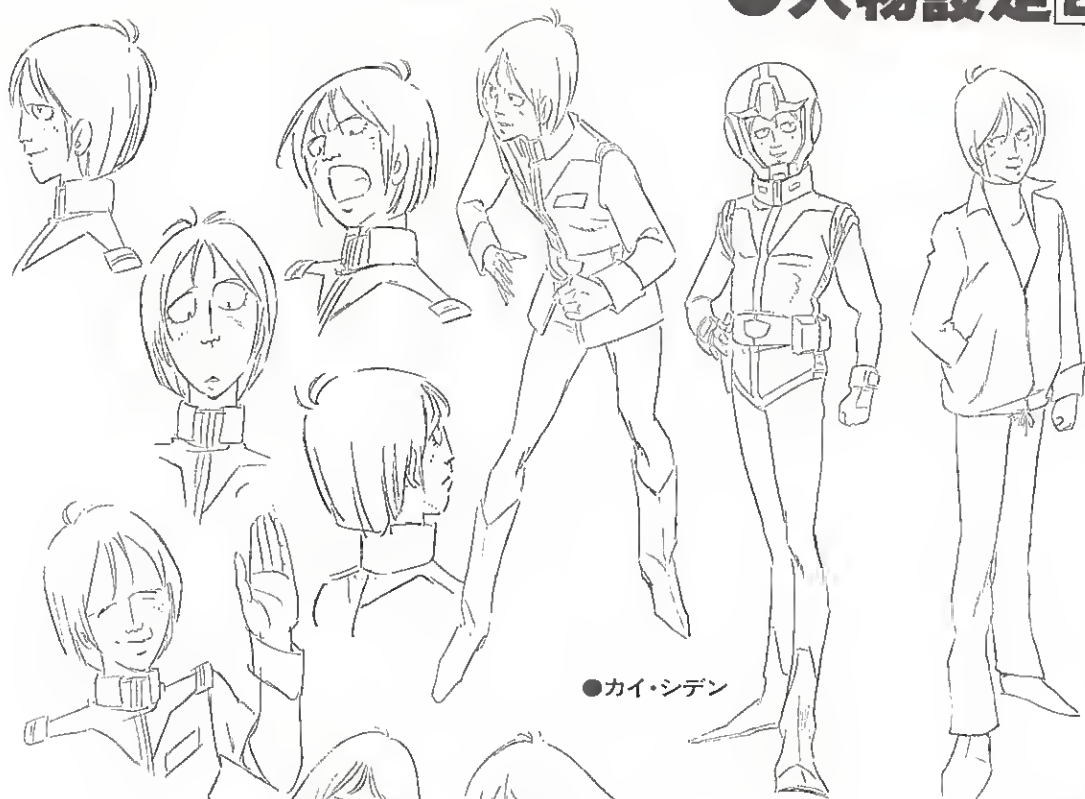


●ブライト・ノア

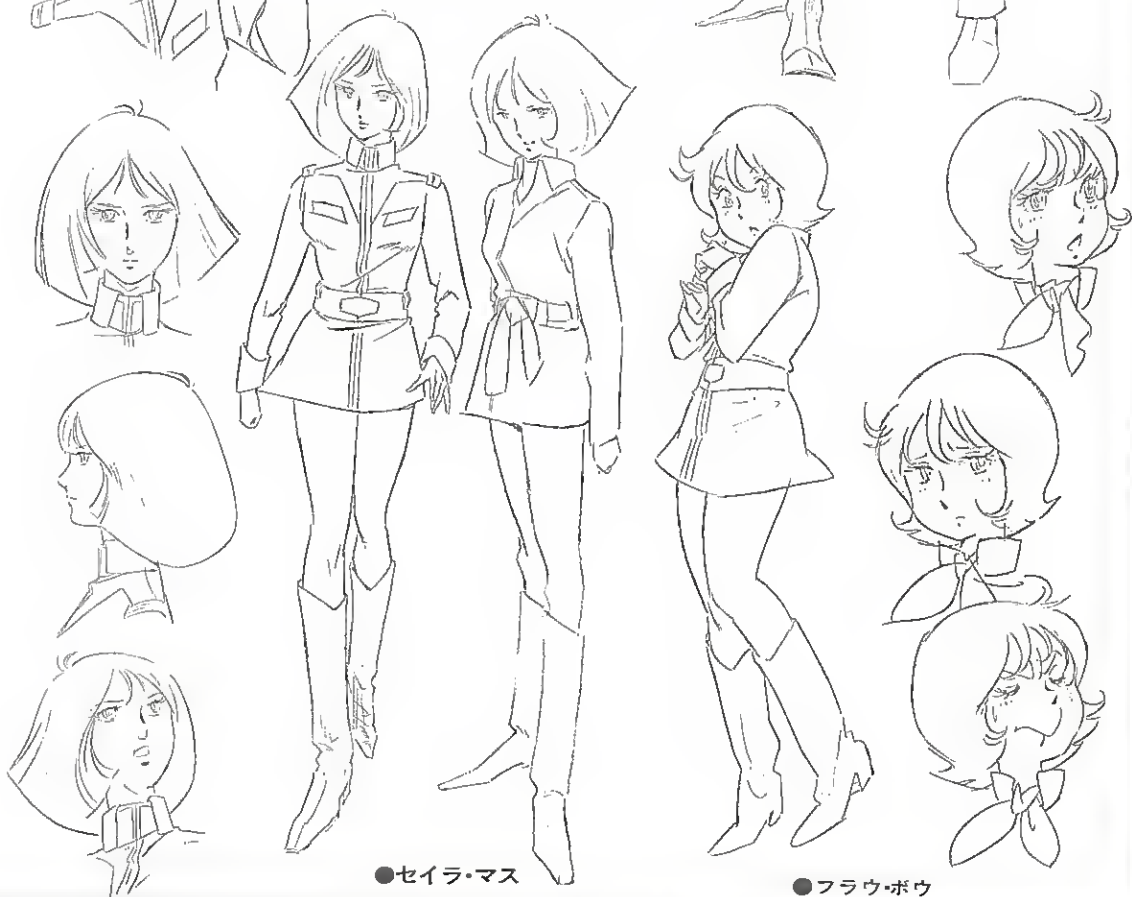


●ハヤト・コバヤシ

●人物設定2



●カイ・シデン



●セイラ・マス

●フラウ・ボウ

●キッカ・キタモト

●ミライ・ヤシマ



●カツ・ハウイン



●レッツ・コ・ファン



●ワッケインの副官



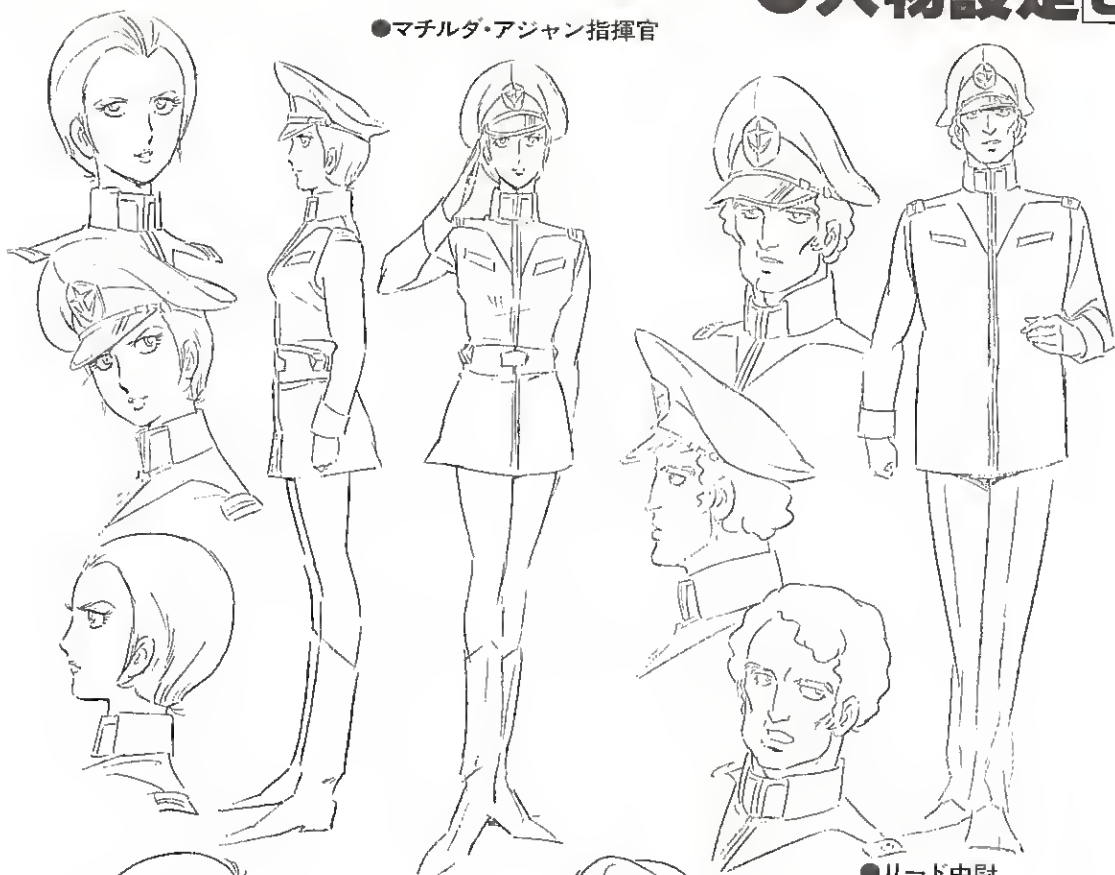
●ワッケイン少佐



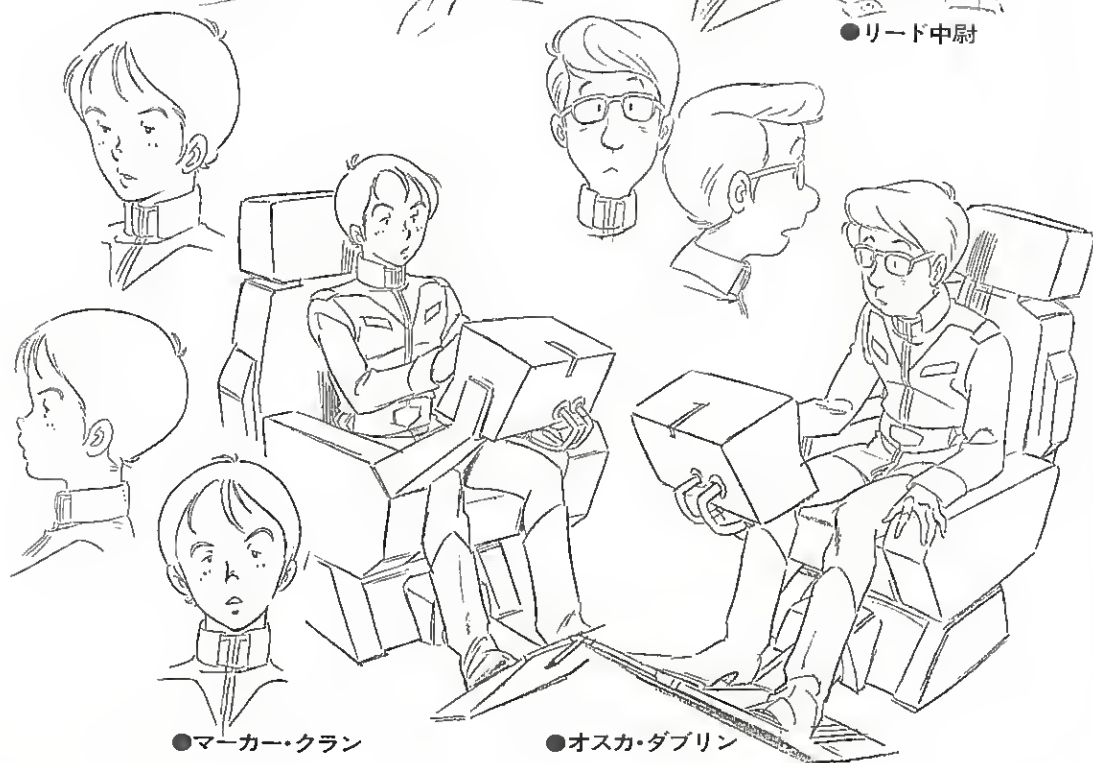
●パオロ・カシアス艦長

●人物設定3

●マチルダ・アジャン指揮官

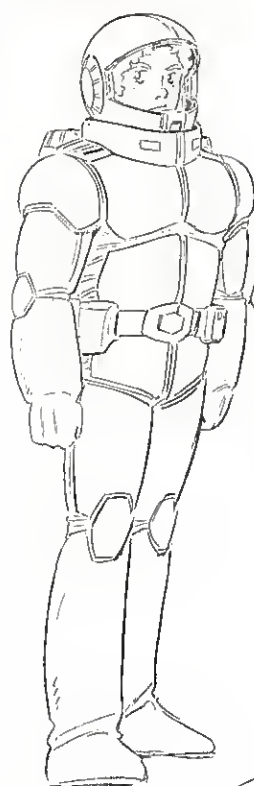


●リード中尉



●マーカークラン

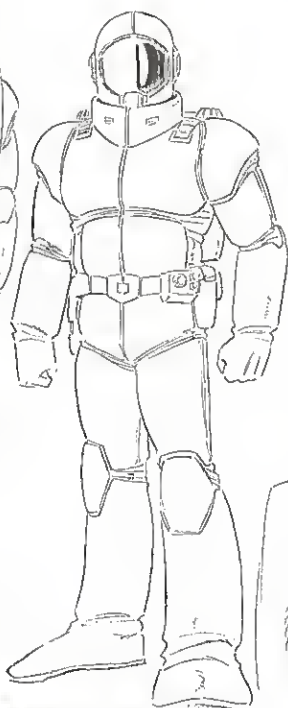
●オスカ・ダブリン



●ジョブ・ジョン



●オムル



●連邦軍・重装備宇宙服(旧型)

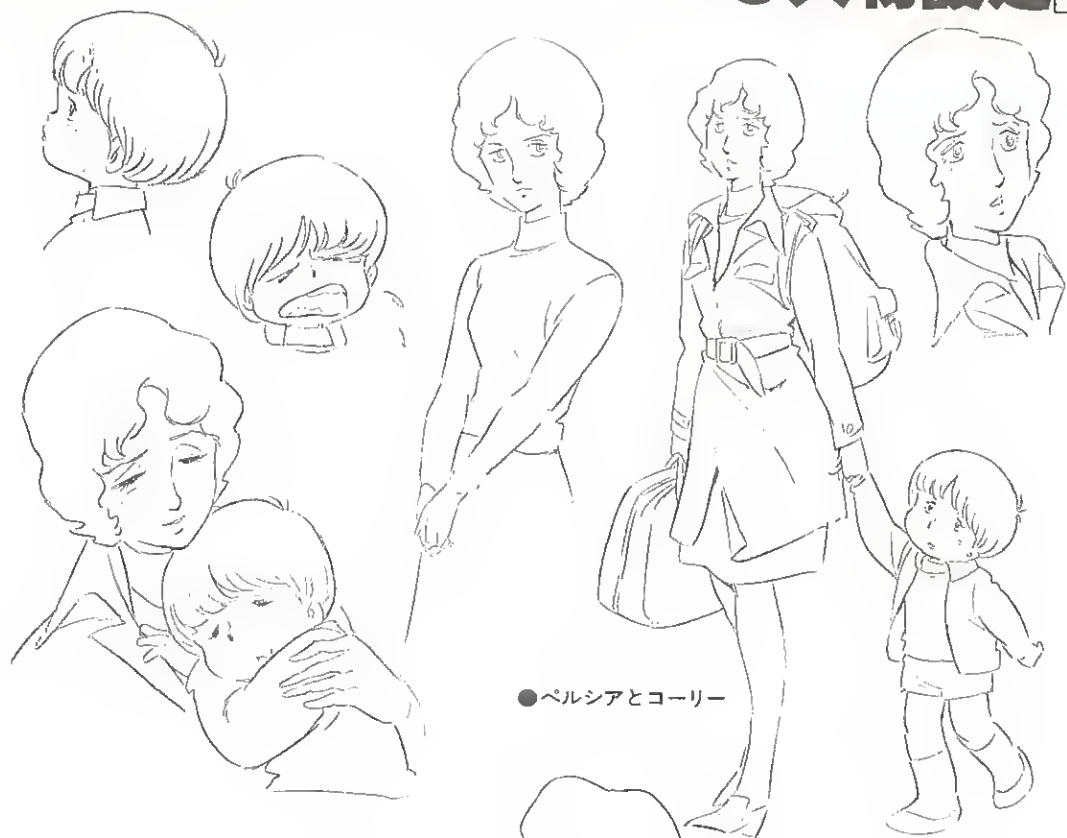


●軍人(A)



●カミラ

●人物設定4



●ペルシアとコーリー



●タムラ(コック長)



●老人



●子供と老婆



●もう一組の母と子



●スミスとペロ

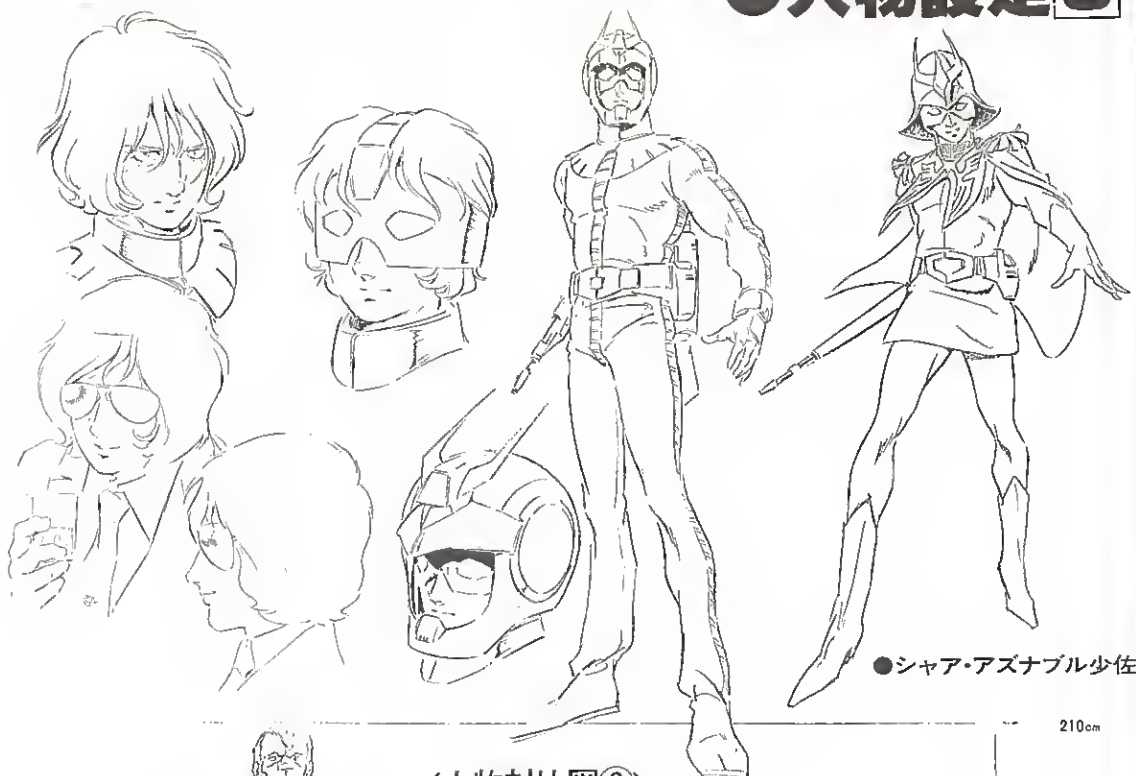


●老人達



●老人A

●人物設定5



●シャア・アズナブル少佐

210cm

〈人物対比図②〉

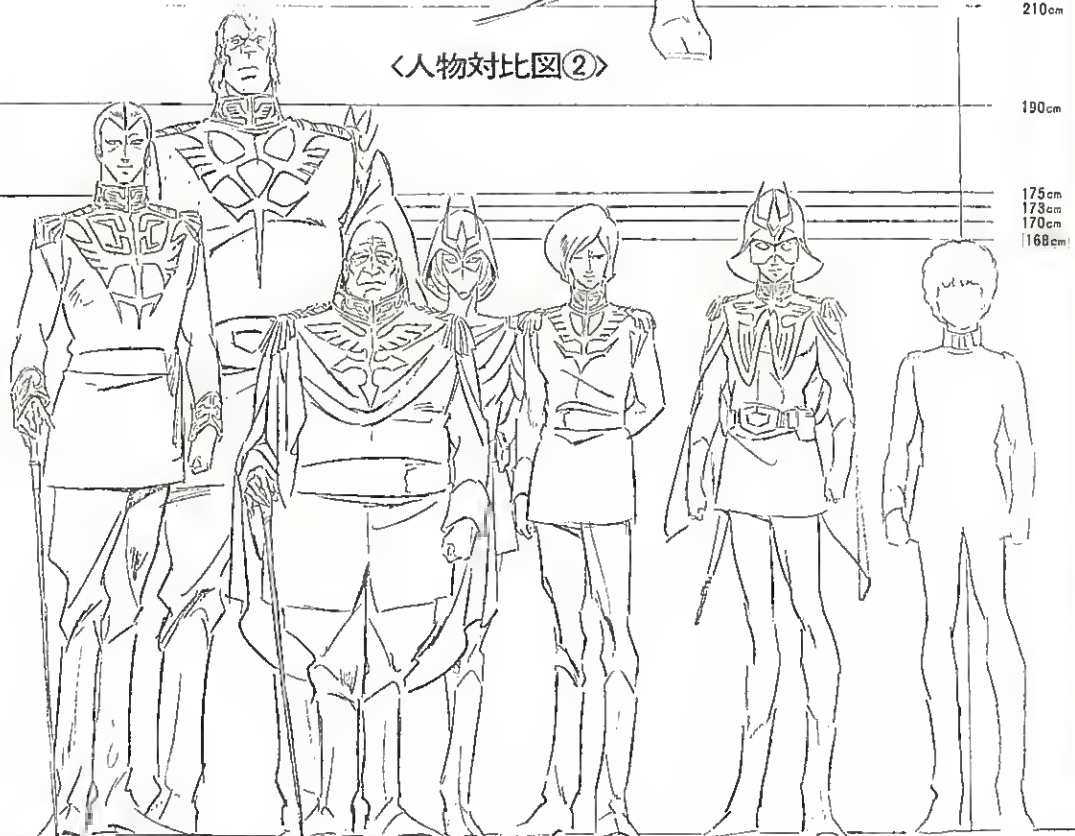
190cm

175cm

173cm

170cm

168cm



ギレン・ザビ大将

ドズル・ザビ中将

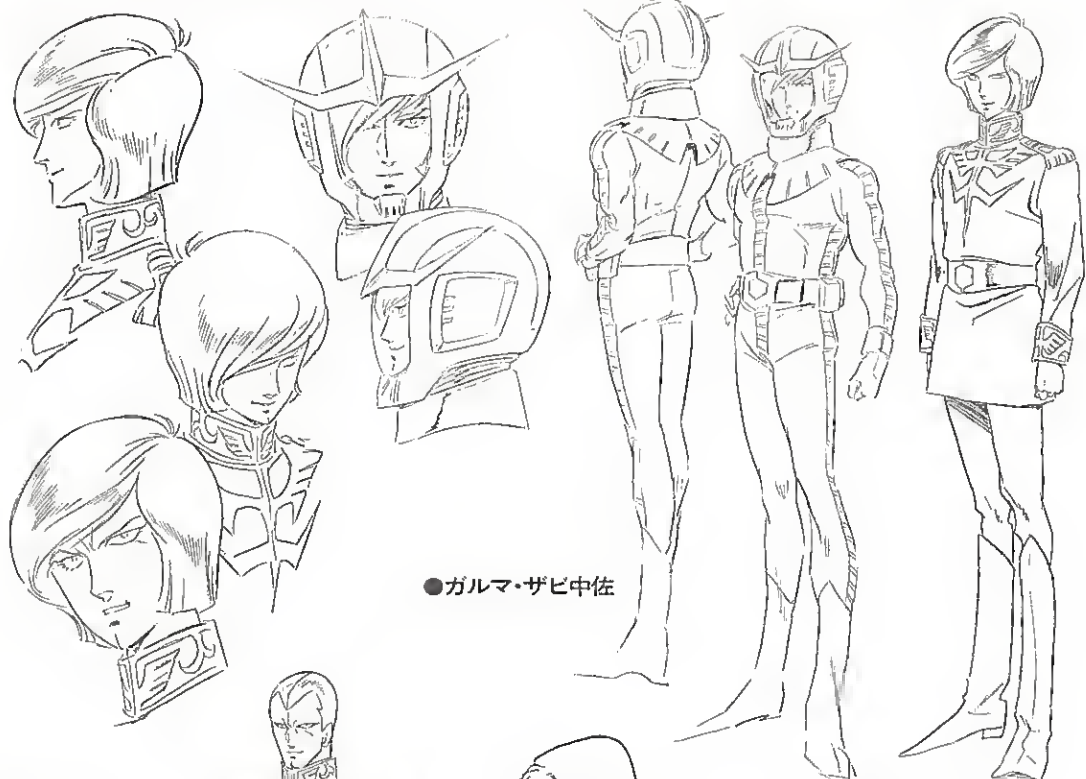
デキン・ザビ公王

キシリア・ザビ少将

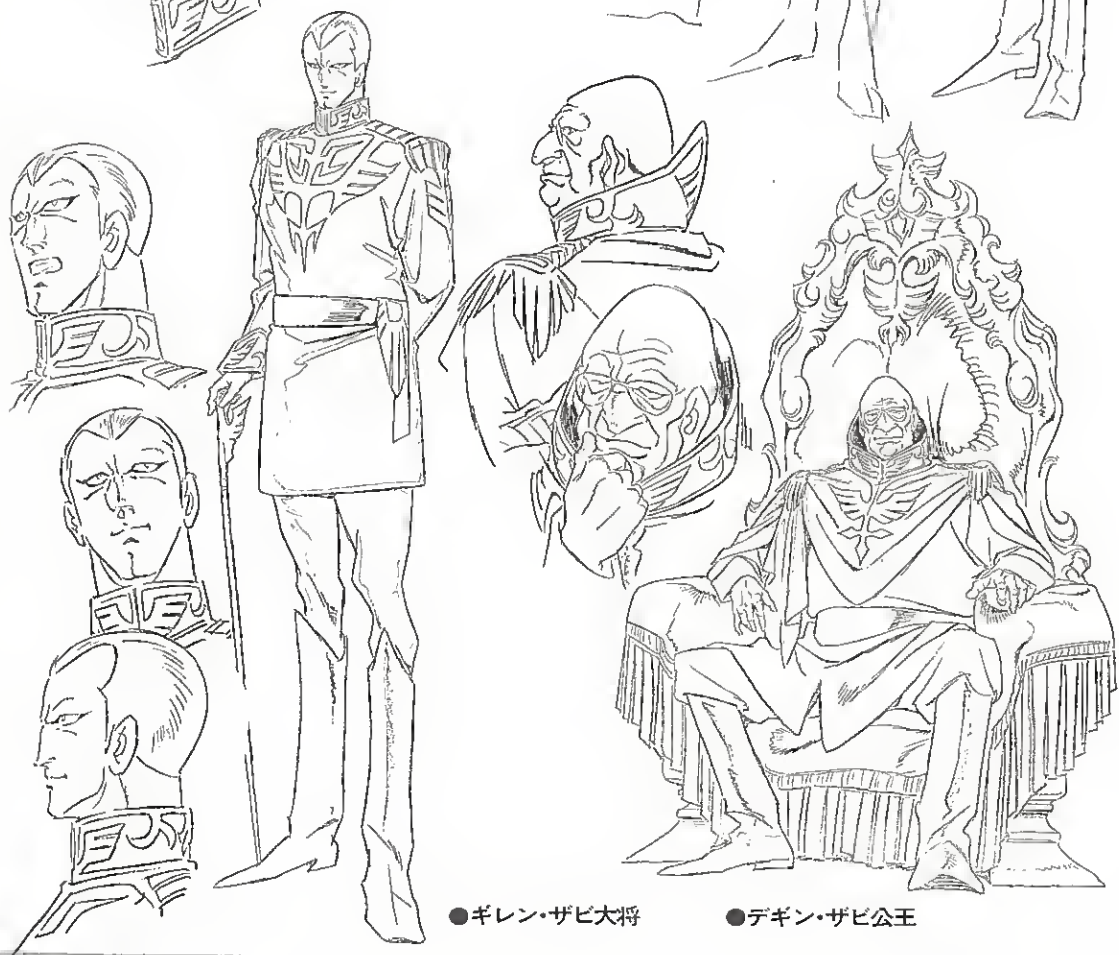
ガルマ・ザビ中佐

シャア大尉

主人公 アムロ・レイ



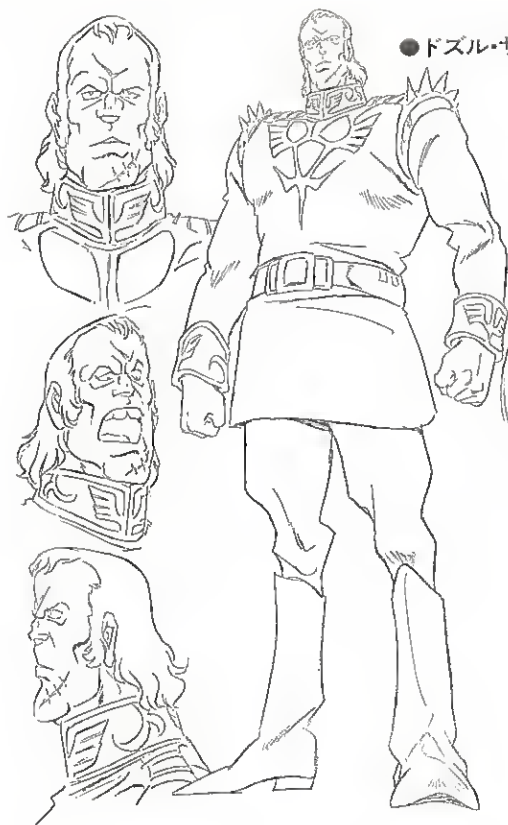
●ガルマ・ザビ中佐



●ギレン・ザビ大将

●デギン・ザビ公王

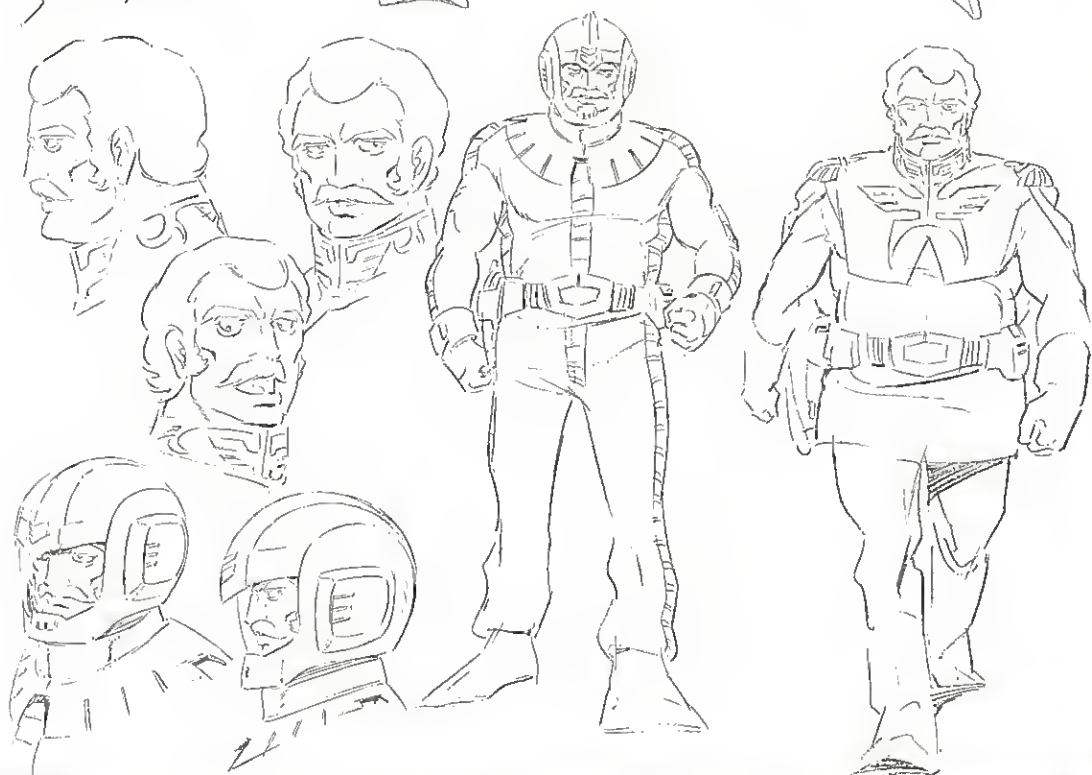
●ドズル・ザビ中将



●キシリア・ザビ少将

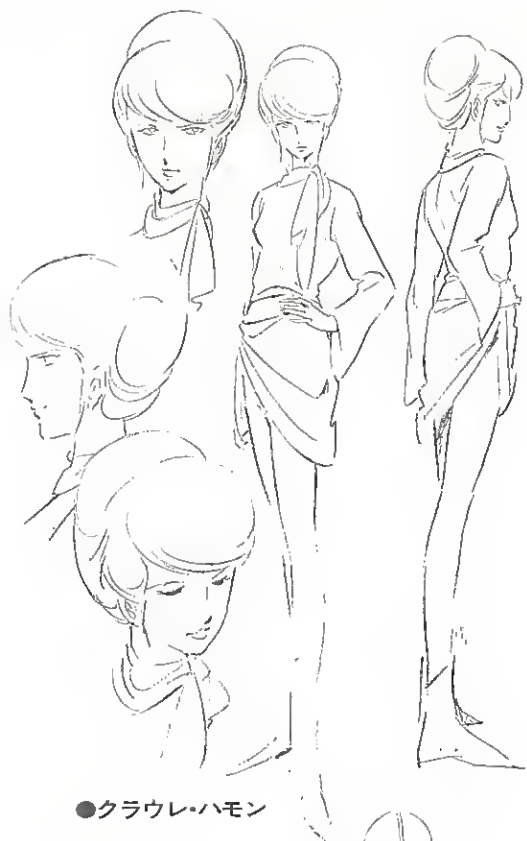


●ランバ・ラル大尉

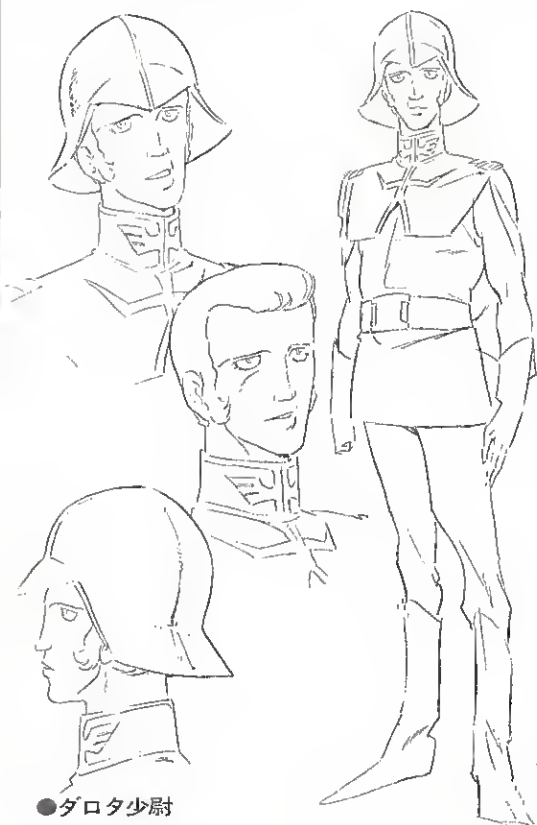




●ガデム艦長



●クラウレ・ハモン



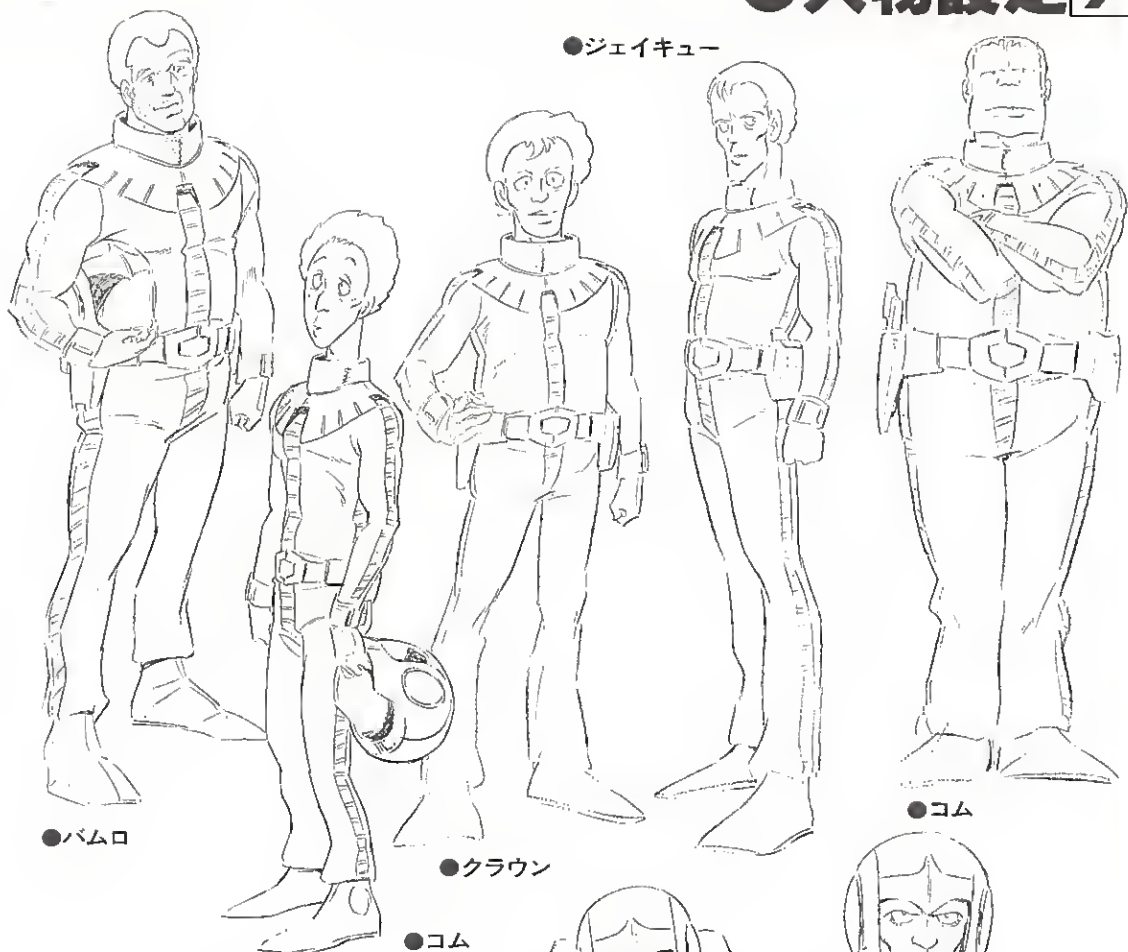
●ダロタ少尉



●クランプ副官

●人物設定7

●ジェイキュー



●バムロ

●クラウン

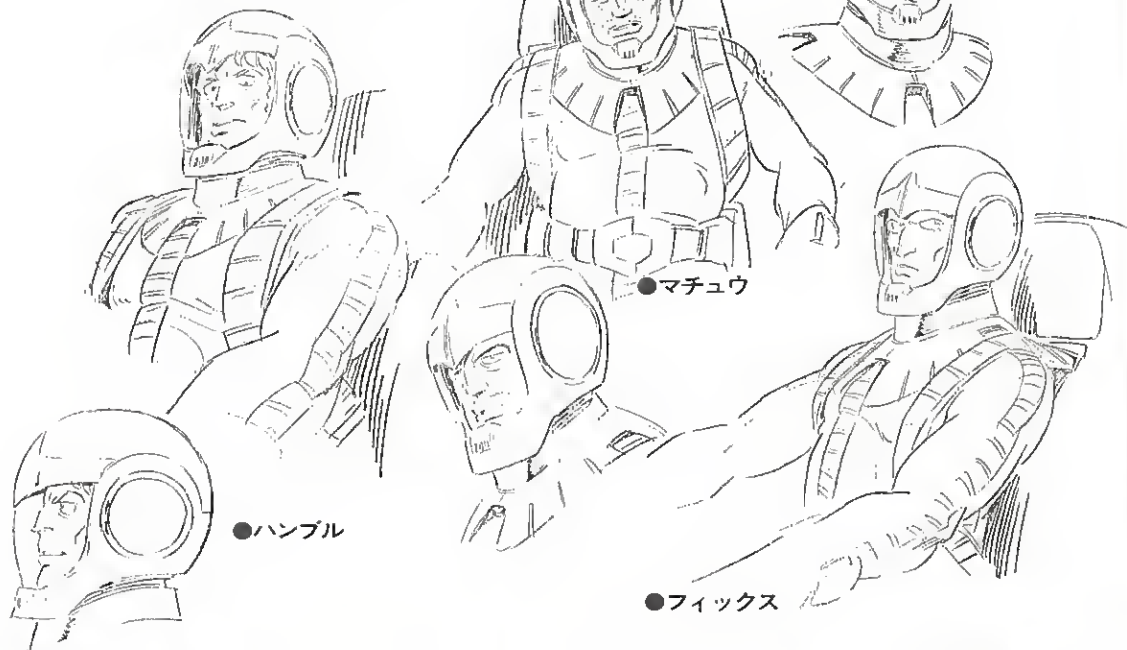
●コム

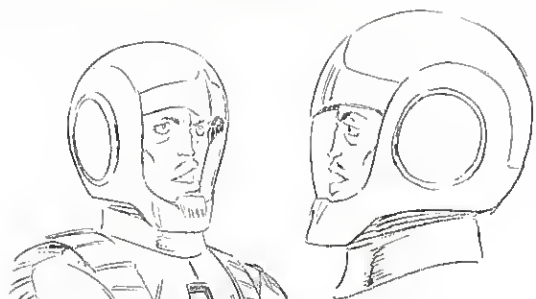
●コム

●マチュウ

●ハンブル

●フィックス





●バインソン



●ゲビル



●ビービ



●スレンダー



●兵士



●将軍たち

●ザビ公王の側近

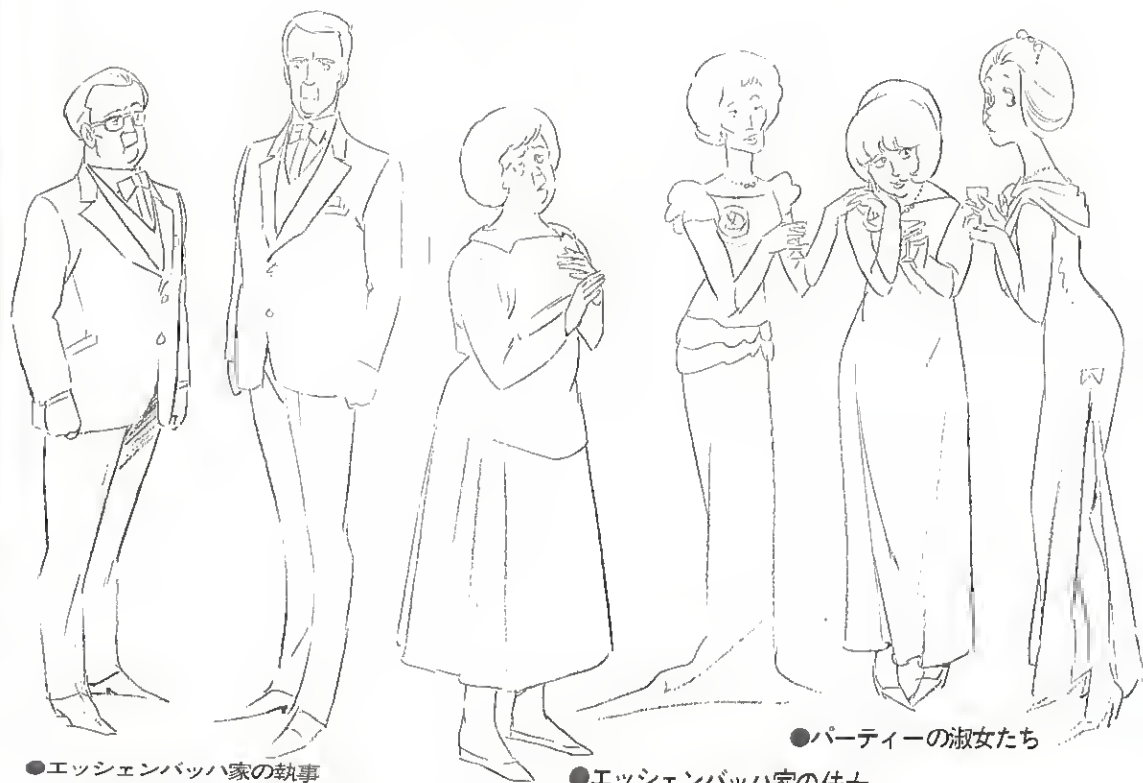


●エッセンバツハ



●イセリナ・エッセンバツハ

●パーティーの客



●エッセンバッハ家の執事

●パーティーの淑女たち

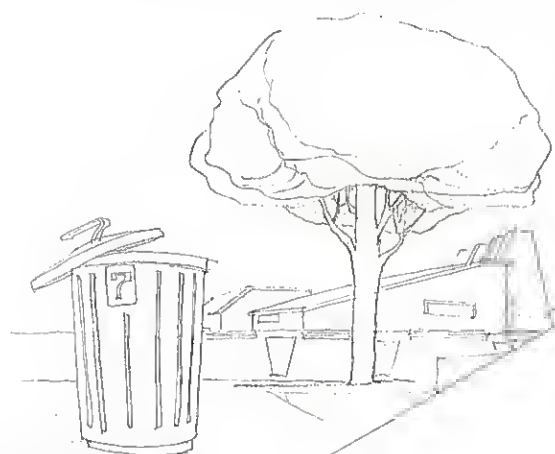
●エッセンバッハ家の侍女

●美術設定1

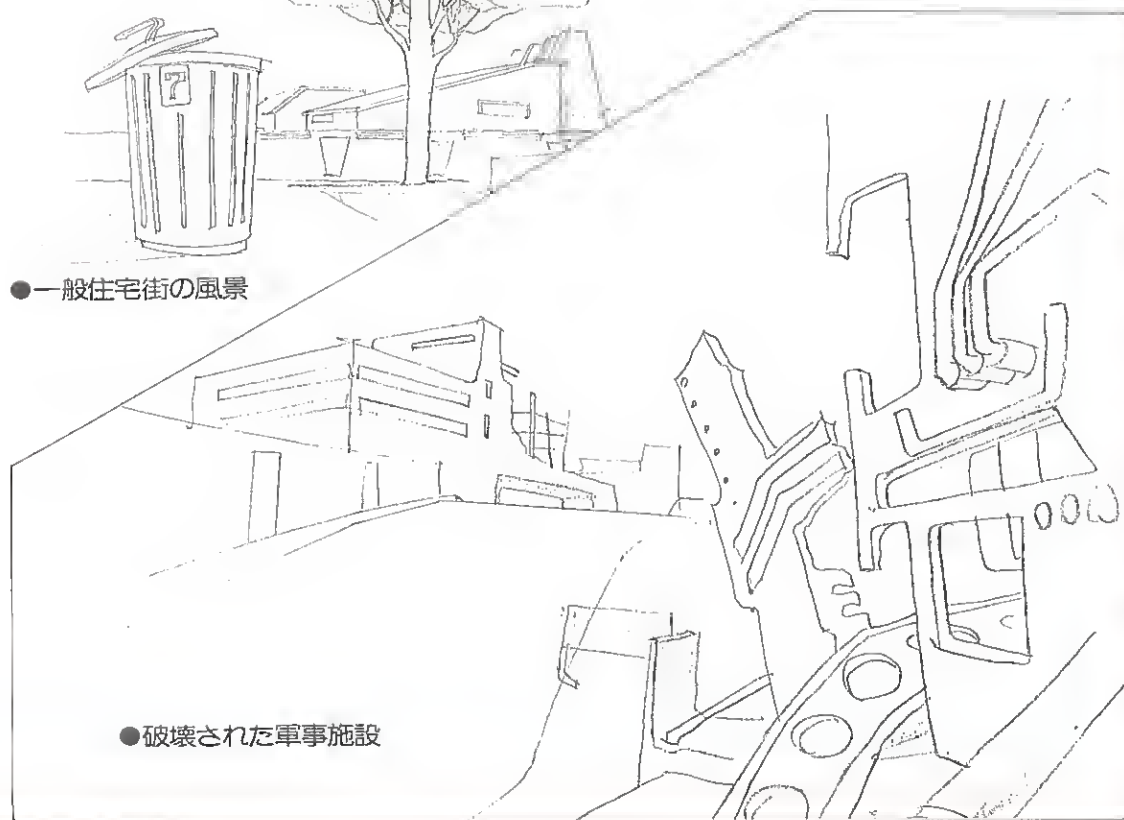
スペースコロニー(サイド7)



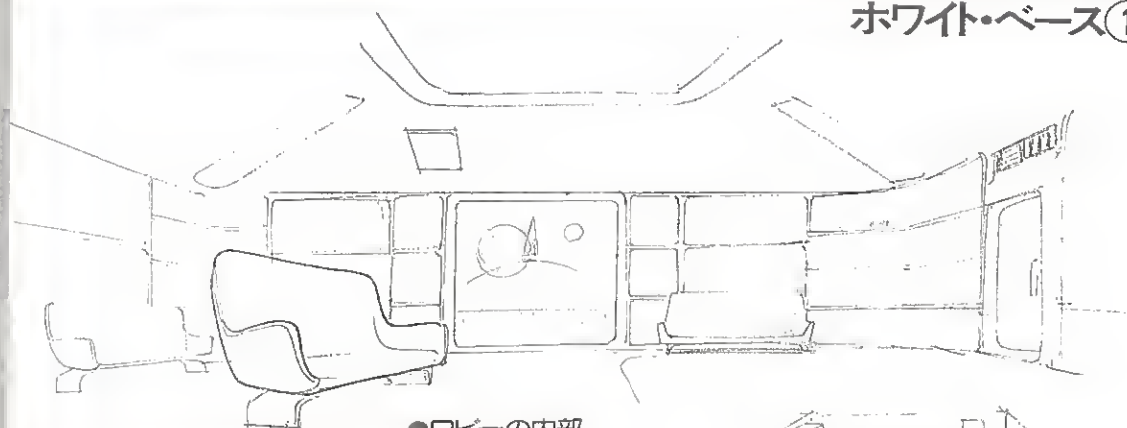
●一般住宅街(フラウの家)



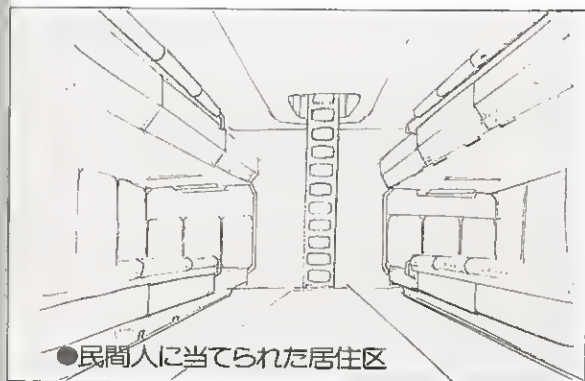
●一般住宅街の風景



●破壊された軍事施設



●ロビーの内部



●民間人に当てられた居住区



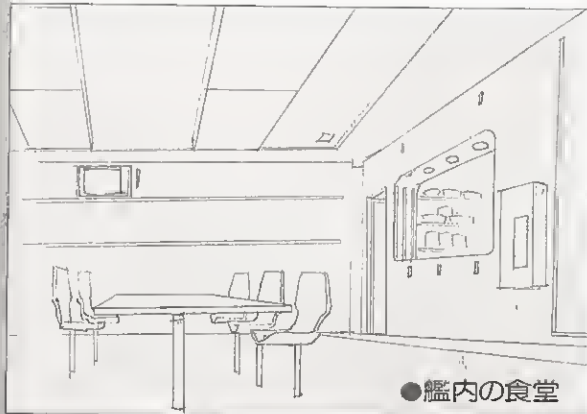
●重力ブロック内の病室



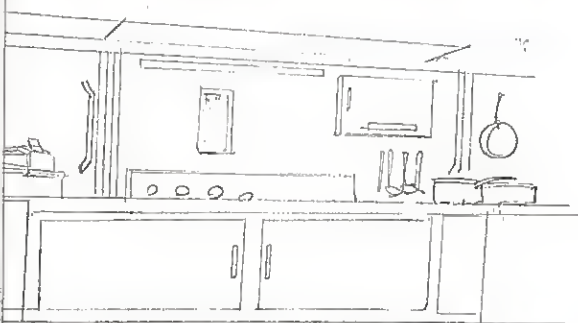
●民間人に当てられたキャビン



●アラムの部屋



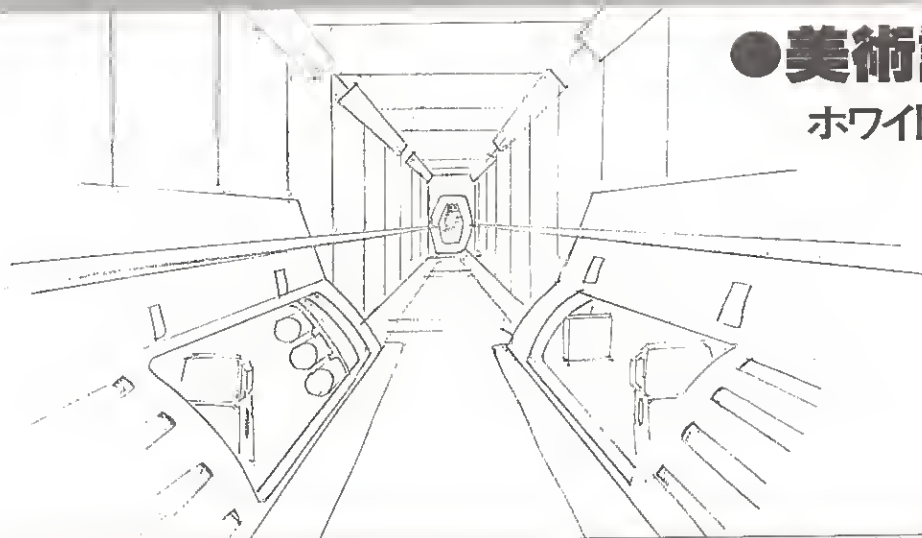
●艦内の食堂



●艦内の調理場

●美術設定2

ホワイト・ベース2



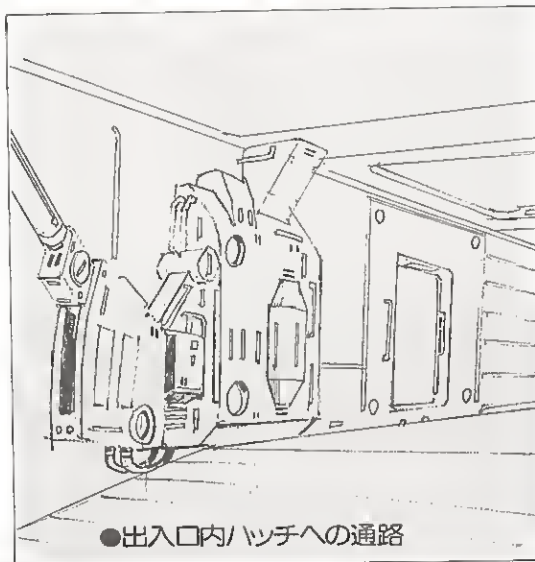
●無重力通路



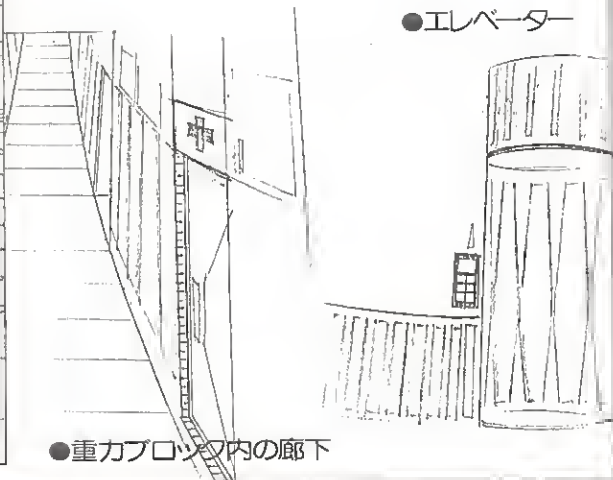
●重力ブロック内居住区の艦内通路



●重力ブロック内居住区の通路

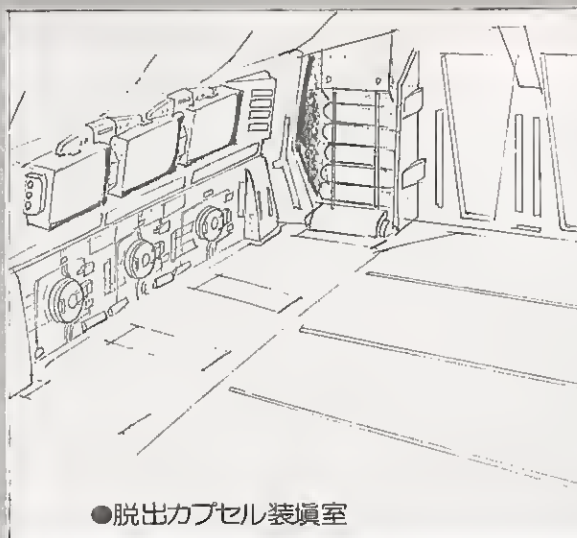


●出入口内/ハッチへの通路

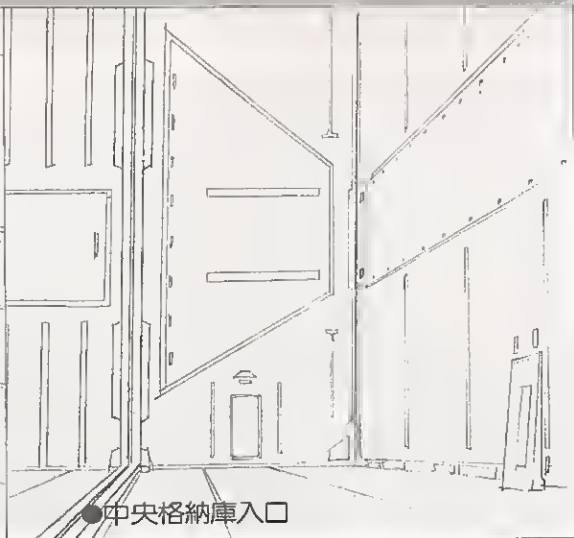


●エレベーター

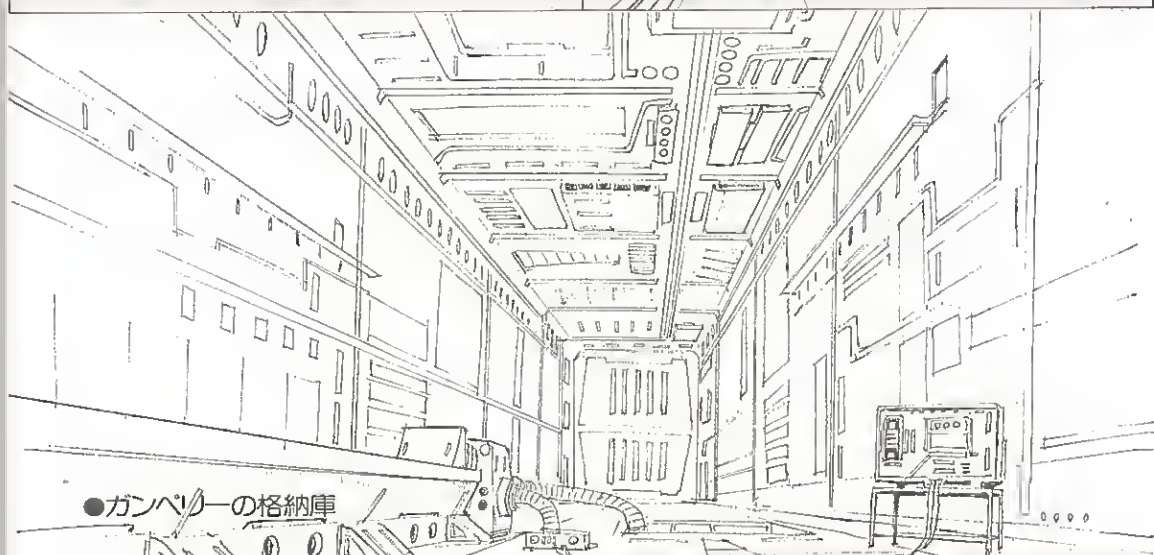
●重力ブロック内の廊下



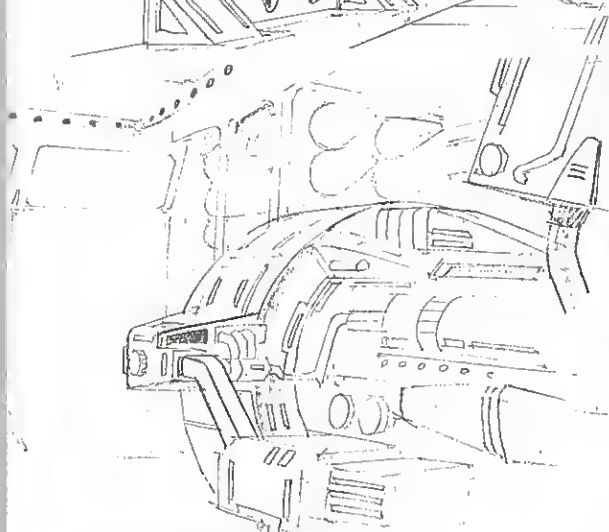
●脱出カプセル装填室



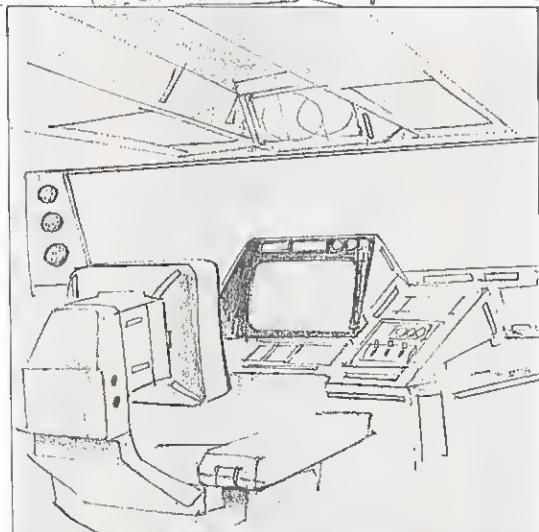
●中央格納庫入口



●ガンバリーの格納庫



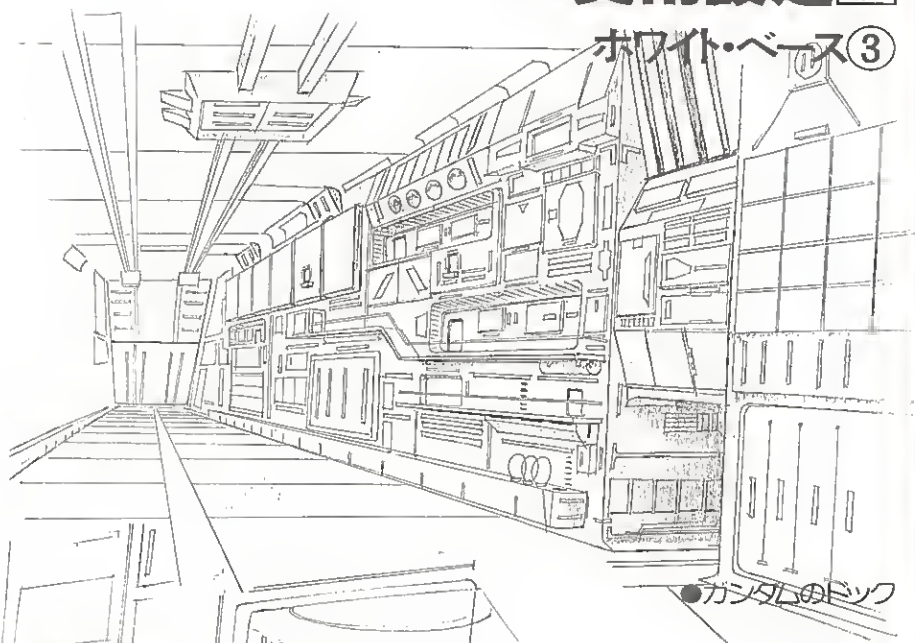
●後部ミサイル装填ブロック



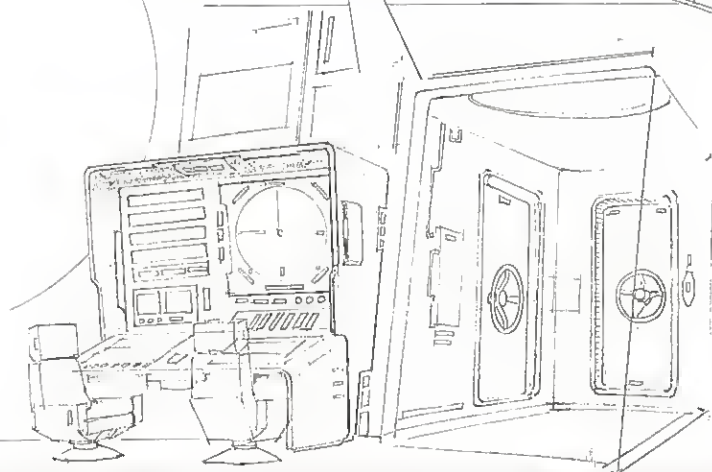
●後部発着艦のコントロール・ブロック

●美術設定③

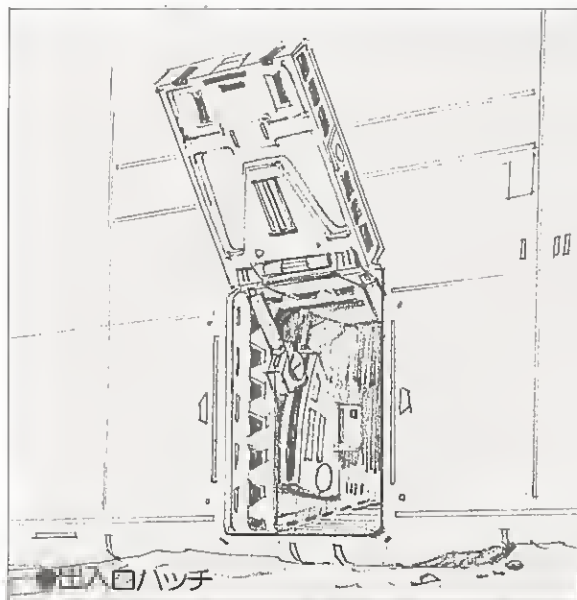
ホワイト・ベース③



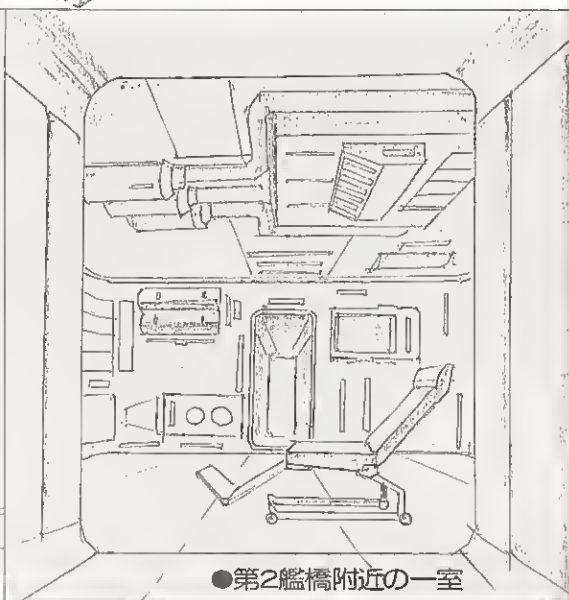
●ガンダムのモック



●艦橋内後部



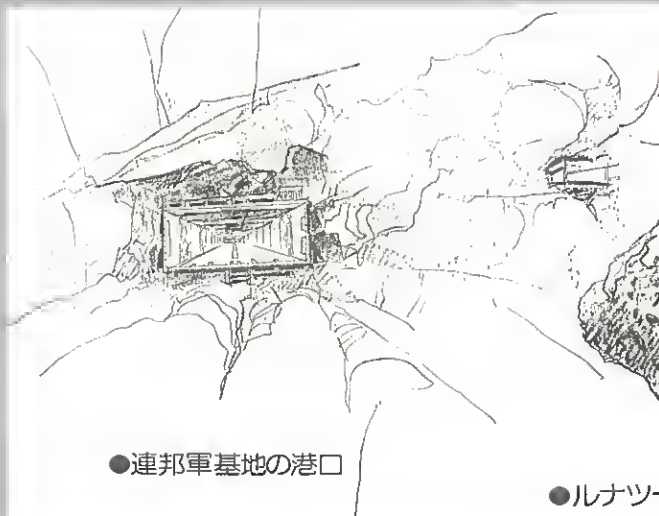
●出入口ハッチ



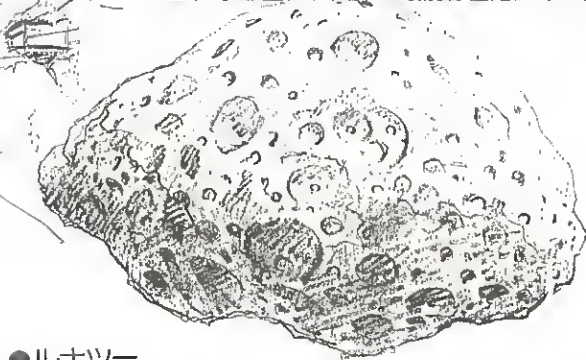
●第2艦橋附近の一室

連邦軍ルナツー基地①

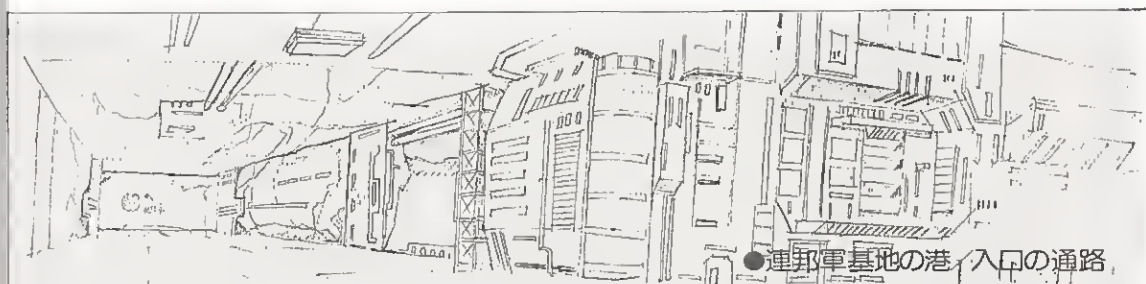
■ 鉱物資源と土を得るために月軌道の上に運んできた小惑星で、連邦の最前線基地がある。



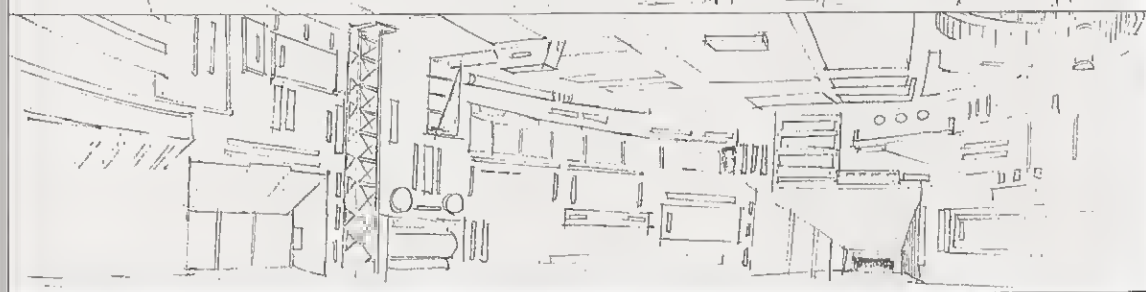
● 連邦軍基地の港口



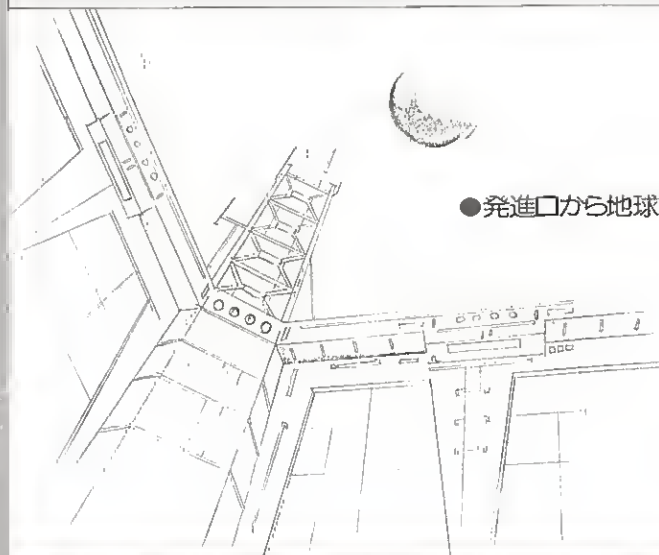
● ルナツー



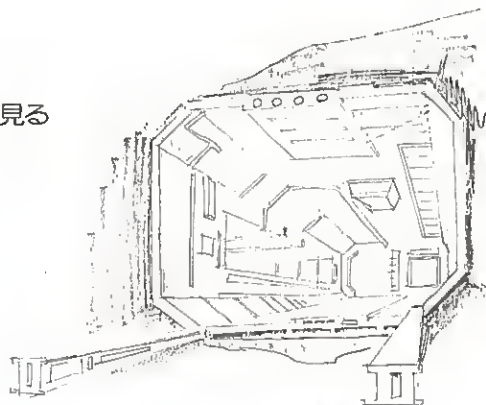
● 連邦軍基地の港、入口の通路



● 港のドック部分／基地内への通路



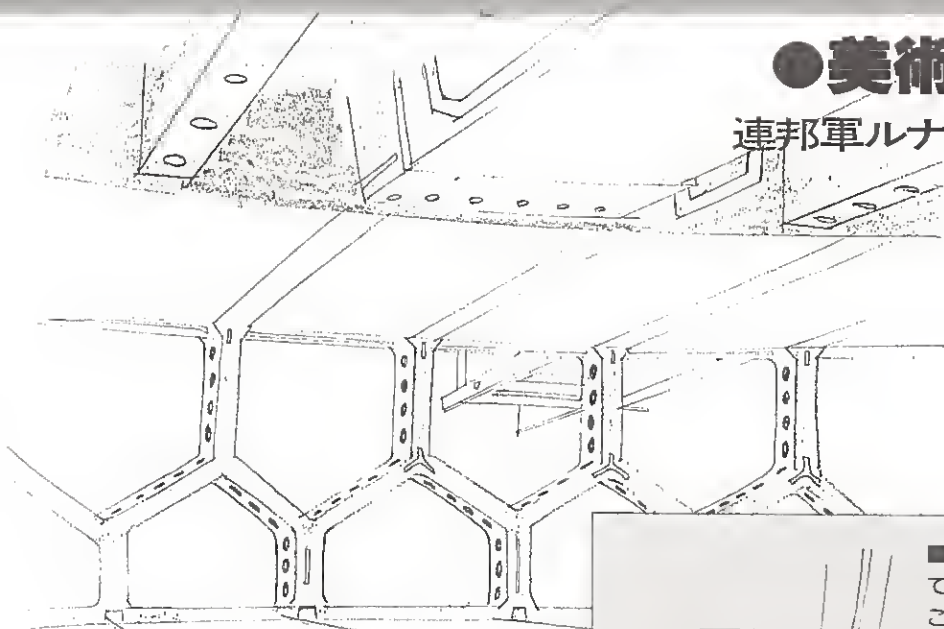
● 発進口から地球を見る



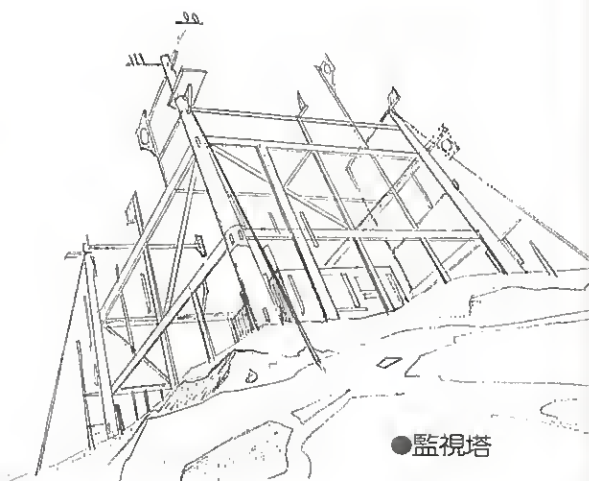
● 戦闘機発進口

●美術設定4

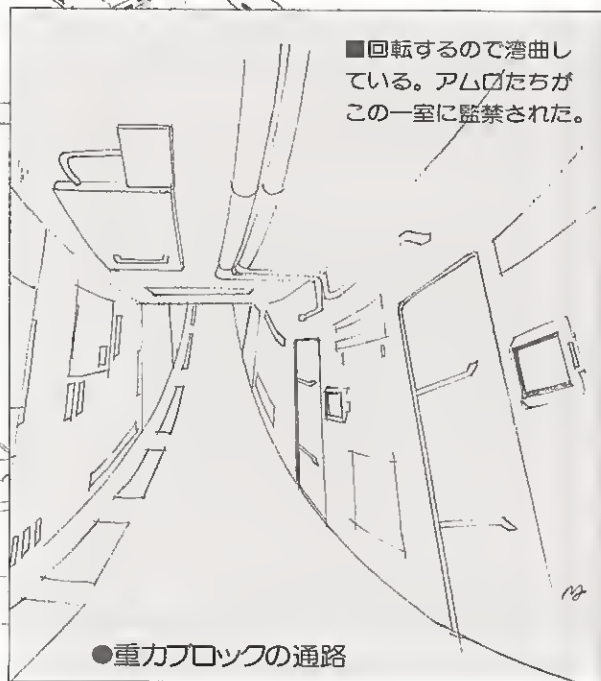
連邦軍ルナツー基地②



●港のみえる床下



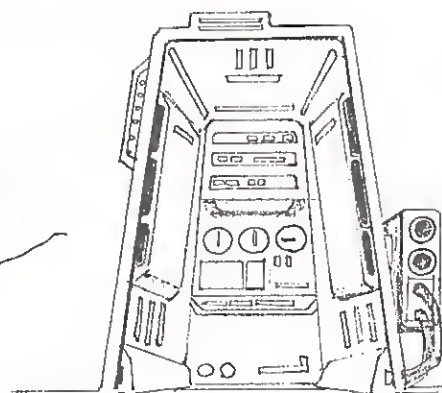
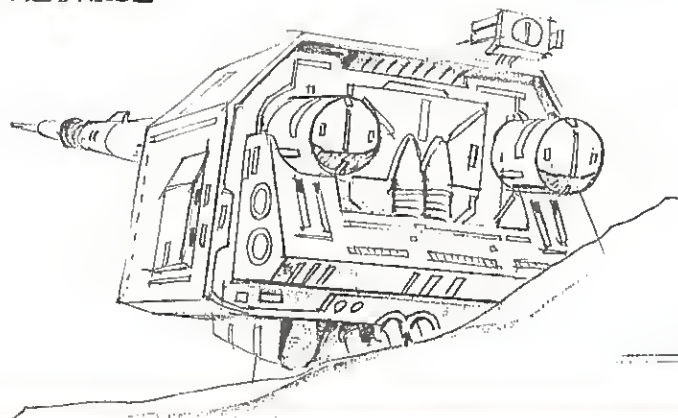
●監視塔



■回転するので湾曲している。アムロたちがこの一室に監禁された。

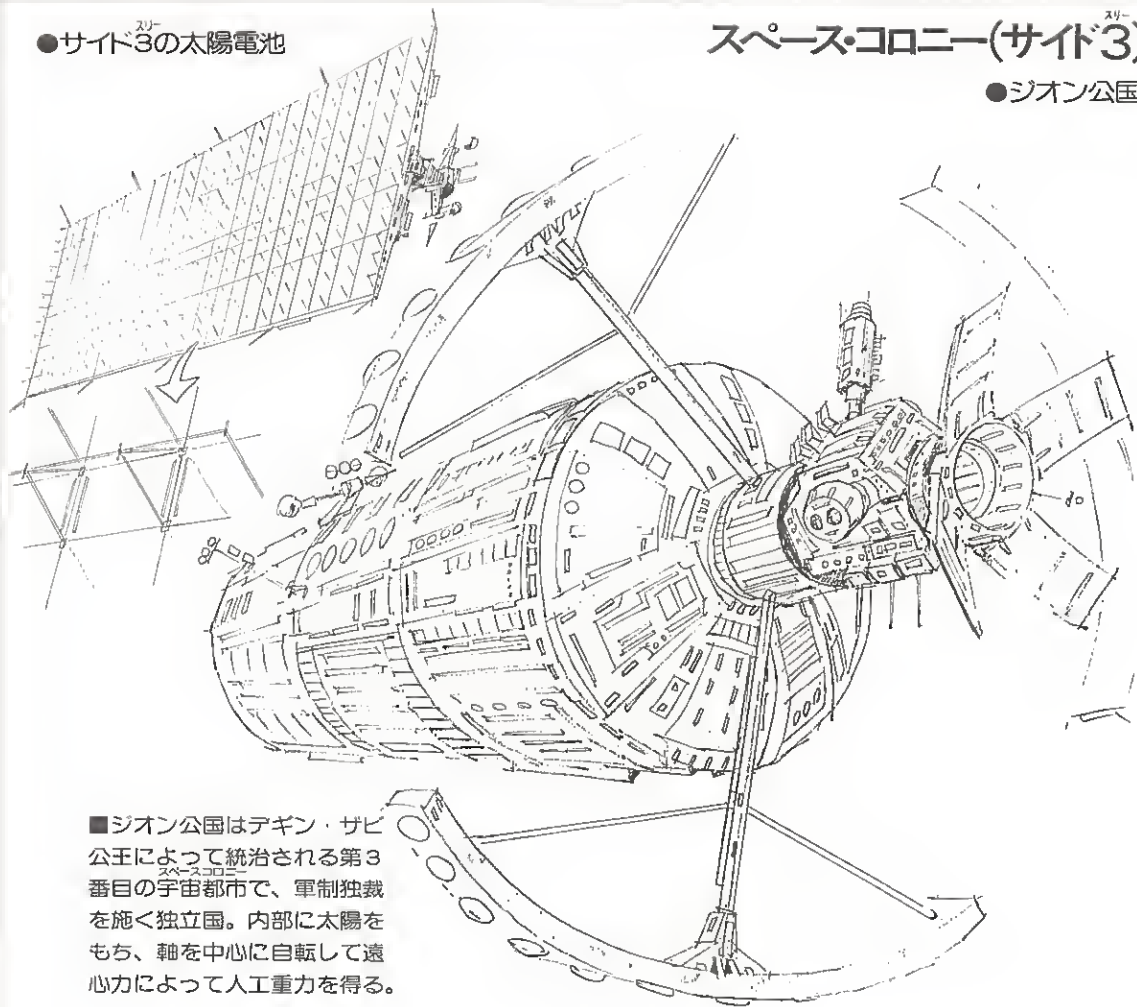
●重力ブロックの通路

●迎撃用砲台



●港出口のコントロールパネル

●サイド3^{スリー}の太陽電池



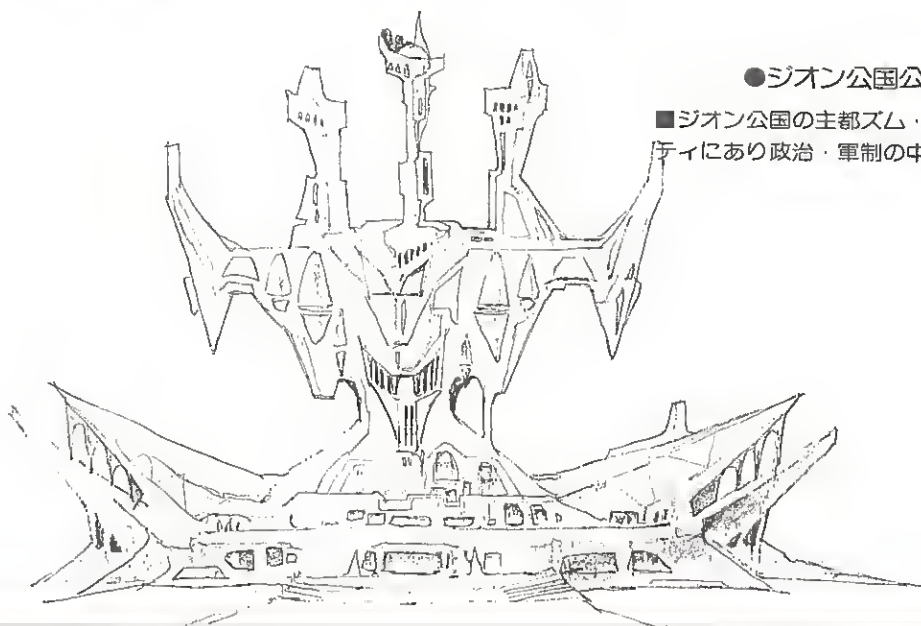
■ジオン公国はデギン・サビ公王によって統治される第3番目の宇宙都市^{スペースコロニー}で、軍制独裁を施く独立国。内部に太陽をもち、軸を中心に自転して遠心力によって人工重力を得る。

スペースコロニー(サイド3)^{スリー}

●ジオン公国

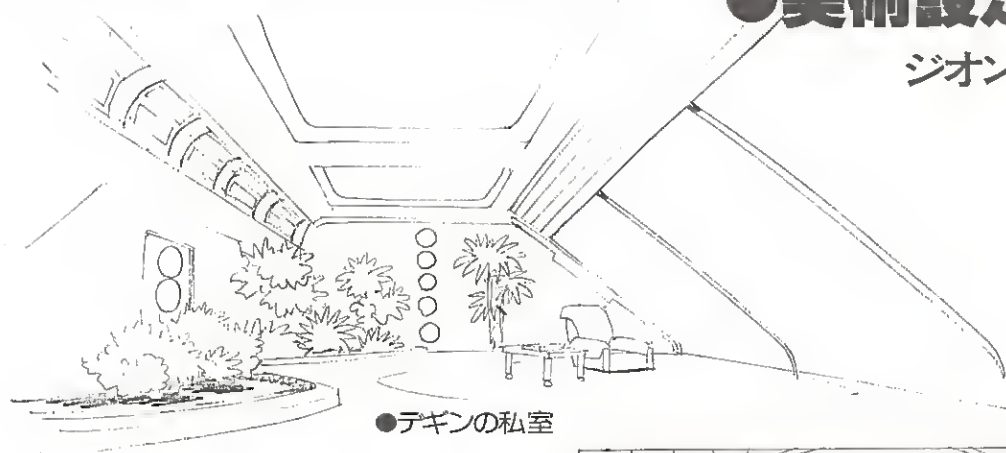
●ジオン公国公館

■ジオン公国の主都ズム・シティにあり政治・軍制の中心。

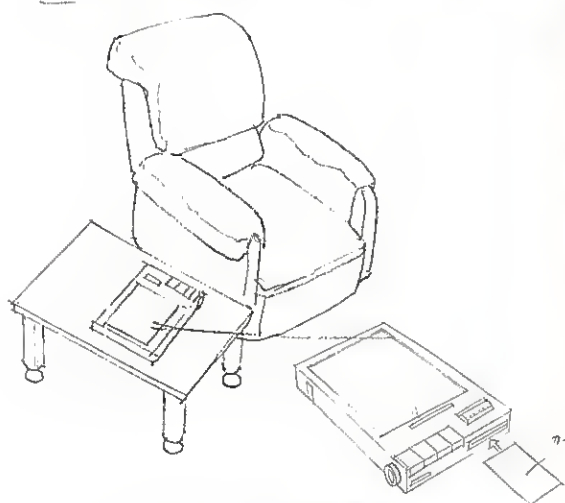


●美術設定⑤

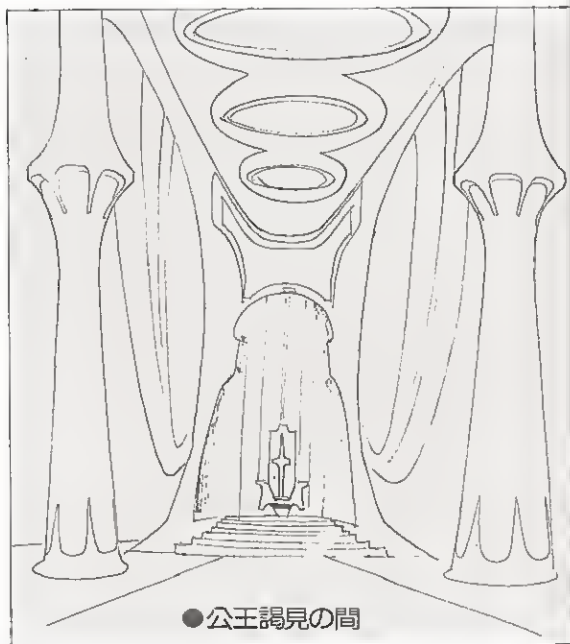
ジオン公館



●テギンの私室



●ビデオレター再生機



●公王謁見の間



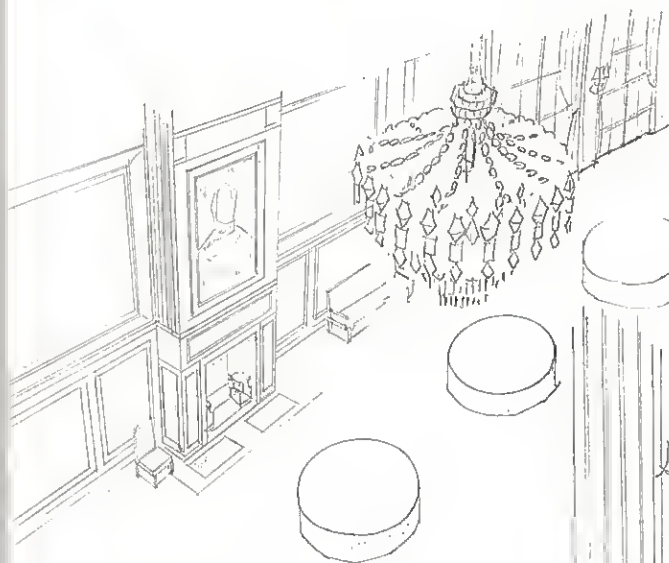
ジオン軍地球基地①

■テギン・ザビ公王の四男ガルマ・ザビが指揮する地球方面のジオン軍前線基地

●ジオン軍官邸

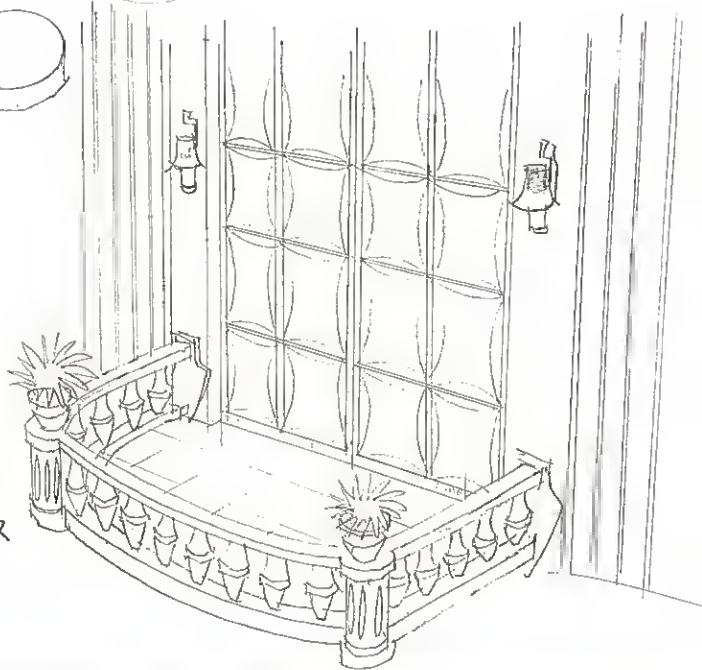


●官邸内部



●官邸内パーティー会場

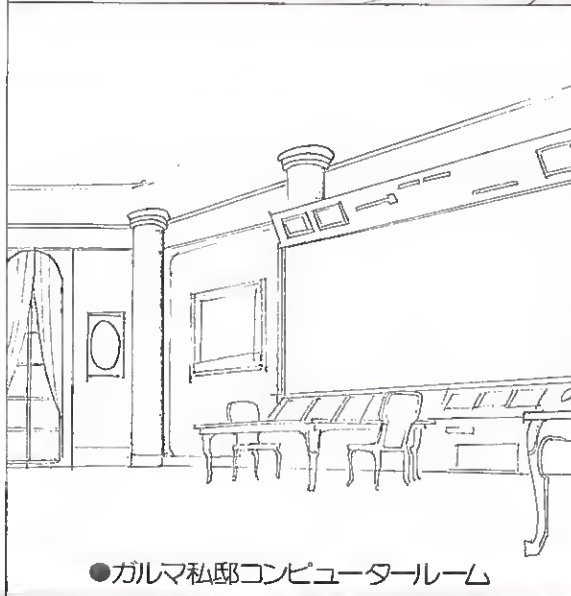
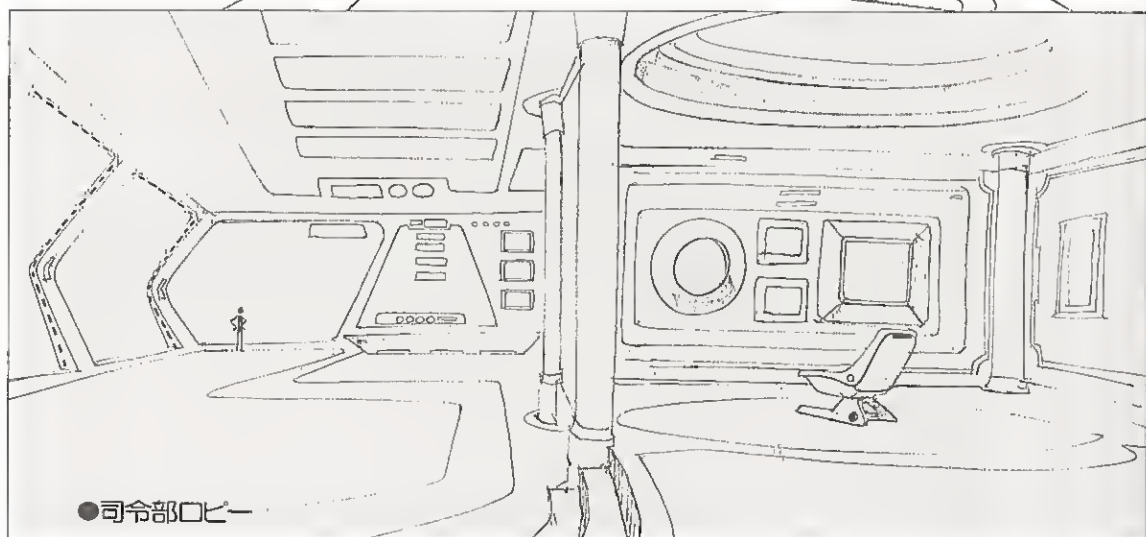
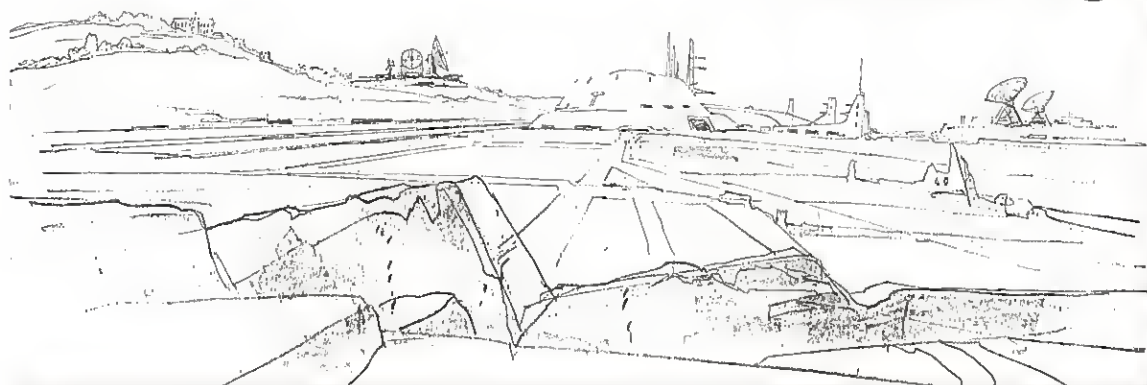
●官邸内のテラス



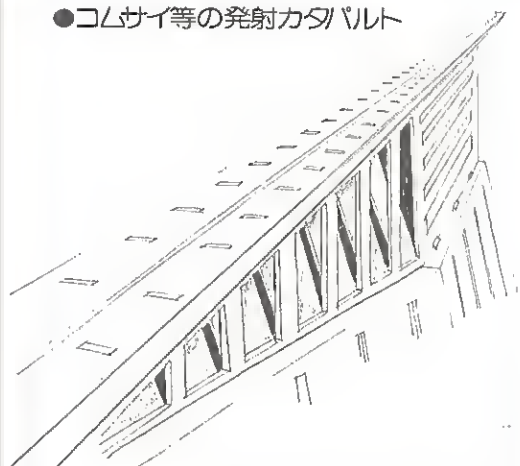
●ガルマ前線基地全景

●美術設定6

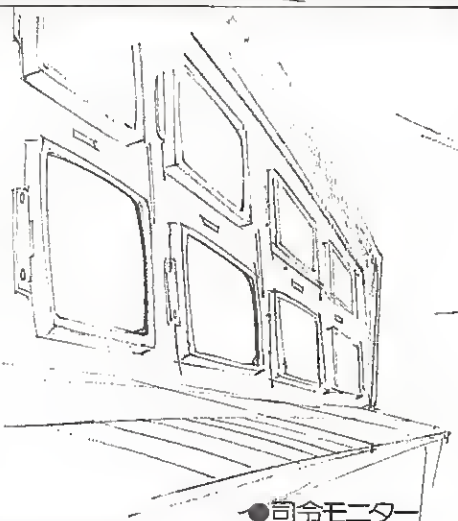
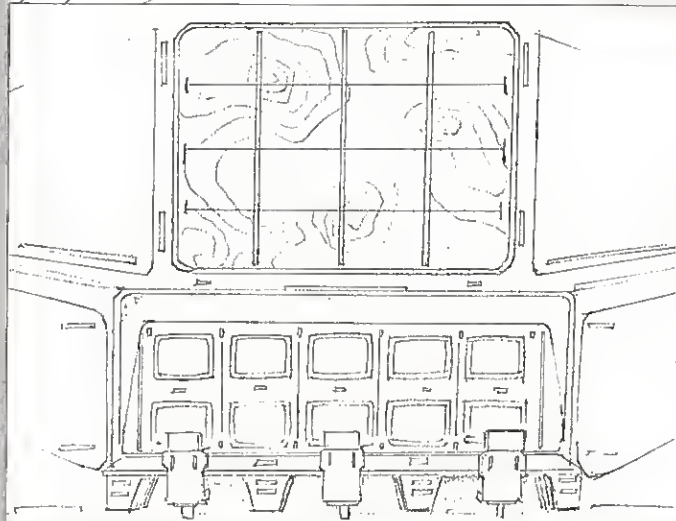
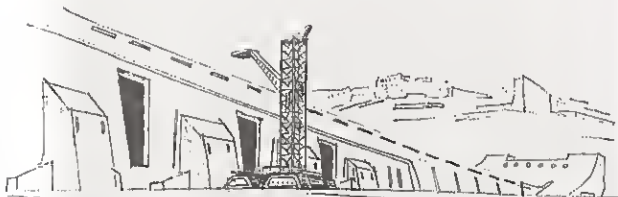
ジオン軍地球基地②



●コムサイ等の発射カタパルト



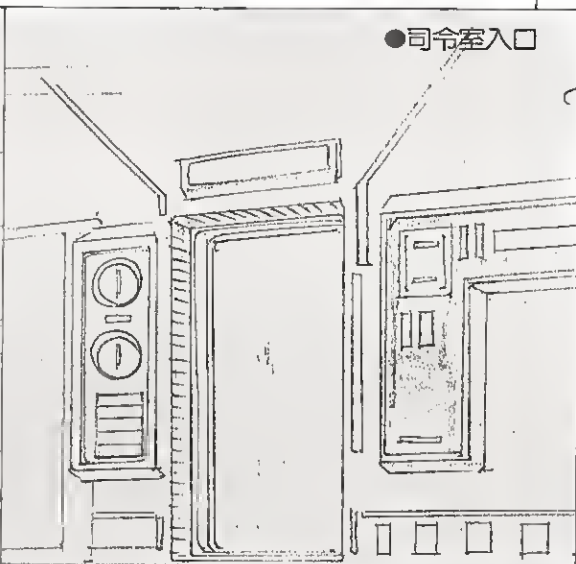
●カタパルトのある基地風景



●司令モニター



●高級士官用個室(シャアの個室)



●司令室入口

●美術設定7

ジオン軍地球基地③



●エッセンバッハ邸全景

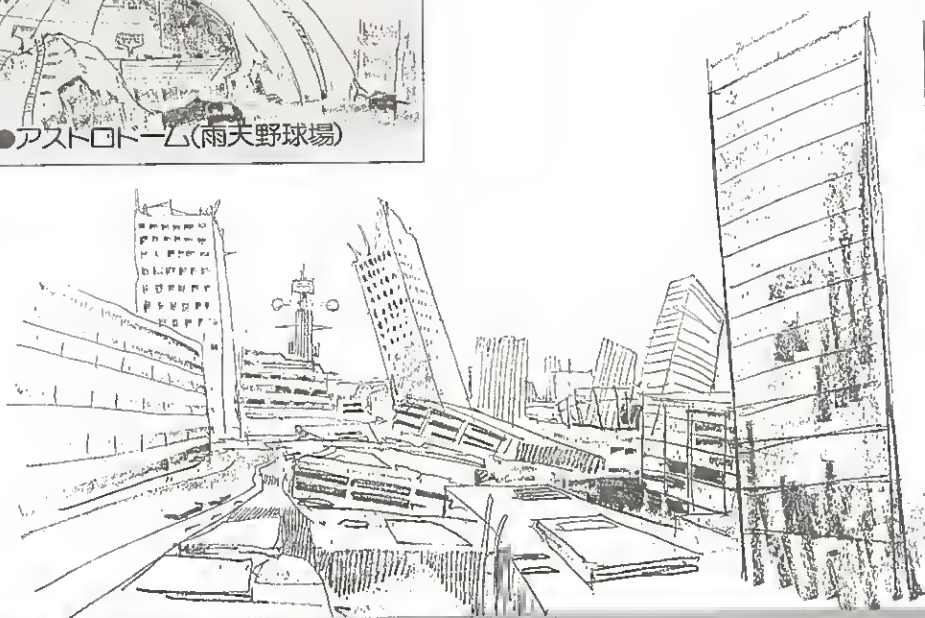


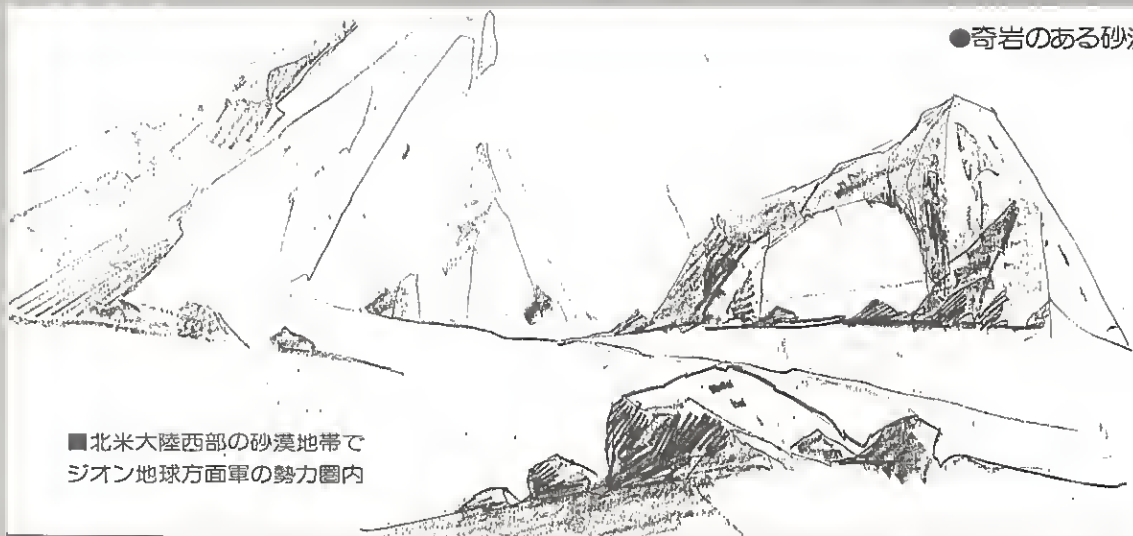
●エッセンバッハの書斎



●アストロドーム(雨天野球場)

●ニューヨーク市





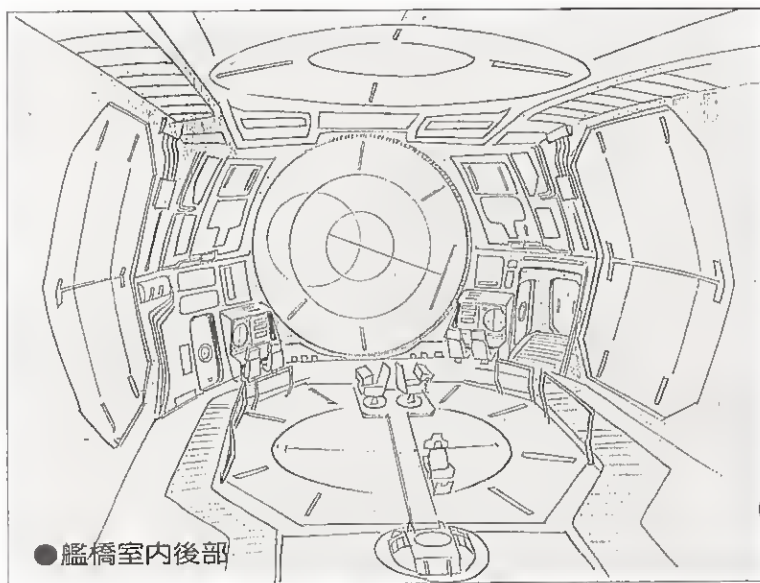
■北米大陸西部の砂漠地帯で
ジオン地球方面軍の勢力圏内

●セント・アンジェ近くの荒野

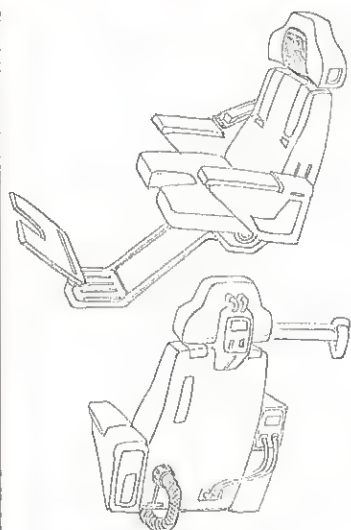


●セント・アンジェ跡の家と爆撃で出来た湖

●メカニック設定 1

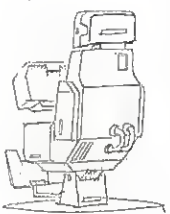


●艦橋室内後部

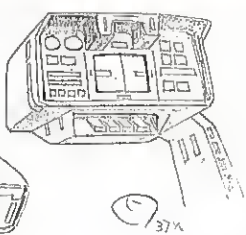


●艦橋／艦長座席

●艦内通話機
(ヘッド・フォン型)

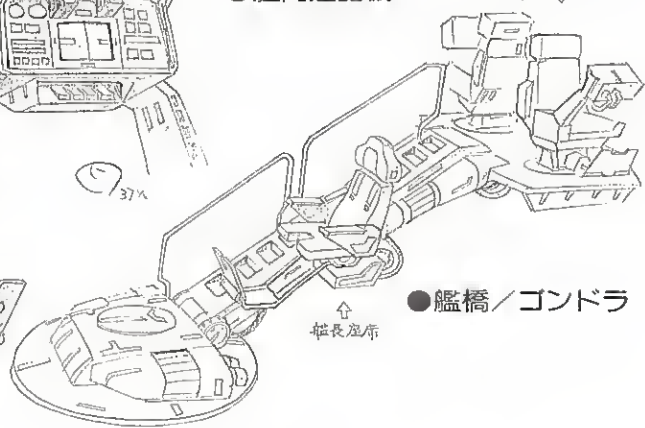


●艦橋／オペレーター座席



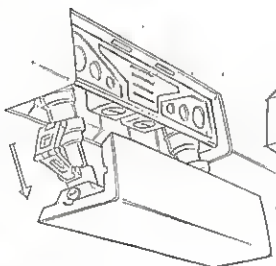
●艦内通話機

オペレーター座席
↑ ↓

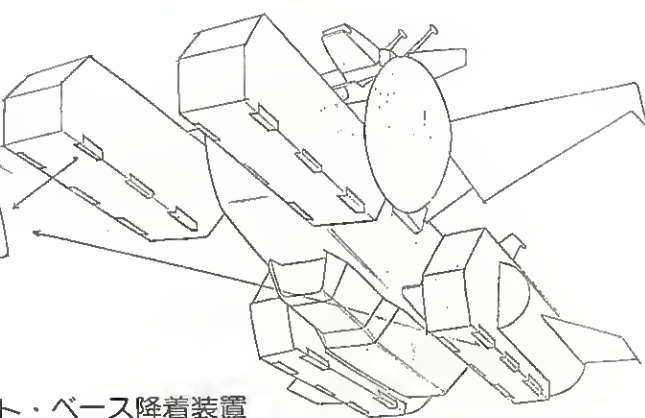


●艦橋／ Gondola

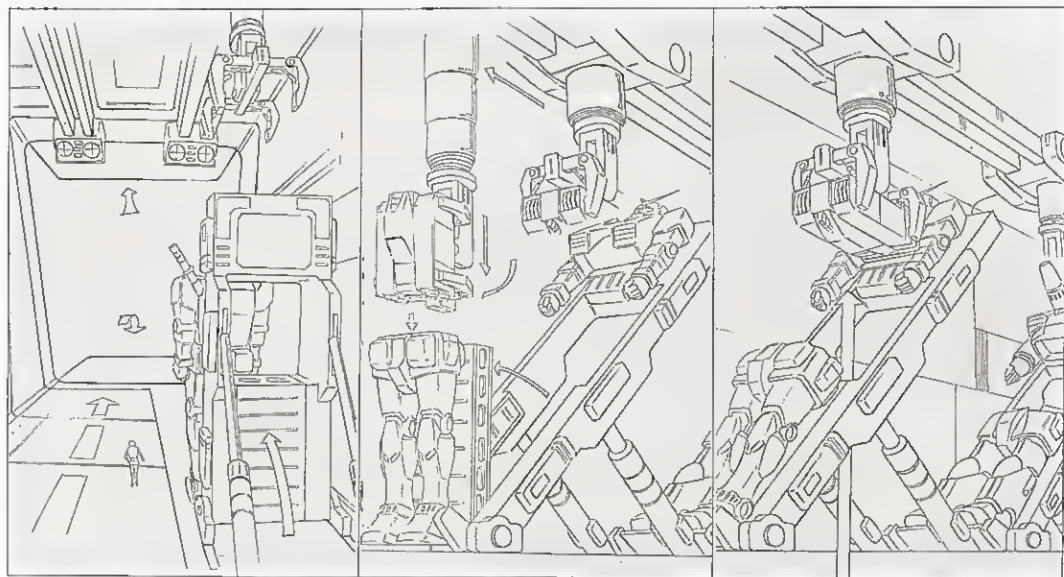
↑
艦長座席



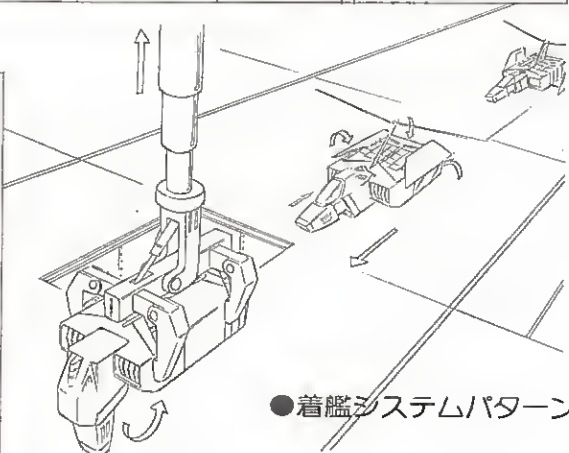
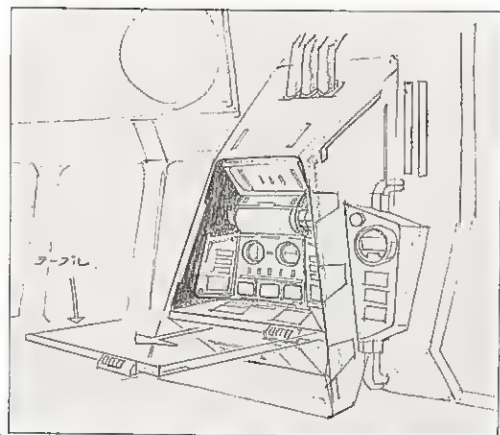
●ホワイト・ベース降着装置



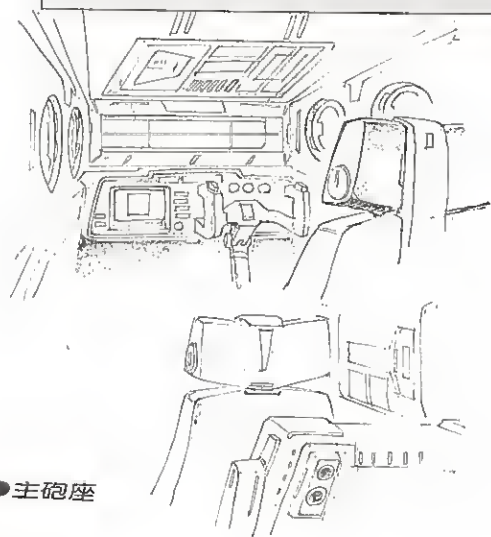
●合体、出撃システムパターン



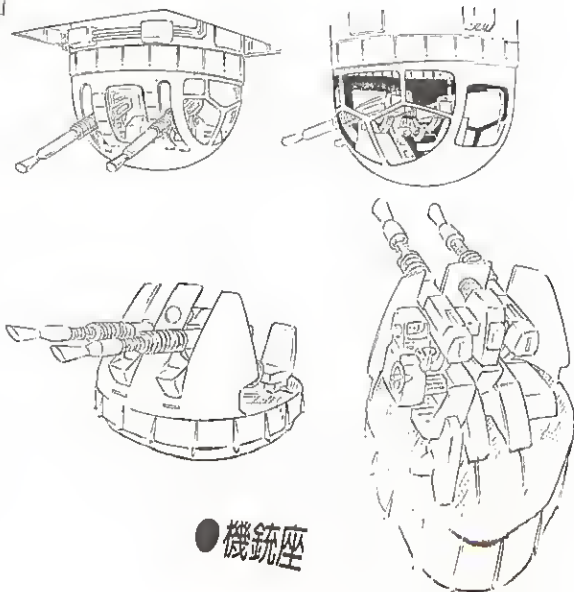
●艦橋／サイド・パネル



●着艦システムパターン



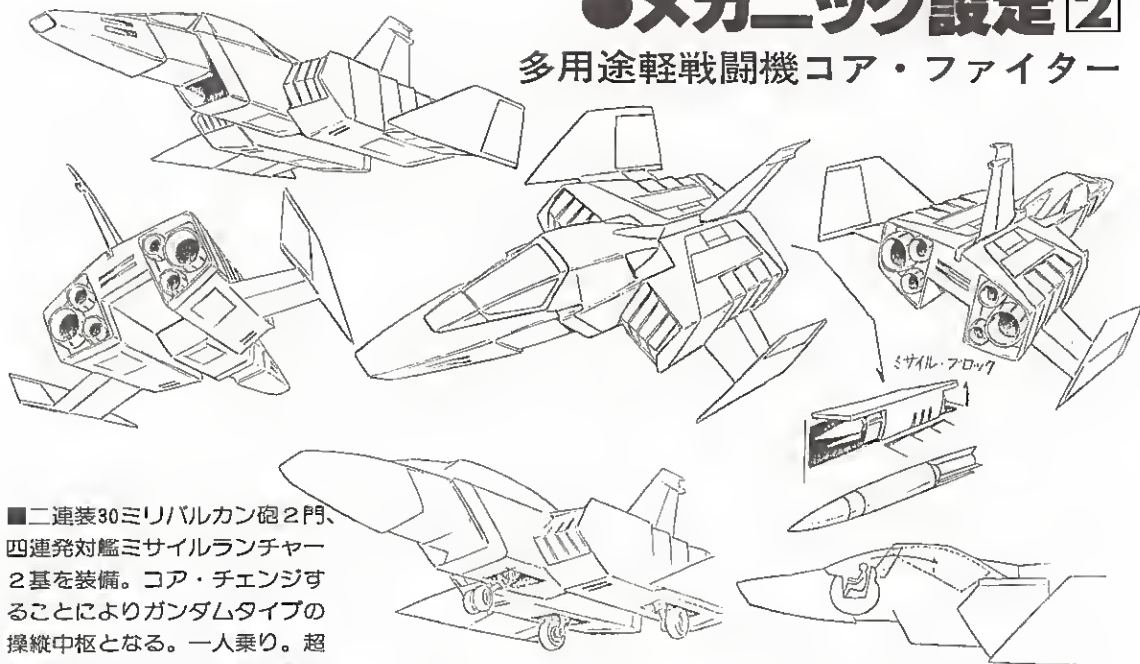
●主砲座



●機銃座

●メカニック設定 2

多用途軽戦闘機コア・ファイター



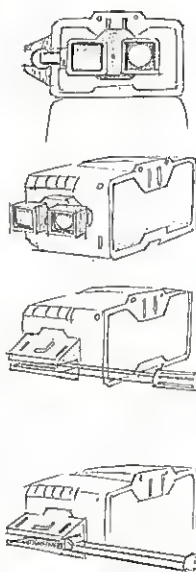
■二連装30ミリバルカン砲2門、
四連発対艦ミサイルランチャー
2基を装備。コア・チェンジす
ることによりガンダムタイプの
操縦中枢となる。一人乗り。超
硬合金ルナ・チタニウム製。
全長8.6メートル。自重8.9トン、
出力1万2千馬力、大気圏内
における最高速度マッハ3。



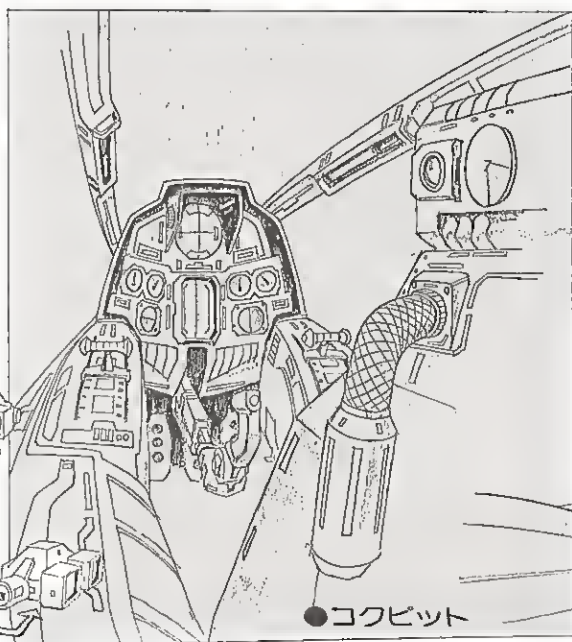
●合体パターン

●コア・ブロック

■コア・ファイターの変形。ガンダムなどとドッキング
するために変形した型で、ガンダムの操縦中枢をなす。

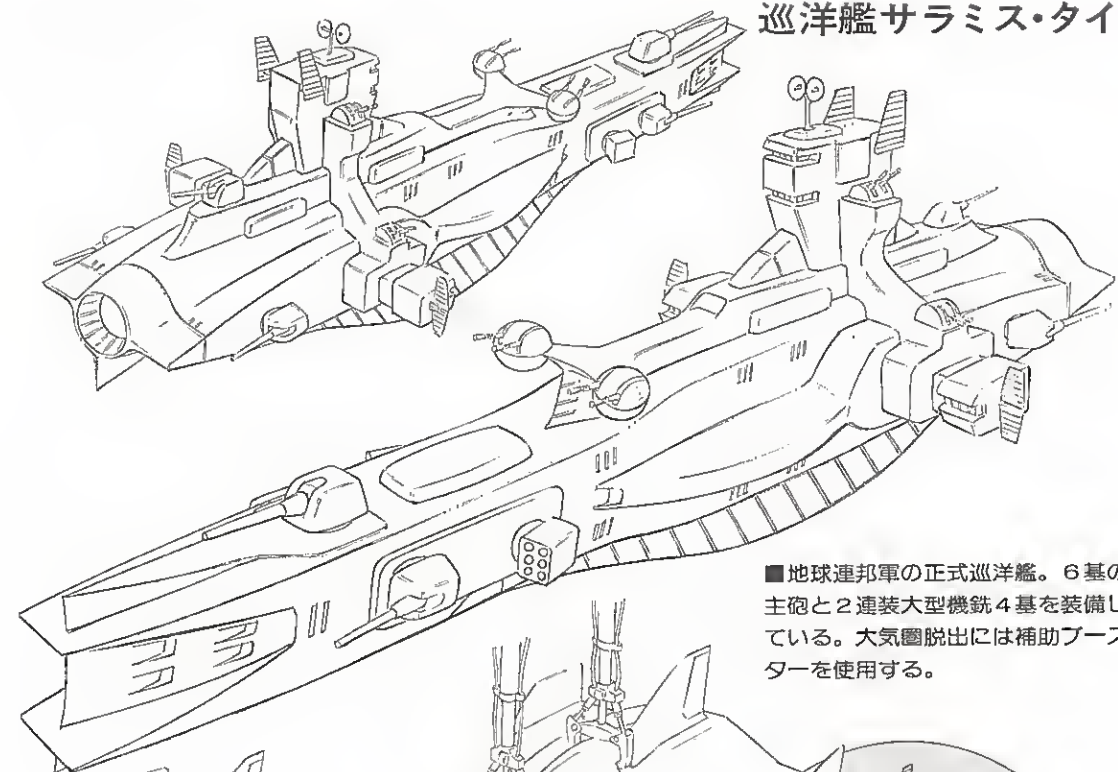


●照準機



●コクピット

巡洋艦サラミス・タイプ

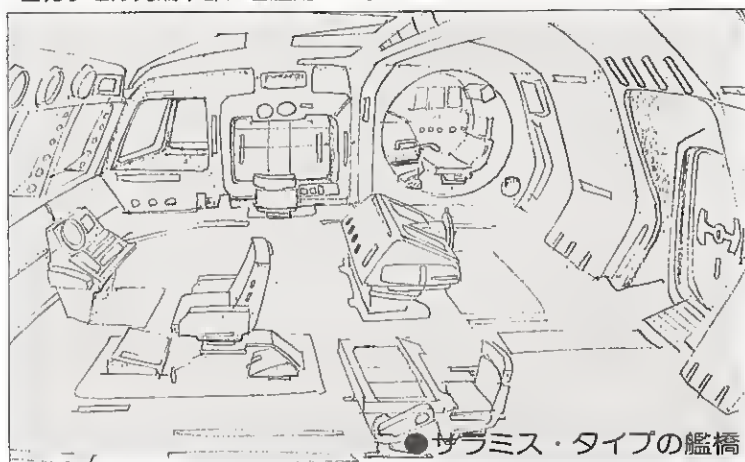


■地球連邦軍の正式巡洋艦。6基の主砲と2連装大型機銃4基を装備している。大気圏脱出には補助ブースターを使用する。

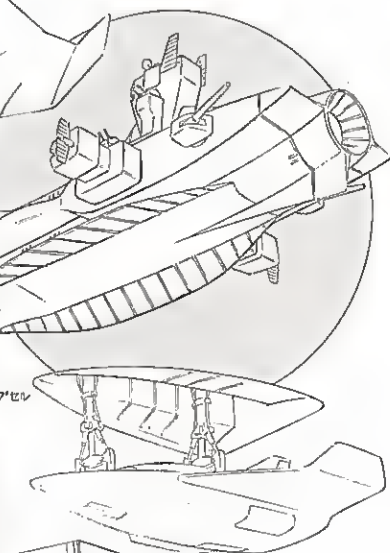
●サラミスカプセル
ドッキングロック

サラミスの大気圏突入カプセル

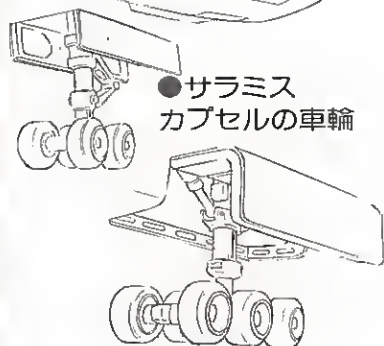
■カプセル先端下部に着艦用レーザー・ロックの吸収レンズがある。



●サラミス・タイプの艦橋



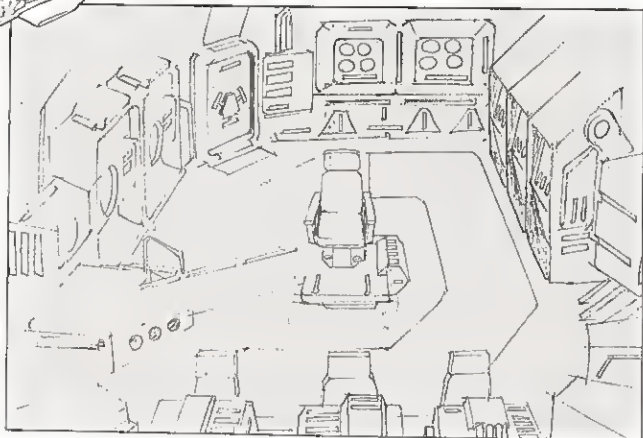
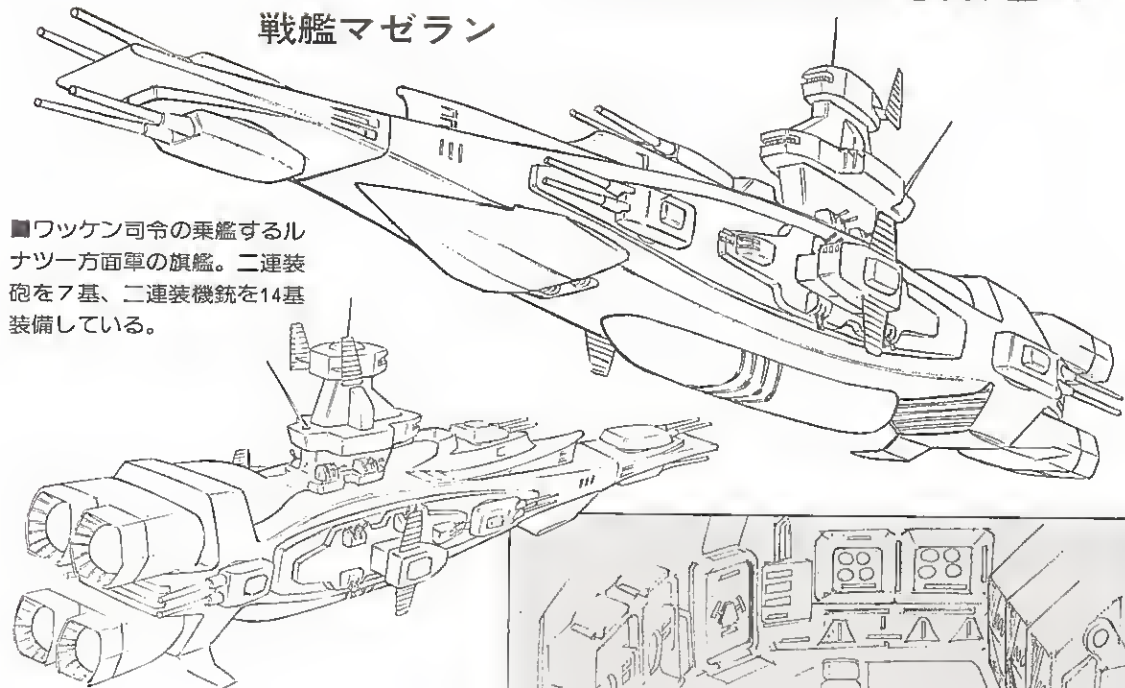
●サラミス
カプセルの車輪



●メカニック設定 3

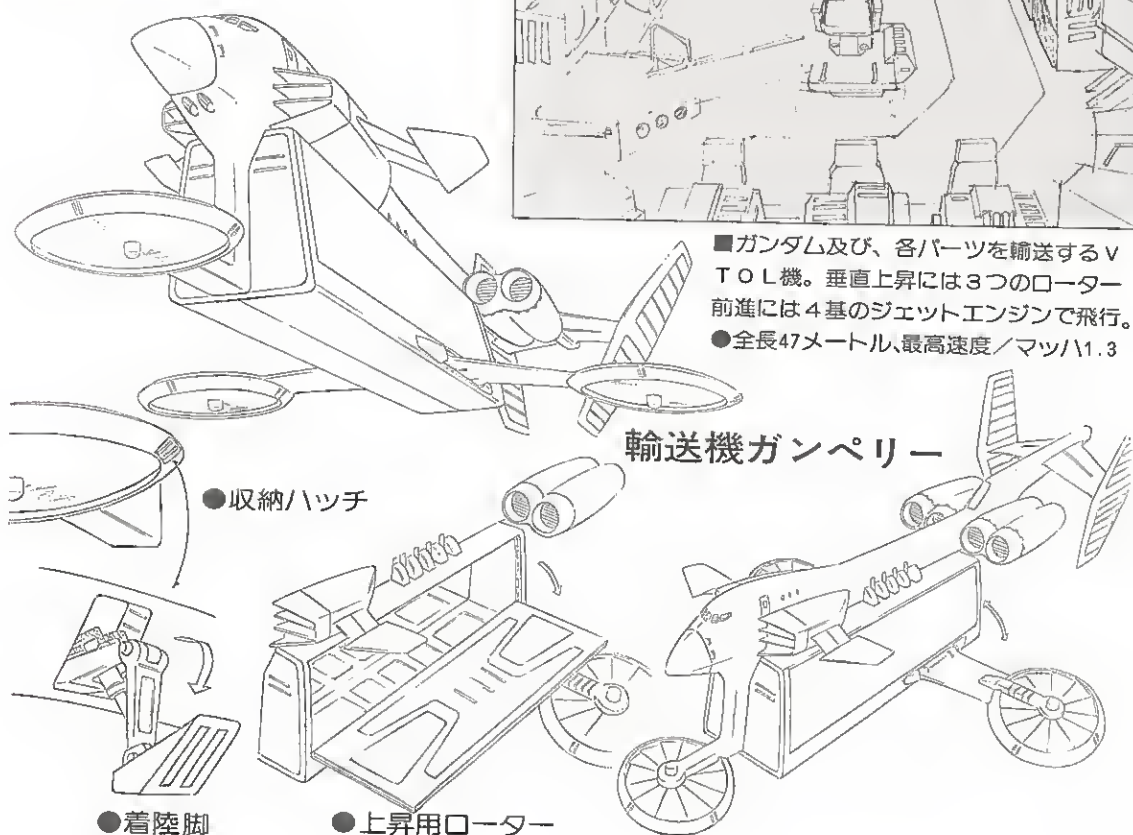
戦艦マゼラン

■ワッケン司令の乗艦するルナツー方面軍の旗艦。二連装砲を7基、二連装機銃を14基装備している。



■ガンダム及び、各パーツを輸送するV T O L機。垂直上昇には3つのローター前進には4基のジェットエンジンで飛行。
●全長47メートル、最高速度/マッハ1.3

輸送機ガンペリー



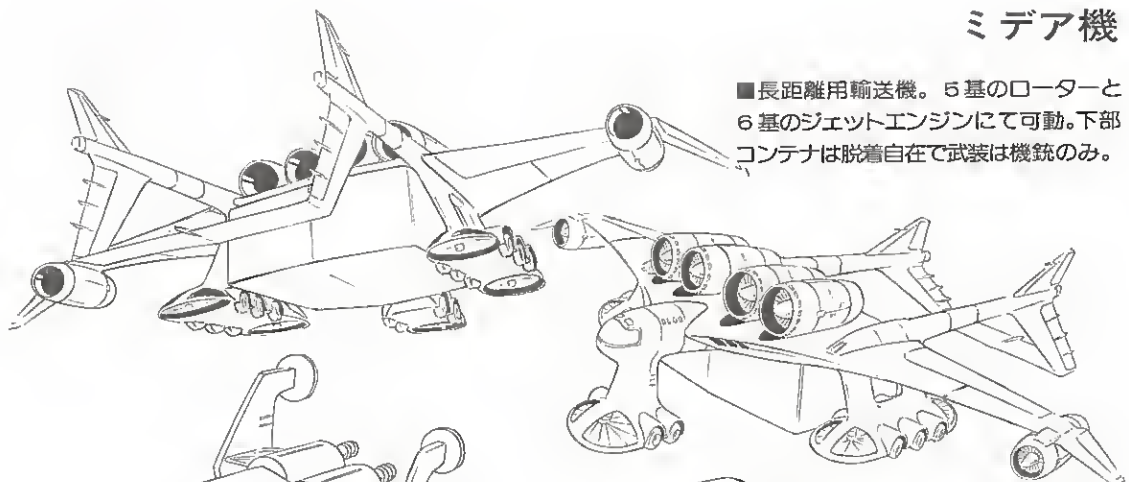
●収納ハッチ

●着陸脚

●上昇用ローター

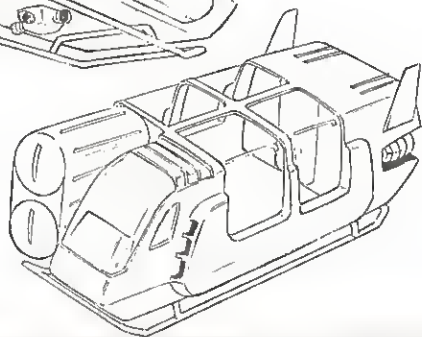
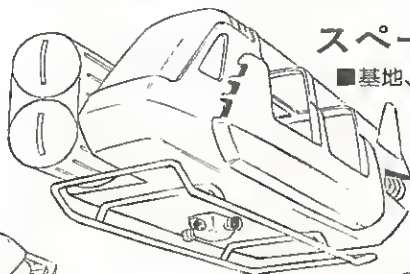
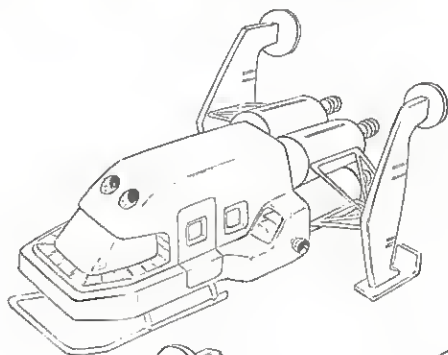
メディア機

■長距離用輸送機。5基のローターと6基のジェットエンジンにて可動。下部コンテナは脱着自在で武装は機銃のみ。



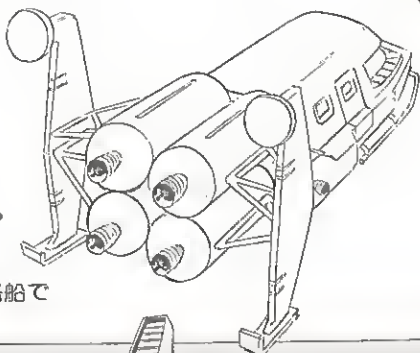
スペース・ボート

■基地、艦艇で使う運搬機。

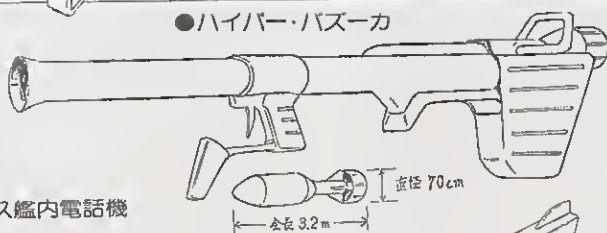


スペース・ランチ

■宇宙空間連絡船で艦船搭載用。



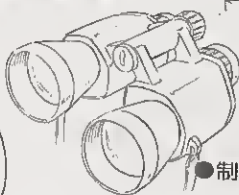
●ハイパー・バズーカ



●ペガサス艦内電話機



●制式双眼鏡



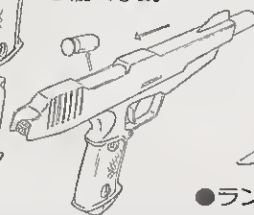
●制式拳銃



●ビームサーベル基部



●ランド・ムーバー



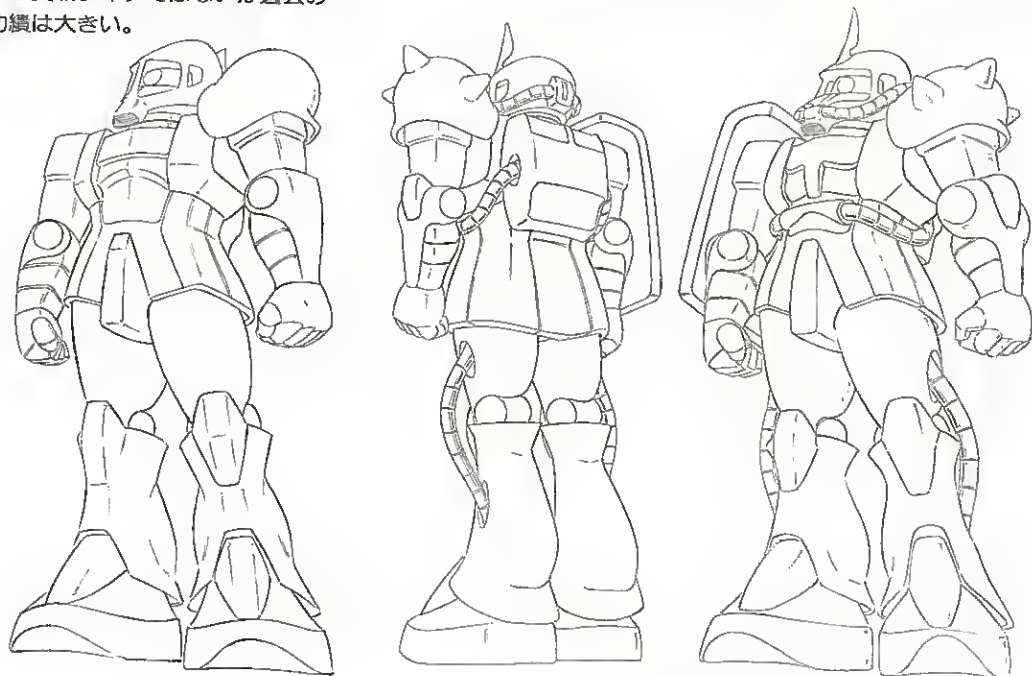
ザク

(ゲストキャラクター)

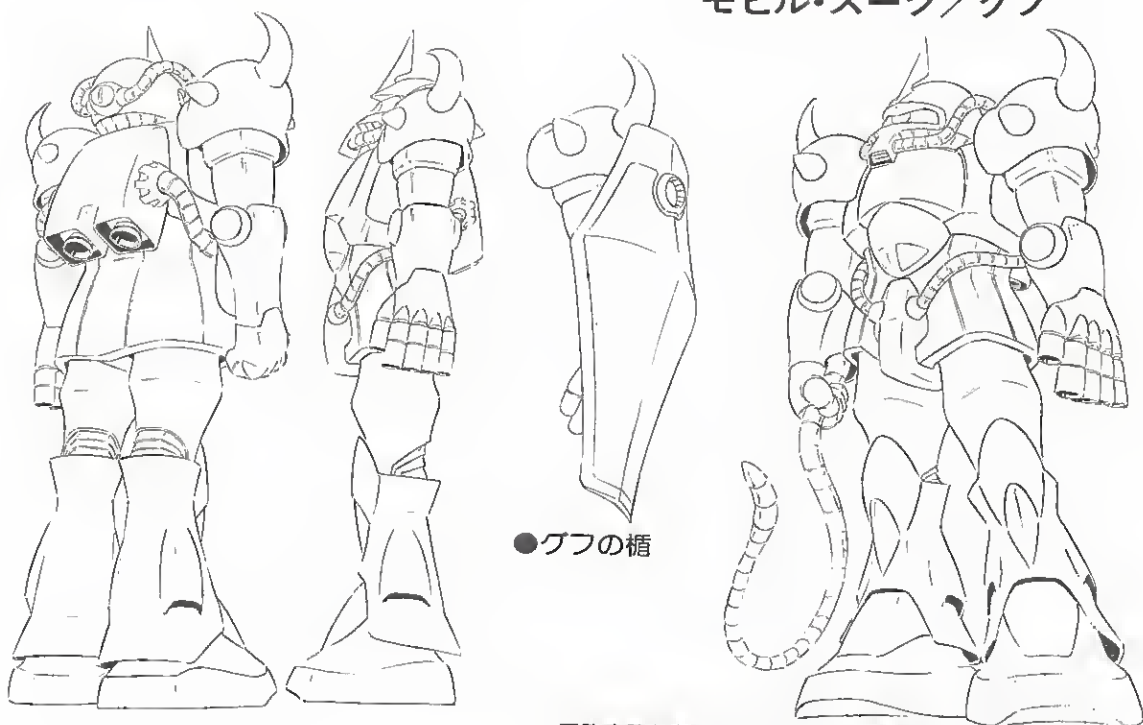
■全てのモビルスーツの原型であり、実戦タイプではないが過去の功績は大きい。

●メカニック設定 4

モビルスーツ／ザク(シャア専用)



モビル・スーツ／グフ



●グフの楯

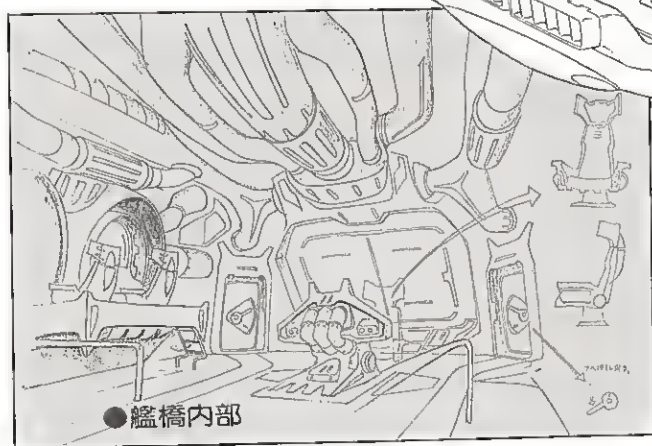
■改良強化新型モビルスーツ。連邦のモビルスーツを想定した上で作られ、白兵戦用の青いモビル・スーツ。

巡洋艦ムサイ（シャア専用）

●艦橋部

■主砲として連装メガ粒子砲塔3基、脇の左右5本のスリットから、小型ミサイル、主砲両脇に大型ミサイル発射口を装備する。艦橋下後部はザク格納庫/ハッチで3体収納する。前部に大気圏カプセル、コムサイが上下逆にドッキングしている。

●小型ミサイル



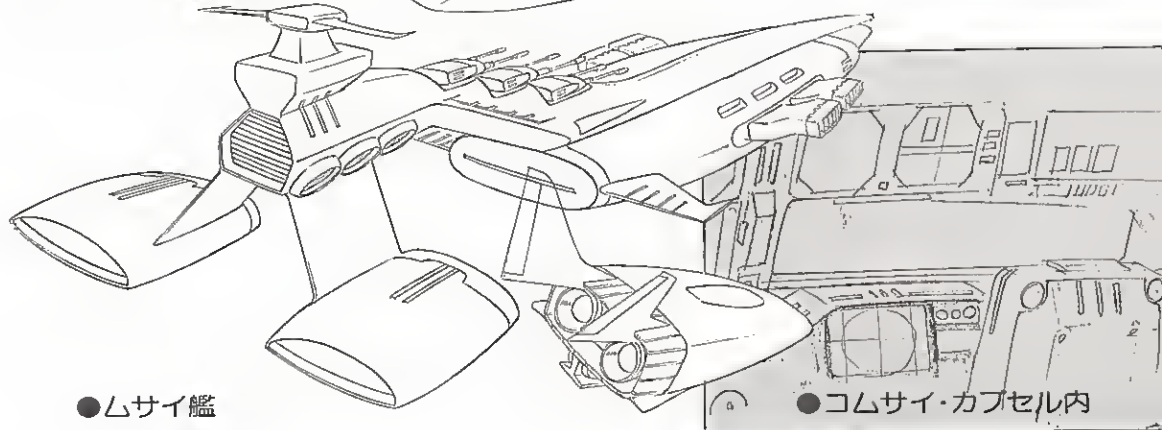
●艦橋内部

●操舵輪

大気圏用カプセル／コムサイ

■ムサイ艦が搭載しており、大気圏突入用カプセルである。左右にバルカン砲を装備している。

●コムサイ発艦の図



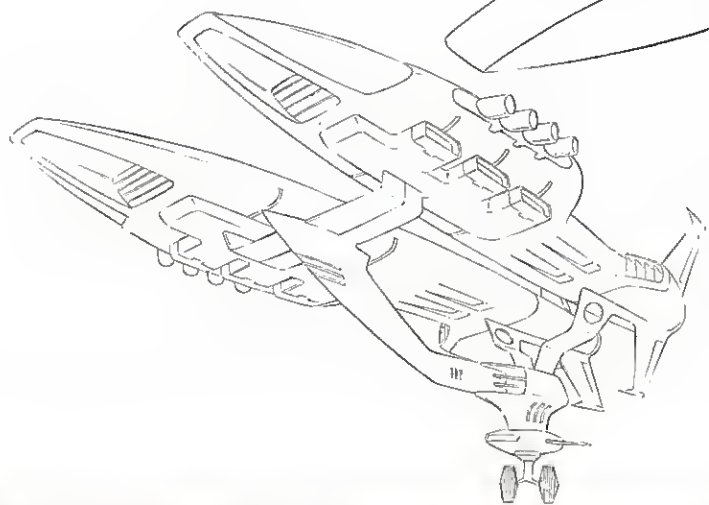
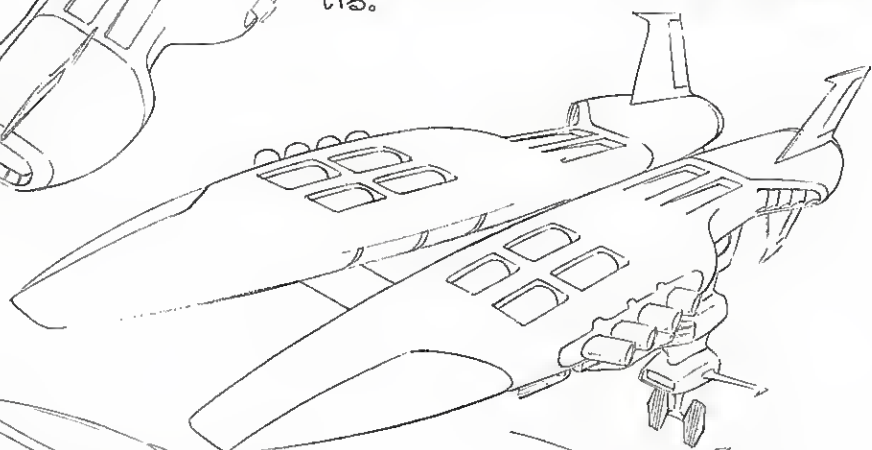
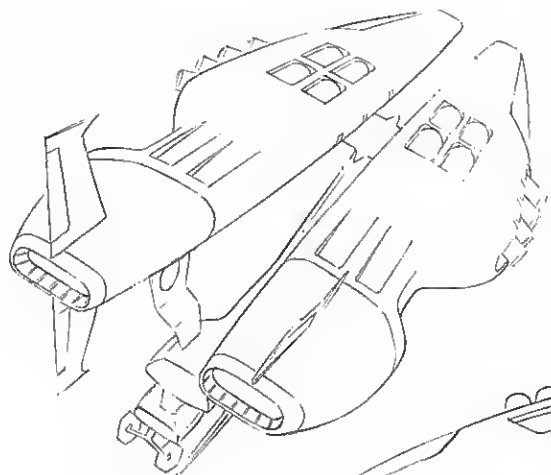
●ムサイ艦

●コムサイ・カプセル内

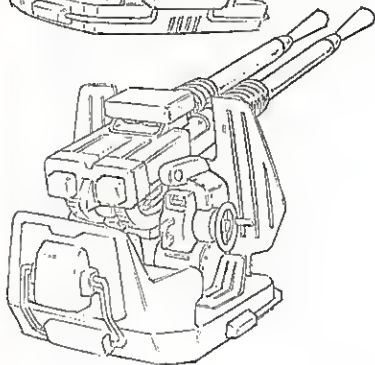
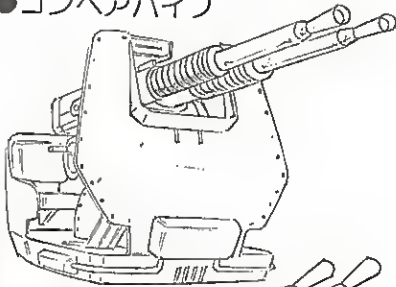
●メカニック設定 5

補給艦 パプア

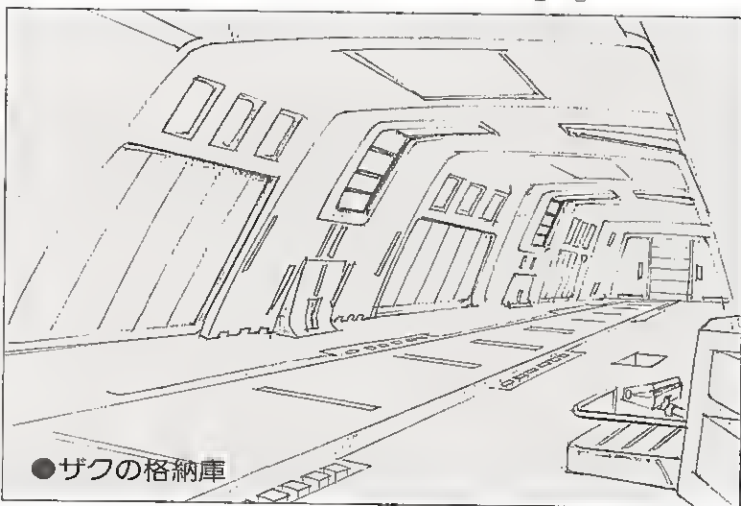
■元来は老朽艦でジオン公国補給部隊に所属している。物資は左右のコンベアパイプ、モビル・スーツは前部格納庫のカタバルトより転出する。機銃のみ装備している。



●コンベアパイプ



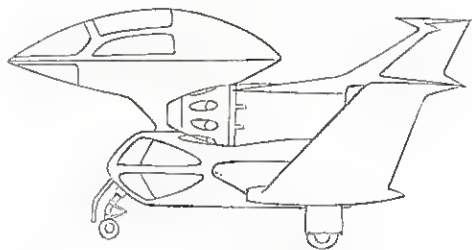
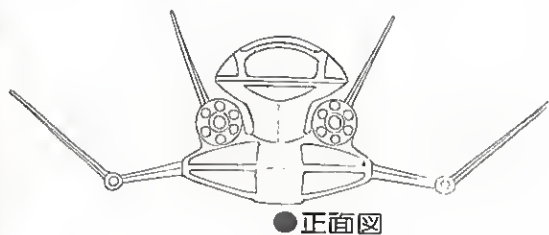
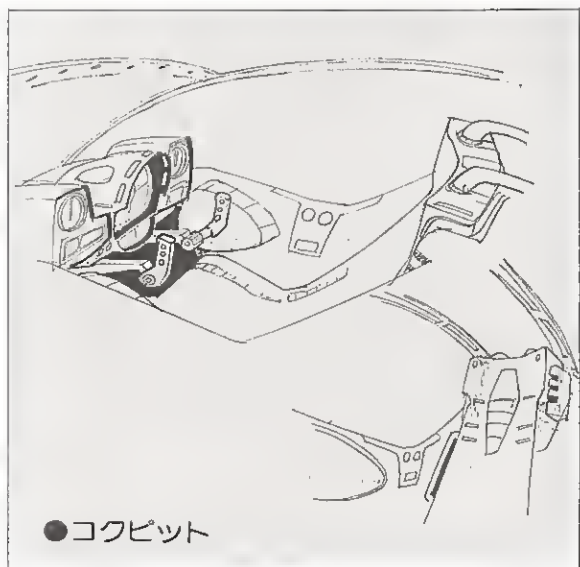
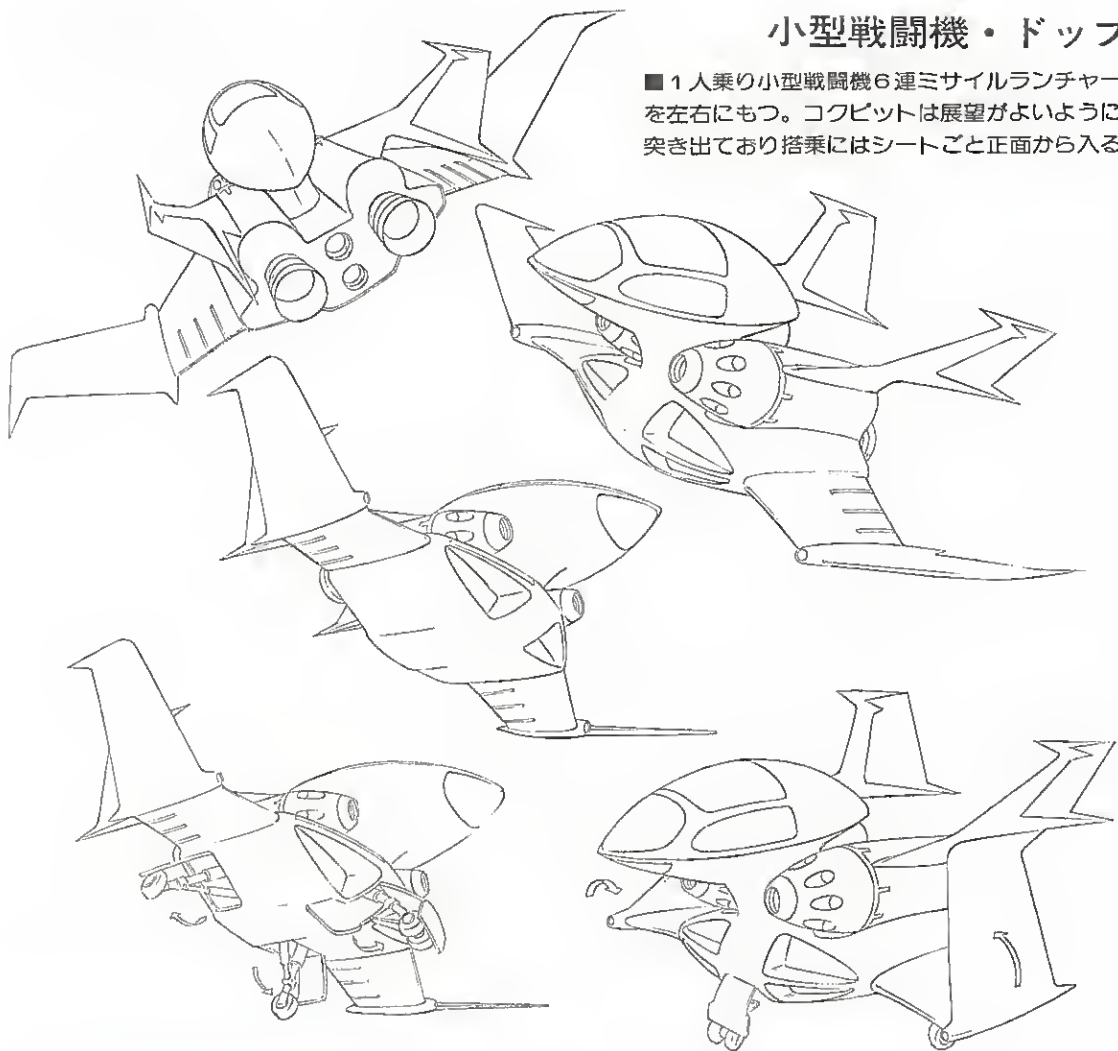
●機銃



●ザクの格納庫

小型戦闘機・ドップ

■ 1人乗りの小型戦闘機6連ミサイルランチャーを左右にもつ。コクピットは展望がよいように、突き出ており搭乗にはシートごと正面から入る。



●メカニック設定 6

ガウ攻撃空母

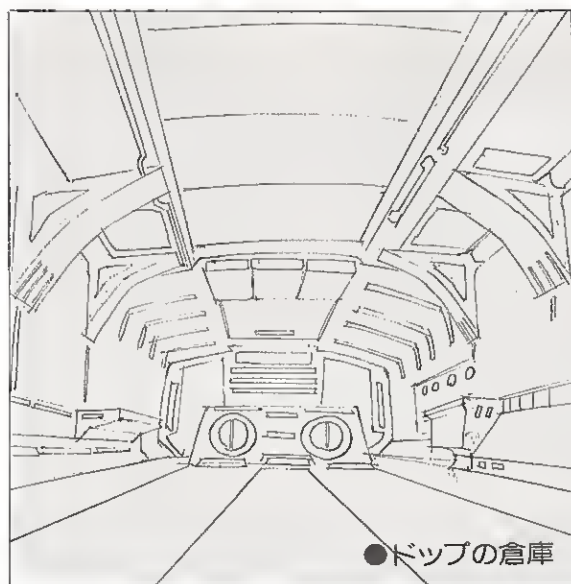
■地球におけるジオン空軍の戦略空中空母。
機動一個中隊は、前部に格納されているザク
3機と両翼に搭載された4機のドップにより
構成されている。

■収納部は後部ハッチがついている。ガウ自
身もビーム砲5門を備え、対地攻撃用の爆弾
倉を持ち大型爆撃機としても使用できる。

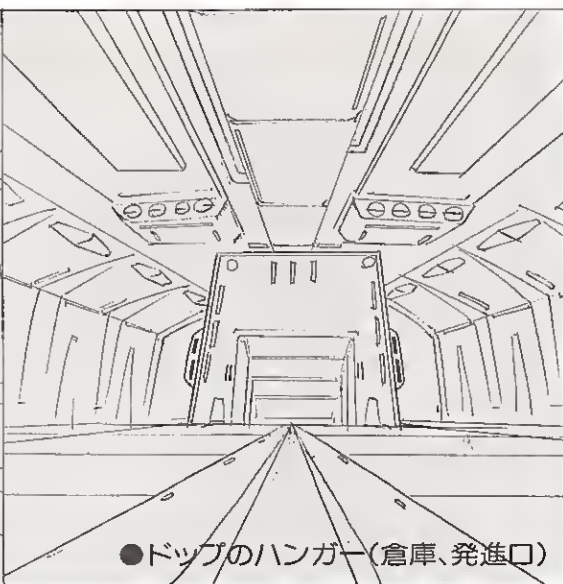


●ドック

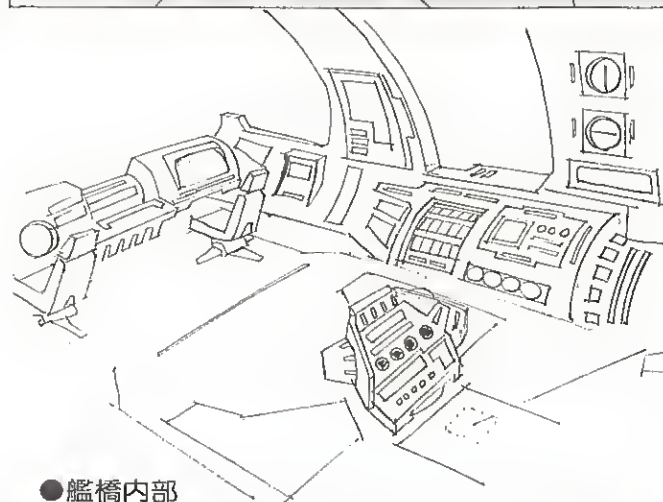
●ガウのビーム砲



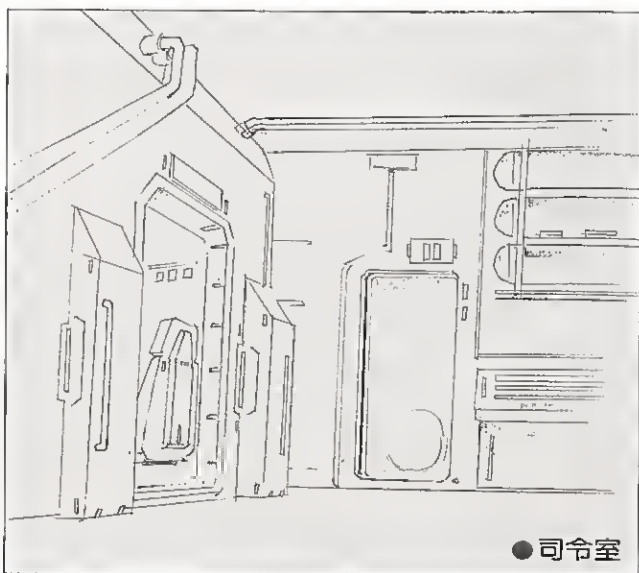
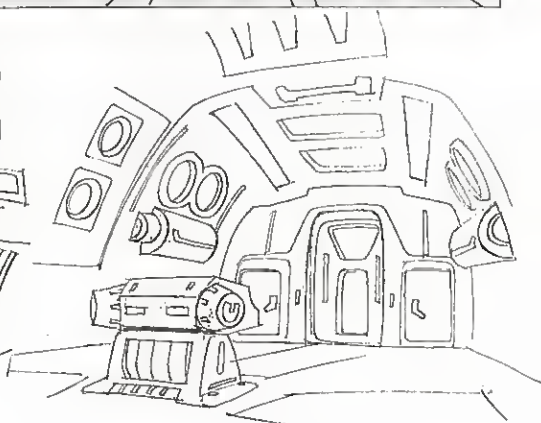
●ドップの倉庫



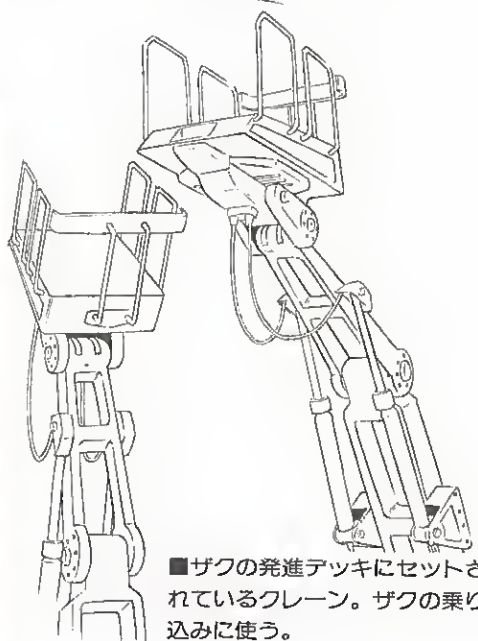
●ドップのハンガー(倉庫、発進口)



●艦橋内部



●司令室

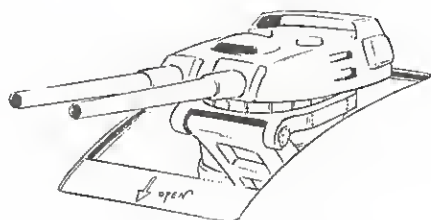
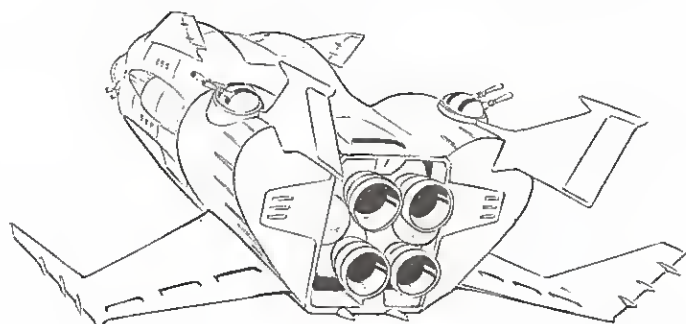
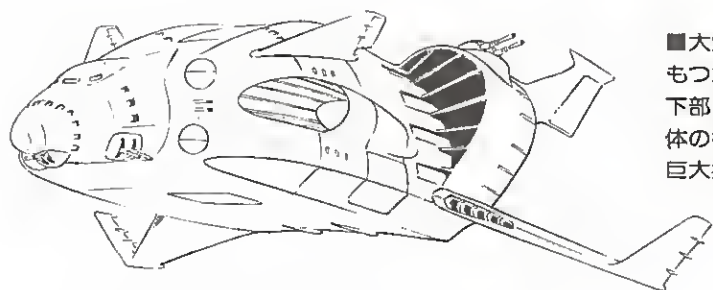


■ザクの発進デッキにセットされているクレーン。ザクの乗り込みに使う。

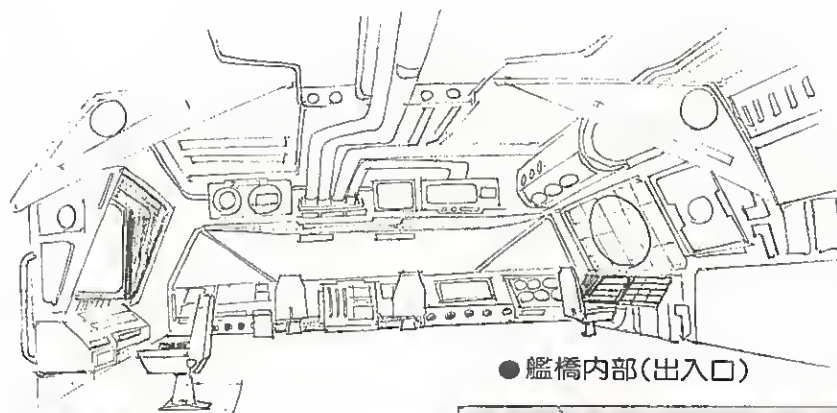
●メカニック設定 7

機動巡洋艦ザンジバル

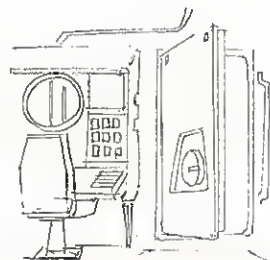
■大気圏突入、離脱ができる。機関砲9基をもつが、大気圏突入時には本体へ収納される。下部にはザク、グフなどのモビル・スーツ3体の格納庫がある。戦線を離脱する時には、巨大投光器でめくらましをする。



●砲 塔

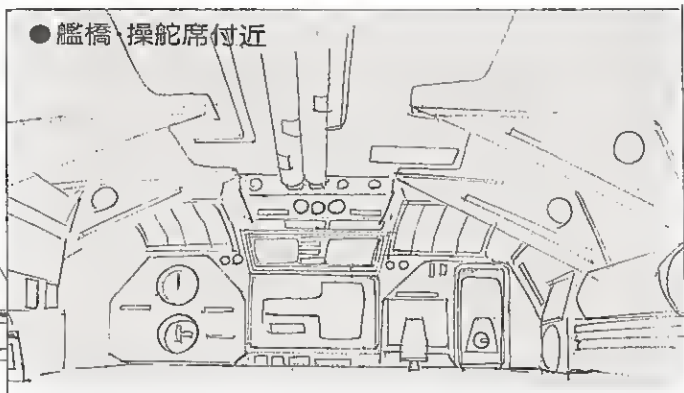
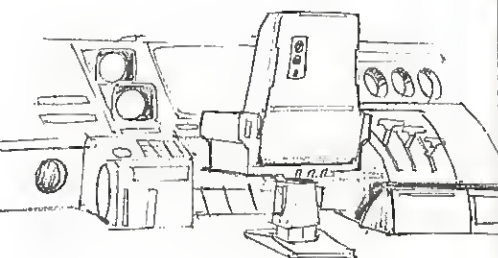


●艦橋内部(出入口)



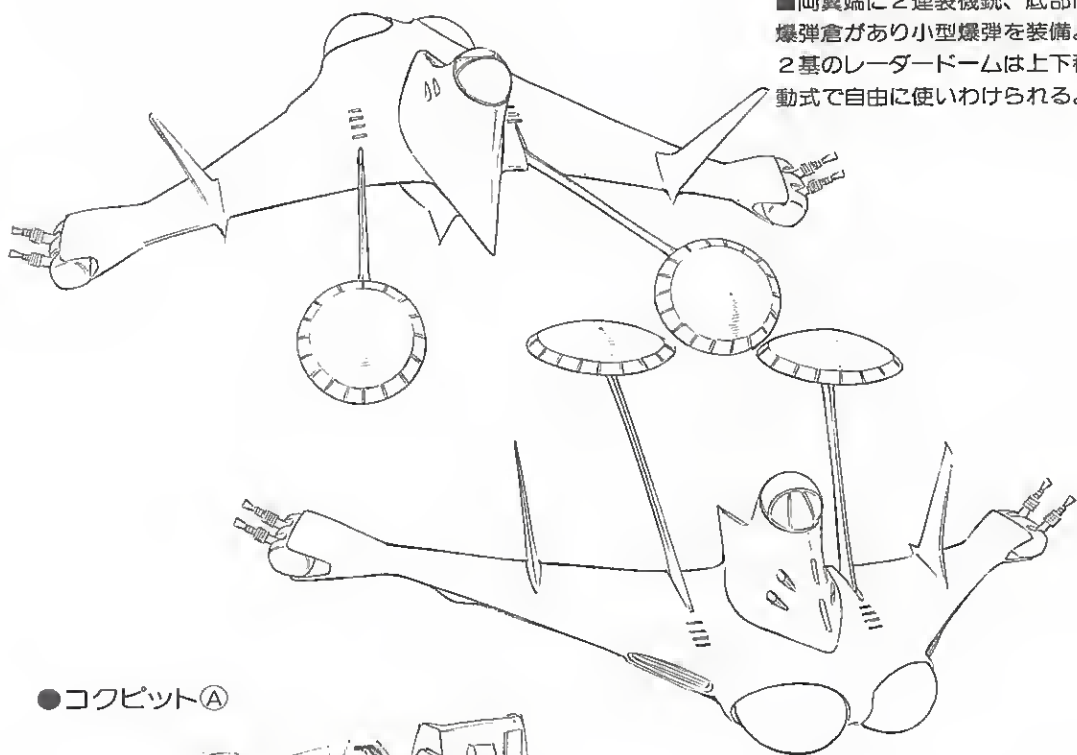
●艦橋・後方部

●艦橋 操舵席付近

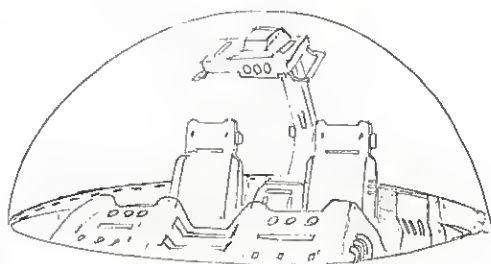


偵察機ルッゲン

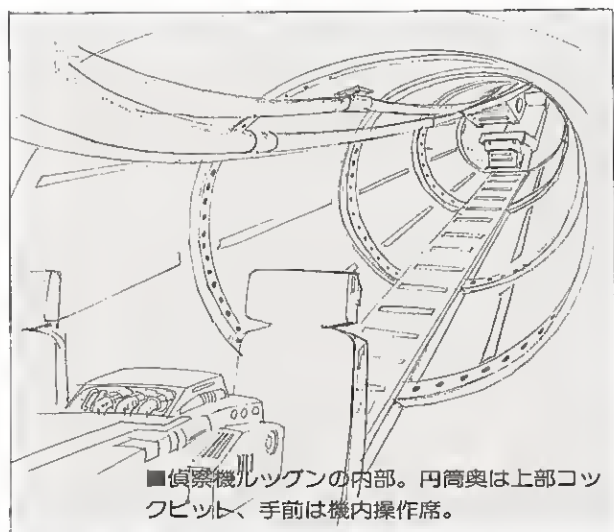
■両翼端に2連装機銃、底部に爆弾倉があり小型爆弾を装備。
2基のレーダードームは上下移動式で自由に使い分けられる。



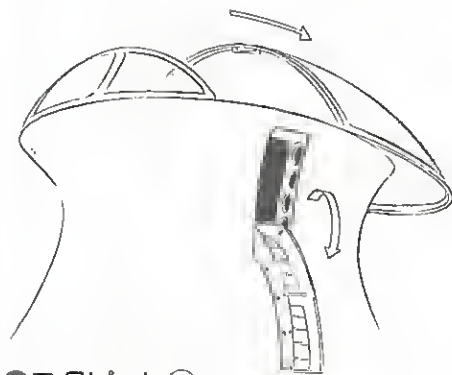
●コクピット①



●コクピット②



■偵察機ルッゲンの内部。円筒奥は上部コックピット、手前は機内操作席。



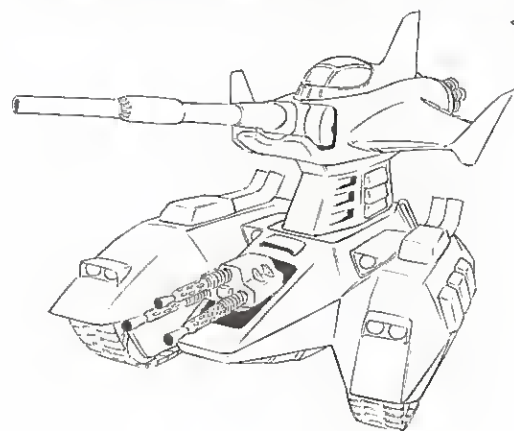
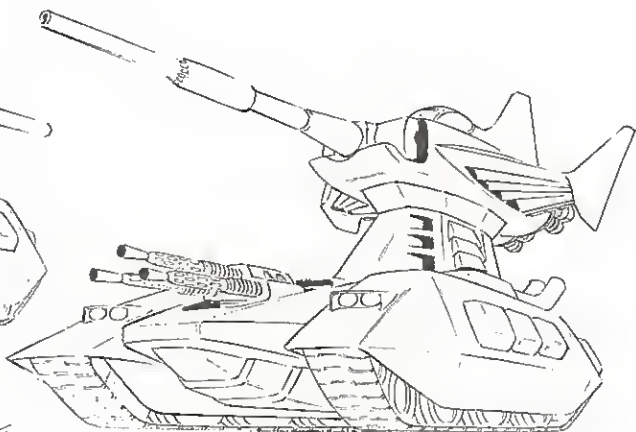
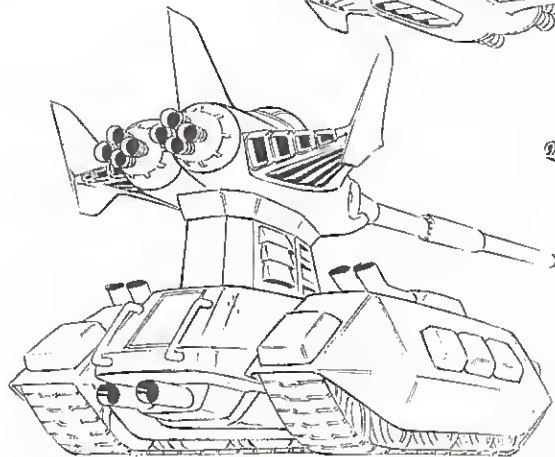
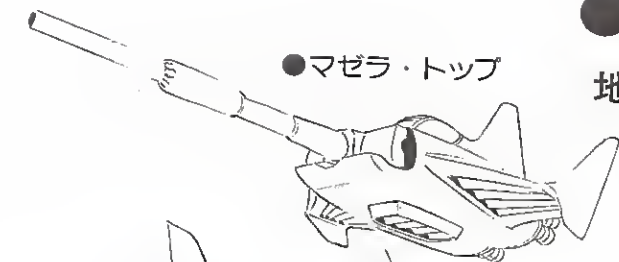
●コクピット③

●メカニック設定 8

地上攻撃用／マゼラ・アタック

●マゼラ・トップ

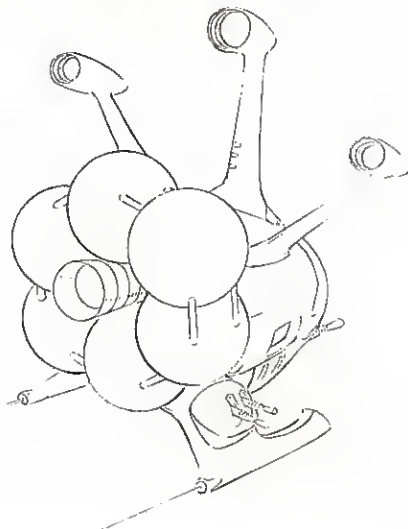
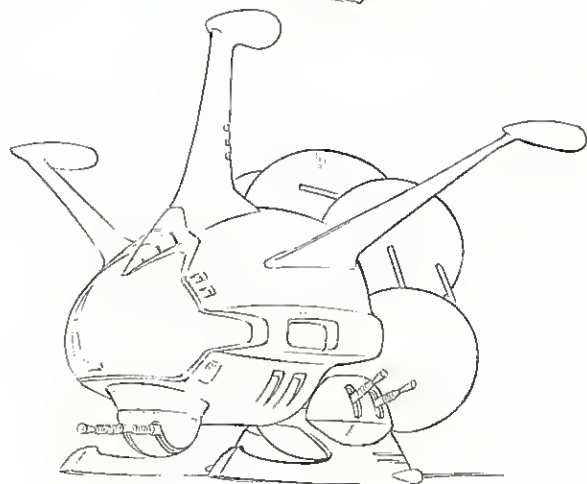
■ジオン公国地球方面軍所属の地上攻撃用。砲塔は離脱して別攻撃を加える。(マゼラ・トップ)。砲台は移動機銃座。(マゼラ・ベース)



●ジョイント部 (マゼラ・ベース)

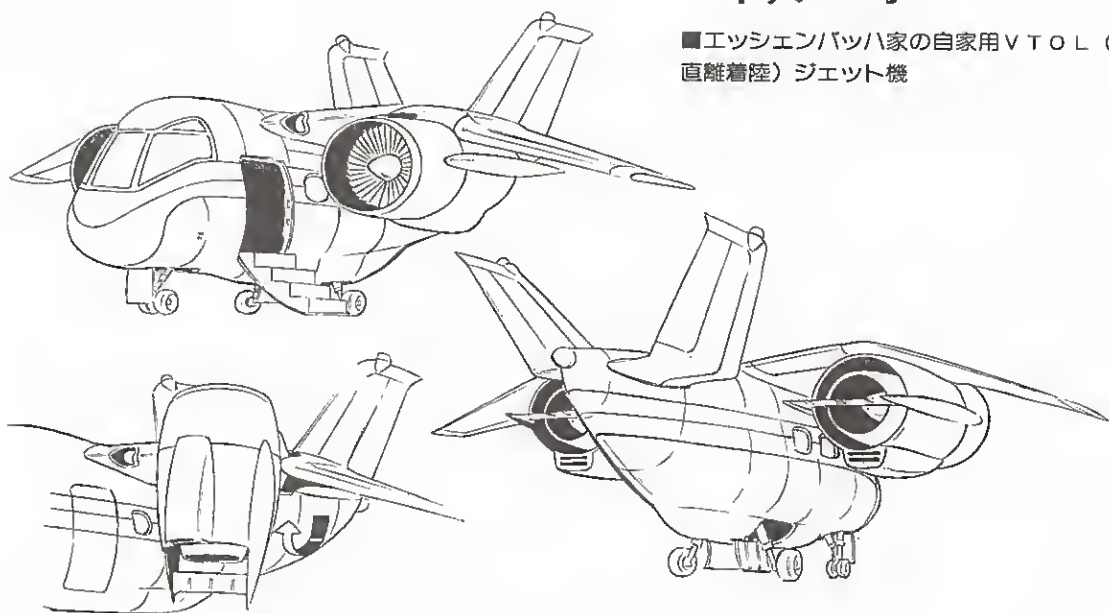
巡航船ソドン

■後部からザクなど補給物資を曳航することができ、二連装機関砲を3基備えている。

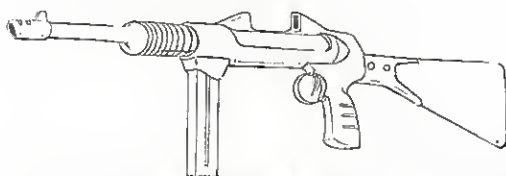


エイリアン号

■エッシェンバッツハ家の自家用V T O L (垂直離着陸) ジェット機

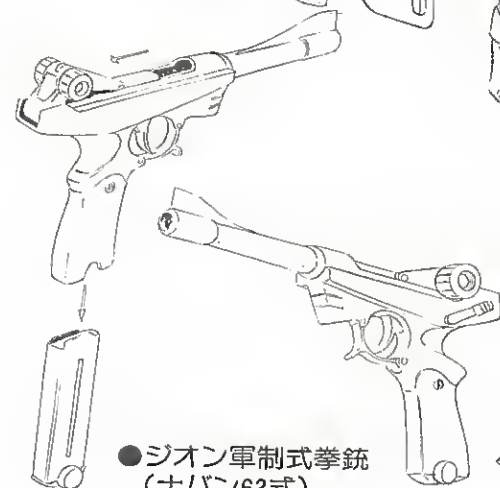
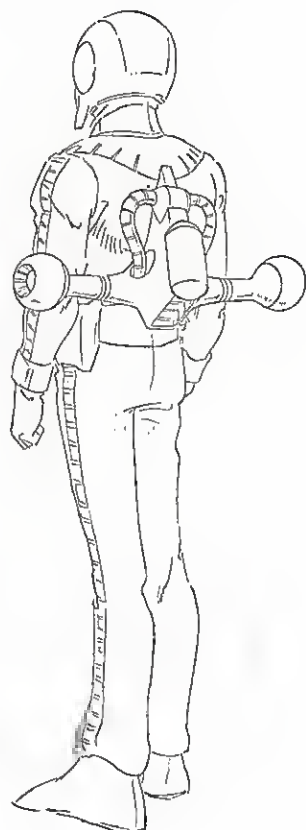
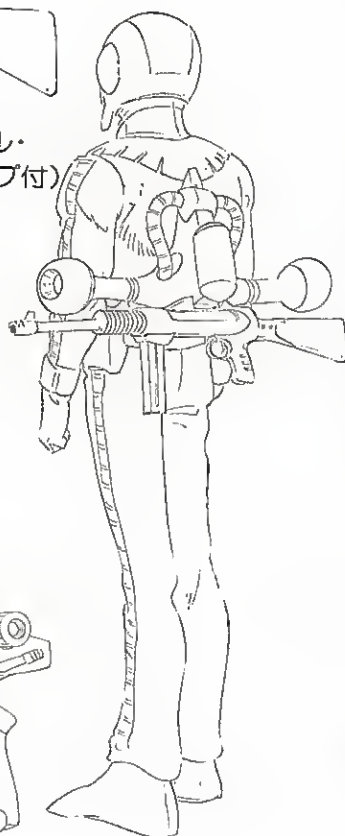


●ジオン軍制式無反動ライフル
(タイガー70-R)



●ランド・ムーバー

●ジオン軍制式狙撃銃(ノーマル・
スーツ着用時用のスコープ付)



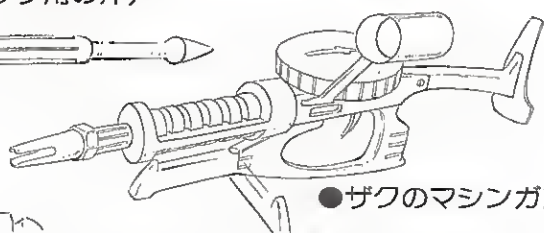
●ジオン軍制式拳銃
(ナバン62式)

●メカニック設定9

●モビル・スーツ回収
リフティングワイヤー

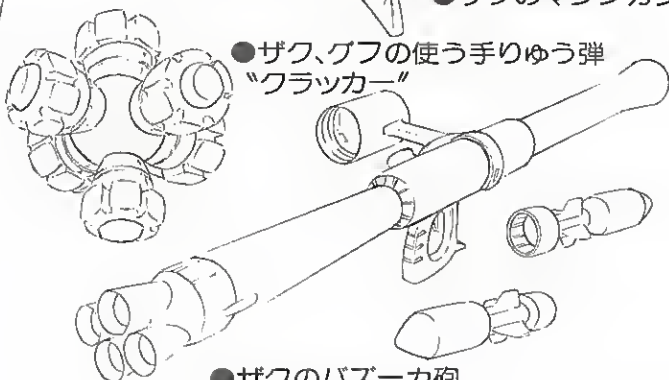


●ヒートホーク(ザク用の斧)

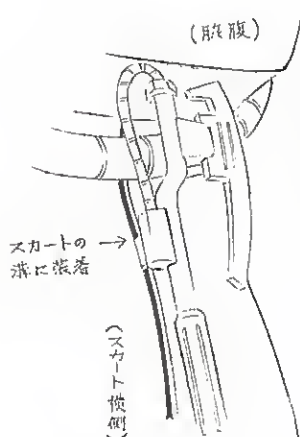


●ザクのマシンガン

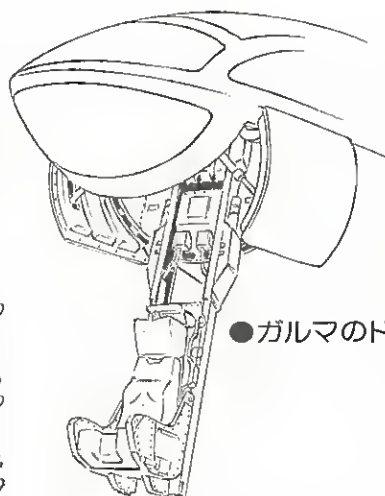
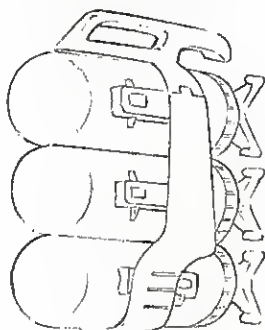
●ザク、グフの使う手りゅう弾
"クワッカー"



●ザクのバズーカ砲

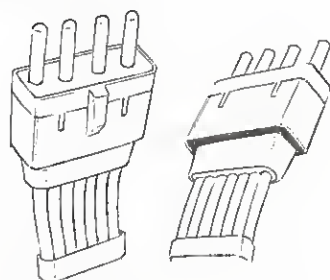


●機雷テック&キャリア

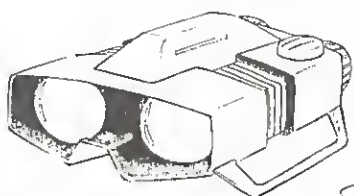


●ガルマのドップ

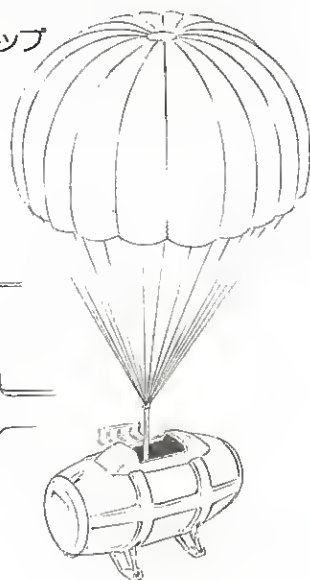
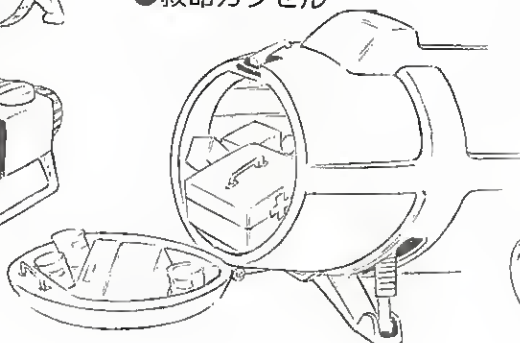
●救命カプセル



●シャアがいじるジャック



●ステレオ・カメラ



制作スタッフリスト ● 放映記録

第4話 ルナツト脱出作戦

昭和54年4月28日放映

●脚本／山本俊 ●演出／貞光紳也 ●作画監督／富沢和雄 ●作画／スタジオZ (長崎重信、鶴島修、平山一) ●背景／アッブル (渡辺毅、渡部孝、動画チエック／浜津守 ●仕上／ディーン (仲良邦、後藤ひとみ) ●特殊効果／土井通明 ●撮影／旭プロ (平田隆文) ●編集／鶴淵友彰、小谷地文男 ●音響監督／松浦典良 ●効果／松田昭彦 ●監音／日向国雄 ●制作進行／滝口雅彦 ●設定制作／円井正 ●A.P. / 神田豊

第2話 ガンダム破壊命令

昭和54年4月14日放映

●脚本／松崎健一 ●絵コンテ／斧谷稔 ●演出／藤原良二 ●作画監督／安彦良和 ●作画／山崎和男、前島和子、戸川俊信、笹木寿子 ●背景／アッブル (渡辺毅、渡部孝) ●動画チエック／浜津守 ●仕上／ディーン (長谷川洋、満江敬雄) ●特殊効果／土井通明 ●撮影／旭プロ (平田隆文) ●編集／鶴淵友彰、小谷地文男 ●音響監督／松浦典彦 ●効果／松田昭彦 ●監音／日向国雄 ●制作進行／草刈忠良 ●設定制作／円井正 ●A.P. / 神田豊

第3話 敵の補給線を叩け!

昭和54年4月21日放映

●脚本／荒木芳久 ●絵コンテ／斧谷稔 ●演出／小原英吉 ●作画監督／安彦良和 ●作画／上条修、高木敏夫、広岡光昭、林良男 ●背景／アート、ティク、ワン (清水昭紀、加藤明美) ●動画チエック／浜津守 ●仕上／シャフト (西牧たみ子、浅賀チエコ) ●特殊効果／土井通明 ●撮影／旭プロ (齊藤秋男) ●編集／鶴淵友彰、小谷地文男 ●音響監督／松浦典良 ●効果／松田昭彦 ●監音／日向国雄 ●制作進行／望月真人 ●設定制作／円井正 ●A.P. / 神田豊

第5話 コアファイター脱出せよ

昭和54年5月19日放映

●脚本／荒木芳久 ●演出／藤原良二 ●作画監督／安彦良和 ●作画／上条修、伊東誠、戸川俊信、林良男 ●背景／アート、ティク、ワン (清水昭紀、加藤明美) ●動画チエック／浜津守 ●仕上／シャフト (森山政子、長谷川悦子) ●特殊効果／土井通明 ●撮影／旭プロ (齊藤秋男) ●編集／鶴淵友彰、小谷地文男 ●音響監督／松浦典良 ●効果／松田昭彦 ●監音／日向国雄 ●制作進行／望月真人 ●設定制作／円井正 ●A.P. / 神田豊

第8話 戦場は完野

昭和54年5月26日放映

●脚本／松崎健一 ●演出／貞光紳也 ●作画監督／山崎和男 ●作画／広岡光昭、前島和子、林良男、笹木寿子 ●背景／アッブル (渡辺毅、渡部孝) ●動画チエック／浜津守 ●仕上／ディーン (海江田裕子、齊藤一枝) ●特殊効果／土井通明 ●撮影／旭プロ (平田隆文) ●編集／鶴淵友彰、小谷地文男 ●音響監督／松浦典良 ●効果／松田昭彦 ●監音／日向国雄 ●制作進行／植田益朗 ●設定制作／円井正 ●A.P. / 神田豊

第9話 翔へガンダム

昭和54年6月2日放映

●脚本／小原英吉 ●絵コンテ／斧谷稔 ●演出／小原英吉 ●作画監督／安彦良和 ●作画／田島英、多賀かずひろ、戸川俊信、林良男 ●背景／アート、ティク、ワン (東條俊秀、那須野幸子) ●動画チエック／浜津守 ●仕上／シャフト (三橋曜子、露木智恵子) ●特殊効果／土井通明 ●撮影／旭プロ (齊藤秋男) ●編集／鶴淵友彰、小谷地文男 ●音響監督／松浦典良 ●効果／松田昭彦 ●監音／日向国雄 ●制作進行／豊住政弘 ●設定制作／円井正 ●A.P. / 神田豊

第10話 ガルマ散る

昭和54年6月9日放映

●脚本／山本俊 ●演出／藤原良二 ●作画監督／安彦良和 ●作画／林和男、田中健、海藤裕美子、三島美千代 ●背景／アッブル (渡辺毅、渡部孝) ●動画チエック／浜津守 ●仕上／ディーン (谷かすみ、木村容子) ●特殊効果／土井通明 ●撮影／旭プロ (平田隆文) ●編集／鶴淵友彰、小谷地文男 ●音響監督／松浦典良 ●効果／松田昭彦 ●監音／日向国雄 ●制作進行／草刈忠良 ●設定制作／円井正 ●A.P. / 神田豊

第11話 イセリナ恋のおと

昭和54年6月16日放映

●脚本／荒木芳久 ●演出／貞光紳也 ●作画監督／大泉孝 ●作画／長崎重信、鍋島修、亀垣一、越智一裕 ●背景／アート、ティク、ワン (清水昭紀、加藤明美) ●動画チエック／浜津守 ●仕上／シャフト (森山政子、古安多恵子) ●特殊効果／土井通明 ●撮影／旭プロ (齊藤秋男) ●編集／鶴淵友彰、小谷地文男 ●音響監督／松浦典良 ●効果／松田昭彦 ●監音／日向国雄 ●制作進行／望月真人 ●設定制作／円井正 ●A.P. / 神田豊

第12話 ジオンの脅威

昭和54年6月23日放映

●脚本／松崎健一 ●絵コンテ／斧谷稔 ●演出／横山健一郎 ●作画監督／中村一夫 ●作画／中村プロ (西城明、醍醐芳晴、齊藤隆) ●背景／アッブル (渡辺毅、渡部孝) ●動画チエック／浜津守 ●仕上／ディーン (田中美和子、松田典子) ●特殊効果／土井通明 ●撮影／旭プロ (平田隆文) ●編集／鶴淵友彰、小谷地文男 ●音響監督／松浦典良 ●効果／松田昭彦 ●監音／日向国雄 ●制作進行／入木岡正美 ●設定制作／円井正 ●A.P. / 神田豊

●キャスト & 声優リスト

第4話 ルナツィ脱出作戦

●アムロ／古谷徹 ●ブライト／鈴置洋
孝 ●リュウ／飯塚昭三 ●ハヤト／鈴木
清信 ●カイ／古川登志夫 ●フラウ／鶴
飼るみ子 ●ミライ／白石冬美 ●セイラ
／井上瑤 ●キツカ／井上瑤 ●レツ／鶴
飼るみ子 ●カヅ／白石冬美 ●シヤア／
池田秀一 ●ドレン中尉／永井一郎 ●マ
チュ／政宗一成 ●フィックス／古川登
志夫 ●ワッケイン司令／曾我部和行 ●
ワッケインの副官／広瀬正志 ●パオロ
艦長／政宗一成
●ナレーション／永井一郎

第5話 大気圏突入

●アムロ／古谷徹 ●ブライト／鈴置洋
孝 ●リュウ／飯塚昭三 ●ハヤト／鈴木
清信 ●カイ／古川登志夫 ●フラウ／鶴
飼るみ子 ●ミライ／白石冬美 ●セイラ
／井上瑤 ●カヅ／白石冬美 ●レツ／鶴
飼るみ子 ●シヤア／池田秀一 ●ドレン
中尉／永井一郎 ●スレンダー／鈴木誠
一 ●ドズル／長堀芳夫 ●パオロ艦長／
政宗一成 ●マーカー／古川登志夫 ●オ
スカ／鈴木清信 ●フラウの母／鈴木れ
い子
●ナレーション／永井一郎

第6話 敵の機體を叩け!

●アムロ／古谷徹 ●ブライト／鈴置洋
孝 ●ハヤト／鈴木清信 ●リュウ／飯塚昭
三 ●カイ／古川登志夫 ●フラウ／鶴飼
るみ子 ●セイラ／井上瑤 ●ミライ／白
石冬美 ●シヤア／池田秀一 ●ドレン中
尉／永井一郎 ●ガダル／水島鉄夫 ●ド
ズル／長堀芳夫 ●パオロ艦長／政宗一
成 ●キツカ／井上瑤 ●カヅ／白石冬美
●マチュ／政宗一成 ●オペレーター／
竜田直樹 ●ハロ／井上瑤
●ナレーション／永井一郎

第10話 ガルマ散る

●アムロ／古谷徹 ●ブライト／鈴置洋
孝 ●リュウ／飯塚昭三 ●カイ／古川登
志夫 ●フラウ／鶴飼るみ子 ●ミライ／
白石冬美 ●シヤア／池田秀一 ●ガルマ
／森功至 ●ドレン／永井一郎 ●イセリ
ナ／潘恵子 ●エツシエンバツハ／飯塚
昭三 ●マーカー／古川登志夫 ●カヅ／
白石冬美 ●レツ／鶴飼るみ子 ●商人／
戸谷公次 ●淑女／井上瑤 ●司令／古川
登志夫
●ナレーション／永井一郎

第11話 イセリナ恋のあと

●アムロ／古谷徹 ●ブライト／鈴置洋
孝 ●ハヤト／鈴木清信 ●リュウ／飯塚
昭三 ●セイラ／井上瑤 ●ミライ／白石
冬美 ●シヤア／池田秀一 ●ドズル／長
堀芳夫 ●ギレン／田中崇 ●デギン／永
井一郎 ●キシリア／小山まみ ●イセリ
ナ／潘恵子 ●ダロタ／古川登志夫 ●ド
レン／永井一郎 ●マーカー／古川登志
夫 ●オスカ／鈴木清信 ●カヅ／白石冬
美 ●レツ／鶴飼るみ子 ●キツカ／井上
瑤
●ナレーション／永井一郎

第12話 ジオンの脅威

●アムロ／古谷徹 ●ブライト／鈴置洋
孝 ●リュウ／飯塚昭三 ●フラウ／鶴飼
るみ子 ●セイラ／井上瑤 ●ミライ／白
石冬美 ●シヤア／池田秀一 ●ガルマ／
森功至 ●デギン／永井一郎 ●キシリア
／小山まみ ●ギレン／田中崇 ●ラル／
広瀬正志 ●クランブ／塩沢兼人 ●ハモ
ン／中谷ゆみ ●側近／戸谷公次 ●ジョ
ブ・ジョン／塩沢兼人 ●マーカー／古
川登志夫 ●アコース／鈴置洋孝 ●コス
ン／戸谷公次 ●キツカ／井上瑤 ●レツ
／鶴飼るみ子 ●カヅ／白石冬美
●ナレーション／永井一郎

演出ノオト

原作・監督／富野喜幸



世の中、作品の観方はいろいろあるわけだけど、アウトの4月号の評論を読んですごく納得するわけ……。

自分の不足分を指摘され、とくに流山氏の語りには感動さえするわけで、もし諸君が、ガンダムファンであるのなら、あの『自閉症』という部分の主張を、諸君の生理の中で正しく受けとめて欲しいと思うのだ。

一つだけ言わせて貰うと、流山氏をご指摘されるほど自分では、自閉症のつもりはないけど、その気配はあると感じているわけで凄と思うのよね。

で、ニュータイプのこと、いろいろな意味で（特にアニメ・ジューンの指摘なんか正確なわけで）とにかく、全部の方の指摘は正しいと判断する。

しかし発表した結果がどうであれ、創ってしまったことは事実であって、恥をしのんでこんな原稿を書く……。

こりや、想像を絶するほど恥しいことなんだけど、人間、一度踊りを踊ると最後までやらにやらないという証明で、諸君は僕の二の舞にならぬようにと忠告する。みつともないのだから……。

◆ 本音について……

ガンダムが、なぜあのような物語になったのか？ その本音を、まず書いてみよう。

本来、書いてはならぬこともかも知れぬのだが、これを抜きにすると、制作意図の根本が判らず、以後の細かい制作や演出の展開の本当の意味（なぜ、あのようにハードにならざるを得なかったか、という意味）が、判らなくなるからだ。

ガンダムの全てが、この本音を支えるために創られたものであり、その意気込みが作品創りの根本になければ、本来のものの創りはできないはずだと、自負するからでもある。（と、やや酔っぱらって書いている気分も、この限定

出版物であるが故に、許されよう）

さて、本音――

一九七九年の中期に出版されたアニメファンジンの雄「ファントム・シチュ」の中の、僕のインタビュー記事をお読みにになった方が何人いるか知らぬが、あそこに、その本音がある。

不幸にして、「ファントム・シチュ」は個人誌ゆえに発刊部数が極少であり、お目にかかったこともないという方のために、一部分を転載させて貰おう。

以下、同誌の復刊第2号の14頁にある一項で、僕のコメントが次のように要約されている。

「つまりロボットが出るということ、が絶対条件として存在することは、一見、物語の発想を根絶させる力を

持っているわけなんです。

そして戦闘なりギャグなりが、一話にどのくらい入っているかが、問題となります。

この二つの条件に、さらに物語が一パターンになる物理要因が付加されるわけです。

例えば、博士とか隊員とか、合体シーンとか、山ほどある。それらの物的条件をすべて兼ね備えながら、尚かつ新しい世界の構築なんてあるわけがない。……とまで言えるわけで、その条件をすべてとは言わないけれど、半分ぐらいはのみこんで話を創ってゆく事には、極度の忍耐と条件を乗り越えようとする熱意が、要求されるということですよ。」

これだけではなく、その前に、こうも言っている。

「たかがロボット物じゃあないか！ という評価をはねつけるという願いをかなえ、ロボットものにある話の制約をはらうだけの、内容のある作品を創り上げるといことです。」

つまり、これが本当の本音であるわけで、その方法論が、同誌の15頁に示されているコメントに要約できよう。

「つまり、今までのロボット・アニメのように、怪獣、出撃、そして大暴れというようなパターンは無い、ということですよ。」

これが、まず第一の制作論というか演出の方法論であるわけで、本音をいかに作品に貫徹させるかのとっかかりであるわけ。

◆ 具体的な物語の展開……

しかし、とっかかりはとっかかりであって、それ以上のものではない。これだけで43回分のストーリーが創られるのなら苦勞はまるでないわけだが、そうはいかないところが辛い。

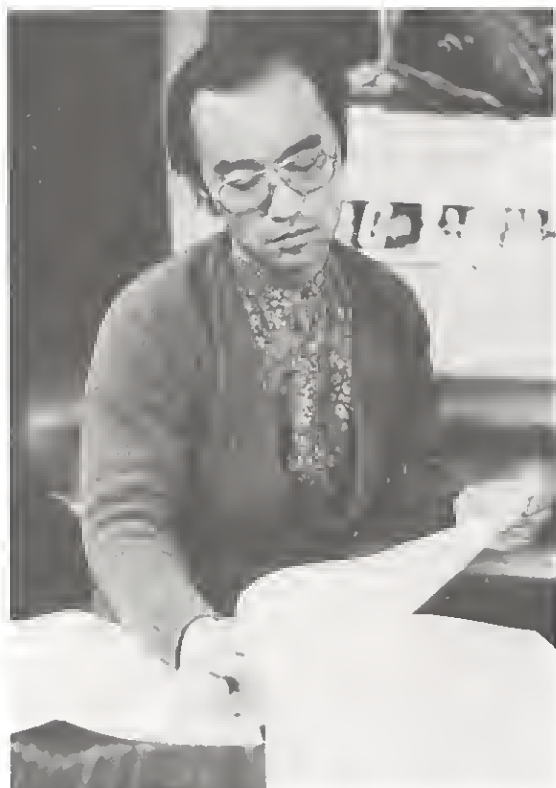
そこで、さらに同誌のコメントから引用させて貰おう。

「確固たる人間ドラマを、創り上げようというテーマですね。」

であり、さらに「青春群像物語が、ロボット物の中で出来るかどうかです。」

と、いう僕自身の不安に対してのチャレンジということが、具体的な物語の展開を発想させることになるわけ。

そのための具体的な手段としてのキャラクターの基本設定を、従来、この種の作品にありがちな性格設定を排するという処に、その物語の展開の糸口を見つけようとした。



しかし、注意して欲しいのは、そのような少年の表現といつても、いくらでも演出の仕方があるわけで、気弱かも知れぬというキャラクターを描くだけでも30分使った場合だつてあるわけで、それをガンダムの第一話では次のように示したわけだ。





—アムロが朝食も忘れて、マイ・コンの組立てをしているだろうと思わせる、フラウ・ポウのイントロのセリフ

—机から立ち上り、背のびをする描写
*ファイル①参照

—防突カプセルでのモノローグの気分
*絵コンテ①参照

＊ファイルムの参照
—思わずガンタムの設計図に見入って
しまうというアムロの演技の展開

*ファイル③参照

日	ビデオチュア	内容	セリフ
37		靴で下し おまじでー	ん
38		41-2C110	(110) 110-540 110-560 (740) (740) 110: 今朝の 110 (110) 41-2C110
39		75-2下 史 511 と入れこ	(75) 何着てい つた。740。 (740) ...
		61-212	(75) 740? (740) 212-110 (740) 212-110 (75) 212-110 (740) 212-110

●絵コンテ①第1話より



●フィルム②第1話より



●フィルム①第1話より

等々の積み重ねが、まあ、第1話で
 アムロ、レイという過去のパターンに
 ない主人公（メカもの、ロボットもの）
 という作品ジャンルでの印象づけに
 精力を投入したわけなのだ。



●フィルム③第一話より

◆ 本音を貫徹させるために……

しかし、この項の主題論にもう一度戻ろう。

フアン・トーシユの引用で判る通り、たかがロボットものだろう、という評価をはねのけてゆくために、この作品の主題が何か、という概念づけを極度に高度（この表現はウソに近い）な処に設定しなければ、作品のフィーリングがロボット物的になって終ってしまうのではないかと考えて、そのことがアムロというキャラクターを、生かすも殺すものになると、やや大上段に構えたのである。

これについての賛否はあろうが、この一見高度にみえるかも知れぬテーマに、ヘニュータイプ論を想定した、ということなのだ。

これがなければ、いくらキヤラクタ
ーたちがリアルっぽく動くように演出

そう言われても、やむを得ないと考えるから、腹も立てぬ。所詮、下手な総監督と笑ってくれてかまわぬ。

◆ ニュータイプへ至る作劇

設定書・原案中の「男としての存在」の項の最後に、

「恐らく主人公に近い女性が、主人公かそれに近い男に對して、
「私は、あなたの子供を生みたかった。今になって、そう思えます。」
という語りで終ることになる。」

この書き方も、ニュータイプの想定をしていない表現なわけで、確かにとってつけたようなニュータイプ話ではないように思えよう。

事実、あの設定書を書いたのが一九七八年の十月〜十二月にかけてであり、設定書を書いた瞬間に関して言うならば、ニュータイプという単語を創造していなかったことは事実だ。が、右のような漠然とした想定（ラスト・シーンの）をしながら、この科白をそのまま使えるようなドラマ創りは無理だ、とも思っていたのだ。

その第一の理由が、ガンダムがロボットのものであり、第二にSF的作品だからだ。

設定書に書いた科白そのままが使えるようなラスト・シーンは、間違いなくメロ・ドラマか、そうでなければ実写といわれている実際の人物を使って撮影したフィルムでなければ、使えない科白だと考えていた。

しかし、設定書という制作者の基本

姿勢を示すものにあつては、あのような表現のままの方が、一般的に判りやすいだろうとあの表現を残して、局・代理店・スポンサーに對しての、基本的な作品イメージの説明をしたわけなのだ。

しかし、一般的な作品イメージを植えつける科白としてはあれでよかったが、次にひかえているSF的な表現として最善なのかどうかは、全く別だ。

ここが大切な処で（本当かな？）、マニアは表現方法を問題とするわけだが、表現はSF的でなくてはいいのだし、かといって、一般視聴者はマニアばかりではない。

設定書にあるような生身のキャラクターの気分を伝えながら、SF的表現は何なのかと、これは一カ月近くも考えた。

そして、思いついたのが、ヘニュータイプ。

この単語を思いついた時の嬉しかったことは、まず、読者諸君にどこまで判って貰えるか？

◆ ニュータイプについて……

が、発想と思いつきはいいとして、それだけで物語は創れないのがつらいところなのだ。

それで、こう考えた。

ヘニュータイプは、新人類。新人類は、人類そのもののルネッサンス、つまり再生だ。しかし、その人類のルネッサンスのタイプとは、何なのか？
そこで……（と、本当は、これ以後のことは書きたくないのだが、これは限

定本ということだから書きます。他の人には話さないで下さい。僕のメシ、種を公開するのだから……）

現在より進化する人類の型は、俗に神様なんだよね。と、思ってしまったわけだ。が、これでは通俗的だし、だいたい神様を持ち出した瞬間に、物語というのはいくらでも逃げ道ができてしまう。

神様はオールマイティ（全能者）なのだから、何をやってもいいことになる。

大切なことは、このことなのだ。何をやってもいい、という事は、何をやっても、

「あつ、こういう逃げ道もあるのか、こういう考え方もあるのか……？」
ということになつてしまつて、感動がくるよりも、作り手の逃げ道を示したことで終りになつてしまふ。これではドラマ（物語）としての面白さはなくなつて、いらけて終るだろう。

そう感じさせないためには、どうしたらいいのか？
概念論としての展開で終ることは、易しいといえる。なぜなら、

「人類は再生する手がかりを、アムロやラアアから学び、明るい未来建設のために邁進するであろう」

などというナレーションで終ることを想像してみたまえ。

これは論文であつて、ドラマではない。と、考えるのだ。

No.	ピラチュア	四	セリフ	枚数
	あ、397はち			
397		コソフターやく(フット)		50
398		コソフターやく(フット)		70
399		コソフターやく(フット)		220

●絵コンテ②第43話より

そしてドラマの骨幹とは、人によって示される情の世界である。という、シナリオ講座的なセオリーに従ったとき、全くセオリーに反するわけだ。これでは、たとえパートIの終了であつても終りではなからう。論文とかで概念論の展開をするのが、アムロやセイラの物語ではないし、まして、ラアの導く世界の物語とか、未来が広大に展開することを予測させる終局とはなり得ない。

キャラクターの痛みや期待を含めて、それら全てがキャラクターの芝居によつて、象徴されなければならないのがドラマである。その芝居によつて語られる哲学(うわつ々ギザ!!)さえも、暗示させなければならない。

これが、シナリオ講座的な基本的な教えなのだ。

それをつきつめていった時に、あのラスト・シーンが成立するわけ。

(と、勢いで書いてみたけれど、ウソですね。あの方法しかないなんて、あり得ない……。)

判らない? 判らなければ、それはそれで有難いと思う。僕の食いふちを持つていかれないと、安心するまでなのだから……。

けど、間違ひなく右の文章が、僕の思考型のパターンなのであつて、これ以上、上手には文章にすることはできない。とはいえ、一つだけ忠告をする、一人の作りのノウ・ハウが判つたからといって、それは絶対的なものではないのだから、多くの作劇例を学ぶ必要があるという事実なのだ。

◆具体的演出論 各論に入ろう。

ニュータイプという言葉が見つかった時、この概念の定義づけをしなればならなかったわけで、これは、朝日ソノラマ社の拙書に書いてあるので省略させていただく。まあ、処女作で読みにくい文章であることが申し訳なく思うが……。

その概念は、良く言えば哲学的、悪く言えばサイボーグものやエスパーもののパターンで、ちつとも新しいものではない。いくら上手に解説したところで、判りにくいものだろうとは予想はした。しかし、ニュータイプという造語が気に入った僕は、なんとこれもこれをドラマの核としておきたいと考えたものだ。(余談だが、全く別の意味、つまりニュータイプの人という意味で、ニュータイプという言葉を使っている雑誌があるのを、ご存知だろうか?)

で、ニュータイプを一つの概念として、なるほど、あり得るな」と思わせるために、ガンダムという作品の全体を、リアルな質感(タツチ)で描く必要があると判断した。

なぜ?

観念が翔ぶから、としか答えようがない。観念が翔ぶから、まずは作品世界をリアルっぽく描く事によつて、そのニュータイプの観念を本当らしくみせることができるだろうという判断だ。(まずいな。本音を書きすぎる。この方法論は、ひよつとしたら、あ

らゆる作品の演出論として通用する)そしてこの発想が、人と人との触れあひのあらゆる面で、本当らしくあらねばならないという演出タツチと、ストーリー構造を生むことになる。

◆ミライについて……

その具体例を示そう。

例えば、2話でのミライの登場だ。

ミライの登場前には、彼女の説明は何一つなされていない。にもかかわらず、立たせた。

彼女の性格ならW・Bに逃げ込んだ時、目の前の負傷兵の手当てでぐらいしているだろう。そういう状況(シチュエーション)なら、彼女は負傷兵の手当てをしている処から、立ち上らせることから始まって不思議ではないだろう。

この考え方と、構成の按排(古い言葉だが)がコンテにあるような描写となる。が、それではミライの性格は判つても全体像は判らぬ。で、バオロ艦長のリアクション(反応)を入れたわけだ。

そのことは、さらにジャブローである提督の科白によつて、さらに補強されることになる。

これで、ミライの過去の状況が明確になるわけだ。そのことが、ブライトのリアクションへとつながると、一見どうということのない画面の積み重ねが、人の情をかいま見させることによつて、視聴者はキャラクターへの面白味を感じるのではないかと思う。

S.	ビクチュア	内容	セリフ
85		木下月夜に （アサ）...？ アサ... あの、八洲 家？	（アサ） はい... お客の 時分... （アサ） え、はい...
		アサ... アサ... アサ... アサ...	アサ... アサ... アサ... アサ...
86		アサ... アサ... アサ... アサ...	アサ... アサ... アサ... アサ...
		アサ... アサ... アサ... アサ...	アサ... アサ... アサ... アサ...

●絵コンテ④第2話より

S.	ビクチュア	内容	セリフ
143		アサ... アサ... アサ... アサ...	アサ... アサ... アサ... アサ...
144		アサ... アサ... アサ... アサ...	アサ... アサ... アサ... アサ...
145		アサ... アサ... アサ... アサ...	アサ... アサ... アサ... アサ...

●絵コンテ⑥第29話より

S.	ビクチュア	内容	セリフ
87		アサ... アサ... アサ... アサ...	アサ... アサ... アサ... アサ...
88		アサ... アサ... アサ... アサ...	アサ... アサ... アサ... アサ...
89		アサ... アサ... アサ... アサ...	アサ... アサ... アサ... アサ...
90		アサ... アサ... アサ... アサ...	アサ... アサ... アサ... アサ...

●絵コンテ③第2話より

S.	ビクチュア	内容	セリフ
125		アサ... アサ... アサ... アサ...	アサ... アサ... アサ... アサ...
126		アサ... アサ... アサ... アサ...	アサ... アサ... アサ... アサ...
127		アサ... アサ... アサ... アサ...	アサ... アサ... アサ... アサ...

●絵コンテ⑤第29話より

これが創り手の発想であり、具体的な演出テクニクである。

結果論？それは言えよう。

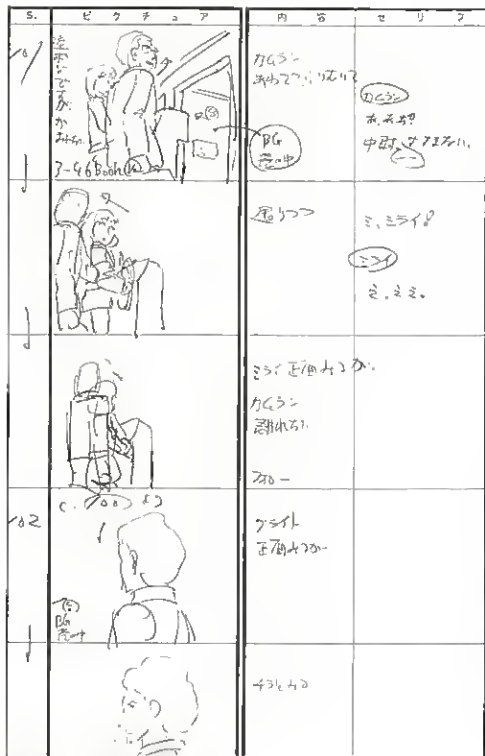
しかし2話で行なったミライの行爲と、同じく2話でやった、セイラにモーションをかけるブライトという性格とを照し合せてみたまえ。
*フィルム④参照
いつか、ブライトはミライへと気持を移してゆかざるを得ないということは、明白なのだ。そのブライトをして軽薄な奴とは、誰も言わないだろう？

そう、ブライトは当り前の男の子なのだから……。でなければ、その後、ミライの処へ昔の許婚者カムランが現われた時、あんなにリアクションをしたって面白くも可笑しくもないはずなのだ。
*絵コンテの参照

これが、人の様なのではないのだろうか？



こういった、かなり現実的にありそうな人びとのリアクションをひろい、積み重ねることによって、リアルな作品への仕上がりができる。僕は信じる。何度でもいうが、他にも方法論があるが、僕にはこれしかできないからこうなのだ。他の例題と解答は、他の作品によって検討して欲しい。



●絵コンテ⑦第33話より

◆再び、ニュータイプについて...

さて、もう一度ガンダムに戻ろう。大きな構成として、ランバ・ラルとハモン夫妻（正式に結婚しているかどうかは、かなり怪しいが……）のことをとりあげよう。

この事は、アムロがW・Bを脱出した事実を設定した時に思いついたキャラクターであり、かつ、この夫妻に会わせることを目的に、アムロに脱出させたといえるからだ。そして、この人物はガンダムのテーマ全体にとっても、大切なキャラクターとして位置づけてある。

つまり、ニュータイプたる人物は、全的に人を知らねばならぬのではないのか？ その時、アムロの前に、全的人を明確に判らせられるソフト（配置）が、どういう処にあるのか？ 単的に見せられる画面とドラマは、何であるのか？ という発想が、あの夫妻の設定なのだ。

夫婦なら、人の男と女ということを明確に伝えよう。

しかし、ただの夫婦であった時、大人の男と女の姿をアムロに見せられるのか？ と考えた。ただの夫婦だと男と女のことを抜きにして、一組の男女と見てしまつて終るだろうと思つたのだ。で、生理的に男と女をきわだたせる人物（キャラクター）として、ラルとハモンのような設定へと思いつた。

僕は、個人的にはマチルダ・アジャン中尉よりハモンが好きだ。（本名はクラウレ・ハモンという。籍に入つて

いればハモン・ラルなのだが、それは不明解だ。変だね！）

一般的には、マチルダが好きだと言つておいた方が判りやすいから、アウト誌にはマチルダが好きだと書いて貰つた。

12話ではハモンとラルの初登場がある。そこでの会話を思い出して貰おう。

*絵コンテの参照

夫婦のようでありながら、普通の夫婦とは違う、という樹白の展開には苦勞した。つまり、

「本来なら、部下と指揮官のわたしたちだが、一緒に生活している仲間から……」

とかの、説明的な科白ではなく、二人の関係を表現するにはどうしたらよいのか？ ということを集申して考えたということだ。

◆出逢いについて……

それは、他の人びとの出会い全てに言える。

アムロとハモンの出会い。*絵コンテの参照

一つ数を多く注文するハモンとラルとの会話を通して、ハモンがアムロという少年を気に入り、子と感じていることの表現。そして、そのハモンの表現が不自然にならぬように、ハモンが来る前のアムロは、固いパンと水しか食べていないという芝居。ここのアニメーションは、ガンダムの中でも最も良い部分と言えるのではないのか？ アニメーターの力に感謝する。

No.	18	日本サンライズ		
S.	ビクチュア	内容	セリフ	秒数
1		ハニ おやい	ハニ 何それかい おまのそのお人分 や。	
2		ハニ	ハニ はー。はい。 ハニ (苦中) ハニ 笑っているハニ。	
3		ハニ	ハニ 年の少年にも ハニ ー?	10
4		ハニ 'と?' ハニ いる場所では ハニ		12
5		ハニ	ハニ ー。おまかせ ハニ	
6		ハニ	ハニ おまかせ ハニ (苦中) ハニ お人分が笑い ハニ か?	10

●絵コンテ⑨第19話より

(22+12)

No.	ビクチュア	内容	セリフ	秒数
1		ハニ 30に病でず ありこ	ハニ おまかせ おま	

●絵コンテ⑩第12話より

18

No.	20	日本サンライズ		
S.	ビクチュア	内容	セリフ	秒数
76		00:46.6 00:47.0-2 ハニールが、あーあーと		60
77		00:48.0 00:48.5-2 ハニールが、あーあーと	00:48.5 360度、ロー ンカー前後!	
78		00:49.0 00:49.5-2 ハニールが、あーあーと	00:49.5 360度、ロー ンカー前後!	
79		00:50.0 00:50.5-2 ハニールが、あーあーと	00:50.5 360度、ロー ンカー前後!	
80		00:51.0 00:51.5-2 ハニールが、あーあーと	00:51.5 360度、ロー ンカー前後!	
81		00:52.0 00:52.5-2 ハニールが、あーあーと	00:52.5 360度、ロー ンカー前後!	
82		00:53.0 00:53.5-2 ハニールが、あーあーと	00:53.5 360度、ロー ンカー前後!	
83		00:54.0 00:54.5-2 ハニールが、あーあーと	00:54.5 360度、ロー ンカー前後!	
84		00:55.0 00:55.5-2 ハニールが、あーあーと	00:55.5 360度、ロー ンカー前後!	
85		00:56.0 00:56.5-2 ハニールが、あーあーと	00:56.5 360度、ロー ンカー前後!	
86		00:57.0 00:57.5-2 ハニールが、あーあーと	00:57.5 360度、ロー ンカー前後!	
87		00:58.0 00:58.5-2 ハニールが、あーあーと	00:58.5 360度、ロー ンカー前後!	
88		00:59.0 00:59.5-2 ハニールが、あーあーと	00:59.5 360度、ロー ンカー前後!	
89		01:00.0 01:00.5-2 ハニールが、あーあーと	01:00.5 360度、ロー ンカー前後!	
90		01:01.0 01:01.5-2 ハニールが、あーあーと	01:01.5 360度、ロー ンカー前後!	
91		01:02.0 01:02.5-2 ハニールが、あーあーと	01:02.5 360度、ロー ンカー前後!	
92		01:03.0 01:03.5-2 ハニールが、あーあーと	01:03.5 360度、ロー ンカー前後!	
93		01:04.0 01:04.5-2 ハニールが、あーあーと	01:04.5 360度、ロー ンカー前後!	
94		01:05.0 01:05.5-2 ハニールが、あーあーと	01:05.5 360度、ロー ンカー前後!	
95		01:06.0 01:06.5-2 ハニールが、あーあーと	01:06.5 360度、ロー ンカー前後!	
96		01:07.0 01:07.5-2 ハニールが、あーあーと	01:07.5 360度、ロー ンカー前後!	
97		01:08.0 01:08.5-2 ハニールが、あーあーと	01:08.5 360度、ロー ンカー前後!	
98		01:09.0 01:09.5-2 ハニールが、あーあーと	01:09.5 360度、ロー ンカー前後!	
99		01:10.0 01:10.5-2 ハニールが、あーあーと	01:10.5 360度、ロー ンカー前後!	
100		01:11.0 01:11.5-2 ハニールが、あーあーと	01:11.5 360度、ロー ンカー前後!	

●絵コンテ⑩第33話より

18

さらに、ミライとカムランの出会い。
*絵コンテ⑩の巻頭
ここではブライトの件もからんでく
るので、人物の点描、演出家の目のお
き方に大変な集中力を要する部分だ。
「再会できて嬉しいよ、ミライ!
元氣かい? ミライ。
戦争が始まってしまつて、君を探して
いる暇がなくて……」
などと、カムランが科白を重ねてしま
つたら、その後のスレッガーとの出
会いのシーンは、かくなつてしまつし、
最もまずいのは、カムランが一方的性
格の人間の、悪い面しか印象に残らぬ
こととなるわけで面白くない。
◆シャアとララアについて……
と、ここでもう一つの例。シャアと
ララアの件について……
アムロとシャアの出会いの、シャア
とララアとの科白展開は、あまり重要
ではない。(二人の描写にとって……)
後半の、テレビを見ているところのシ
ャアとララアの会話と、その気分の一
連を見直して欲しい。
この時は、すでに安彦君が倒れてい
たので画の表現としてはやや不十分だ
が、二人の関係を描く上で重要なニュ
アンスを加えているということだ。
これは、声優の池田君と潘さんにも
注意して演じていた点でもある。
二人は昨夜一緒に寝ている。という
気分をどう出すか? という点だ。かな
り、上手いといっているが自負している
ララアの甘えた気分と、それを許し
ているシャアの関係は、ひどく甘い
だ。ざれ合っている、気分。
アニメで、そんな人間関係の匂いは
いらないんじゃないか、という大人た
ちもいようが、これはニュータイプを
論じ、描いてゆく上で重要なことなの

だと、お判りいただけようか？

もし、ラアラがシヤアに対して、プラトニック・ラブ以上のものを感じていなければ、アムロとラアラの対立はあり得ないのだ。

ニュータイプへの感応は、絶対プラトニック的な理解の仕方だと考えたと、もし、シヤアとの肉体関係のないラアラなら、まずシヤアに対する未練なぞ一瞬のうちに消滅して、アムロの同志となってしまうだろう。

これでは41話のようなシーンは、生れようがないのだ。ラアラのシヤアへのこだわりが、アムロと同化できない自分を発見して、彼女が自滅していかざるを得ないのだ。

それ故に、ラアラの悲劇が成立する。

◆愛について……

肉体関係という表現は、純心な視聴者にとつては汚い言葉と受けとれよう。確かに、きれいな表現とはいえない。しかし、その行為が単なる動物的な嫌悪感のかたまりとするのも間違いだ。『愛』という言葉で飾って、男と女の問題の全てを浄化しようとするスタッフたちが、世の中にゴマンといるのも、僕は嫌悪する。

『愛』を真に語り得る力のない者が、『愛』をいう。これは『愛』という美しい日本語に対する冒瀆とさえいえる。

映画の宣伝文句に、安易に使って欲しくないのだ。殊に、男女の性愛(エロス)をもからめた愛なぞ一生をつかって解るが解らぬかぐらいに身をひいて語って貰いたいものだ、と思うのだ。

そして、その僕の決意が、ガンダムの中で、あらゆる意味での『愛』という言葉を使わなかったことにもあらわれている。

しかし、ハモンとラルは、愛し合っていないかった二人だったのだろうか？あの二人ほど愛し、信頼し合ったカップルはいなかったのではないかと思っている。二人のプライベートな生活は、作者とて覗いてはいないので判らぬし、また、二人の私室なぞ覗こうとも思わぬ。なぜなら、あの画面に現われている二人の人間だけで、充分に二人の関係が判るからだ。また、判るようにも描いたつもりだ。

その二人を見ているから、ラルの遺志を受け継いだハモンが出撃しようとして決意した時、あれだけの部下がついてきたのではなかったのか？

その、人と人のかかわり合いを見つめてゆく事が、ガンダムの演出の基本方針だったのだ。

で、ドラマっていうのは、そういうものののだろうかとも、思うわけ。

ハモンの補佐となっていた、タチ中尉。彼など、ハモンとラルの関係を羨ましく思っていたらう。

そして、こつとも一人の男性に傾倒しているハモンの女としての表われ方に好感を抱いていたらう、と思う。でなければ、ラルの死んだ後、逃げ出していたかも知れぬのだ。さらに、戦いの後もしハモンが俺の方をみてくれたら、一緒になってもいいとぐらい、考えていたかも知れない。

やさしき、でもいい。そして、助平根性もあろう。が、そんな気分がないまぜとなつたタチ中尉に、男としての好感を抱く。だから、ハモンだつて生き残つて数年すれば、彼と一緒に生きていたのではないかな？

当方の描き方が下手なのだから……。しかし、一つだけ言わせて欲しい。ニュータイプとの関係のない話としては、ちよつとボリユームがありすぎるとは思わなかったらうか？

◆ニュータイプへ至る伏線

伏線。シナリオ講座的にいうと、クライマックスを暗示させるための道具だ。それを伏線という。

さらに、従来のアニメの作品に現われている敵の描き方としては、ちよつと変つていとも思わなかったらうか……？そう考えていただければ、少しは判つてくれるはずだろう。

それをもっと広く解釈すると、性格を描くための何かを置くとか、その描写することを明からさまにはなく、いろいろな状況とか描写の中に、キャラクターの性格とか考え方をそれとなく前もって描いておくことを、伏線を張る、というのが、この技術的な方法はいろいろある。

アムロが、ニュータイプへの道をたどる過程で大切なことは、片寄った人生遍歴であつてはならないのではないか、と考へたことなのだ。なぜか……

それを、あるファンは、明確に解説してくれた。

「ニュータイプとは、(己れの)精神のすみずみまで、判る人のことなのですね」

巨大な伏線、細い伏線と、ね。この辺を具体的に知りたい方は、シナリオ作法の入門書を読んで貰うとして、ガンダムの場合、このランバ・ラル夫妻は、ニュータイプへ至る大きな伏線となつている。

……と。判るだろうか？我われ(君たちも含めてだがね)は、自分自身の考へという部分ではなく、精神というもつと巨大で、抱えどころのない自分自身の力のこととを、どれだけ判つていられるだろうか？

自分自身のことをだよ。

自分自身のことをだよ。

自分自身のことをだよ。

自分自身のことをだよ。

自分にどれだけの潜在的力があるとか、もしくは自分自身の能力を信じて、ただひたすらに努力すれば、その能力は巨大に発揮されるんだ。なんて信じられる人が現在の我われ（あえて言う。オールドタイプに、と）の中に何人いると思う？

君は信じているかい？自分の力を？私立の大学にしか受験できない……。あたしは、国立狙いができる……。なんていうレベルのものじゃない思考と、精神の高揚という意味でがね。自信はないだろう。

けれど、現在はそういうレベルで全てのことが仕切られていて、良しとされているんだ。

現に僕自身が四流の私立大学出身さ。笑っていいよ。けれど、この僕がニュータイプへのルートを語ろうと思ったのは、なぜだろう？

けっして、利口な僕じゃないんだけど、願いなんだよね。その願いを出さなければ、物語なぞ何にもならん。（訴えかける力などない！）と、かすかに判断したんだ。

その判断と、ある部分での勘が、人間、我われオールドタイプが思っているほど、悲観したものじゃないのかも知れない……。

と、考えたんだ。そう。人間って、きつと素敵なんだらうって考えた時に、ニュータイプっていう言葉を思いついたんだ。

◆ニュータイプって何？

さて、だからだ。

僕の理想とする、人類のニュータイプってなんなのだろうと、考えてみたわけだ。

前掲のフアンの指摘は正しすぎるけれど、僕自身あまり考えていなかった部分なので、特に記載したわけだが僕自身は、こう考えている。

人同士の思惟が、直結する手段が発見されれば、人と人とのコミュニケーション（意志の伝達）の中に誤解の発生することがない。さらに、誤解が発生しなければ、その通じ合った意志とか考え方が重なりあつて、相乗効果が増幅されるのではないかと、考えたということだ。

思考の相乗効果！これは、すごいと思う。

オールドタイプの個人の考えの、二

倍も十倍も想像力とか洞察力が拡大するんじゃないか、と想像したんだ。

それが、アムロとララの会話だ。

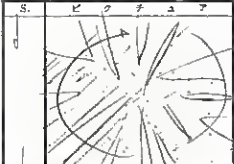
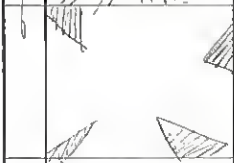



＊絵コンテ⑪美照

◆ニュータイプのルーツ


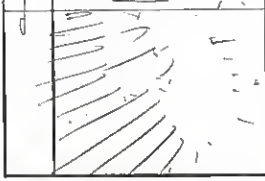
けれど、ここまで、アムロの想像力を拡大させる前に、大切なことがあるんじゃないのか？という作者の立場の想像力が、ランバ、ラル夫妻の登場ということになるわけだ。

現実の中（オールドタイプ世界）での人の良き姿、悪しき姿をみて判つていかなければ、ニュータイプへの発生なぞありはしないんじゃないか、と考えたんだ。

それが、ランバ、ラルの登場であり、ニュータイプへ至る伏線となつてい。つまり、人生の全体像をちよつとでも知る機会がなければ、例えアムロというニュータイプの素養をもった少年

シ	ビクチャ	セリフ
	花かサーッと Bのほうから 放射線が せまってくる 花かサのほう？	F-1 37
	花か原（遠く） 西面一帯に かきこえて 花かサのほうと花か	ランバ 「人はあつてつたのや、 花かサとF-1のほうに ……」 あー！
	花かサのほうから F-1のほうに かきこえて	アムロ 「……」 ランバのほうに ……
	花か原（遠く） 西面一帯に かきこえて 花かサのほうと花か	ランバ 「……」 アムロのほうに ……
	花か原（遠く） 西面一帯に かきこえて 花かサのほうと花か	ランバ 「……」 アムロのほうに ……

●絵コンテ⑪第41話より

シ	ビクチャ	セリフ
	花か原（遠く） 西面一帯に かきこえて 花かサのほうと花か	アムロ 「……」 ランバのほうに ……
	花か原（遠く） 西面一帯に かきこえて 花かサのほうと花か	ランバ 「……」 アムロのほうに ……

●絵コンテ⑫第41話より

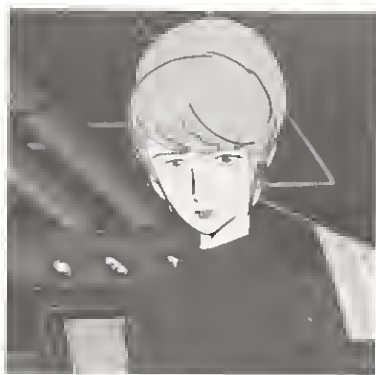
があつても、人のゆく道の目指すべき処を洞察するなぞは、できはしないだろうと考えたのだ。

では、一つの例で、典型的に人生を描くことができるだろうか？と想像してみたが、まず、無理と感じた。当りまえだろう。人生などという巨大なかたちは、絶対的に描けるわけがないのだ。

一人の人間の一生を描いたからといって、人生を描くことにはならないからだ。

では、どうするのか？

で、男と女の代表的な型、一組の夫婦を描こうじゃないか、と思いついたのだ。この一つの人間の関係は、人の世の基本だからだ。



が、戦闘ものの中で、夫婦を描くために、どのようにしたら良いか、という具体的な方法論が、つまずくわけだ。

ドラマ「世界の未来」は、全て白紙であるために無限の可能性があるようだが、この可能性という言葉こそ、真に毒がある。つまり、逆に言えば何を書いてもかまわぬ。作者のお好み次第だというわけで、発想の出发点を間違えると主題に対して全く無意味なもの——作者の遊び——になってしまう。

ハモンとラルについて……

あたり前の夫婦であつたら、二人が戦場に出ることはないだろうと思ひ、とにかく、戦場に（夫についてきちゃう）妻でなければなるまいと考えた。が、これが易しいようで難しい処で、この必然性を、ハモンというキャラクターの中において、状況については曖昧にした。

女性兵士がいたっていいわけだけど、
それではハモン（つまり、ラルの妻）
の性格がぼやけてしまふことを恐れて、

女性兵士とすることを避けたのだ。

しかし、兵士でない女が軍艦にのれるわけはない。それ故、ランバ、ラル隊を正規軍から外して、ザビ家の直轄におき、さらに部下思いのランバ、ラルという設定によって、部下たちにハモンの存在を暗黙のうちに認めさせるようにした。

さらに部下たちがみんな、ハモンをいい女だと思わせるような女性（いい女）にする必要があった。そのため、いい女としての要素は何なのか？と考えた。

美人で、やさしく、思いやりがあり、他人がみてもいいカップルだと思わせるような、男女の愛し合い方をみせることができる女性。と、まず、完璧な女性性を想定したわけで、それがハモン。この演出方法こそ難しかった。

人づきあいの手な僕には、いい女と知り合う機会なんて皆無だったから、サンプルがいなかったからだ……。

……まったく……。

で、安彦君は苦しみぬいた揚句（ま、二晩くらいネ）あのキャラクターを持つてきてくれたんだけど、これが僕の好みじゃないんだな。

情熱は一瞬で消え失せて、やつちやえやつちやえ／＼なげ出すことが許されないのが、毎週毎週、番組を作らなくっちゃならない僕らの立場なのだから、二人の登場のところで、二人の画面に入ってくる順番、兵士のリアクション等で、第一印象づけをしようと思いたわけなのだが……。

<p>22</p>	<p>カン、現象は] 長さ 300km 幅 100m (14/0.523 124) (2.5 1000 124) 分</p>
<p>23</p>	<p>ガンバル し その前進投進力 加速力カサ (2.5 1000 124)</p>
<p>24</p>	<p>入、2C 左の人数知す 入、2C 左の人数知す</p>
	<p>右にとつ ラミ、ウ入、2C (ラミ、ウ入、2C) 右のとつ</p>
	<p>ハミ、ウ入、2C 右のとつ 右のとつ</p>

●絵コンテ⑬第12話より

その後12話前半での二人の会話をひろい読みしてくれと、いかに、愛しているよ、という告白を使わずに二人の関係を描いているか、お判りいたた集中だけると思う。ただ、それだけに集中しすぎていて、やや厭味の気味がなきにしもあらずだがね……。

◆ アムロとハモンについて……

そして、19話のアムロとハモン、ラルの出会い。

会てどうの、ということは一切言っていないけれど、アムロはこの二人の大人と出会ったことで、人間に対して一つの手応えを感じたんじゃないの、
だろうか？

それは、ラル、ハモンの死の話を重ね合わせてみるといい。

アムロが触れた敵の中で、シャア以外ではこの二人だけが唯一無二の重要な人びとなのだ。人の関係を個として

重く背負つた二人の人との接触。

措しむらく、ハモンの死を認知しなかつたアムロは、演出上のミスといへる。ラル同様に、ハモンの死をアムロは目撃する必要があつたように思う。このミスが、二人の人間をしてニュータイプへつながらざる伏線とみさせなかつた原因といえる。

しかし、アムロは人のかかわりあいというものを、この二人を通して感じたのではないか？ということだ。

この精神的なインパクトは、アムロの精神に重大な力となってすべり込んでいる、としたい。が、こじつけっぽくも思える。

この辺が僕の演出ミス。

と、これ以後、自分のミスをあげつ
らうようになるので論点を変える。

の一語に尽きる。

●あるファンからの手紙
が、最後に一つ。お母様と一緒にガンダムを観て下さっていたファンの方からの手紙で、ガンダムの感想をお母様に聞いたら、

「汚ないわね」

と、おっしゃったそうなのだ。

作画がひどいから汚いというのではない、と注釈もくれているように憶えている。

では、なぜ汚いのか？

きつと、人がみえるアニメーション

だったからなのだろう、と想像する。

本来、アニメは絵空事の嘘八百の世界だと思っていられなかった大人には、生身の人間がみえると、ドキッとして汚いと感じる。この大人の生理的不快感は、よく判る。

とはいえ、それほど人間が描かれていたのか？

これは僕のいうべきことではない。が、ともかく、ラル夫婦一つをとって、右のような考えを持って描こうとした（充分描かれているか否かは別として）ということだ。

演出心得帳より――

●スタッフを信頼する……

演出の立場からすると、いろんな事をもっともらしく考えていたとしても、作画スタッフや各話の演出に意図を伝えなければ、何一つフィルムの上に定着させることはできない。

それはどうしたか？……どうもしない。各スタッフを信頼するしかない。

殊に僕の場合、直接的に手を下すことのできることは、汚いコンテに仕上げるだけで、それ以上のことは直接的に手を下すわけにはいかないからだ。

●絵コンテについて……

では、コンテとは何か？単なる画面

割りの作業か？というと、これは違う。

以前に、さきまぐら監督が言っていたことだけれど、フィルムの60%~70%を決定するのがコンテだ、と言ったことがある。

これは、見方にもよるから、本当に60%~70%かどうかは別にして、確かにフィルムの主張を決定する作業段階ではある。だから、コンテに演出の主義主張の全部を叩きこもうとする。

どういうふうに？

それは、今まで記した事をコンテにする、ということだし、もつと方法論を知りたい方は、エイゼンシュテイン（身の毛もよだつほど旧い話！）の本でも読むといい。

で、そのコンテで各アニメーターや演出家が料理するだけで、ああしろ、こうしろとは言わないし、言えないの

だ。判りにくいコンテの画の説明をするのが、演出家の仕事となる。が、それで済むわけではない。

●アニメーターについて……

各アニメーターは、各々の立場と好みによってコンテを読みこんで原画を描くわけだが、ここでアニメーターと演出家がぶつかるわけだ。

キャラクターの腕の上げ方一つでも

好みと判断力によって異ってくるわけだ、それをどうバランスをとって動画へ廻すか、という判断をする。二人の人間が寄ると大体見解の相違があつて、画にしてゆくのには極度の神経を使うわけだ、そこに安彦君がいると、Aという原画家とBという演出家の二人の違う意見を、ものの見事に封じこめてしまう画を現わしてくれる。

これが凄い処なのだ。

異なつた見解を持つ何人かのスタッフを黙らせて、さらに、別の主張を盛りこんでゆく。

たとえは、ただ悲しいのか、そうでない意味と気分があるのかまで、画にするのだから、これは凄いの一語に尽きる。

だから、僕なぞ何も言わないわけ……。しかし、全てがそうかというともいえないのが、アニメーション制作の難しい処なのだ。

●美術・メカについて……

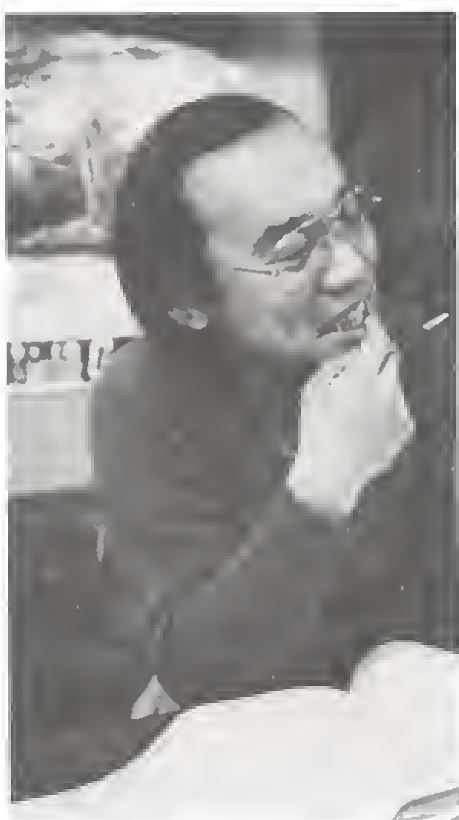
作品の表情としての背景とは、一体どうあるべきなのか？という点について、中村美術監督とよくやりあったものだ。

全くの空想ならいざ知らず、ありそうな気分を背景にいかに見えすか？

例えば、ルナツの外觀一つにしても、まずラフ、スケッチのさらにラフなメモを、僕が中村監督に渡して、肉づけしたラフを今度は僕が貰う。それでも違うということがよくある。

その極めつきの事が、スペース・コロニーの内部の景色に言える。概念的に判っても、実体としてはどうなるのか？どう見えるのか？が判らないのだ。

想像力の欠如と言つてくれないけど、雲一つ描くのにも、大体、雲があつていいのか悪いのか、となるわけだ。そこで僕がわめくのだ。



「空に街がさかさまに見えてたら、俺は宇宙移民なんかするものか」……で、決まり。

さかさ、街が見えないような煙幕雲を張るというわけになる。

空が青いか別の色か？

これも雲と同じ理由で青くする。とものすごく偏見で描いているのがガンダムの世界で、リアルな考証などどこにもない、と言っている。

失望したでしょ？

しかしね、本当にさかさ街の見える空を、君は平気でみることができただろうか？僕には出来ない。

で、中村監督はブツブツいいながら普通の空を描くというわけ。

メカデザインのものと同じようなものでね、大河原氏が何を言おうが、僕が嫌いだから、全てが決まるわけです。偉いんですよ、総監督は！

◆演出家の仕事とは……

にもかかわらず、全てが一人の人間の意志で決定されるのか？

先にも言ったように、直接画を描けないのが演出家。仕上がったセル画と背景がどのようなものであっても、スケジュールがなければ全て認めて、撮影させなければならぬというのが、本当の立場で、現場から一方的プレッシャーをうけてやる仕事で、演出の本当の立場といえる。

つまり、作画、仕上げ、背景、撮影の各スタッフの言うことを最終的にのみこんでいかなければならない。各パートの仕上げられた結果を受けとめね

ばならぬのだから……。

かといつて、卑屈でいいわけでは無い。

よりよい仕上がりフィルムを手にとろうと思うのが演出家であり、そう仕向けてゆくのが演出家の仕事でもあるのだから。

では、どうする？

話し合う。と、良いパートナーを見つける……に尽きる。

しかし、僕らは弁論部じゃないから、討論のための討論はしない。

そして、アニメーターとか美術マンとか、撮影マンとか、要するに技術者は話すのが上手でないタイプの人が多い。演出家も、なぜだろう。

画が全てを語っているからだ。ある映画監督が言った名言がある。映画監督になるには、どんな勉強をしたらいいでしょうか？と訊いた人に、「簡単さ。声が大きければ、映画監督になれる」

と、言ったそう。

アニメの場合、ロケーション撮影がないから声は小さくていいわけだ。

ブツブツ言うことさえできれば、スタッフに対してキュー出し（まあ、指令出しとでもいうか）ができるって考えていいわけ。

じゃあ、君にもすぐ出来るか？

と、保証したいところだけれど……：保証はできませんね。

◆僕の願ひ……

大体、この原稿自体、ガンダムという偏見に満ちた作り方をしている作品の、しかもその一部分の演出の考える手順を示したもので、テレビ・アニメーション一つとって、「サザエさん」「一休さん」「ヤマト」「スリー・ナイン」「コナン」「ルパン」「ロッキー」「チャック」「ハイジ」「アン」「ドラエモン」「キャンディ」「ベルバラ」「ジョー」等々、目がくらむくらいジャンルがあるわけ。

さらに劇場版、短編、CMとジャンルが広がっているのがアニメーションの世界というものののだ。

たった一つの方法論を知ったからといって、それにこだわった瞬間から、あなたはオールドタイプになるんじゃないだろうか？

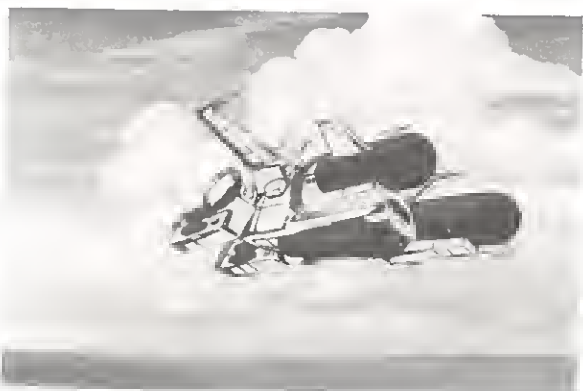
確かに、ニュータイプ論へと直結するための大筋に、ミスがあつたかなかつたかは、作品全体で判断すべきだから、創り手の僕には何にも言えない。

あれしかできなかったのですよと、自閉症的にひらき直るしかないものね。やつちやつち後なのだから。

条件が悪いからというのは言いのがれで、所詮は、いかにSFを創るのか創らぬのかという、高千穂論は正しいわけだし、平岡論の同世代の弁護的言

い方には涙がでるほど嬉しいけれど、ニュータイプを語り得なかつた己れに身の毛もよだつほど嫌悪するわけだ。

白井氏、山本氏、竹宮氏の指摘も含めて、そりゃ、乗り越えてみせたいと



いう欲望はある。が、なにしろ、子供を信じていない自閉症に何ができるのか、つて思う僕にとつて、このガンダムの欲求不満の「元」は、何か？もう少し時間を欲しいと思いつつも一つだけ言えることがある。もし、ガンダムのファンである君、あなた、諸君らだけは、この作品を鑑として自閉症に陥ち入って欲しくないということだ。

でないと、日本の未来は暗くなる一方だし、近未来があり得るのか？ということになる。

そう、

「君は、生きのびることが出来るのか？」

……とね。

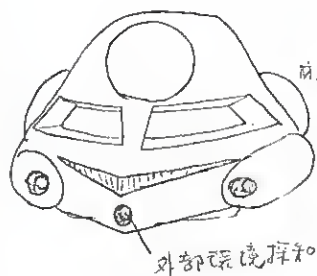
●モビルスーツ・イメージスケッチ／富野喜幸

ガンボイ 性協的記号

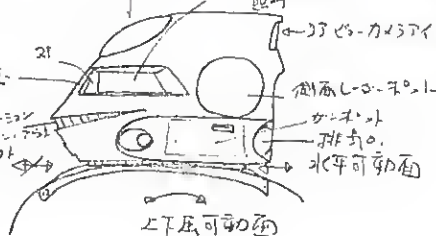
前面シールド

フロントビューカメラアイの位置
フロントビューカメラアイの位置

企画設定時において、監督よりメカニックデザイナーに指示出されたモビルスーツのイメージデザインスケッチ



外部環境探知口



前部柱

21

バネ・コイル
マフラー・アライ
ダクト

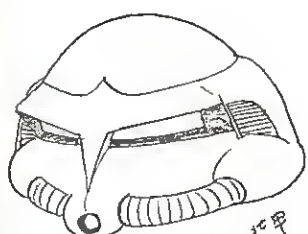
前面シールド

カメラアイ

排気口

水平可動面

上下可動面



前部銃口装甲



レコーダ

カメラ

カメラアイ

前部銃口可動不可能

この面が下まで下りてくる

球面と
円面の合
はみり

シールド面
可動面

シールド面
可動面

対比して
の人物



マニピュレー
ターストラット

よく描かれて
いる人形像で
ある

球面と円面合成の
みり

シールド
カバー

シールド
補正カバー

口角と同じで、唇の口角が同じで、

口角の同じで、唇の口角が同じで、



20度

Spot light/ **メインスタッフ**!

「不思議に思われるけど、何でも覚えている。」

●脚 本 星山博之

■ボクにとってのガンダムとは…

「ガンダムについて、どう思いますか？」

最近、こんな質問をよく受ける。

「ガンダムについてですか？」

「そうです」

「えーと……」

ボクは一瞬返事につまづいてしまふ。

すると、相手は矢継早に、

「ニュー・タイプというのを、どう考えていますか？」

「えーと……それはですね」

又しても、言葉につまづいてしまふ。

なにやら、できの悪い学生が、入社試験の面接を受けている感じなのだ。



こうして何度も「えーと……」が続けば、相手だって怪訝顔になってくる。

「あなたが脚本を書いたんでしょ」

そういう顔付きになって、ジロリと睨まれる。

こうなるともう開き直って、

「あなたが見て理解したものの、感じ

たもの、それがガンダムですよ」

と、まるで答えになってないことを口

走って、冷えたコーヒーをすすするはめになる。

相手の、聞きたいという気持がよく

わかるだけに、これはつらい。

自分の眼で耳で、体（感覚）で感じ

とったことを、直接スタッフに聞いて

みたい、つまり確認したいという気

持は、ファンなら誰でも大なり小なり持っているし、映画に狂ったボクにも体験がある。

しかし、自分の関わった作品にスラ

スラ答えられないとは、一体どういうことなのか。

ガンダムに関して語る時、しんどい

という気持になるのはどうしてなのか。

とにかくしんどいのだ。これが作品を

作り終った、ボクのいつわらざる心境である。

このしんどさは、OKされた脚本

段階とフィルム化されたものが、かなり違っていた。

つまり、脚本が下書きとしか扱われ

なかったことへの不満と、脚本タイト

ルをだしている以上、フィルム化され

たもので質問に答えなければならぬ

という、二重のギャップによるしんど

さなのだ。

そんなに脚本をいじられるのが厭

ったら、スタッフから降りて、主体性

を貫けばいいじゃないか……全くその

通りである。

しかし、ボクはおりなかった……な

んでこととはない、自分に苛立っている

のだ。

脚本がいじりまわされ、その結果が

多くのファンの心をとらえた。人気を

得た。

だとしたら、それはもう監督をはじめ

他のスタッフがすごいのであって、

一ライターのボクが、くだくだ言

うことはない。素直に敗北を認めれば

いいのだ。

この本は、「ガンダム」という作品と「出会い」青春の一時期を関わり、ファンとなった人のいわば「その確認」の本である。

そうした本に何故、読者にとってはどうでもいい、個人的感情から書き始めたのか。

それはいうまでもなく、何をいおうと、一笑にふされることはあっても、

「機動戦士・ガンダム」の世界には、

何の影響も与えないということが判

っているからである。

そして、このことを抜きにしてボク

がガンダムを語ることがウソになる……

……そう思ったからだ。

そんなボクに何か書け、そのために

ページもさくという……これは一体ど

ういうことなのか？そして判った。

この本はいわゆる商業雑誌ではない。

作り手が全員揃って「ガンダム万才」

を叫ぶことはない、ということなのか

も知れない。

そうした記事なら、ファンはすでに

様ざまなもので眼に通しているのだから……。

■スタートまで——

脚本を書き始めて、シリーズの第一

話を書かせてもらった、初めての作品

がこのガンダムであった。

サンライズという会社で、企画から

加わったというのも、これが初めてだ

った。

そういう意味で、ガンダムはボクに

とって記念すべき作品である。

あれは夏の暑い頃だった。
企画部長の山浦氏から、ロボットを使った隊員ものをやりたい、と聞かされた。

正直いって又、ロボットものかと思つたが、やる以上は今までと違つたものをやりたいとそう思つた。

なんとしても、アニメお子様番組という安易な図式は、ぶち壊したいという思いと、一つの世界だけは創りたいという気持が強くあつた。

そして、監督は富野氏がやると聞かされた。

富野氏とは、以前から知っている先輩であつたが、脚本という形で一緒に仕事したのは「ザンボット・3」が初めてだった。そして「ダイターン・3」にも参加させてもらった。

富野氏の目指すアニメは、様々なところでボクの思いと一致し、オリジナルものということもあつたが、やりたいこと、何よりも書きたいことを書かせてくれた。

そんなわけで、彼の狙い目、好みもかなり具体的に判つていた。

今度の新しいものも彼とならやれるだろう。又、富野氏なら絶対にやるだろう（事実やつた）と思ひ、ボクもそれなりの意気込みで挑んだ。

サンライズの企画室で何度も企画会議がもたれ、とにかくにも飯塚氏の協力を得て、テレビ局に提出する企画書を書き上げた。

その間、平行して原作者である富野氏がガッチリ世界観を固め、肉付けし、

安彦氏がキャラクターを創り、ガンダムの輪郭は出来上がつていった。

話は前後するが、企画の話が出た時ボクはフツと映画「仁義なき戦い」(笠原和夫/脚本 深作欣二/監督)を思い浮かべ、あの青春群像劇をアニメでやれたらと秘かに思つた。

一つの時代、状況の中に投げ込まれた若者たちが、傷つき、あるものは生きる欲びを見だし、あるものは権力への階段を目指しつつ挫折していく……一人の人間にのみスポットをあてるのではなく、複数の青春像が相互にからみ合い、描けたらいいなと、イメージはボクなりにふくらんでいった。

いま思えば、この時点で富野氏と、もつとデイスカッションをしておけばよかったと悔まれる。

富野氏も青春群像劇には異論はなかつたが、彼は、後に問題となるニュータイプを登場させる、かなり構造的なハードSFを考えていたことだった。

作品の制作が始まって、両者がぶつかることになつたのは、この辺に原因があつた。

闘いを減らしても、人間の揺れ、動きを重視するボクと、ニュータイプ論を含む「観念」の領域へ冒険を試みる富野氏の劇作法がぶつかったともいえる。

ボクは観念を描くことには異論がなかつたが、観る人に伝える(言葉とは限らない)という一点で、かなりこたわつた。

ライターのというのは、たとえまわりくどくても、相手に伝えるということ

を最も重視する。

フィルムで伝えられなかったら、それはもうどんな高尚な理論も、テーマの提出も失敗であると思う。

ボクが一点、ガンダムを批判するとすれば、相手に伝えるという作業で、かなり荒つぱいところがあつた。それだけである。

「判らないのも面白さの一つだ」それを百わかつていても、そうはいかないのが脚本なのだ。

ボクだけの理屈かも知れないが……

■ レースは始まった!

話を元に戻そう。

テレビ局に企画書を提出して、しばらくは音沙汰がなかった。

そして冬に入り、作品化のゴー・サインがでた。

ボクはとにかくにもかくにも、長距離レースの第一走者としてスタートを切らなければならなかった。

他のスタッフが手を空けて待っているのだ。

悪戦苦闘し、スケジュールもかなり遅れて第一話を書き上げた。

シナリオに入る時まず考えたのは、一話の中の極端なストーリー展開はさけ、視聴者(今だからいえるが、ボクはターゲットを中学生以上に考えていた)の生活リズム感、日常感覚をたんだんと、まぎしくたんだんと描いて丁度いいのではないかと思つた。

ストーリーが人間を動かすのではなく、人間がストーリーを作つていかな

くてはとも思つた。

第一話でアムロがフラウ、ボウに避難命令を伝えることになるシーンを書いた。アムロとフラウ、ボウの関係、両者の性格を初めて視聴者に伝えるシーンだ。

このシーンの中で(フィルムではニエアンスが変つたが)面倒見のいいフラウ、ボウが、室にとび込んでくるなり、マイコン作りに熱中するアムロの世話を焼き「タオルと下着は?」と、アムロに聞く。

すると、アムロはムキになつて、「いいよ、洗濯なら自分でするから」と答える。

何故、アムロはムキになつたのか。中学生にもなつた男の子なら、思い当たるかも知れないが、男の生理現象をアムロも知っていることを表現した



かった。

いやらしいなどといわないで欲しい。
こんなシーンを引き合いにだしたのは、
フィルム化されなかったことを云々し
ているのではない。

ボクが今まで書いて来たアニメの脚
本と徹底的に違ったのは、生身の人間
を描きたいばかりに、こんなささい
なことを重視した、それをいいかつ
たのだ。

ボクに限らず他のライターもこの点
を重視し、それを富野氏の演出はかな
りの、いやそれ以上の腕の冴えて表現
していたと思う。

第一話を書き上げてしばらくして、
第一話の完成試写をみた。

正直いって衝撃を受けた。演出の切
れのよさといい、アムロとフラウ・ボ
ウの戦火の中でのからみの時の演技の
表現力といい、宇宙空間での遠近感と
いい、実に見事だった。



シヤアの唐突なセリフにムツとした
ことを差し引いても、驚きに値する出
来栄えだった。

マイナー作品ばかりを作られて来
たスタッフの「みていろ！」という意
気込みを、そこに感じた。

一話にして、早くもボクの世界が犯
されることを予感した時、監督と喧嘩
したって最後まで付き合ってやると、
不思議に燃えたことを今でも覚えてい
る。

一言断っておくが、やたらと喧嘩と
か物騒ないい方が出てくるが、富野氏
とは毎回ぶつかるのだ。だからといっ
て、一緒に仕事が出来ないということ
ではない。

むしろ、馴れ合うことの方がこわい。
ぶつかるといっても、それは仕事の上
のことであり、あつて当り前のことな
のだ。だからこそ、三作もやってこら
れた。(今回はかなり参ったが)

仕事では恐いが、それ以外では温厚
な優しい人であることを、富野氏のフ
ァンのためにつけ加えておく。

■ 気になるキャラクター —

そろそろキャラクターの話に移ろう。

「キャラクターの中で、誰が一番好
きですか」

何故か、人間のことになると言葉は
つまらずに語れる。

「シデンとアムロです」

聞くとところによると、シデンの人気
も仲々というところらしい。

ただ、放映間もないころは、アムロ

はともかく、シデンと答えると妙な顔
をされた。

ボクが一番のめり込んだのは、アム
ロとシデンだといってもいい。

いいわけじみて聞こえるかも知れな
いが、ボクが様ざまなきさつがあつ
てもスタッフから降りなかったのは、
生活がかかっているという当り前の事
情の他に、この二人を最後まで見届け
たいという気持があつたことは事実だ。

安彦氏のキャラクターがあつたから
こそかも知れないが……。

他にといえば、何故かメインではな
く、ゲスト・キャラクターの魅力を感じ
た。敵では、ガルマの陰のある存在
が好きだった。

ファンには石を投げられそうだが、
シヤアは余り好きになれなかった。

物静かな中に秘めた権力志向、上昇志
向、そういった人間の欲みないなもの
がもつと出せたならば、好きになり、
かなりのめり込んでいたに違いない。

そして、最初はこういうこともなか
つたアムロだが、最終話近くなつて、
ボクはこの手のキャラクターが何故か
好きになった。

人の上に立つものの孤独感が、すご
く出て来たのだ。しかし、時すでに遅
かった。

こうしてみると、キャラクターとい
うのは、実に不思議な存在である。

作り手など無視して生き続けていく
のだから……。



■ 僕のニュータイプ論

(インクビニーにて収録)

この作品で富野氏は「ニュータイプ」というひとつの観念の世界を描こうとしたわけですけど、ひと言では、いいにくい。「ニュータイプ論」をあの限られた本数の中に収めようとしたのは、ちよつと無理があつたと思う。

残酷ない方だけど、未消化な部分が感じられただけ不親切だつたと思う。僕が考える「ニュータイプ」というのは、富野氏の考える「ニュータイプ」とは違つて、もつと単純なんです。

例えば、縦志向の人間というか……ピラミッド型の社会をまず「オールドタイプ」とするなら、横へみんな繁つていくのが一種のヒッピーなんで、そういう感覚を持つていくのがニュータイプである……全く単純に考えたんです。

せつかく、未来社会を予感、暗示させる秀れた「素材」を富野氏が提出しただけに、ちよつと残念な気がしたし、それに応えられなかった自分の能力のなさも感じたわけです。

僕の考え方からすると、既成事実をニュータイプじゃないものをまず見せて、対比させながらどんどん見せていく。

例えば、シャアが「俺はニュータイプじゃない」と言つた時に、じゃニュータイプとは何か、ということになる。

それは、シャアがジオン軍にのり込んだ時、最初は仇討ちのつもりが、ひよつとしたら自分が権力の頂点に立て

るかも知れない……と思う。その瞬間にシャアは自分の中に、旧いタイプの権力構造を志向している部分があることに気付く戸惑う、その戸惑いをもつと明確に出たら面白かつたと思うんです。

仇討ちにしても、人間というのは結局あんな未来社会に於ても、相変らず血みtainところから抜けられないんじゃないか、父親を殺したり、兄を殺したりして、結局旧タイプというのは人間のもつとも根源的などろどろした部分でしか、生きて行けないんじゃないかと思うわけです。

ところが、狭いところで上か下かとかやつて人間と、もうそういうものは要らないという人たちも出てくるんじゃないか。シャアの場合は、その両方にまたがつている存在、両方が判る存在だと思ふ。だからアムロみたいなニュータイプが出てくると、自分の反面教師みたいになつて、本当はもつと権力の座に昇りたいのにどうも具合が悪いわけです。

こうして、どちらにもなりきれず苛立つシャアと、本人の意志によらず殺人マシーンとなつていくアムロ、つまり、敵、味方を問わず傷ついた青春が二つあつた……ということをラストでぼーんとしたかつたですね。

アムロは、もう戦士にしかねないと思う。結局、もう現実の社会には戻れない。日常に戻れるのはフラウ・ボウとハヤトぐらいじゃないかな。この二人なら、戦争が終つてもニューファミリイとして生きてゆけるでしょうね。

ララアは第三世界から出てくる必然

性があつたと思う。現在の政治圏は西と東があるわけだけど、インドとかビルマとか、中近東も含めて、これからはそういうところの勢力がもの凄くなると思うわけです。だから絶対、その辺りから未来に向けて出てくると思う。僕は、ララアについてももう少し単純に、未来へ向う若者たちの「希望」の存在として、ララアを登場させたかつたですね。

難しいのはいいけど、それなりに言葉ではなく、映像で見せなければ駄目だと思ひます。だから、解らなかつた分だけ、他の雑誌なんかで補足するのは間違ひじゃないかなあとも思う。やはり。

シナリオを書くというのは、やはり演出家との闘ひですからね。

脚本家というのは、自分の狙いがどれだけ演出家に理解されているか、そしてどれだけ映像化して貰えるかに期待をかけるわけですから……。

ライターの方は当然、かなり人物キヤラクターとか人間関係に執着していますからね。僕は、SFであれ、どんなものであれ、作品というのは人間が最終的には基本だと思ひますから多少削られた分だけ、やはり不満があります。

僕個人の意見として言えば、結果として成功だつたかも知れないけど、賛沢だといへば賛沢なんだけど、全面賛成ではない。評価は評価として、認めるんですけど、それでいいのかという思いがどうしても残るんです。

■再びガンダムとは……

グチじみたことを何やら書きなぐって来たようだが、残りページも少なくなってきた。

ここで、自分の書いた中で気に入っている、「再会、母よ……」について少し書いてみる。

振り返ってみるとボクの書いたものというのは、どういうわけか、接近戦で相手を、つまり至近距離で相手を見据えつつ倒している。

いつだったか、ベトナム戦争に一兵士として参加したアメリカの若者の手記を読んだことがある。

その若者は歩兵であり、もっぱら山野を動きまわり、ゲリラ退治を任務としていた。

やがて戦争が終わり、その若者は本国に帰ったものの、生きる気力を失なっていたという。そんな時、空軍として参加していた同じ若者が、なんの悩みもなく、あっけらかんと戦争で何人敵を殺したとかいう手柄話をしているの聞き、思わずいい返した。

「あんたはいいよ。空からミサイル撃つてりや死んでいく、人間の姿なんて見ないですむ。だが、こっちは目の前にいる人間を殺して来たんだ。判るか、出逢う直前まで呼吸をしていた人間をだぞ！」

この二人の若者を比べた場合、そう叫ばずにはいられなかった若者は、戦場で「痛み」を知ってしまった。後者にしてみれば、ゲームで済んだ。戦争

を考える時、この両者の対比は実に興味深い。

これを読んだ時の衝撃が、あの話に投影されたといつてよい。

アムロが、眼の前で人を殺した時、彼は変ったはずである。

この一点を体験した時、彼は一瞬、痛みと混乱を生じたが、人を殺すことに感覚がマヒしていくための、戦士になるための踏み絵ではなかっただろうか……。

人間の命は尊いと思う。にもかかわらず、戦争となったら、ボクとして殺人マシーンになり得る……この引き金をひくか、ひかないかの分かれ道とは一体なんなのだろう……。

ボクにとってガンダムとは、それを考える作品でもあった……。



昭和19年5月13日、東京・板橋生まれの練馬育ちというから、やはりアニメーションとは深い因縁の糸で結ばれていたのだろう。

中央大学4年中退。と、いうのは大学4年になって、何か面白いことがないかな……と思っていた矢先、友人のりんたろう氏（銀河鉄道999／監督）の誘いで、たまたま遊びに行ったのが運命の出逢い、「虫プロ」だったのである。

遊びに行つて驚いた。何しろ仕事中に将棋をさしている人がいる、食事をしている人がいる。こんないい会社だ、世の中にあるのか？という訳で、是非入れてほしい」と頼み込んで、入社してしまったのだ。

当時、文芸部のなかった虫プロで、絵も少し描かされたそうだ。丁度その頃、「さすらいの太陽」

という作品をやっていて、その時入社したのが安彦氏だった。富野氏もいた。ということは、すでにガンダムの核となる三つの才能は、出逢っていたわけだ。

僕の作品はどうしても「優しく」なってしまう。その「優しさ」を見せるために、戦いを見せ、汚さも見せる。人間、汚さを隠してしまつたときは、美しいものも見えなくなっているのだと、語ってくれた。

宇宙時代になつても、住み心地が悪くても、やっぱり地球に住むだろうと……。だから、宇宙基地に行つても、ポケットにコーヒード豆を持ち歩く、スミス老人の気持がよくわかるそうだ。

星山さん、これからも「優しさ」の脚本を書き続けて下さい！

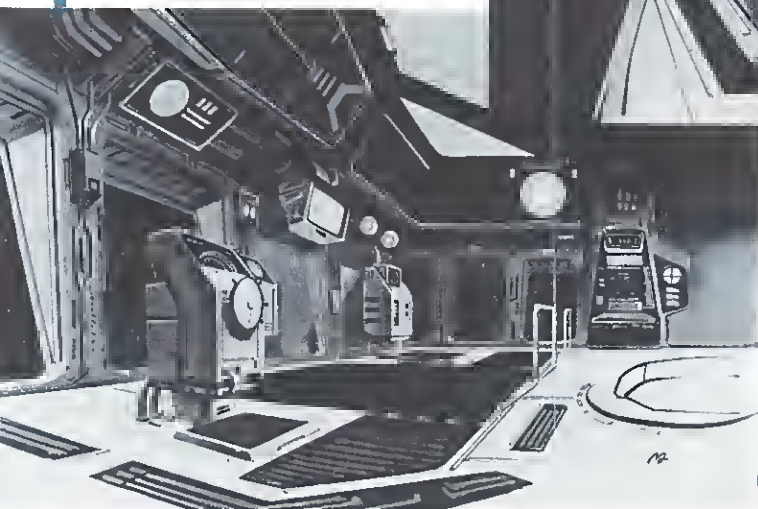


今までになく群衆で、描いていてのめり込みました。”

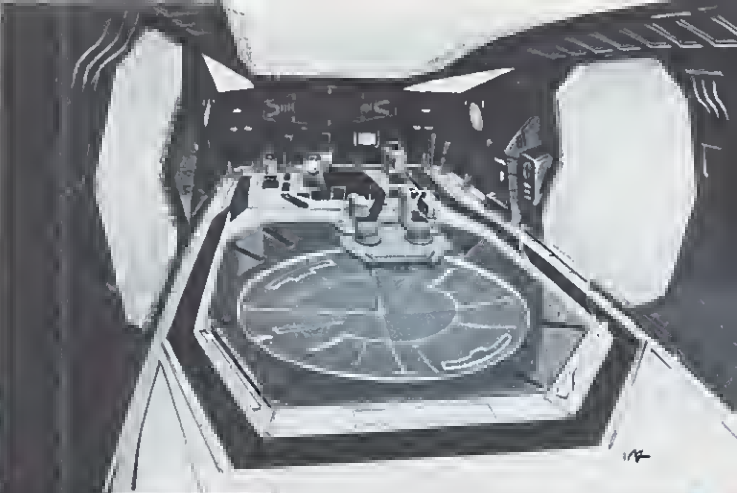
●美術設定 / 中村光毅

WHITE BASE

●艦橋内部②



●艦橋内部①



〈ホワイトベース〉

■ガンダムを終えて

この作品を始める際は、キャラクターのネームを覚える事で大変苦労させられました。

正直、キャラとネームが頭の中で合致したのは、もう20話を越えている頃だったと思います。

それとメカキャラの名称もまた大変なもので、この件で総監督と一戦を混じえた茶番劇もあります。ともかく、何んだかんだでスタッフ一同、これはかなり振りまわされたものです。

この作品ほど、自分なりの構想が一転、二転と変化したのも他に例がありませんでした。

当初は、ザンボットのな世界観を考えていたのですが、回を重ねていくごとにリアル思考に進んでいくので、設定の際にはかなり戸惑いました。

小道具類などは機能的、かつ斬新なデザインであらうと思っていたところ総監督の意見で、現在、我々が日常使用している物そのままを、ガンダムの世界に取り入れたアイデアなどは、見ている者に臨場感を与えただろうし画面に温かみを提供したと思います。

どれ一つひろいあげても、富野氏の構想の深さには、ただただ尊敬するばかりです。逆に美術のあり方などを教えられたりで、私の勉強不足を露呈した場面もしばしばでした。

ひとつ、ホワイトベース内のデザインについて書かせてもらいますと、司令室は暗い部屋の中にコンピュータ

類の輝きが浮び上っている、という想定で考えました。

また、戦闘状態では、艦橋内は暗くあるべきであらうという考えのもとで全体をダークにしたわけです。他の通路、各部屋なども、戦時下というパツクである以上、艦橋内と同様にすべて暗目のトーンで統一しました。

サイド7については、直径6kmという筒の内部ということなので、情景の見え方にかなり四苦八苦しました。

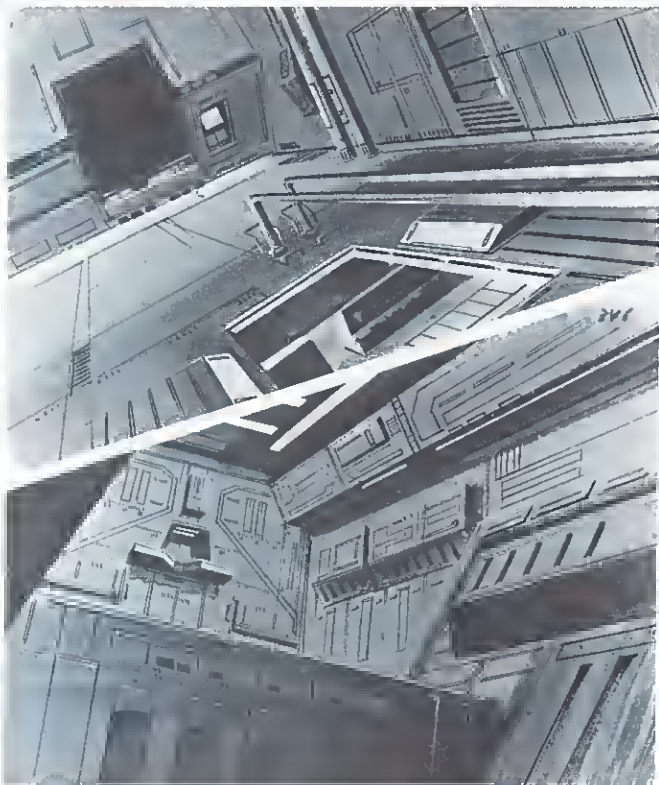
空を見上げれば、反対側の地面が当然見えているわけですから、それをどう作画するかで押問答の末、中心部は地球と同じように雲の層をつくり、真上の陸部分を雲でかくすようにして、立っている位置から見た地面は、両方の地面がそり上って、雲間に消えていく作画に落着いたわけです。

最終回の、ア・バオア・クーの内部（実は、このネームを思い出すのになりの時間を要しました。）は、冷たいメカニカルな世界を強調したのですが、実際には今ひとつ、つつ込みが足りなかったことを反省しています。

どの作品も終了した後は、イメージの貧困からくる後悔の連続で、いつもながら、力不足に悩んでいることしかりです。

ガンダムについていうなら、最終的には富野氏の思惑にはめられて終ったという印象です。

富野氏には次回作品に期待しているものの一人です。



■美術設定のカラーイメージ

自然界を主体とする作品にしても、ガンダムのようにSF的なメカニカルなものを主体とする作品でも、美術設定の上では同じくらしいの力量を必要とする仕事だと考えています。

しかし、今回のガンダムの場合には特別、目新しいものを入れてみたりすることはしませんでした。

富野さん自身、今回は余り飛躍したことを要求しませんでしたし、全体にリアルにしようということがあったので、気負うこともなく、わりあいノーマルに考えて仕事をすることができたと思います。

しかし、最初はすい分かりにくい作品だなあとあって、面喰らいしましたし、正直いつてどうなっちゃうんだろうと心配もしました。

いつもというか、前の作品でもそうでしたけど、富野さんはある程度話が進むと、コミカルにしてしまったりすることがあるのですが、その点、今回のガンダムは、一本に的をしぼって、主張したと思います。

ガンダムで最初に手がけたのは、ホワイトベースの内部で、医務室だとか司令室が非常に多かったですね。それからコロニーに入っていました。

大別すると、この二つのタイプぐらいで、それこそ膨大なというか、無限に色彩の表現を要求されるということにはなかったのです、その点、非常に助か

ったと思っています。

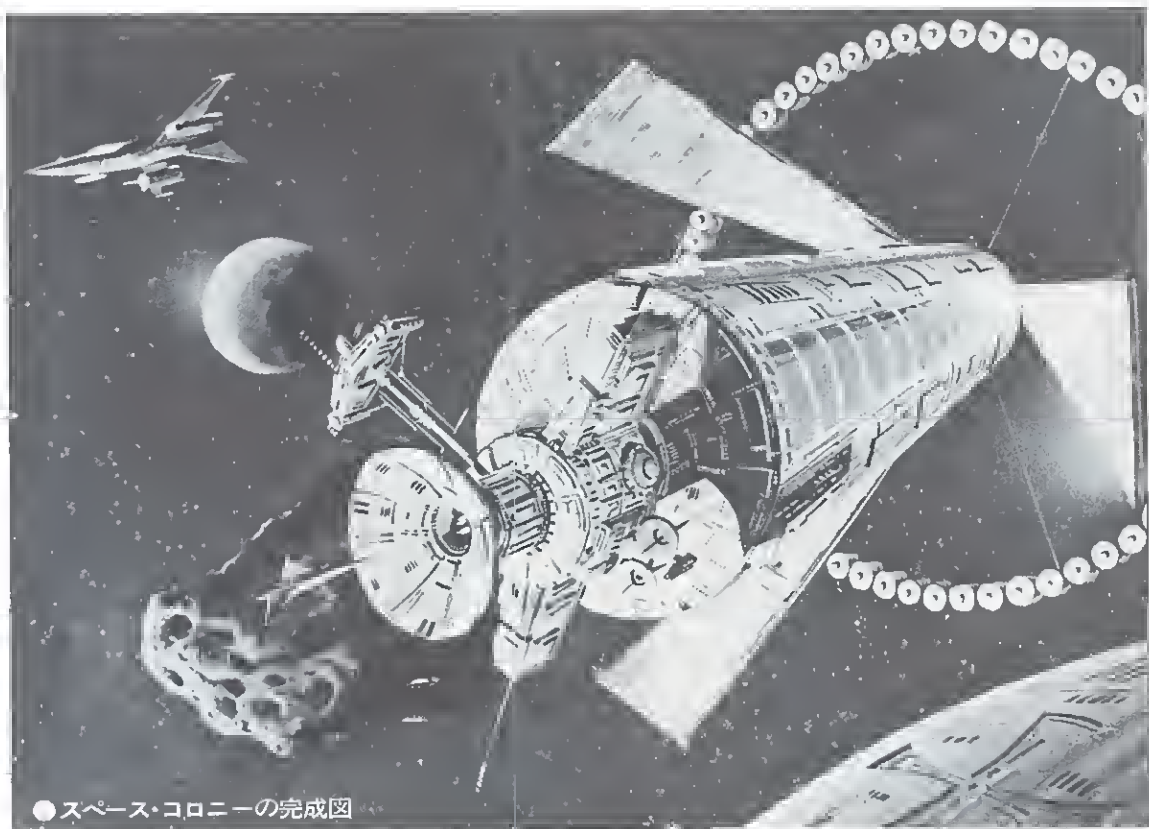
ただ、配色の点では、すでにキャラクターの色が出来上っていたので、それに合わせるように注意を払いました。何しろキャラクターの色が余りに生々しいので、どうも自分自身としては感覚的に受けつけなくて、他の人がやったカラーイメージに、自分の配色を合わせるのに苦労しました。

シャアの乗るムサイ艦の艦橋については、特に制約がなかったので自由にやらせて貰いました。しかし、それがそのまま面白いうことで決定稿になつてしまったので、描く方のわれわれとしては大変でした。エンジンなどは、緻密に描けば描くほどメカニクの質感が出てくるわけです。メカ・キヤラの格納庫の色なども、同じ配色にすると場面展開が判らなくなるので、それぞれ色に変化をもたせました。

宇宙空間も真空地帯ですから、真っ黒が一ばん合うんじゃないかということになり、全体的にぱっと明るい暖かな色ではなく、冷たい寒色系でまとめて、全体のイメージを暗くしてストリーを盛り上げようとした狙いが、結果的に当たったという感じでした。

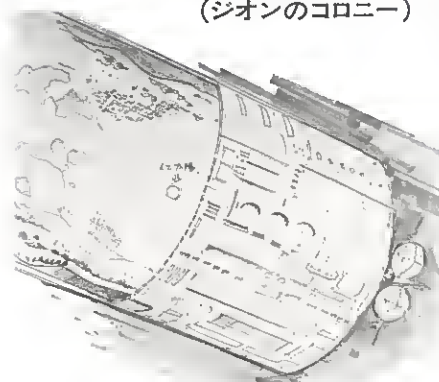
近い将来には、本当にあり得る怖さみたいなものも描けたと思うし、その意味ではかなり深味のある内容になったと思います。

美術設定を担当したわれわれとしても、今までになく新鮮で、描いていて非常にのめり込んで行けた作品でした。



●スペース・コロニーの完成図

●内部ラフスケッチ (ジオンのコロニー)



コロニーにしても、直径6kmの筒型描きこみのない、描きやすい方法をとりました。

ところが、実際に描くことよりも、作業を楽にするための整理の方が大変だったのです。何しろNASAのものは、住宅とかその他の部分も、もの腰く描き込んであるので、スケジュールの都合上それをなるべく簡単に、して描きました。

これは富野さんの意志で、こんなふうにいこうと言うことがあったので、実行に移しました。ただその範囲内で細かく描こうとすると、これは大変なことなので、それを整理しながら作業を進めてゆきました。

当初、NASAのプランをそのまま引用することに、すい分抵抗がありました。真似らしいということにならないかと……と。

■スペースコロニー設定 —オニール計画のこと—

なんです、真上が見えるわけで、上方の陸地の部分が見えてしまわないようにという訳で雲を描きました。

どうしてだか解らないのですが、NASAのオニール計画でも真中に雲ができるようです。

コロニーに不可欠な太陽にしても、設定方法は富野さんのアイデアで、われわれはそれを具体的に絵にしただけなんです。自分自身では、割合こういう仕組みを細部にわたって考えないで、演出家の意図に添って絵にする……というのが仕事になるわけです。

ですから、ガンダムの場合にも、こちらからアイデアを出したものは無かったはずです。

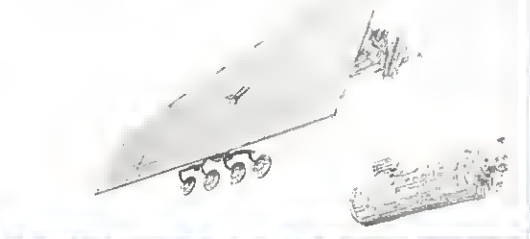
しかし、オニール計画というのは素晴らしいですね。

この仕事を進めていく上で、NASAの見本を見ましたけど、本当に近い将来にはあり得るなと思いました。

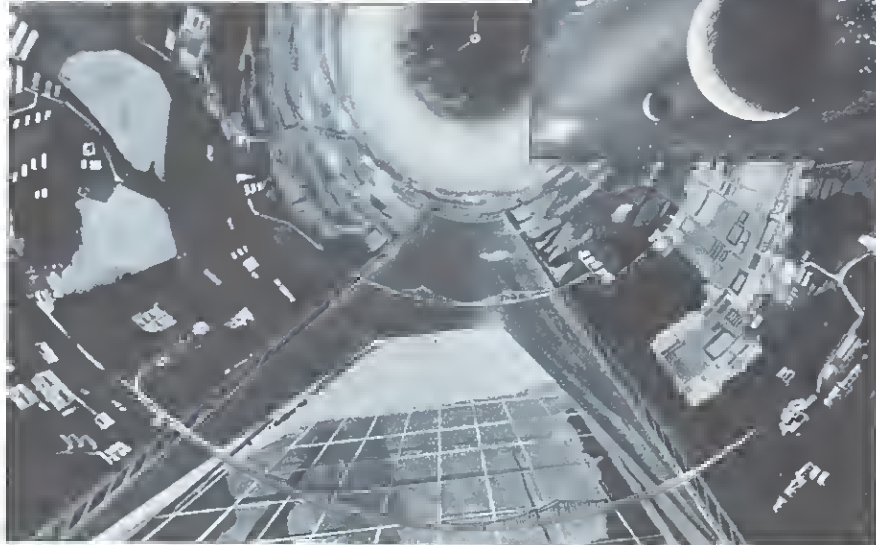
今回のガンダムにしても、何千年後かにその時期が来たら、その時にはわれわれの方が理想に近いのではないかなんかのことを、糺がりがら創ったことを憶えています。

こんなことを計画している人びとが現実にいるということも素晴らしいと思いますね。

オニール計画に自分自身、興味がありますけど、住むとなると、やはり地球のように本当の青い空のある場所の方が好きですから、宇宙空間に暮らしてみたいとは思いませんが……。



●地球連邦コロニー



●サイド7・内部

オニール計画



「ガンダム」のストーリー展開の上で、重要な役割を占める舞台美術の一つに、スペースコロニーの設定があった。この設定に引用されたのが、NASAのオニール計画である。

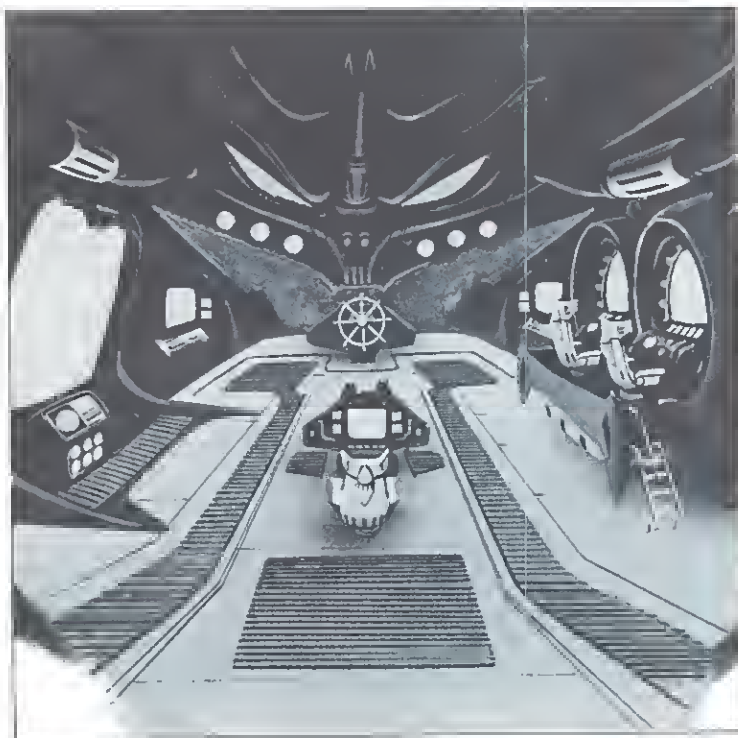
オニール計画とは、一九六九年、アポロ宇宙船の飛行士が始めて月面に着陸した年に、米国プリンストン大学教授であるジラード・K・オニール博士によって生まれた宇宙植民島のアイデアで、米国ですくなくとも、数十年後には実現にこぎつけるべく、着々と準備が進められている。

この計画は、米たるべき近い将来に必ずやって来るエネルギー危機、人口増加、工業化によって傷めつけられた地球に住む人類が、限らない安価なエネルギーと限らない新天地、限らない資源を求めて、宇宙に移住するということだ。移住といっても他の惑星に移住するのではなく、月よりも地球に近い宇宙島に移住するのである。

島の内部には、人間の生活にふさわしい快適な気候風土や娯楽施設など、全く地球と同じ諸条件を揃える計画になっている。また、植民島では反射鏡を設置し、島自体の自転軸がいつも太陽の方向を指していることで、いつも太陽光線が当たる。そして昼と夜の長さは、住む人々によって決められる。そして空気は月の酸素と地球から運んでくる水素でつくることになるらしい。

21世紀前半には可能になるという、夢のように壮大な計画である。

●宇宙植民島/完成想像図 ©NASA



●ムサイ艦/艦橋内部

■背景マンを目指す人へ！

演出家からのイメージを具体的に表現する背景マンの仕事は、まず描き方が問題になります。

この仕事は、筆を使いこなさなければならぬので、熟練した人が描くわりあい楽に描けるのですが、経験の浅い人は筆を使いこなせないで、トラブルがあるわけです。

美術監督にしてみれば、自分が描いた作品どおりにして貰いたいわけ、ところが技術的に進歩の遅い人は、このようにいかない訳で、その辺にトラブルが多いようです。

OKが出せるイメージを描けるようになるには、どんなに才能のある人でも経験を十分に積んでゆかなければなりませんから、正直に言って10年は覚悟して貰わなければなりませんね。

昭和19年4月7日生まれ。幼ない頃から「走る玩具」が何より好きであった。

東京の裏玄関・上野で生まれ育った。都合のよいことに近くにはデパートがある。だから遊ぶのはいつも玩具売場だった。毎日毎日通っては、バスや電車のオモチャで遊んでいたことが、今日、メカニック・デザインを手がける動機になったのかもしれない。

御徒町中学校を卒業後、東映動画に籍をおき、彩色と検査を学んだ。若かったから、ずい分いろいろなパートの仕事をしたそう。だから、いろいろなセクションで仕事をする人の苦労がよくわかる。今でもその頃のことを思い出すと自分の作品のことで、他人に苦労をかけてはいけないと、気を使うそう。

その後、「竜の子プロ」をへて、昭和51年、美術設定とデザインの会社「メカマン」を設立する。

アニメの仕事に従事するようになってもう20年、美術設定以外にメカニック・デザインも手がける。中村氏の繊細な描写力と技術は長い年月の間に積み重ねられた、努力の結晶だ。きつと芯の強さなのだろう。一見、静かな表情ではあるが、アニメの仕事に対してはとばしる情熱が窺える。

時間があればギターを弾いたりレコードを聴いたり、プラモデル作りに熱中するそうだが、最近ではその時間を見つける間もないほど忙しくなった。

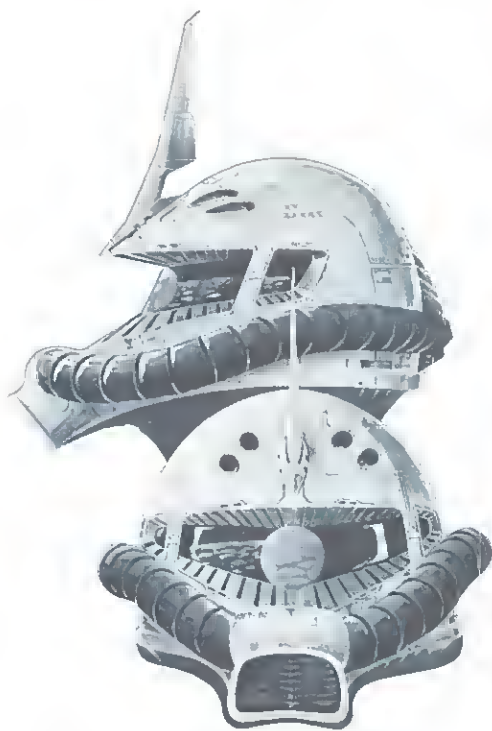
何事にも前向きな姿勢で歩んできた誠実さと暖かさ、隠れまれな忍耐が中村氏の大きな自信になっているにちがいない。



Spot light/メインスタッフ3

「...ないと思っています。」

●メカニックデザイン/大河原邦男



●ザクの頭部イラスト



■ガンダムに参加したきっかけ

当初、ダイターン路線で話が進んでいたのですが、従来通り子供向けのロボットものを作るのだと思っていただけで、こういう作品になるとは思っていませんでした。

ところがしばらくして、少し遊んでみては…というか、前半の1クール、2クールぐらいは自由にやってみたらというニュアンスの話を小耳に挟んで、これは、ひよっとしたら、かなり緻密なものが出来るんじゃないかという予感がしていました。

ダイターンが終った時点で、富野さんからも、いろいろな事を緻密に研究して、何か本格的な作品をつくってほしいという話があったと記憶しています。もともと、これがガンダムのことであつたかどうか、はつきり憶えていないのですが……。

本格的なもの、例えば、衣・食・住の総ての資料を揃えて、未来にはこうなるだろうという夢物語であつてもいいのですが、そういう本格的なものをやってみない気持は、ずっと持っていたわけです。

■草案から決定稿まで――

話が具体化して、草案から決定稿までの移行にしても、ダイターンなどは半年以上かかりましたから、それに比較すると、ずい分楽だったのではないかと思います。

一般に立体メカのデザインをする場合には、スポンサーの意向がかなり強力に打ち出されるのですが、ガンダムに関しては従来のように複雑な変型とか合体がなく、せいぜいコア・ファイターが胴になる程度のものでしたから、商品化した際の遊びまで考える必要もありませんでした。

ですから企画当初で苦しんだということもなく、むしろ一ばん楽だったのではないのでしょうか。

他の作品ですと、木でモデルなんか作って、構造とか変型まで研究して見せるのですが、ガンダムではその必要もなかったし、スケッチだけで進めていった感じです。

もともと、安彦さんに後でかなり手を入れて貰ったので、これだけ良いものが出来上ったと思うのですが……。

初めの1クール、2クール目くらいまでは、富野さんと話して合って創っていたのですが、2クール以降になるとスケジュールも忙しくなってきた、また富野さんの求めていることも判る様になってきていたので、富野さんにラフを出して貰って、それをこちらでグリーンナップするようになりました。

ですから後半は、かなり富野さんの好きなデザインになってくるわけで、逆に言えば少し不満もあるわけです。

まあ、結果論ですけど……つまり、作品が一応成功に終わった今だから言えることではあるのですが、全面的に任されていた前半のメカは、僕なりに連

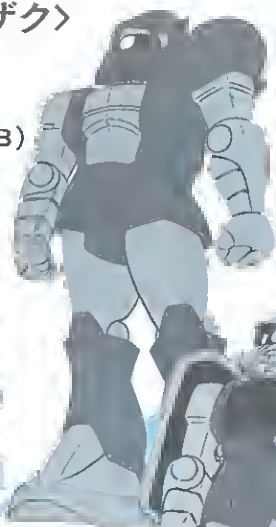
●デザインワーク①

〈モビルスーツ・ザク〉

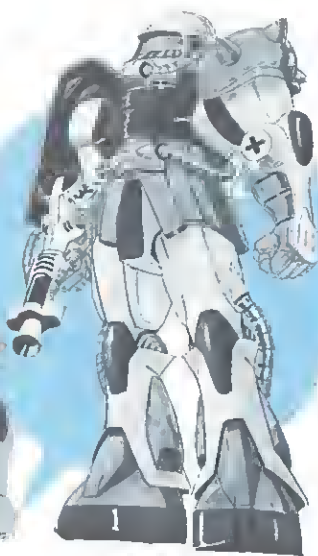
●決定稿(TYPE・B)



●決定稿(シャアのザク)



●決定稿(TYPE・A)



●準備稿

■メカ設定はスタッフの総結集!

中には、最終決定稿で提出して、ボツになった作品もあります。しかし僕は、メカは一人で創り出すのではないと思っています。

例えばメイン・メカに関して言うなら、スポンサーがあり、制作側の意図があり、みんな意見を出し合って創ってゆくもので、自分だけの力で創ったという意識はないですね。つまり、みんなで創り出したのがガンダムです。特にアニメーションの場合は、そう言えますね。

アニメーションの場合には、原画とか動画とか様々なセクションがあるわけで、各々のセクションの人びとが、みんなでデイスカッションしながら寄

邦軍とジオン軍のデザインの違いを意識して描いていたわけで、それがラフがくるとその通りになっちゃう。そうすると、やはりデザインの個性がごちゃごちゃになってしまっただけ。

当初は、連邦軍のメカは直線的に、そしてジオン軍のメカは曲線的にと、意識的に処理していたのですが、後半になると連邦軍の方にも少し曲線的な変ったデザインが出てくるようになって、区別がなくなってしまう。考えてみると自分なりにデザイン上のポリシーを通した方がよかったんじゃないかと思うわけです。もともと、途中で言わなかった僕の怠慢でもあるし、結果論なのですけど……。

■モビルスーツについて

企画当初のメカは、スポンサーの依頼で、ガンダムとガンタンク、ガンキヤノンの三つで、ジオンのモビルスーツはなかったわけです。

しかし、僕が個人的に一番気に入っているモビルスーツは、ザクです。

ザクの方が一見、柔軟性に富んでいるように見られますが、これはたまたま、曲線で表現されているために、そのような印象を受けるので、最初から完全に兵器乗り物として考えられています。もともと従来ロボットよりはモビルスーツということで、もっとSF的に描きたいという意図が根底にはあったわけですが……。

■ザクの比較と変遷について

ザクの性能については、分野が異なるので、専門家にお任せしてありますが、形の変遷については、最初のザクを基礎にして、『兵器として発達するために変型していく……』という印象を大切にしました。ですから全く違った型に変化させることを取って避け、最初のイメージを全部残しているわけです。

シャアのザクとの色彩の区別も、やはり特徴づけという意図だったと思います。

せ集まって良い作品を創り上げていくわけですから……。

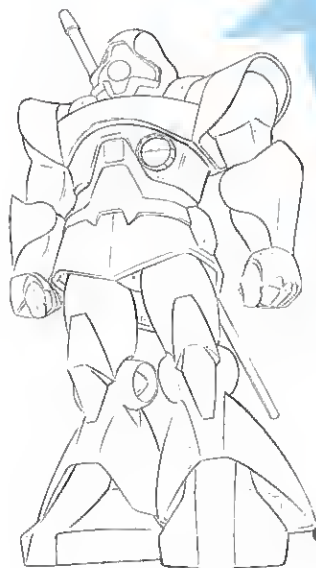
〈モビルスーツ・ドム〉



●準備稿



●準備稿①



●決定稿



●準備稿②



〈モビルスーツ・グフ〉

●決定稿

シャアのザクの一ツ目と角も、富野さんのアイデアです。

ファンからも、よくガンダムとザクの脚の部分が、「スターウォーズ」のストローム・ストローサーに似ているといわれるのですが、残念ながら「スターウォーズ」は観ていません。

僕は、SFとかその種の映画は、まるつきり観ないですから……。

ただデザイン的にそう描いたわけ、ガンダムの場合は、人間の骨格から入ったことは確かです。

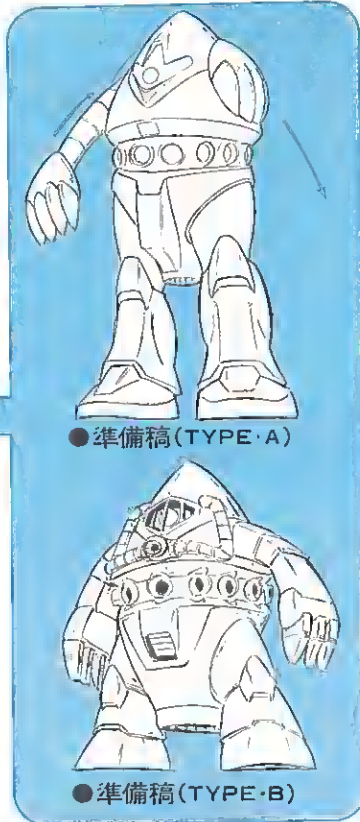
筋肉をデフォルメして、メカっぽい

筋肉にしたわけで、人間に近いシルエットにもついていたという、自分なりの考えがありました。

■ホワイトベースについて

実は、ダイターンの頃に、これに近いキャラクターがすでにあったんです。ダイターンの時に使われなかったものが企画室に眠っていたわけで、それを富野さんが見つけ出してきて、これを改造して使おうじゃないか、ということになったのです。

●デザインワーク③



●準備稿(TYPE・A)

●準備稿(TYPE・B)

＜ゴック＞

■メカニック・デザインについて

これが本当は三つの部分に分かれていて、各々が変型して別々の乗物になるという宇宙船でした。当時、宇宙船というと「ヤマト」に出てくる宇宙船が当然と想われていたわけで、富野さんが、こういう宇宙船があってもいいのではないかと、引っぱり出して来たことが、結果的にはガンダムを成功に導いたといえるでしょう。

結局、その他のムサイ艦、ババア艦、ザンジバル等も、「ヤマト」に似ては困るというので、ある程度意識的に創ったといえます。

ムサイは、初め逆、つまり逆さまだ

ったんですが、演出上、あのようになってたわけです。

ガンダムのように、単なるロボットものではなく、かなりシリアスな人間臭い部分の多い内容の中で、メカニック・デザイナーの役割というのは、あくまでも主人公の生きざまを描いてゆかための調味料の役だと、僕は考えています。だから、あまりメカが表面に出てしまうと、人物の人間性が失なわれてしまうわけで、ガンダムの場合は非常にうまく調和がとれたのではないかと思います。

調味料というのは、表には出ないけど大変重要なわけで、ガンダムの世界をつくった美術というのも、余り表面には出ないのですが重要です。

今、振り返ってみても、確かにガン

ダムはSFなのですが、余りSFを意識する必要はないんじゃないかと思っています。

メカニックをデザインする立場からいっても、現在あるものを少しシャープな形にもってゆけばSF的に見えるわけだし、例えば古い馬車なんかにしても、機構はそのままして、車輪の部分にアースター(ロケット・エンジン)をつけてみたりすればSF的にならないことはないんです。それよりも、やはりその世界を創る話の方が大変でしょう。

僕は、自分のデザインしたものが、より良く表現されていればそれで一応は満足なわけで、その点、アニメーターに僕自身のデザイン以上に素晴らしい描いて貰ったので、(重量感も出ていたし...)メカニック・デザイナーの立場からは言うことはありません。

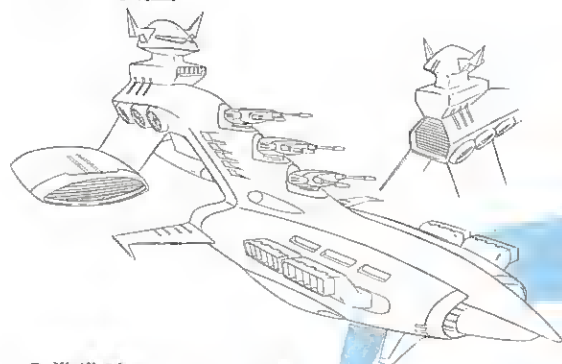
時間があればもう少し改良したり、手を加えたい部分もありますけど、現状シリーズものでは、あの位で満足しなけりば贅沢すぎると思うのです。

しかしガンダムという作品は、ちょっととし過ぎますね。固有名詞が覚えにくいし、かなり難しいでしょう。

僕自身がガンダム・ファンであることは確かなんですが、でももう少し下の年齢層の子供たちが見られたら、最高だったと思います。

この業界に入るきっかけになったのが、「ガッチャマン」だったので、一番印象に残っているのですが、やはり「ガ

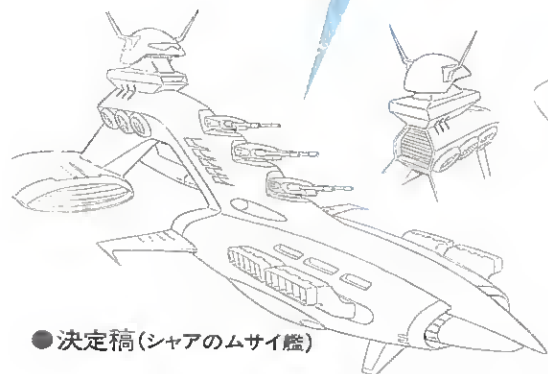
＜ムサイ艦＞



●準備稿(シャアのムサイ艦)



●準備稿



●決定稿(シャアのムサイ艦)



●決定稿

■総監督・富野喜幸さんの印象

富野さんとは、竜の子プロにいた頃からですから、四、五年のお付き合いになります。

富野さんは絵コンテマンというか、演出の方をやっていたのですが、当時から富野さんの絵コンテはすごく特徴があって、コチョコチョとよく描く人だなという印象があったわけです。

「ダイターン」からは一緒に仕事をさせて貰っているのですが、やっぱり何とんでもタフな人ですね。

バイタリティがあるという点では、ちよつと真似が出来ないです。あの忙しい中で小説まで書いてしまうし、やはりあのバイタリティは、見習うところがありますね。

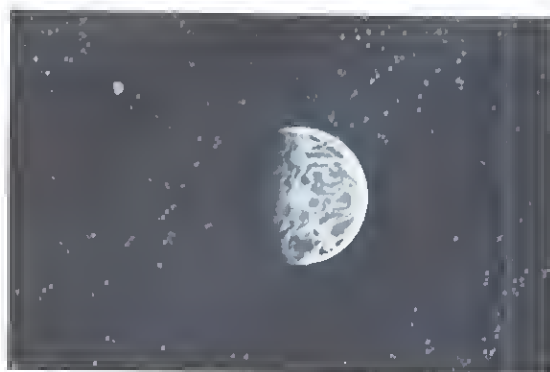
何しろフリーの仕事をしている大先輩ですから、いろいろとアドバイスはいただいています。

■もし、アロムたちのような立場におかれたら……？

仕方がなければ、ホワイトベースでもガンダムでも乗るかも知れませんが、自分から進んで乗りたいたいとは思いません。

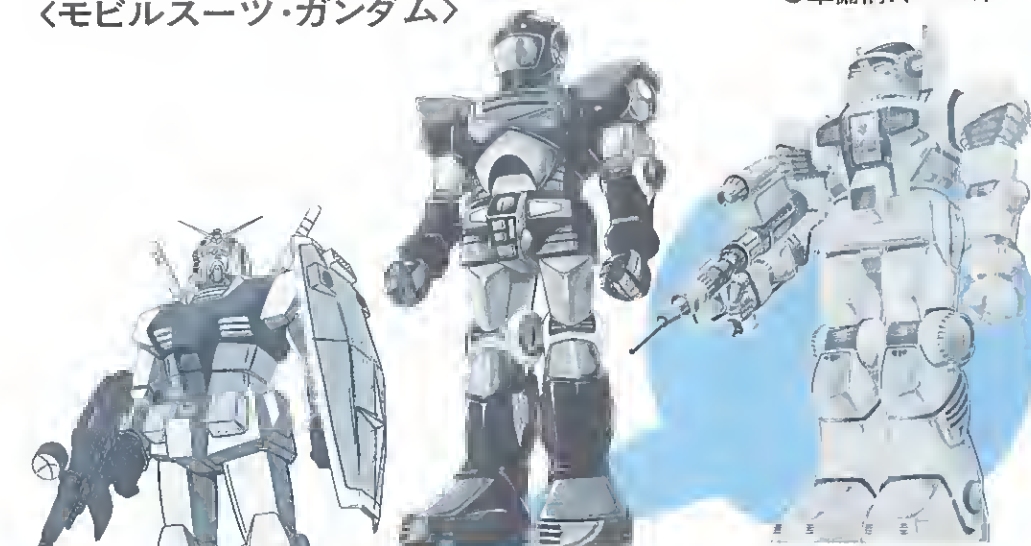
もつとも、中学生の頃は、「ああ、江田島」とか「ああ、特別攻撃隊」とかいう戦争ものの映画があって、僕なんかも当時は随分憧れて、自衛隊に入ろうかなんて考えたり、親戚に無線をやっている人があったので、無線をやってみようかなんて思った時期もありましたけれど……。

やっぱり宇宙は、遠くから見ている方がいいですね。



〈モビルスーツ・ガンダム〉

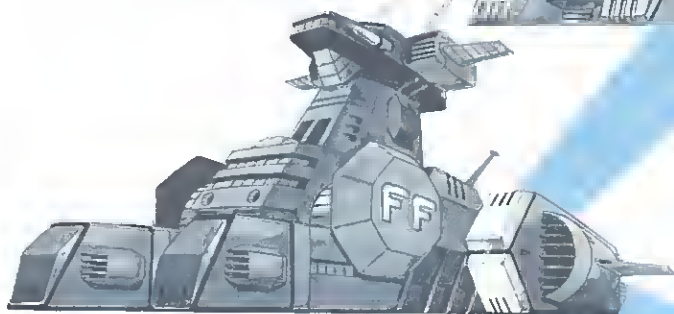
●準備稿1(ガンボイ)



●準備稿2(突撃攻撃型機動歩兵)

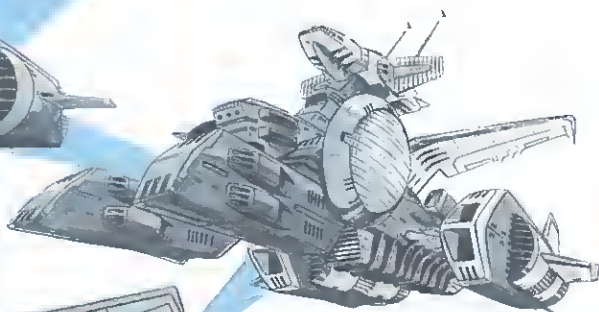
●決定稿

〈ホワイト・ベース〉

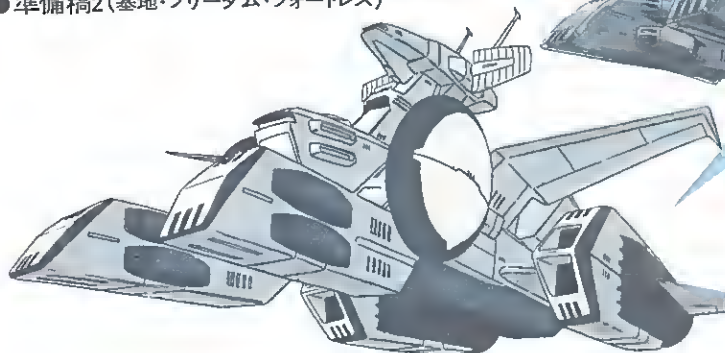


●準備稿1(戦争戦列艦移動要塞・スペースベース)

●準備稿2(基地・フリーダム・フォートレス)

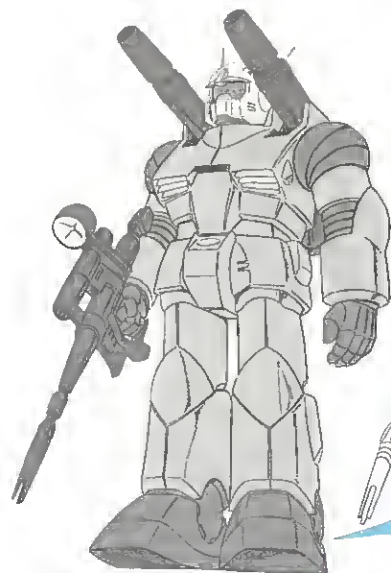


●準備稿3(フリーダム・フォートレス)

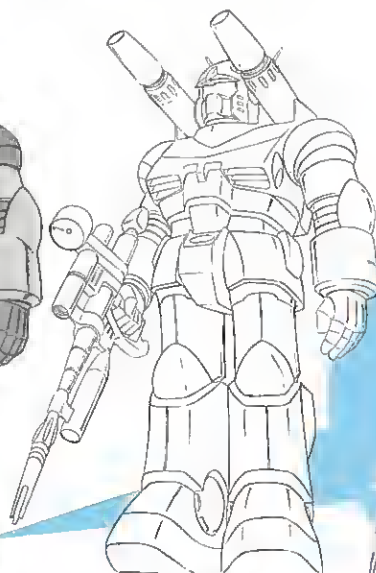


●決定稿

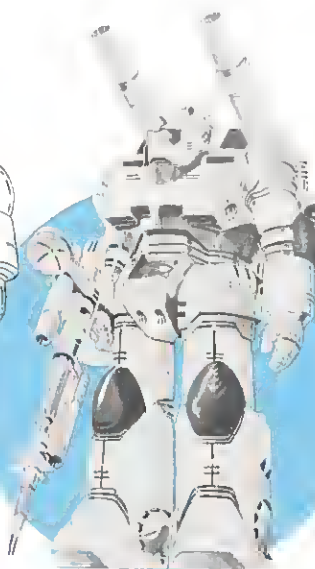
●デザインワーク⑥



●決定稿



●準備稿2

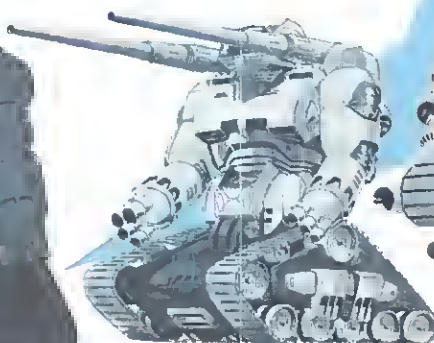


●準備稿1(重砲兵型機動歩兵)

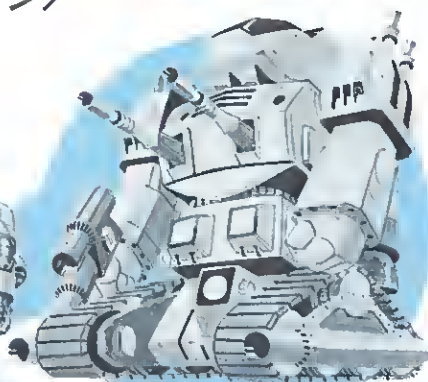
〈ガン・キャノン〉



●決定稿



●準備稿2



●準備稿1(重機甲型機動歩兵)

〈ガン・タンク〉

■メカデザインを志す人へ!

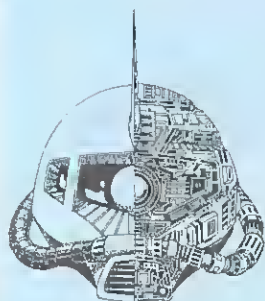
僕自身、先輩を見ながら勉強したので、やはり数をこなすことが大切だと思います。

アニメのメカというのは、特殊ですし、線をどんどん減らさなければならぬという宿命がありますから。さらに、現状では立体物にするのが前提ですから、その構造面まで判って描くのでなければ、スポンサーやメーカーに対して指示出しができません。

また、描写力だけあっても十分ではありません。

メカの変型とか合体とかになると、説明するのに絵だけではどうにもならない説明できない部分が出てくるわけで、その点、立体物をつくることで、それは一目瞭然なわけです。ですから、構造部分まで判ったうえでの描写力と、それが可能な……という段階でのモデル作りの方法をマスターしておくことが大切でしょう。

僕は何かを作ることが好きで、今でも絵を描いているよりは、何かを作っている時の方が楽しいんです。



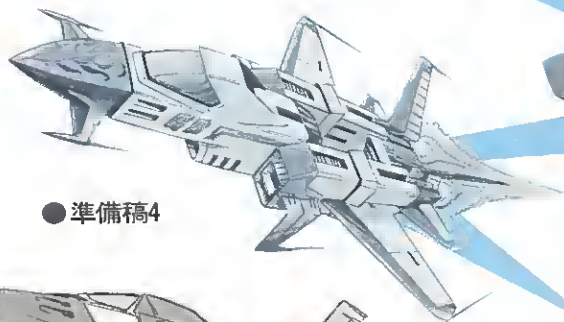
〈コア・ファイター〉



●準備稿2



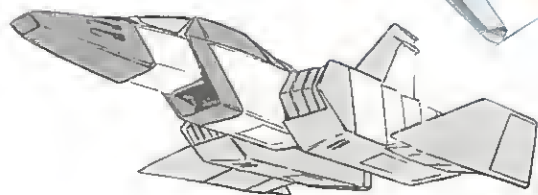
●準備稿1(フリーダム・ウイング)



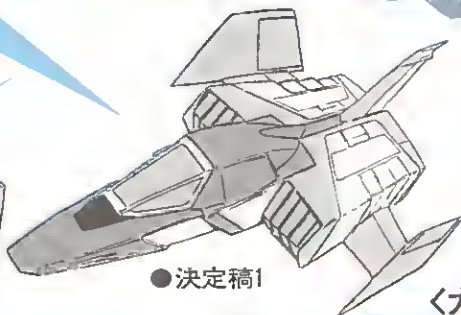
●準備稿4



●準備稿3

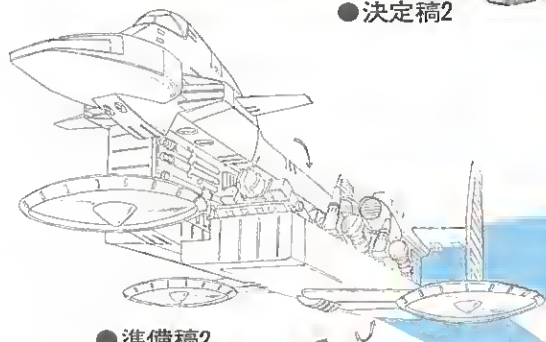


●決定稿2



●決定稿1

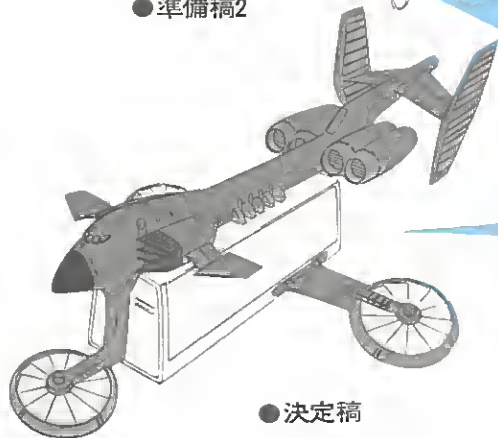
〈ガンペリー〉



●準備稿2



●準備稿1(フリーダム・クルーザー)



●決定稿



●準備稿3



●玩具専門紙/表紙イラスト



●自作の「ザク」の未完成模型



昭和22年12月26日生まれ。
子供の頃から物を作ることが好きだったそうである。

小学生のころ、竹で手足の動く人形をつくったり、こうしてみたら動くのではないかなどと、自分でいろいろ工夫したのを今でも憶えているそうで、案外、そんなことがメカの変型や合体を考えたす基礎になっているのかも知れない。

東京造形大学グラフィック科入学。

当時はまだメカニカルなものへの興味は全く芽ばえていなかったそうで、翌年にはテキスタイル科へ移籍。

テキスタイル科卒業後、紳士服の「オ

ンワード」、ベビー服の「おとぎの国」を経て、偶然のきっかけでこの仕事を始めるようになった。

たまたま新聞広告をみて、面白そうだなと思ったのがきっかけで、昭和47年、竜の子プロの美術部門に入社。

ここで偶然、上司だった中村光毅氏との出逢いがあった。

本来、背景を描く職場に入ったものの、当時は中村氏もメカを担当しており、「ガッチャマン」が始まる時期であったことも重なって、メカニック・デザインの仕事が始めた。

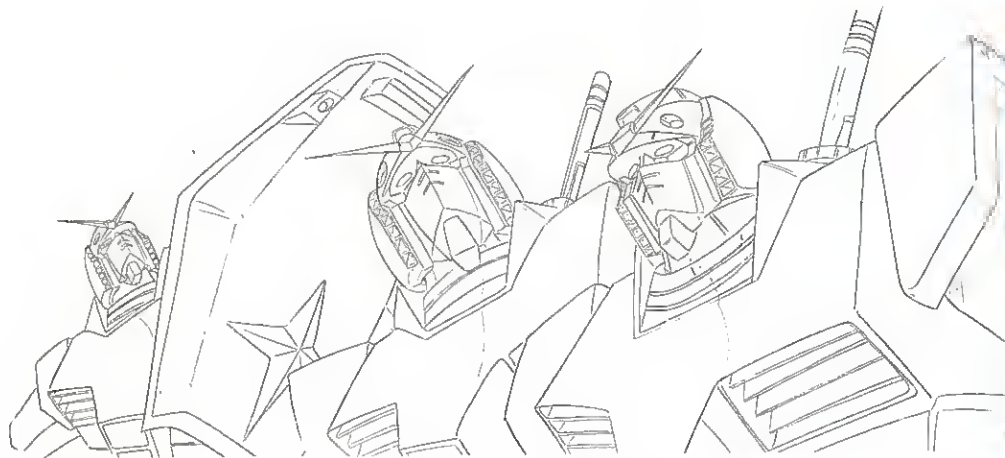
大河原氏自身によると、現在たまたまメカニック・デザインの仕事をやってはいるものの、それほどマニアではないし、特別に好きでもないという。

はじめは「ガッチャマン」が終った時点で、この仕事もなくなるだろうと思っていたそう。特殊な部門だし、長く続く仕事だとは周囲も思っていなかったらしい。

この路線が続いているから、現在のメカニック・デザイナーの仕事も続いている。というのが大河原氏の偽らざる心境のようだ。

新しい構造、新しい機能、そして新しい形へと、次つぎにメカを生み出してゆく、アイデアとセンスの素養もさることながら、何かを作り出す緻密な手仕事の積み重ねと努力が、そして何にもまして、作り出される物へ寄せる暖かな心が、今日の大河原氏を支える大きな力となっているのだろう。

スタッフからのコメント



作画監督 中村プロ
代表／中村一夫

「ガンダム」は安彦氏の絵の魅力と、富野氏の「演出力」が、ファンに大きな反響を呼んだ原因ではないかと思っています。

私達、作画はその影の力として、「演出家の手足」となるわけですが作品のイメージをこわさずに、絵で表現してゆく……その点に全神経を集中して、作画をしてきました。

内容的には、「人が死に直面した時の姿……戦いへの恐怖」などが非常にリアルに描かれていたのが、大変気に入っています。

アニメの作品としては、高い水準を保っていましたが、作画の乱れが多くみられたのは、残念でした。

アニメーターを目指す人達には、出来上ったフィルムで見ると楽しい仕事に見えるかも知れませんが、やるからには、真剣の上を裸足で歩く心構えを持って目指して欲しいです。



作画 西城 明(中村プロ)

ガンダムを作画するにあたり、上がつてきた第一原画のイメージを、こわさずに忠実に描く、という点に心を配りました。

絵を描くという事は、それ以前に原画のイメージをどう受け止めるか、というセンス作りからスタートするのです。また、今、自分が描いているのは何なのか、という事を考えながら、頭を使って絵を描く……。

これは、物の質感を出すうえでも大切な事だと思います。

自分の能力にたよるだけでなく、参考資料をフルに活用する、という事も大事だと思うのです。

「ガンダム」という作品は、人間ドラマが打ち出されていましたが、ひとつ、ひとつの物語が現実感を持って迫って来ていました。

結論としては、富野氏の演出力があるものを云った作品ではないです。

作画 坂野方子(中村プロ)

ガンダムを見る時は、仕事とは切り離して、楽しく見ていました。

内容が充実していましたが、人間の性格があれば、細かく表現されていた作品は、他には無かっただけに、肉迫したものがありません。

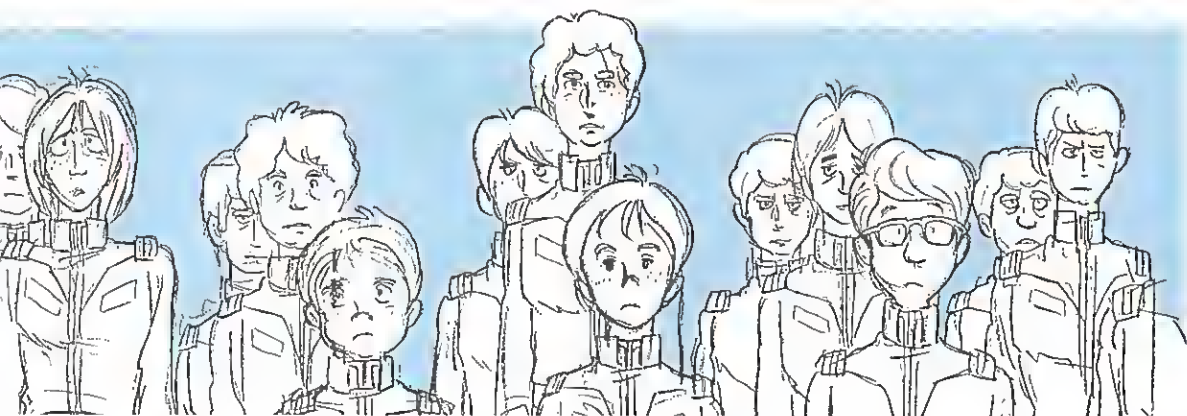
登場人物の成長のドラマが、大きなウエイトを持っていたし、戦争への恐怖も、よく描かれていたのではないかと思います。

これだけの作品ですので、人気も出て当然です。きつと、若い人達に素直に受け入れられた、という事ではないでしょうか。

私は、私なりに、ひとつ、ひとつの仕事丁寧に、こなして来ただけなのですが、動画は与えられた原画をくずさない様に注意しています。

描いている時は、悩み、苦しみがらやっているので、限られた時間内に精一杯、力を出して打ち込んでいます。





作画

青鉢プロ

代表／青鉢芳信



最初、脚本^{シナリオ}じゃなくて安彦さんの絵柄^{エヘ}だけを見せて貰ったので、描けるかな...と思って...

僕は東映のものが多くので...ガンダムは、東映のものとは絵柄も全然違うし、話の進行状況も深いし、ドンパチばかりじゃなかったから、難しかったですね。人物が、というより表情を出すのが難しくて...顔の微妙な変化が出せなくて何回も消したりして、大分苦労しました。

ロボットは、表情じゃなく、体の動きで単的に表現できますけどね。人物でもフルショットで画面一杯に動くようなものだったなら、やりやすいのですが、ガンダムの場合は最後まで把握^{つか}めませんでした。

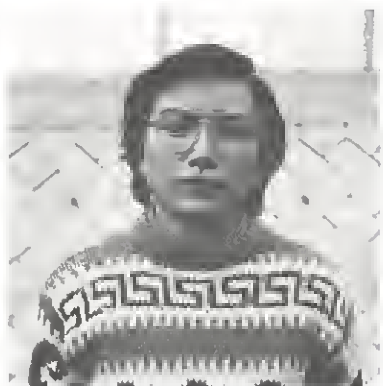
ガンダムというのは、豹^{ヒョウ}みたいな感じがあって、例えば戦闘場面なんかで動いているのに、一枚の絵の中には絶えず静けさがありましたね。

背景 アップル
渡辺 毅／渡部 孝

ガンダム特有の描き味とか趣旨みたいなものが、メカものなんだけどリアルなんですよね。機械一つにしても、メカそのものが...例えばホワイトベースのメインブリッジをみても、天井よし、床よし、壁よし、至るところにスクリーン・モニターみたいなカメラ装置や計器類があつて凝^こっていて、アップになるとものすごく気を使いましたね。メカの表現が特にリアルなんですよね。

ガンダムが、いいとか、よかったとかよりも、何しろきつかった！メカ物のアニメーションというのは、メルヘン物とかギャグ物に比べると総カット数が多いでしょ。

普通30分物のシリーズだと空中戦とか戦闘シーンがあつて息抜きがあるんですが、ガンダムに関しては宇宙空間やスペースコロニーなど、場所の説明などが多くて...一枚一枚

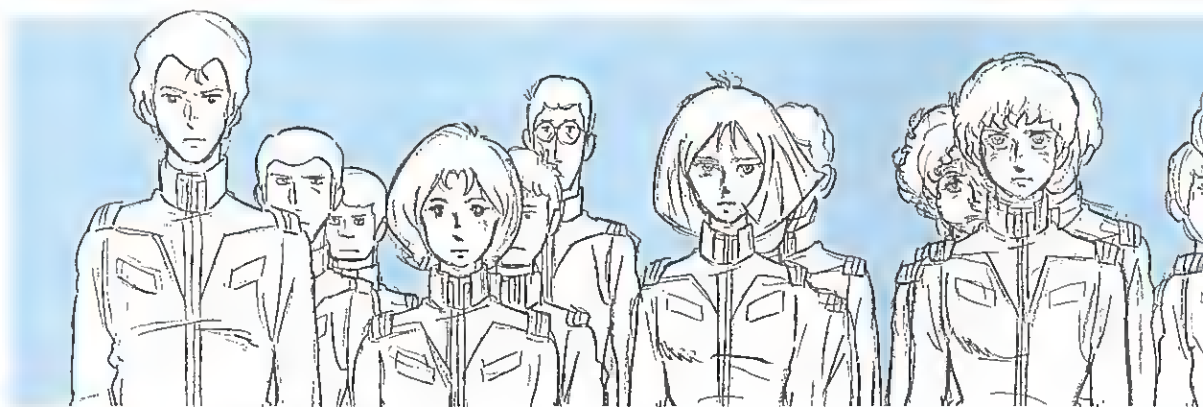


時間をかけて丁寧にやりましたからね。普通だったら、楽に枚数をこなせるところを、ガンダムの場合是一日に3枚とか4枚とか、ひどい時は1枚なんて時もありましたね。

いくら好きでもね、10日間あるかないかで、一人100枚ちよつとはこなしてましたからね...苦しみました。

どちらかというとアップルは、森とか木立ちとか自然物が得意で、ガンダムは直線とか曲線が多くミゾリきの仕事ばかりでしたし、メカは特に苦手ですからねえ、それに今までこれほどのメカはなかったから、苦しみましたね。まあ、よく言えばある意味で勉強になったともいえますが...

カット数も、普通名作もので300位ですが...ガンダムは100〜500カットはざらでしたからね。それにどの部屋も計器類やパネルが一杯で、場所移動が多いから、兼用がきかない。実際、ガンダムは、外注泣かせの作品ですよ。



仕上 シャフト 代表／若尾博司

短期間の仕事で、あの中身のあるものを、よくこなせたと思います。予定期間が二週間あったのですが、結局追い込みで一週間というのが現状でした。丁寧な仕事をしなかったんですけどねえ、心が残ります。

視聴率が低かったのは、時間帯のせいだけじゃない、子供には難しすぎたんじゃないですか……。何しろ僕自身、15年間アニメをやって来ても判らないところがあって、ちよつと気を抜いていると、もう話が見えなくなる……。ついてゆくのが大変でした。

うちの人間は物凄く好きなんです、片寄る傾向があるので、ガンダムが終っても次の仕事に入る段になつて困りましたよ。やりたがらなくて……。しかし、「ガンダム」の仕事は力いっぱい、誠心誠意尽くしましたので満足しています。



仕上 浅賀チエコ／千葉澄世 長谷川悦子(シャフト)

何しろ登場人物が多くいすぎて、覚えるのが大変でした。

初めはすごく難しくて余り熱心ではなかったのですが、人物設定がしっかりしていて、必要なのは頭数だけが揃っているというのではなかったし、どんな脇役でもゲストでも必要だから出てきたという感じで嬉しかったですね。

人物の生活設定もしっかりしていて、とても印象に残っているんですが、ブライトについていつも眉をしかめた感じなんです、病氣した時だけ眉と眉の間が開いて、だるそうな表情になっている。ガンダムって使い廻しが多かったけど、そういう部分をしっかり押えてるのは凄いと思いました。それからドズルが、コーヒークレというのがある……緊張するとコーヒークレが欲しくなる……そこまでやったアニメというのも凄いと



思うんですよ。

富野さんで、コリ性なんじゃないかしらノマニアっぽさも感じるし……ザンボット以来、富野さんの仕事をやっていますが、今回はキラリノやつぱり凄い人だと思います。

ただ残念に思ったのは、メカニックスなんか設定が複雑すぎたからか、キャラ表通りとはいいいにくく、線が抜けていたり間違いが多くて閉口しました。視聴率がもう少し上ってくれたら、張りもあつたんですけど……。





☆このアロム?の絵は、本編に使われたものです

背景 森 博敬(アートテクニク)



仕事自体は、ぐちを云いながらも結構楽しかったですよ。

ガンダムは他と違って、内容がシリ阿斯で筋が通っているから飽きないし、次が想像できて楽しかったんではないですか。

苦勞というのではないですけど、毎回毎回設定の細部が改造されたり、別のものがついたりして変更があったので、描く方としては苦勞しました。細部で複雑だったことを除けば色合せなんかも、打合せなんてものはなくて、カラーボードを見ながらさあいこうか、みたいな感じで適当に選んで、気楽なものでした。

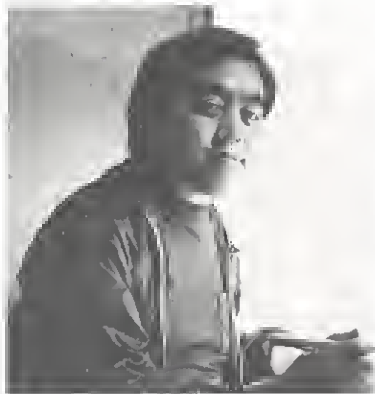
最近の子供たちはアニメに詳しくすぎる。知識がありすぎて却って個性が感じられなくなるんですね。知識なんかを越えた、今までにない巾広い個性を持った若い人がいるんな分野から出てくれば、今後のアニメも面白くなるでしょうね。

背景 今井広寿(アートテクニク)

苦勞ということとはなかったですね。しいて言えば、メカの光りの照り返しや極端な色わけをした、明暗のコントラストの大きいものが多かったですね。それととにかく線が多かったのも、それが大変でした。

しかし、ガンダムというのはよく出来ている。安彦さんの絵も素晴らしいけど、スタッフやすべてのものを総結集させた富野さんの力量は凄いなと思う。ダイターンをやつて、そのすぐ後でガンダムみたいな作品をつくるという、その切り替えの凄さというか、アニメ界のスピルバグって感じですね。大成功だったと思うし、時間帶さえよければもっともつと見る人は増えたんじゃないですか。

アニメは創る側の熱気がフィルムになつて、それが視聴者に伝われば、徹夜してもやっぱり嬉しいですね。



背景 加藤明美(アートテクニク)



これまで、ロボット・アニメには余り関心がなかったのですが、ガンダムはすっかりファンになってしまいました。第1話放映を見た時は、それまで自分で考えていたロボット・アニメと全然違うので、すっかり驚いてしまいました。

先輩の方々が第1話を描いているのを横で見ながら、サイド7というのは地平線がない。景色が遠くへ行くと空と溶け込んでゆくんだと聞かされて、アニメというのはちよつと実写では創り得ないことをやるのだけど、ガンダムは、単に巨大なロボットの林立廻りだけじゃなく、科学的SFののつとっているんだなと大変期待したものです。

思った通りの素晴らしい作品で、自分が少しでも参加するのかと思うと、恐ろしいような気がしました。ともかく、大変勉強になりました。

声優からの コメント

ながい
永井 一郎 (ナレーション、その他)

ガンダムでは、ずい分沢山の役を演りましたが、やはりナレーションが一番印象深いですね。ん、デギン、ザビっていいましたか……公王は？ 短かったけど彼の怪物性というか、彼なりの苦悩は出せたと思うし、あれはちよつと面白かった。

ナレーションというのは、物語の内容をボーンと打ち出すもので、それぞれの作品の中で声のトーンを変えるようにしてるんですが、ガンダムの場合には自分の心の中に、宇宙と同じだけのスペースをつくって、その中を自分の声で満たす……声そのものの響きが、宇宙空間に於ける人間の悲劇を訴えるものにしたかった。これは最初から考えていました。

この種の作品のことを、僕はオモチャモノというのですが、オモチャモノとしては信じられないほど、内容の高いものになったと思います。今までのアニメで最高、徹頭徹尾高

度だったんじゃないですか。

ニュータイプは戦う武器ではない。というのがあるけど、僕の解釈ではニュータイプというのは、単にテレパシーとかエスパーとかじゃない。生命を生んだ宇宙の意志を感じることでできる者というのか、だから戦う必要がない。

最終回の「脱出」というタイトルにしても、一体何からの「脱出」なのか、これは小さな状況からの脱出じゃなく、これまで人間がつくってしまってきた歴史からの脱出、何億年か創ってきた人間の状況からの脱出ではないか……富野さんは、もう「変革」では仕方ないと考えたんじゃないですか。脱出のためには、何か新しいものを生んでゆかなければならない。それがニュータイプであると。

まあ、宇宙の意志、宇宙の愛そのものを感応できる人間というのはいわけてすよね。例えば釈迦とか……みんなそうならなきゃいかん。そこまで書き切った作品だと思います。

最後のナレーションで、地球連邦とジオンの間に終戦協定が結ばれた……というのを、それは甘いよ。終戦協定なんかじゃ戦争は絶対なくなるじゃないよ」という気持をこめて、ものすごく冷たく表現したんですよ。

それは甘いよ。本当のニュータイプにならなきゃいけないのは、君たちだよ！ と……それが伝わるかどうかかわからないけど、ガンダムという作品の裏にこめられた何かを、肌で感じて貰えたらと思いますね。

はん
潘 恵子 (イセリナ、ラアラ)

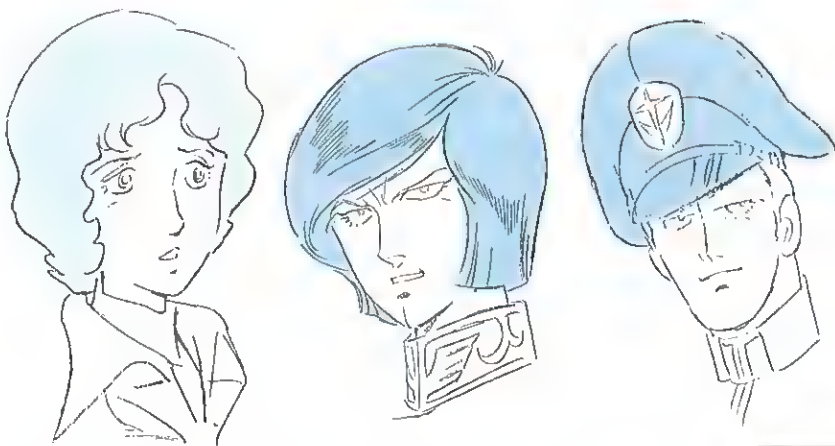
ガンダムというのは、とても難しい作品でした。本当に、一つ一つの言葉に何かあるんですよ。だからすごく難しかった。役者として、声優として、印象に残った作品です。

イセリナは、現代版のロミオとジュリエットかな、とても純情可憐な娘ですけど、すぐ死んでしまうのでいくらか表現したくても場が少ないという点では、ラアラの方が人間的にも厚味があったし面白かった。やりがいがありましたね。

ラアラは人間味というのかな、二面性も透明感もあったし、でもはっきり言って、きれいな人間、純情可憐ではないですね。女としての心の裏をもった、生きていく上で純情だけじゃ生きて行けないという部分を十分背負っていると思います。

私はイセリナみたいにパツと燃えて、パツときれいに散っていったら、どんなに幸せかと思うけど……。





森 功至 (ガルマ)



僕は、与えられた役の中で、そのキャラクターを自分がどう演るか、というのがオンエアじゃないかと思っているわけで、ガルマがどうの、シヤアがどうのといった感覚を持っていないんですよ。

特にガルマの場合は途中から出てきて、あつという間に死んでしまったでしょ。だから、どこも闘って何がきっかけで……ということをはっきり把握できないうちに終わっちゃって……余り具体的には云えないけれど、あのガルマっていうのは、世間知らずな甘さがあつたし、すごく性格的に弱いんですね。シヤアに頼ったりして……だから裏切られた時にああいった絶叫になるみたいなの……。

とにかく、ガンダムのスケールのでかさには目を見張りました。サンライズのは、このアニメ界の中じゃ特筆に価しますね。

曾我部和行 (ワッケイン)

ワッケインは1クール目と3クール目に出てきて死んじゃったけど、僕は自分なりにこなしたつもりです。はつきりいって、ワッケインみたいな役は余り好きではないですね。性格というのか……僕の役は大抵二枚目半的な要素をもっているのですが、ワッケインは二枚目でしかも性格的に冷たいというか、職務に忠実すぎたのかも知れないな。

僕は3クール目に出てきたときの方が好きですね。モビルスーツの存在を認めたくないけど認めざるを得ない。自分はこつちを守る……というふうになって死んでいく。

しかし、ガンダムという作品は凄いですね。絵が奇麗だし、リアル感がすごい。物を威圧するというのがかすこい重みを出したメカや背景を描きましたね。本当に美術やメカニックデザイナーの人が、大変だったと思います。何と言っても凄い作品でした。



門谷美佐 (ペルシア)



私は母親役が多いんですよ。特に音響監督の松浦さんから仕事の依頼がある時は、母親役がほとんどなんです。ですから、芯の強い母親とか、女っぽい母親とか、自分がこうなりたくないというような優しい母親とか、母親役としては準備ができてましたから、ガンダムのときにも役づくりで苦労したという記憶はありませんでした。

ペルシアの時には、もつと優しく、もつと弱い感じだと思っています。私の要望があつたと思います。

私は意外とカッコイイのが好きなのね。それにあの作品は何といっても男性が多いので、女性が少ない時には男性には出せない女性の優しさとか、そんなものが作品の中にありますでしょ。そうすると一生懸命やりたいなって、頑張っちゃうんです。



げんたてへしよ
玄田哲章(リード、スレッガー)

リードを振り返ってみると、いつも怒鳴ったり対立している印象しかなかったし、なんか訳の判らないまま消えてしまつて、そういう意味ではすごく不満なんですよ。

そこへスレッガー中尉の役がきて、絵を見たら、ちよつとキザッぽくてニヒルで、それでいてユーモアもあつて男っぽい。スレッガーみたいな役は、今まで僕のやった役の中でも初めてですね。男としても把みやすかつたし、意外とすんなり入つて行けて、面白かつたですよ。魅せられちゃつて……なぜ死んだの? つて感じて、でも、僕はスレッガーにめぐり会えただけで満足です。

スタジオの雰囲気もよかつたですね。暖かくて、みんなでかばい合ひながらこの作品をつくってるんだっていう……こういうムードが作品を盛り上げる一つの要因なんだな、って思いましたね。



まさむねいせい
政宗一成 (バオロ艦長)

僕は俳協養成所の第一期卒業ですが、役者といつてもまさに声優というか、声の出演オンリーなんです。しかもレギュラーはなるべく持たないようにしているから、殆どがゲストでバオロ艦長のような役が多いですね。

初め、バオロ艦長が死ぬというのは知らなかった。しかし僕の役は、こういう訳か死ぬ役が多いですね。

ところで、ガンダムというのは絵のつくりも丁寧で、制作態度も非常にオーソドックスで、ロマンを求めた作品ですから、正統的な未来ものというのでしょうか、若年層にうける作品というより、むしろ玄人筋にうける作品だったと思います。ですから時間帯も7時30分ぐらいのところへもつて来るべきではなかったかと思う。そしたら視聴率もい線いっただけではないですか。再放送に期待したいですね。



みぎとてつお
水鳥鉄夫 (ガDEM)

ガDEMですか?……何しろずい分前のことですからね、余り記憶にないんですよ。

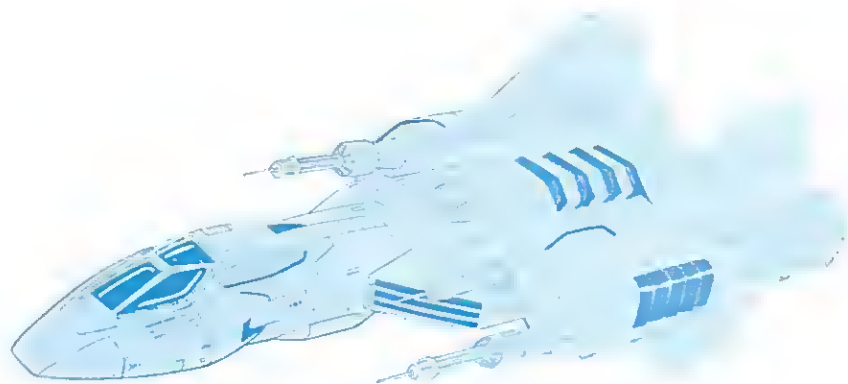
ただ出てきて……死んだな……ぐらしいか覚えてないんです。

ただ、ものすごく絵がきれい、物語のしっかりした作品だった、という印象はつきり残ってますね。

それに役も、とても演りやすかつた。なんか全体が熱気に包まれていて、何があんでも頑張つてやろう、って雰囲気があつて、自然とそうなつちやつたですね。

ただ、ハードな作品は疲れますね。





機動戦士ガンダム・記録全集²

昭和55年5月1日発行

発行者／岸本吉功

発行所／株式会社日本サンライズ

〒167 東京都杉並区上井草2-35-11

電話／東京(03)399-8962

編集者／株式会社ニューアート・クリエイション

印刷・製本所／小宮山印刷株式会社

定価 2,700 円

●許可なく本書の転載複製を禁ず。

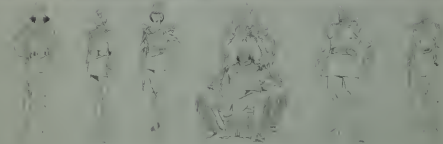
落丁・乱丁本のお取替えは直接、小社までお送りください。(送料は小社で負担します)

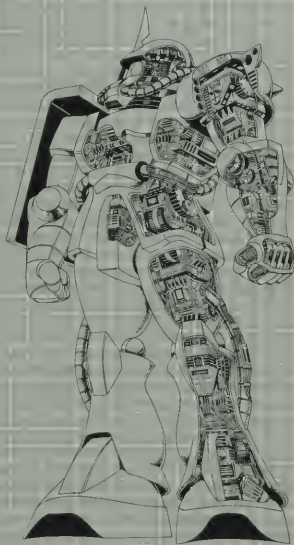
G 機動戦士
ガンダム
GUNDAM

記録全集 **2**



MOBILE SUIT GUNDAM



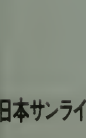


Presented by
NIPPON SUNRISE

機動戦士



記録全集



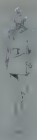
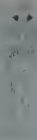
日本サンライズ

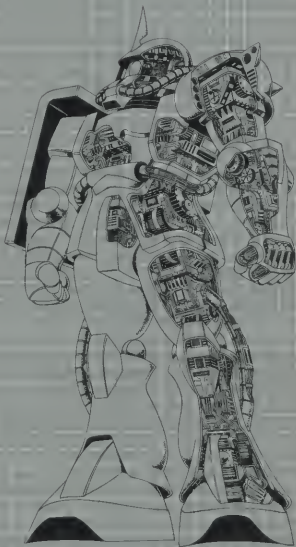
機動戦士
ガンダム
GUNDAM

記録全集 **2**



MOBILE SUIT GUNDAM





Presented by
NIPPON SUNRISE

機動戦士

Z

記録全集

2

日本サンライズ